
翡翠のナディル ～消えた姫君と銀の猫～

絵理依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠のナデイル　く消えた姫君と銀の猫く

【Nコード】

N24590

【作者名】

絵理依

【あらすじ】

恋人を追いかけて家出をしたアーヴァーンの王女ナデイルは、旅の間に賞金稼ぎ『翡翠のナデイル』として名を馳せつつあった。ひょんなことから隣国オーデルクの公子と知り合ったナデイルは、公子に雇われ、彼と共に恋人がいるという魔女の城に向かうが……。

失われた姫君と侯爵家一族の伝説とは……？

完結致しました。ご愛読&応援、ありがとうございました！！

イラストはこの後も追加予定です。

登場人物の紹介

> i 1 6 1 8 2 — 2 2 3 5 <
イラスト/碧無瑠恩 <http://espressivo.yu.kihotarur.com/>

ナデイル……アーヴァーンの王女。賞金稼ぎ『翡翠のナデイル』として仕事をしながら、エリユースを探す。

エリユース……『化け猫エリユース』と呼ばれる賞金稼ぎ。満月の夜に猫に変身するという体質の持ち主。

ガガ……ナデイルが飼っている竜。人間の言葉を喋れる。

フィリアス……アーヴァーンの隣の国オーデルクの公子。冠を探す旅の途中、ナデイルを雇う。

デュプリー公爵……アーヴァーンの貴族。城ではナデイルの数少ない味方。

レオン……ナデイルの賞金稼ぎ仲間。仕事をきっちりこなすことで定評がある。

カジェーラ……宝石を集めている魔女。エリユースと何か繋がりが？

1・（前書き）

その美しいお姫さまは、ある日、銀の猫と一緒にどこかに行ってしまいました。

より

オーデルクの伝説

> i 1 6 1 8 1 — 2 2 3 5 <
イラスト／碧無瑠恩 <http://expressivo.yu.kihotaru.com/>

薄紫の逢魔が時の空気が地上を覆い、家々に金色のあたたかい光が、ぼつぽつと灯る頃。

旅人の宿『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』の扉が、甲高い鈴の音を響かせて、開いた。

魔が時の透明な濃い青の空と、黒い影だけとなった木々を背景に入ってきたのは、『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』にとって、その日十人目の客。十五をいくつか過ぎたくらいの、華奢な少女だった。首筋でぷつりと切り落とされたような、そんな痛々しささえ感じさせる柔らかい髪は、間近に迫った夜の闇よりも暗い漆黒。両方の目は、翡翠を思わせる神秘的な緑。肌は太陽の恵みで、薄く健康的な色に焼けている。

灰色の上等な布で作られたマントを羽織り、その下には灰緑の上着とズボン、黒の皮のブーツ、そして腰に下げているのは、細身の剣。

その身なりは彼女によくなじんで、中性的な雰囲気を作っていた。『少年』で通らぬこともないくらいに。

だが、闇色の髪を長く伸ばし、ドレスを着て装飾品を付ければ、おそらく光り輝くような気高さを持った若い貴婦人が現れるに違いない。そう思わせるような、どこか奇妙で確かな雰囲気、その少女は持っていた。

そして何よりもこの年若き旅人が一風変わっているのは、小さな生きた竜を冠のように、頭に乘せていることだった。

金色の鱗で覆われた竜は、黒髪の主人の頭にしっかりとつかまつたまま、二本のりっぱな角を生やした頭をそびやかし、ルビーのような赤い鋭い目で、テーブルでくつろぐ客たちを順番に睨みつけた。

竜の閉じられた羽根の先が明かりを反射して、星のきらめきを放つ。

客たちは、ちらりと新参者の方に顔を向けたが、再び何事もなかったかのように俯いて酒を飲み、あるいは黙々と食事を続けた。それが、この旅人の宿での礼儀であつたからだ。

旅人たちは、しばしの静かな食事と心地よい眠りを得るためにこの宿に集まり、そしてまた、それぞれの目的地へと散って行く。

互いの素性も、どこから来てどこへ行くのかも知ることなく、知らせることもない。

見知らぬ者同士で知り合いになり、和気あいあいとした楽しい時間を過ごしたい者は、別の様式の宿を選ぶはずだった。

多少宿代は高めだが、『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』は、余計な詮索や雑音とは無縁の、静かな安息を約束する宿だった。そのため、客には一癖も二癖もありそうな連中が多かつたわけだが。

けれども、奥のテーブルについている二人の客だけは、杯の向こう側から、竜を連れた少女を値踏みするように、じろじろと観察していた。

お世辞にも目つきがいいとはいえない、傭兵まがいの二人組だ。そして、もうひとり。

二人の客から少し離れた席に座って、静かにお茶を飲んでいる人物。

その人物は、少し遠慮がちに、アメジスト色をした目を少女に注いでいた。

「部屋、空いていますか？」

少女は、カウンターにいた宿の主人に声をかけた。

宿の主人は、でっぴりと太っていて並々ならぬ貫禄の持ち主では

あつたが、『砂漠に眠る』ことにも『緑の羽根生え猫』にも全く関係がなさそうな、ごく普通の中年男性だった。

「どうぞ」

主人が頷くと少女は扉を閉めた。そして軽い足取りで先客たちのテーブルの間を横切つて、主人の前に立つ。

「ここは前払いですが」

主人が言った。

少女は主人の前に、金貨を積み上げる。

「足りですか？」

宿の主人は、手の中で金貨をチャリンと鳴らし、鍵を差し出した。少女が出した金貨が多すぎもせず、少なすぎもしない枚数だったことが、期待はずれだったようだ。

「お食事は？」

「お願いします」

「お部屋にお運びしましょうか？」

「そうしてください。ありがとう」

少女は鍵を受け取った。

それから声を落として、主人に訊ねる。

「少しお聞きしたいのですが……。ご主人、銀色の髪に黄水晶の目をした若い旅人が、ここに来ませんでしたか？ 名前はエリユースっていうんですけど」

「お客の名前は、いちいち聞いていませんからね。銀色の髪のお人は五万というし、黄水晶の目のお人も、多くはないかもしれませんが、たったひとりってことはありませんよ」

主人が、回りくどいセリフをそっけなく言う。

「物腰がやわらかで、美形で、剣の使い手で、歩くとき、いつも足音をたてないの」

「それも、ありきたりの特徴ですね」

「特徴……。えーと、そうだ、満月の光を浴びると、猫になる」

宿の主人は目を剥き、それから露骨に顔をしかめた。

「魔法使いですか、そのお方は」

「職業は、賞金稼ぎ。気まぐれに傭兵をやっているかもしれません」

主人は、首を振った。

「前払いでやってなかった頃は、鳥に変身して宿代を踏み倒して行った魔法使いはありましたかね。残念ながら、ネコは知りません」

少女は溜め息をついて、肩を落とした。

飾り物のように身動きをしなかった竜が、頭をわずかに動かし、

少女の顔を見下ろす。

「そう……。どうも」

少女は鍵を握りしめ、くるりと向きを変える。

「あなたが言っておられるのは『化け猫エリユース』のことですか？」

少女は、突然自分にめがけて降ってきた声とその内容に、凍りついたように身を固くした。

壁際のテーブルでお茶を飲むひとりの人物が、少女を真っ直ぐ見つめている。

その目は、アメジストを思わせる紫色。肌は少女よりもはるかに白く、陶器のような艶があった。

長い金の髪は、まばゆい滝のように肩に波打ち、鮮やかな青のチュニックに身を包んでいる。

育ちのよさをどことなく漂わせた、二十代前半くらいの若者だ。

声の主がその若者であることを確かめ、少女は彼につかつかと近づいた。

彼女の頭の上の竜が若者を睨みつけたが、若者は気にした様子もなく、軽く頬杖をついたまま、微笑んだ。

「こんばんは、お嬢さん。変わった兜をお持ちですね」

「エリユースのことをご存知なんですか？」

少女の声は、幾分震えていた。

漆黒の睫毛の下に見開かれた翡翠色の目は真剣な光を帯び、若者

を凝視する。哀しげな、すぐるような眼差しだった。

それは恋をする者の目。恋人を思う切ない心を映し出した、小さな鏡。

焦がれるような恋をしたことのない若者にも、それは何となく感じられた。

「私は、そのエリユースとやらに直接会ったことはありませんが、噂は聞きましたよ。すご腕の『化け猫』というあだ名のある、銀の髪の賞金稼ぎのね。満月の光で猫に変身するから、化け猫なんて呼ばれているのですね」

「彼は、どこへ……」

「北へ。ゼノアの町に立ち寄り、さらに北へ行っただようです。でもこれは、随分前の情報ではあるのですけれどね」

「北……」

少女は、はるか遠くへ意識を飛ばすように視線を漂わせた。

「お役に立てましたか？」

若者が訊ねると、少女はにっこりと微笑んで頷く。

「ありがとうございます」

少女は腰をかがめて丁寧にお辞儀をし、間もなく客室のある二階へと立ち去った。

「今の挨拶の仕方は……」

若者は少女の身のこなし方を、かつてどこかで見たような気がした。

あれは、自分の国に近い、どこかの国のものではなかっただろうか。

それも、貴族の姫君の作法では……。

そんなあやふやな記憶に基づいた軽い疑問が、頭を持ち上げてくる。

さらに、記憶の中でその作法を行っていたのは、実は今の少女自身でなかったかという、とんでもない考えが浮かんできたので、彼は苦笑した。

そんなはずはない。自分が会うことを許されていたのは、限られた身分の人々だ。

たったひとりで旅をする少女の知り合いなど、いようはずもない。お茶に入っていた香り付けの酒で、少し酔ったのだろうか。

少女の姿が階段の奥に消えた後、例の傭兵まがいの二人組は目配せをし、頷き合った。

それから彼らは酒の追加を主人に言いつけ、何か貴重な楽しみを得たかのように、少女が来る前よりもはるかに機嫌よく、陽気に酒盛りを始めたのだった。

「やっぱり、ここには来ていないね」

漆黒の髪の少女　賞金稼ぎ仲間からは『翡翠のナデイル』と呼ばれてはいるが、西の小国アーヴァーンの第一王女であるナデイル・リア・ジフル姫は、ぐったりとベッドに転がった。

彼女の頭の上に乗っていた金の竜は、いつもそうするように床を歩き回り、部屋の中を点検し始める。

落ち着いた茶色を基調とした部屋は丁寧に掃除され、微かに薬草のよい香りが漂っていた。

「来てたつて言うもんか、あの親父。ここの信用にかかわるもの」

竜が、鼻をひくつかせながら言う。

「でも、『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』なんて、何となく彼に合いそうな名前じゃない？　ここの色も……」

「あまりおいしそうな名前じゃないな。ってか、わけわかんない名前だ。知的で感性のありそうな名前をこれ見よがしに付けようとして、着地失敗……みたいなさ。あの親父の趣味かな。確かにここの外観は、ナデイルの目と似たような緑色で塗ってあるけど。でも、結局行き先がわかってよかったじゃない」

「そうだね……。ゼノアの北か。すごい広範囲だ」

ナデイルは起き上がり、窓を開けた。

魔が時の青い空間は既に消え失せ、闇があたりを支配し始めてい

る。

薄い銀色の月の光が、ナデイルの体を包み込んだ。

「月がきれいだよ、ガガ。満月には遠いけど」

金の鱗の竜ガガは、主人を上目遣いで眺めた。それから溜め息をついてベッドに上がり、優雅な仕草で体を丸める。

「月なんか見てると、まただんだん感傷的になるよ。食事して、風呂入って、寝ちゃいなよ、ナデイル」

ガガは言って、あくびをする。

たえ何を言っただとしても、気休めにしかない。

ガガは、そのことをよく知っている。

彼の主人は、月を見ては涙を流し、ベッドの中でも時々泣いている。

ガガに涙を見つかけられると、「目にゴミが入っただけだよ」とか「翡翠のナデイルが泣くわけないでしょ」などと無理やり笑顔を作ってごまかして見せるが、それは痛々しいほどだった。

その涙は誰にも止められはしない。彼女が探し求めるエリユースが見つからない限り、あるいは、彼女自身が自分の思いを断ち切らぬ限り。

ナデイルは、澄んだ空に浮かぶ、黄色いガラスのような月を見上げた。

灰色の雲が時折月を横切り、縁を金色に染めて風に運ばれて行く。彼もこの月を、この光景をどこかで見ているのだろうか。

草の上に横たわりながら。それとも、大海原の真ん中で。もしかしたら、同じように、どこかの窓から。

彼と初めて出会ったのも、月の光の下だった。

あれは満月の森の中。闇に光る、不思議な鏡の目。銀色の猫の、月をそのまま映して小さくしたかのような、きれいな二つの並んだ目……。

なぜこの思いは伝わらないのだろう。

雲はあんなに自由に天を流れて行くのに、なぜ自分の心は彼のもとへ行き着けないのだろう。

ナディルは、何百回ともなく唇に上らせて呪文のようになった言葉を、声に出さずに呟いた。

あなたは、今、どこにいるの？

何を思っているの？

私のことを少しくらいは思ってくれてる？

もしかして、そばには誰がいる？

私のこと……忘れてないよね……？

> i 2 7 8 0 4 — 2 2 3 5 <

ガガは、ルビーの目をナディルに注いだ。

彼の主人は、今にも月の光の中に溶けてしまいそうに思えた。

床に付くほどの長い髪、透けるような白い肌、そして宝石と高価な衣装に身を包んだナディル王女をガガは知ってはいるが、『翡翠のナディル』と呼ばれる今のナディルも、月の光の飾りだけで、十分それ以上に美しく、素敵に思えた。

ナディルがアーヴァーンの離宮を飛び出して、もうすぐ二年になる。

銀色の髪、トパーズの目の若者が彼女のもとを去ってから、既に二年が過ぎた。

深窓のはかなげな姫君はその間に、仲間うちからも一目置かれる賞金稼ぎに変身していた。

この力が、ただひとりの人物を思いつめる心からだけ来ているのなら、人間とはとんでもない生き物だ、とガガは思う。

「ねえ、ナデイル」

ガガは、遠慮がちに切り出した。

このままずっと、このお姫さまを感傷に浸らせておくのは、よくない。

「ん？」

ナデイルは、無言で見下ろす月と目を合わせたまま、軽く返事をする。

「さっきの金髪のおにいさんだけど」

「エリユースのことを教えてくれた人？」

「そう。あの人、どこかで会わなかった？」

「……」

ナデイルは月を見るのをやめ、窓を閉めた。
ガガは、内心ほっとする。

「初対面だと思うけど？ 私には記憶はないよ」

「ぼくはあるんだ」

ナデイルは、言葉を話す小さな竜の隣に座った。

「どこで？」

「彼本人に会うのは初めてだけどね。確か肖像画を見た。アーヴァー
ーンの離宮で」

「肖像画？」

「ナデイルの花婿候補の肖像画の束の中に、あの青年のがあったよ」

「……まさか」

ナデイルは、笑った。

「だって、それだったら、どこかの国の王子さまか、身分の高い貴族の若さまってことになるじゃない。そんな人がたったひとりで、こーんな場末の旅の宿にいるなんて」

「アーヴァーンの王女さまが、まあ、竜の連れはいるとはいえ、たったひとりで、こーんな場末の宿にいるじゃないか」

「私は例外だよ」

「あの青年も例外かもしれないぞ」

ガガは、真紅の目でナデイルを見上げた。

「もしかすると、あの人、ナデイルのことを知っているかもしれないな」

い。舞踏会とかで会ってたりして」

「だとしたら、あまりお近づきになりたくないな。でも、私があの
はかなげな、今にも壊れそうなナディル王女だなんて、誰も想像し
ないよ」

「そりゃま、そうだろうけど」

「……ねえ、ガガ」

「うん？」

「エリユースは『翡翠のナディル』のことを知っているかな」

ナディルは壁を見つめて呟いた。

「そりゃ、知ってるよ。結構有名なもの、この頃じゃ」

「でも、その正体が私だとは思わないでしょうね」

「同名だ、くらいにしか思っていないんじゃないの」

「やっぱり、そうなんだろうな」

「もしかしたらナディル王女かもしれないって、思ってもらいたい
？」

「そんなことないけどね。でも、私は、やっぱりそれを期待してい
るのかもしれない。ううん、きっとしているんだよね……」

「……ナディル、やっぱりまだ続けるの？」

ガガは、訊ねた。

「何を？」

「この旅」

「……続けるよ、もちろん」

一瞬沈黙した後、ナディルは答える。

宿でくつろいでいる時にガガが出てくる恒例の質問と、当たり前となったナディルの答え。

このやり取りは、もう何十回目になるのだろう。

「そ」

確認が終わったガガは、半分目を閉じた。

「ま、帰っても、ナディルにとっては、今より悪い状況になるかもしれないもんね。夜ゆっくり眠れるだけ、今のほうがましってものだ。じゃ、夕食が来るまで一眠りしようっと。来たら起こしてね」

すぐにガガは動かなくなり、きらびやかな金の竜の置物になる。

ナディルは、ベッドに体を横たえた。

部屋の中が暗い。

たとえ明かりをどれだけ灯したところで、夜の闇は外から染み透ってくる。

人の作った光を簡単に擦り抜け、肌の表面にさえ、ひたひたと触

手を伸ばす。

少しでも気をゆるめると、自分の体が闇を受け入れ、同化してしまいそうな、そんな錯覚に陥る。

ナデイルは息苦しくなり、深く空気を吸い込んだ。

夜は考えなくてもよいことまで考え、感情が研ぎ澄まされる。心がどこかで叫び声を上げて、痛み出す。

まるでたったひとり、果てしない砂漠に立ち往生しているようだった。

昔は、そう、二年前までは、静かでやさしく包み込んでくれるような夜が好きだったはずなのに。

そんな安らかな夜は、またいつか訪れるのだろうか。

ナデイルは眉を寄せ、唇を噛む。

いつまで続くのだろう、この暗い夜は。息の詰まる、この悲しい夜は……。

その時、扉がたたかれた。

ナデイルはけだるげに体を起こし、ガガのしっぽを引っ張る。

扉の向こう側から、料理の盆を捧げ持った給仕の少年が現れた。

おいしそうな匂いと、料理が持ち込むあたたかい空気。それらに加えて、明るく健康的にこぼれるのは、少年の笑顔。

「ありがとう。ご苦労様」

ナデイルも、つられて笑顔で答える。

ナデイルが必要以上に感じる夜の闇の存在が、少し薄くなった。

澄んだ藍錆色の天を欠けた月がゆつくりと巡り、星々もその銀の星座ごと位置を変える。

『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』は、静寂に包まれていた。

次第に終わりを迎えつつある夜の沈黙の中、旅人たちは、約束された安息と心地よい眠りに身を浸す。

けれども、緑の建物の中を、そろそろと動く影が二つあった。

一つの影は、たたんだ大きな布の袋を抱え、もう一つは、両手に持ったロープをもてあそびながら、廊下を進む。

先程ナデイルを値踏みするように眺めていた、二人組の男たちだった。

飴色の髪をした、眉の薄い背の高い男。そして、残り少なくなつた髪をなごり惜しげに集めて束ねた、小太りの背の低い男。

彼らは薄笑いを口元に浮かべ、楽しくてならないという様子で頷き合った。それから、ナデイルの部屋の前で立ち止まる。

鍵をかけていたはずの扉は、男たちが素早く手を動かすだけで、魔法をかけられたように簡単に開いた。

部屋には明かりが灯され、狭い空間は隅々まで、あたたかい橙色に染められている。平和で静かな客室だった。

中央のベッドから、軽い寝息が聞こえる。

侵入者のことなど何も知らずに眠り続ける、あの美しい少女のものだ。

二人組は細心の注意を払いながら、ベッドに近づいた。

ベッドの毛布の膨らみが、呼吸に合わせて微かに上下する。

よく眠っている。

だが、その眠りも、もう終わりだ。

自分の容姿も年齢も考えず、浅はかにもたったひとりで旅に出て、我々に出会ったのが身の不幸。運が悪いというものだ。

たとえ我々に出会わなくとも、この美少女は、早かれ遅かれ誰かに同じことをされる運命だったのだ。

男たちは布袋の口を広げ、手に持ったロープをぴんと張る。そして、今夜の獲物を覆っていた毛布をさっとはがした。

狙っていた獲物に布袋をかぶせ、ロープでくくりつける……はずだった二人組は、その行動を実際にすることは出来なかった。

毛布の下には少女の姿はなく、代わりに金の鱗の竜が、膨らみをもたせるために入れられた枕の上で、長々と体を伸ばしていたのだ。

「何すんだよ！」

竜は頭を上げ、不機嫌そうに振り返った。

それから背ビレを逆立てて、赤く燃える炎のような目で、ぎろりと二人組を睨みつける。

少女がベッドにいないこと、その場所に竜がいたこと、そしてその竜が喋ったことに驚く二人組の首筋に、背後から冷たい金属が押し当てられた。

「すみませんが、安眠妨害なんですけど？　その前に、人のお部屋に勝手に入ってきたちゃ駄目でしょう」

ナデルは、飴色の髪の男に細剣を突きつけ、小太りの男には左手で握った短剣をあてがって、眠そうに呟いた。

しかし、その翡翠の目は釣り上がり、狩りをする猫科の動物のようには隙はない。

「う……」

飴色の髪の男は、布袋で隠した右手を、そろそろと腰の剣に伸ばした。

指の先が剣に届いた瞬間、男は素早く剣を引き抜き、振り向きざまにナデイルに切りつける。

男の剣が、橙色の空間の中で、不気味に閃いた。

「このガキ！」

ナデイルは表情一つ変えず、小太りの男の束ねた髪をぐいと引っ張り、思いきり足を払った。さらにその肩を踏み台にして、飛び上がる。

ナデイルめがけて振り下ろされたもう一人の男の剣は、もんどり打って倒れる相棒の頭をかすめ、弧を描いた。

小太りの男が床に尻餅をつくと、その真ん前に、ぱさりと彼の髪が落ちる。

「お、俺の大切な髪をつ！」

切り落とされた髪をつかんで、彼は悲鳴に近い声で叫んだ。

「そんなことより、さっさとそのアマを捕まえろ！」

飴色の髪の男は相棒に叫び、再びナデイルに襲いかかった。

ナデイルは身をかがめて銀のきらめきを避け、男が剣を振り切った瞬間、男の手をめがけて蹴りを入れた。

剣が宙を飛び、カラカラという音をたてて床に転がる。

「安眠妨害だと言っててるじゃないですか。騒いだら他の部屋の人にも迷惑ですよ」

ナディルは、今度は真正面から飴色の男の喉に剣をあてがった。
剣の下から血が一筋流れ出す。

「動くともっとたくさん、首に赤い色が増えますが？」

「う……」

飴色の髪の男は短くうめいて、助けを求めるように相棒を見る。
だが、彼の親愛なる友人の頭には、金の鱗の竜がしっかりと張り
付いていた。

「こちらへ。言うことをきかないと、その竜が火を噴く。そうなっ
たら、頭が丸焼けになっただけじゃすまないと思いますよ」

ナディルが小太りの男に言うと、金の竜は、天井に向かって口を
開いた。

ぼうつつという濁音と共に、赤と黄色の派手な炎が噴き出される。
炎が収まると、次に竜は小太りの男の顔に向かって、ぱかりと口
を開けた。

男は、硫黄の匂いが漂う竜の口に震え上がる。

竜は楽しんでいるように、ピンク色の舌をちろちろと動かして見
せた。

「そうそう。いい子ね」

ナディルは、二人の背中を合わせ、反対向きに並ばせる。
それから、腰に下げていた薄緑のロープを取り、彼らに向かって
ふわりと投げた。

ロープはまるで生きているかのように、ひとりでにぐるぐると回

り、二人組を締め付ける。

「私を無傷で捕まえようとして、手加減したのが悪かったね。顔に傷でも付けちゃ、値打ちが下がるって思ったのかな」

ナデイルは肩にガガを乗せ、腰に手を当てて、二人の侵入者を見下ろした。

「あなたたちの手配書、きょう通った町で見たよ。確か若い女の子をさらっては売り払うという、悪党二人組。そうだよね？」

「割といい値の懸賞金が付いていたから、これから当分、高級な宿に泊まれるね」

ガガが、嬉しそうに言った。

「よりもよって、『翡翠のナデイル』に手を出そうとしたのが、運のつきですね」

その時、そこにいる三人と一匹以外の声が、割って入った。夕方言葉を交わした、あの金髪にアメジストの目の若者が、腕組みをして扉にもたれている。

ナデイルは眉をしかめ、ガガは首を傾けて、その若者を眺めた。

「げっ、ヒスイのナデイル……」

小太りの男が呟いた。飴色の髪の男は、けげんそうな顔をする。

「何であなたがここにいますか？」

ナデイルは、若者に訊ねた。

「この二人があなたに何かしそうだったから、見張っていたのです」

「それは、どーも。ご苦労様なことで」

ガガが、めんどくさそうに、一応お礼を述べる。

「ありがとう。でも、これくらいの事態を切り抜けられないようでは、とても女ひとりで旅は出来ません。こういうの初めてじゃありませんから」

ナデイルの素っ気ない態度を気にする様子もなく、若者は人懐こい笑みを顔に広げた。

「まあ、『翡翠のナデイル』がそう簡単に誘拐されるわけではないとは思いましたがね。あなたの立ち回りも見えたかつし。いや、たいへん素敵でした。あんなに軽やかで素早く動ける方は、とても貴重です」

「当然だ」

ガガは言つて、天井を向く。

「で、この人たちの処遇は？」

若者が、人さらい二人組を指差した。

「明日の朝、手配書を出していた町へ引き渡します。不幸な娘さんが増えないように」

ナデイルは答える。

「また翡翠のナデイルの名が上がりますね。でも、明日の朝まで彼らをどうするんですか？　まだ夜も明けてはいませんが」

「廊下で転がっていてもいます。私はまた寝なければならぬので。朝までゆっくりね」

飴色の髪の人さらいが、ふんと小馬鹿にしたように、鼻を鳴らした。

「翡翠のナデイルだか何だか知らないが、お嬢ちゃん。我々がこんなちやちな草の蔓で編んだ紐で、いつまでもおとなしく縛られているとでも思っているのかい？　お嬢ちゃんが目の覚める頃には、この紐だけを残して、我々悪党二人組のおじさんたちは、影も形もないよ。お嬢ちゃんの手の届かない安全なところで、のんびりと昼寝でもしてるだろうよ」

「甘いね、悪党のおじさん」

ナデイルは、翡翠色の冷たく無表情な目で、彼を見下ろした。

「あなたたちを縛っているのは、サラマンサの草で編んだロープだよ。そのロープで縛られた者は、体がしびれて眠ってしまう。ほら、あなたのお友達は、もう夢の中だ」

「なにっ」

彼は振り向き、相棒が首をがくんと垂れ、すやすやと子供のよう

に寝入っているのを発見する。

「目が覚めたときは、たぶん檻の中だ。安心してお眠りなさい。おやすみ、人さらいのおじさん」

ナデイルは、口元だけをゆるめて、ふっと笑う。

「このガキ……！」

飴色の髪の人さらいは暴れようとしたが、やがてその顔からも肩からも力が抜け、相棒と同じようにがくりと頭を倒し、すぐに動かなくなった。

ナデイルは、男二人をずるずると引きずって、廊下に放り出した。

「重いんだから、もう」

手伝おうとして拒否された若者は、腕組みをしたまま、紫色の目でナデイルを眺める。

「サラマンサの草は手に入りやすく、高価なはず。それで作った口ブを持つことを許されるのは、王室付きの魔法使いや神官兵の長、位の高い近衛兵、それとも、武器を収集するのが趣味のよほどの大富豪。あなたは、いったい……」

「悪徳商人や、どこかの落ちぶれた元貴族だって持ってましたよ。そんなに珍しいものではないです」

ナデイルは微笑んで答え、客を見送る主人のように、開いた扉のそばに立った。

「さ。あなたも出て行ってくれますか？ 心配してくれてありがとうございます。でも、もう終わりましたから。私はこれから眠ります」

「翡翠のナディル。本当にこの二人、こうやって置いておくつもりですか？」

若者は、信じられないという顔をして訊ねる。

「持つて行く人もいないでしょう。ここのお客も働いている人たちも、こういうことには関わり合いにはなりたくないはずですしね。第一、このロープをはずせる人は、そうそくないもの」

ナディルは、若者を無理やり部屋の外に押し出した。

「おやすみなさい」

儀礼的にそう言い残して扉を閉め、鍵をかける。

まだ呆気に取り残されている若者の顔が、扉の向こうに消え去った。

「あ。やっと寝られる……」

ナディルは、ベッドに潜り込んだ。

「……つたく。ナディルは、いつもほったらかしなんだから」

ガガはぶつぶつ文句を言いながら、床に転がった剣を片付け、位置の変わった調度品をきちんと直した。それから、ナディルの足元に丸くなる。

その時にはナディルは、たたいてもひねっても起きないほどに、深い眠りへと落ちていた。

月が輝きを失って薄青くなった空に溶け込み、その代わりに、まばゆい朝の太陽が天のドームをゆつくりと昇る。

ナデイルは目を開け、四角い窓の形に切り取られた明るい白銀色の空を、ぼんやりと眺めた。

ほのかに漂う薬草の香りが、心地よい。

今しがたまで夢の中で一緒に過ごした銀の髪の若者の姿を、ナデイルは何度も思い返した。

彼……エリユースの夢を、また見てしまった。

ナデイルは翡翠色の目を宙に漂わせ、深く息を吸う。

本当は、彼が夢に登場することを待ち望んでいた。

毎晩そのことをそつと願って、眠りに就く。

現実の世界で会えないのなら、せめて夢の中でもいい。彼に会いたい。

この目で見ることの出来ない彼の顔を見て、この手で触れることのかなわぬ彼に触れたい。

けれども夢から覚め、それが夢であるとわかった途端、気の遠くなるような悲しみが、影のようにナデイルの体を覆い尽くすのだった。

夢の中では、隣にいて微笑んでくれていた彼は、現実にはここにはいないのだ。

どんなに手を伸ばし、探し回っても、見つけることは出来ない。そのことが、明るすぎる太陽の光でよけいに気づいてしまう朝。いやというほどわかる、きれいな朝だ。

ナデイルは、両手をかざした。

エリユースと手を繋いでいた。

あれは、舞踏会だった。猫の仮面を付け、正装していた彼。彼と踊ったあの短い時間の、夢の中での虚しい再現だった。

まだ彼の手のあたたかい感触が残っている。不思議なくらいに、はつきりと。

彼の黄色い目の色も、銀色に輝く髪も、鮮やかすぎるほどに覚えている。あれが夢だなんて……。

彼の微笑み、自分と呼ぶやさしい声。

全部、頭の中での出来事なのだ。記憶と意識が作り出した物語。いつそ、夢が永遠に覚めなければいい。たとえ夢の中でも、エリユースといられるのなら。

ナデイルは、半ば本気でそう思う。

目をこすると、手のひらが湿った。

ナデイルは、それを頬に撫で付ける。

泣いてはいけない。決めたのだから。彼に会うまでは、絶対に泣かないと。

泣いていたのは、長い髪をし王女の衣装をまとったナデイル。

二年も前のことだ。『翡翠のナデイル』は、泣かない。

夢を見ようと見まいと、彼のいない一日は再び始まる。

行き場のない心を抱えて、また一日を過ごさなければならぬ。そうだ。あの二人組を連れて行って、引き渡さなくては。

ナデイルは思い出して、憂鬱になった。

夢の世界は薄れ、直面すべき現実が押し寄せてくる。

昨日通った町に逆戻りしなければいけない。確かベルタイトとかいう町だ。

だが、どうやって運んだものか。

大きな図体の男が二人。当然、馬がいる。

丈夫な馬を一頭買って、あの二人を乗せて引いて行こう。ちょっ

と馬が気の毒だが。

何と面倒なことか。

時間の無駄だ。懸賞金が入るのは、嬉しいとはいえ……。

ナディルはベッドから体を起こし、髪をかき上げた。

ガガは、ナディルの足元で丸くなって眠っている。

ナディルは、ガガの頭をそつと撫でた。

朝の冷気を含んだひんやりとした感触が、金の鱗から伝わってくる。

「あなたはいつも、私のそばにいてくれるんだね。ありがとう」

ガガは、耳をぴくりと動かしした。

ナディルは微笑んで、そつとベッドから離れる。

顔を洗い、服を着替えたナディルは、部屋の扉を開けた。

そして、廊下を覗き込む。

「あれ……？」

廊下には、ナディルが置きっぱなしにしておいたものはなかった。掃除の行き届いた清潔な空間に、旅人たちの出立の緊張感が、朝の空気と共にかすかに漂っているだけだ。

あの人さらいの二人組の姿はおるか、サラマンサのロープの端くれさえ見当たらない。

「逃げたのかな。でも、変だな。彼らがロープを自分ではずせるわけないし。あれをはずせる人が、そのへんにごろごろいるとは思えない」

自分の判断は、間違っていたのだろうか。
いつも張り詰めるようにして抱いている自信が、ほんの少し揺ら
いだ。

「どうしたの、ナディル」

ガガが眠そうな目をしばたたかせて、ナディルのそばにパタパタ
と飛んでくる。

「あれま……」

ガガは廊下を眺め、溜め息をついた。

「あいつら……。やっぱり、部屋の中に入れておいたほうがよかつ
たんじゃないの」

「冗談じゃない。あの人たちと同じ空気を吸いながら眠るなんて！」

ナディルは、思いきり顔をしかめて見せる。

「でも、これで懸賞金はペアで、当分安宿、もしくは野宿かな。あ
ーあ」

ガガは、欠伸をしながら言った。

「仕方ないよ。もともと想定外の出来事だったもの」

その時、廊下に人影が現れた。

ナディルとガガは、緑の目と赤い目を、その人物に同時に向ける。
あの金髪、アメジストの目の若者だった。

ナディルにエリユースの情報を提供し、ナディルを心配しながらも立ち回りを見物していた、どこかおっとりとした、人のよさそうなあの美青年。

「やあ、おはよう、翡翠のナディル」

若者が笑って、軽く会釈する。

悪党二人組の姿が消えていることなど、気にも留めていない様子だった。

「また、こいつかよ」

ガガは、ぼそりと呟いた。

「竜くんも、おはよう」

若者は、ガガにも挨拶をする。

「ぼくには、ガガっていう名前がある」

ガガは、不満そうに言った。

「ガガ。素敵な名前だね」

若者は、無謀にもガガの頭を撫でようとしたが、ガガが口をぱかりと開けたので、思わず手を引っ込めた。

彼は気を取り直して、ナディルの目をじっと覗き込む。

「翡翠のナディル。本当にあなたの目は、翡翠のように……」

「で？ 何か御用ですか？」

ナディルは、頭ひとつ分以上背の高いその若者のセリフを遮った。この人、エリユースと同じくらいの背丈だ。同じ角度で見上げねばならない。

いつも胸に抱きしめている記憶のかけらが、ナディルに教えた。

「これを届けに来たのです」

金の髪の若者は、小さな皮袋を差し出した。

「はい、どうぞ、翡翠のナディル」

「え……？」

袋は、ナディルの右の手のひらに、ずしりとした重みと共に乗せられた。

その中に金貨が詰まっているのが、袋の口から見える。

「それから、これもね」

若者は、呆気にとられているナディルの左手を取り、赤く輝く宝石を握らせた。

「ルビーです。ガガくんになんで、これにしました」

「あのう……？」

「懸賞金ですよ、あの二人組の」

若者が、につこりと屈託のない笑みを浮かべて、言った。
ナディルとガガは、顔を見合わせる。

「あの二人、あなたが？」

「そう。夜明け少し前に馬に乗せて、ベルタイトの町まで運びました。『翡翠のナディル』の使者としてね。懸賞金は、持ち運びに支障をきたさない程度は金貨にして、残りはルビーにしてもらいました。それから、これもお返ししなければね」

彼は、きちんと輪にしてまとめた薄緑のロープをナディルに差し出す。

それは、ナディルがあのだ二人組を縛ったサラマンサのロープだった。

それが自分のものであることをさつと確認したあと、ナディルは若者を見上げた。

「……では、あなたはこのロープを使えるわけですね。これの使い方を知っているのは、身分が非常に高い方の関係者が大金持ち。するとあなたは、そういう……？」

「あなたがロープをお持ちになっている理由は知りませんが、私の場合も、もしかしたら、あなたと似ているのかもしれないですね」

若者が言った。

「でも、まさか、ロープの使い方を知っているからって、親切心で早起きして、わざわざベルタイトまで、あのお尋ね者たちを運んで、おまけに懸賞金まで届けに戻ったわけじゃないでしょう？」

「あなたの手間を省いてさしあげたかったですよ。あなたは逆戻りなどせずに、一刻も早くエリユースとやらの後を追いかけてほしいですし」

『エリユース』という名前が出た途端、ナデイルの目が釣り上がる。

なぜこんな見も知らぬ人に、彼の名前を気安く口にされなければならないの。

翡翠色の目がそう告げているのが、ガガにはよくわかった。

ガガは喉の奥で、炎を噴き出す準備をひそかに始める。

「実は、あなたを雇いたいです」

若者が、それまでの微笑みを直ちに消し、真面目な顔をして言った。

「それが一番の目的ですね」

「……」

ナデイルは眉を寄せ、若者を眺めた。

笑みを消し去った若者には、ぴんと張り詰めたような緊張感が漂っている。

加えて、微笑みで分散されてつかみどころのなかった雰囲気、輝くような気品と風格として作り直され、若者をしっかりと取り巻いた。

どこかの下級貴族の道楽息子や大金持ちの遊び人、などといったぐいの人物ではなさそうだ。

「おはようございますっ！」

昨夕ナデイルの食事を運んで来た給仕の少年が、両手に料理を盛り付けた大きな盆を抱えて、廊下を歩いて来る。その後ろには、彼よりも年下の別の少年が、これも大きな盆を持って続いていた。

「朝食をお持ちしましたっ！」

頬を紅潮させた少年が、昨夕よりも明るく声を上げた。

二人の盆には、数種類のみずみずしい果物、野菜を軽く炒めた料理や黄色が鮮やかな玉子料理、熱いお茶、香ばしく焼かれたパン、蜂蜜でまぶされた甘そうな菓子などが、見た目も美しく乗せられている。

「私、頼んでないよ。朝はいつも、自前のお砂糖入りのお茶だけなもの」

ナデイルが言うと、少年は金髪の若者の方に会釈して、にこっと笑う。

「こちらの方からです」

「は……？」

若者は、子供のような無邪気な笑顔で、ナデイルに頷いて見せた。

「朝はちゃんと食べないと元気が出ませんよ。ご一緒にどうですか？ 朝食は三人分頼んでおきましたから。食事の後、私の話を聞いてください、翡翠のナデイル。もちろん、ガガくんもね」

若者は、少年たちを勝手にナデイルの部屋に招き入れる。

「ああ、そのテーブルの上に置いてくれたまえ。そうそう。うん、なかなかおいしそうだ」

彼は料理を盆から一切れつまみあげ、口に放り込んだ。そして満足そうに頷く。

「美味だ。さ、いただきますうか、ナデイル、ガガくん。あ、お茶はそこにね。椅子も整えてくれるかな」

「……信じられない」

ナデイルは、少年たちに細かく指図する若者を眺めながら、小さく呟いた。

「向こうから、わざわざお近づきになってくるじゃないか」

ガガが、ちらつとナデイルを見上げる。

「ほらほら、二人とも。早くいただかないと、冷めてしまいますよ」

若者が、朝の景色にふさわしい爽やかさで、にっこりと微笑んだ。ナデイルは、深い深い溜め息をついた。

「私の名は、フィリアス。オーデルクから来ました」

きれいに空になった食器を前にして、金髪の若者が言った。

「オーデルクって、アーヴァーンのお隣の国だね」

食後のミルクを飲んでいたガガが、頭を少し持ち上げて、ナディルにささやく。

「ほんの少しだけど、一応ね」

ナディルは、仕方なく呟いた。

アーヴァーンは小さな国だが、四つの国と隣り合っていた。

オーデルクはアーヴァーンの西隣にあり、尻尾のように伸びた領土の端が、アーヴァーンと接している。大公が治める、緑に囲まれた平和な美しい国だ。

「私の家には、代々伝わる宝冠があります。翡翠を嵌めこんだ金の冠……。花嫁になる女性が、結婚式の時に付ける冠です。だがその宝冠は、三年前に盗まれたのです」

フィリアスが言った。

落ち着いた、静かな声。煙るような紫の目が美しい。

そして、真新しい朝の光の中で、波打って輝く金の髪。

ナディルは二杯目の砂糖入りのお茶の器に手を添えながら、彼を見つめる。

この人の髪は、太陽によく映える。

エリユースの銀の髪が映えるのは、月の光の下だ。

神秘的な、あまり華美ではない、気品のある銀の色。

やわらかいその髪は、猫に変身したとき、毛の先に星々のかけらがきらめいた。

「冠の行方を調べましたが、何人かの手を次々と渡った後、カジエーラという魔女が持っていることがわかりました」

「まじよっ！」

ガガが舌をぺろりと出して、呟く。

「私は冠を取り戻さねばならないのです。そのためにオーデルクを出ました。魔女に会って交渉し、冠を持って帰ること。それが私の使命です。翡翠のナディル。あなたにそれを手伝っていただきたい」

「でも、私は魔法は使えませんよ、オーデルクの公子さま」

ナディルは、フィリアスに言った。

フィリアスは、アメジストによく似た目を大きく見開く。

「あなたは私の素性をご存知なのですか？」

ナディルは、肩をすくめた。

「だって、翡翠をはめこんだ冠があるのは、翡翠の産地のオーデルクの、それも大公家だけですから。代々の公妃さまの宝冠ですよ。大公家の方は、紫の目が特徴だって聞いたことあるし、その公子さまは、あなたと同じような年恰好のはず。名前までは覚えていま

せんけど」

「そーそ。アーヴァーンの王女さまの結婚相手としては、申し分のない家柄だもんね。やっぱりあれば、この公子さまの肖像だったってわけ」

ガガが、フィリアスに聞こえないように、小さな声で呟いた。

「はい。おっしゃる通り、私はオーデルクの公子です」

フィリアスは、ナディルたちが拍子抜けするくらいに、あっさりと認めた。

「公子さま自ら、冠を探しに？」

普通、公子さまともなれば、そういうことは臣下に任せて、宮殿の奥でただ待つだけでもいいはずなのに？

ナディルは不思議に思う。

「二十人です」

フィリアスが、ふうつと溜め息をついて言った。

「え？」

「全部で二十人、冠を取り戻すために、オーデルクの若い剣士たちをその魔女の元へ向かわせました。だが、誰一人として帰ってこなかった。私の幼なじみや友人たち、従兄たちも入っています。これ以上冠のために、親しい人々を失いたくありません。それにあの宝冠は、わが大公家に伝わる大切なものです。宝冠を付けぬ妃は正妃

とは認められぬほどに。大公家の栄光と繁栄の象徴ともいうべきもの。次期大公家を担う公子ならば、自ら赴いて取り戻すのが当然です。もし取り戻せないなら、私は後継者としての資格を認めてもらえないでしょう」

「えらいつ！」

ガガが、ミルクの皿を舐めながら頷いた。

「たったお一人で？ 見たところ、お連れはいませんよね？」

「そう。一人で旅立ちました。誰か腕の立つ剣士を見つけて、雇うつもりでした。で、あなたを見つけたわけです、翡翠のナディル」

フィリアスはにこりとして、ナディルを見つめる。

「私に雇われませんか？ 報酬として、両手にいっぱいの上質の翡翠をあなたにお約束しましょう」

ナディルは、どん、と音をたてて、お茶の容器をテーブルの上に置いた。

「あのですね、公子さま。私は商売仲間の間じゃ、それほど腕が立つってほうじゃありません。翡翠の宝冠を取り戻しに行った人たちが一人として帰ってこなかったということは、つまりカジエーラがその人たちをどうにかしたってことでしょう？ あなたは、その魔女と戦わなくてはならないかもしれないですよ。私は魔法の心得は全然ないんです。私の名が知られているのは、私が若い娘で、珍しいからです。大人の男の人たちに比べたら、体力も腕っぷしも当然劣ります。私よりすぐれている人は、見つけるのは容易なはずで

す」

魔女だなんて、本当に冗談ではない。

魔法がらみの事件に巻き込まれるなんて、真っ平だ。

危ないし、時間がかかるし、ろくなことがない。

早くエリユースを追いかけないと、ますます遠ざかってしまうというのに。

ナデイルは少々いらつきながら、思う。

この、きれいでお人よしそうな公子さまを、たったひとりだけに置いて行くことに、ほんのちよっぴり気がかりを感じないこともなかったが。

「いや、あなたの腕前は、かなりなものだと思いますよ。幼い頃から、さんざん仕込まれてきたという気がする。違いますか？ 魔法が使えなくても、だいじょうぶ。きっと魔女に勝てますよ」

あなたがその笑顔で言うと、本当に簡単に勝てそうだ。

ナデイルは呆れながら、心の中で呟いた。

「では、フィリアス公子。宝冠とあなたの臣下の人たちを取り戻す手立てはあるのですか？ あなたは魔法が使えますか？」

ナデイルは、公子に訊ねた。

「いや、使えませんね、まったく」

ガガが、ミルクの皿を引っくり返しそうになった。

「でも、説得します。きっとわかってくれるはずですよ」

フィリアスは、まぶしいくらいの笑顔で、明るく答える。

「話にならんっ……！」

ガガは、ふいっと横を向いた。

「カジエーラは、元々人間に対して、非友好的な魔女ではありません。自分からは、人間の前に姿を現すことはしませんが、訪ねて行った人間たちには極めて親切だったと聞きます。占いをしたり、病気を治したりね。ただ、宝石を集めるのが趣味で、そのために一部の人間からは恨みを買っているようです。私の臣下たちは、彼女を怒らせるようなことを何かしたのかもしれませんが。だとしたら、謝って許してもらわねば」

フィリアスが言った。

「二十人が、二十人ともですか？」

「カジエーラがどうしても冠を返してくれないから、輪になって座り込みでもやってるんじゃないの？」

と、ガガ。

「そうかもしれませんね」

フィリアスが真面目に答えたので、ガガはおもしろくなさそうに、ふんと鼻を鳴らした。

「その二十人は、魔法をかけられているとか、どこかに閉じ込められているとか……では？」

フィリアスは、ナデイルに頷いた。

「それも考えられますね。でも、ここ最近、カジェーラの城に行つたまま、帰つてこなかった人たちは、私の臣下以外にもたくさんいるらしいのです」

「魔女は気まぐれだからね。人間に対する方針を転換したのかも」

ガガが呟く。

ナデイルは、紫の目の麗しきオーデルクの公子に向かって言った。

「公子さま。残念ながら、私はあなたのお手伝いは出来ません。私は人を探しているんです。もちろんご存知でしょうけど」

「化け猫エリユースですか」

「そうです。私が旅をしている第一の目的は、彼を探すこと。だから、たとえお金になったとしても、ややこしい仕事や長引く仕事は引き受けません。魔法がらみは、特にね。この仕事を始めた頃は、手当たり次第にやってましたけど、今は選べるようになりました。それに、あなたに持つてきていただいた賞金のおかげで、当分仕事をしなくても旅を続けられそうですし」

「その、エリユースですがね、ナデイル」

フィリアスは、軽く片手で頬杖をついた。

「エリユースは、カジェーラの城にいるかもしれないですよ」

「え……っ」

ナデイルは、凍り付く。

「それは、どういう……」

「彼は、北に向かいました。カジェーラの城をめざしてね。彼はドレーンの貴族から、ある首飾りの搜索を依頼されたそうです。その首飾りも、カジェーラが持っているとか」

「では、エリユースは……」

ナデイルは、胸に当てた手をぎゅっと握りしめる。

「彼が無事に首飾りを手に入れて、カジェーラの城を出ることが出来たのかどうかはわかりません。だが、私の臣下たちが彼女に捕らえられているならば、エリユース殿も同じ目に遭っている可能性がある」

「エリユースは、魔女に捕まるようなヘマはしない」

ナデイルは、フィリアスの言葉に被せるようにして、呟いた。

「でも、あの人は、イノシシの罠にかかるようなヘマはしたよ」

ガガは言って、ルビーの目でナデイルを流し見る。

「そういえば、そうだけど……」

「じゃあ、決まりですね、翡翠のナデイル。私としても、やはり旅

の道連れは、むくつけき男よりも、あなたのようなかわいい娘さんがいいですね」

フィリアス公子が微笑む。

「どうするの、ナデイル？ オーデルクの公子さまなんて、あまり関わらないほうがいいに決まってるよ。それに、カジェーラの城にエリユースが確実にいるかどうかはわからない。出て行った後かもしれない」

ガガが言う。

エリユース……。

ナデイルは、心の中で彼の名を呼んだ。

その名を呼ぶ度に気持ちが沈み込む。体の表面が氷の膜に包まれるようだ。

あなたはいるの？ その城に？

もしいるのなら、私は行かなければならない。

あなたをずっと探してきたのだから。

私はもう一度、あなたに手を伸ばす。もう一度だけ……。

ナデイルは、唇を噛んだ。

体が震えている。

何を恐れているのだろう。

彼に…… やつと彼に会えるかもしれないというのに。

そのために、こうして旅を続けているというのに。何をいまさら。ナデイルは、彼に会うことをためらっている自分を遠くへ押しやる。

そして少し黙り込んだ後、フィリアスに言った。

「わかりました。たとえ彼がそこにいなくても、彼がその城をめざしたことが事実なら。エリユースの消息がかけらでもわかる可能性があるのなら、お供いたしましょう」

「ありがとう」

フィリアスの顔が、願い事がかなえられた子供のように、嬉しそうに輝く。

ナデイルは、フィリアスが差し出した手を握り返した。日焼けのしていない、白いやわらかい華奢な手。

あたたかかったが、エリユースの体温には届かない。

「では、これは手付金です」

フィリアスは、テーブルにコトリと音をたてて、緑色の石を置いた。

「翡翠のナデイル。名前の通り、あなたには翡翠がよく似合う」

「どうも」

ナデイルはそっけなく答え、宝石をつまみあげた。

深い湖の神秘的な緑。心が落ち着く、静かな緑色だ。

「確かに」

「それから、あなた用の馬も、ついでに町で買っておきました」

「用意周到だな」

と、ガガが冷ややかに言う。

「ナディル。あなたには、いつかどこかでお目にかかりませんでしたか？ あなたのその、翡翠と同じ珍しい色の目には、見覚えがあるような気が。あれは、どこだったか……」

フィリアスは額に手を当てて、考え込んだ。

「公子さま。あなたの目も、アメジストみたいな紫色で変わっておられますけど、私には記憶はありません」

ナディルは、彼がアーヴァーンのナディル王女のことを思い出さないうちに、急いで言った。

「あなたは賞金稼ぎなどとしておられるが、本当はどこかの貴族の姫君なのではないのですか？」

フィリアスが訊ねる。

「なぜ、そうお思いです？」

ナディルはフィリアスを見据えた。

「いや。なんとなく、そうじゃないかと感じたまでです」

「オーデルクの公子さまには、一切関係のないことです」

ナディルは、外気にさらされた翡翠の表面温度よりも冷たく答える。

「エリユースというのは、あなたの恋人なのですね」

「それも、あなたには関係のないことです」

ナデイルは、さらに輪をかけた冷たさで言った。

ガガは、口を少し開け、尖った見事な歯を剥き出して見せる。

それが彼なりの、にやりと笑った顔だった。

その後、オーデルクのフィリアス公子は、翡翠のナデイルの部屋から丁重に追い出され、彼女の用意が整うまで『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』の門の前で、じっと待つはめになったのだった。

ナデイルがエリユースに初めて会ったのは、風の吹かない満月の夜だった。

暗い澄んだ藍色の天には、月が普段よりも存在感を持って浮かび上がり、地上のものは、すべて薄い銀の膜で覆われる。

月は中空に、異様なほど明るく輝いていた。

空を見上げて月が視界に入ると、誰もがどきりとするほどに。

ナデイルは窓を開け、しばらく離宮の庭の風景を眺めた。

青と黒と月の銀色。吹き溜まる光のしずく。闇にまぶされ、凍ったような花たちの影。

静かだ。

木々のざわめきすら聞こえない。

月が、いつもナデイルが飽きるほど眺めている景色を、似ても似つかぬ別のものに变化させてしまったかのようにだった。

「散歩に行かない、ガガ？」

ナデイルは、小さな金の竜に声をかける。

「散歩？ こんな時間に？ またあ？」

半分眠りかけていたガガは、けだるそうに頭を持ち上げる。

「こんな時間だから、行くの」

腰よりも長い漆黒の髪、透き通るような白い肌。そして、一度会った者は必ず記憶に残すであろう、神秘的な翡翠の色の目。

アーヴァーンの第一王女ナデイル・リア・ジフルは、王城からは西へ遠く離れた、小さな離宮で暮らしていた。

兵士たちに守られ、侍女たちに囲まれて離宮内で過ごす日々が、五年間続いている。

ナデイルは、おとなしく手のかからない姫君を演じてはいたが、時々月の明るい暖かい夜には、見張りの目をごまかして、離宮を抜け出した。

森の中を抜け、離宮近くの湖まで出かける。

しばらく湖のほとりを散歩し、あるいは岸辺で座って風に当たり、乳白色の朝靄の中を再び見つからぬよう、細心の注意を払って離宮に戻り、ベッドに潜り込む。

ナデイルにたった一つ出来る小さな冒険であり、気晴らしだった。

ナデイルは人の気配がないことを確かめ、窓に足をかけた。

引きずるように長い寝間着をもとめせず、すっかり慣れた手際のよさで、外壁に絡みついた蔦を上手に使い、地面へと降り立つ。

窓から見下ろしているガガに手招きをすると、ガガはしぶしぶ金に輝く羽根を広げ、ふわりと空中に浮いた。

ガガは静かに窓を閉め、ナデイルの隣に着地する。

ナデイルとガガは暗やみに身を潜めながら、ナデイルが数年前に偶然見つけたいつもの抜け穴を通り、いとも簡単に離宮を抜け出た。そしてすぐに、森の湿った草を踏む。

湖は静まり返り、黒曜石を溶かして流し込んだかのような、深みのある闇色に染まっている。

水面の鏡のような丸い月は、天の満月をそのまま写し取って湖の中に投げ込まれたかのように、じっと息を潜めて光を放っていた。

うつうつ。

低い、唸り声とも溜め息とも取れる声を、ナディルは聞いたような気がした。

「なに、今の？」

「あつちに何かいるよ。動物みたいだ。やわらかい毛で、体温の高い……」

ガガが、鼻をひくつかせながら言った。

「うさぎ？」

「もつと大きい」

「猛獣？ そんなの、この辺にいるわけないけど」

ふつつ。

あきらめたような、溜め息。

ナディルは、灌木の茂みを分けた。

二つの丸い月のかげらが、闇に浮かび上がる。

「わっ！」

ガガが、後ずさった。

灌木の影にうずくまっていたのは、一匹の大きな猫だった。

全身を覆う毛は、月の光とよく似た色合いの銀色。

その大きさは、ヒヨウやライオンぐらいは十分にあるに違いない。

「すごくでかい猫だな。本当に猫かな？」

ガガが、感心したように呟く。

銀の猫は黙り込んだままガガを見つめ、それからナデイルを見上げた。

目の奥に、透き通るような金色の炎が揺らめく。

ナデイルは、猫が身動きできない状態にあることを感じた。

足がどうかしたらしい。

ナデイルは、かがみこむ。

「猫さん、罠にかかってしまったのね」

「へっ？」

銀の猫の右足には、猪を捕らえるための罠が、しっかりと食い込んでいた。離宮お抱えの狩人が仕掛けたものだ。

「ガガ、明かりをお願い」

ナデイルが言うと、ガガは気乗りのしない様子で上を向き、口を開けた。

喉の奥にぽつと薄紅の小さな炎が灯り、やがて橙色の火の玉が、ガガの並んだ歯の間で燃える。

ガガの明かりは、大猫を照らし出した。

銀の毛は、光の中に溶けてしまいそうなくらいにやわらかく、その目は黄色の宝石だった。

尖った耳に、ぴんとはねた髭。

ヒョウでもライオンでもなく、やはり猫だ。

ナデイルは、猫の足をくわえこんでいた罨をはずした。

罨のはずし方は、もちろん夜の散歩の成果で習得済みだったので、簡単なことだった。

「血だ。けがをしてる」

ナデイルの手に、赤い液体がべつとりと付く。

「手当てしなきゃ。この罨、必要以上に強力だから、深い傷かもしれない」

「手当て？」

ガガが、火の玉を口の中で燃やしたまま、首をかしげる。

「離宮に運びましょう」

「待った！ こんな大きな猫をどうやって？ 引きずるのだって、ナデイルの力じゃ無理だよ。むろん、ぼくの力でも！」

ガガが、わめくように言った。

「そういえば、そうか。困ったな」

「ほうつておいて、帰ろうよ。罨をはずしてやったんだから、それで十分だよ」

「このままにしておくなんて、そんなかわいそうなこと、出来ないよ」

その時、灰色の雲が、光り輝く月を飲み込んだ。
地上を包む銀の膜は消え去り、闇が景色を塗り替えるように、いつせいに出現する。

「あ……」

ナディルは、目の前の、今まで猫であつたものを見つめた。
ガガは「わあっ」と声を上げ、思わず橙と青の火柱を吹き上げる。
銀の猫の姿は、まるで魔法の力が使われたかのように、消え失せていた。

代わりにそこに座っていたのは、人間の若者だった。

後ろで一つに束ねた髪は、たった今まで確かにいたはずの、あの猫の毛の色と同じ、見事な銀色だった。

整った顔には、トパーズの二つの目。

質素で丈夫そうな旅人の衣装をまとい、銀の猫と同じようなくまいった姿勢で、ナディルを見上げている。

彼の足首からは、血が流れていた。

「猫さん……よね。今、ここにいた猫さん……。あなただったの？」

若者は、仕方なさそうに頷いた。

「私は満月の光を浴びると、猫になる」

若者が言った。

ナディルはその声に、心地のよい懐かしさを覚えた。

この声を知っている。昔から。

遠い過去から知っていたような気がする……。

ナデイルがいつか出会えるとずっと夢見ていた、そんな声だった。

「魔法でもかけられているんですか？」

ナデイルが訊ねると、若者は首を振った。

「そういう体質なのです……」

「とんでもない体質だな」

明かり役に徹しているガガが言う。

「とにかく足の手当てをしなきゃ。一緒に来てください。さ、私に
つかまって」

ナデイルは、若者をゆつくりと立ち上がらせた。

そして、彼の腕を自分の肩に回す。

若者が胸元に付けている小さな鈴が、チリンと澄んだ音をたてた。

「歩けますか？」

「あなたは、私が恐くないのですか？ 私は、化け猫と呼ばれる身
なのですよ」

若者が言う。

「べつに……。そりゃあ、不便な体質だと思いますけど」

ナデイルが答えると、若者はあきれたような表情をして、微笑んだ。

「初め、あなたのことを幽霊かと思った。でなければ、この辺の魔女が、それとも魔物……」

「そういえば、そのヒラヒラした寝間着を着ていれば、そう見えな
いこともないな」

二人の先に立つて飛ぶガガが、呟く。

「だが、あなたはちゃんと触れられるし、あたたかい。生きている
のですね」

若者が言った。

ナデイルは、頬に触れる彼の腕と、背中に触れる彼の胸の体温を
感じた。

あなたも、あたたかい。

ナデイルは、心の中で呟く。

彼もまた、魔物やまやかしくはなく人間であることが、ナデイル
は嬉しかった。変わった体質の持ち主であることにはあるのだが。

「猫さん、旅の人？」

ナデイルは、彼に訊ねた。

「そうです」

「傭兵とか？」

「たまにそういう仕事をするかもしれませんが、本業は賞金稼ぎです」

きれいな人……。

ナデイルは、すぐ隣にある彼の横顔を眺めた。

銀の髪が、ガガが灯す明かりから、チラチラと小さな星を集める。目は、猫になったときと同じ、黄色の透明な宝石……。

「ところで、私をどこに連れて行くおつもりですか、お嬢さん」

「離宮ですよ。アーヴァーンの王家の」

ナデイルは若者の質問に、当たり前のように軽く答える。

「離宮に……？ 住んでおられるのですか？ 侍女をしておられるとか、父上が離宮の衛兵とか……？」

「失礼なやつ」

ガガが、幾分侮蔑を込めた眼差しで、ちらりと若者を振り返る。

「あんたが寄りかかっているのは、王女さまだよ」

「おうじょ……っ！」

途端に若者は、ずっしりと重くなり、同時にその体の感触は、やわらかくなった。

ナデイルはその重みに耐え切れず、若者と地面にうつぶせに倒れる。

「きゃあっ」

月が再び顔を見せ、若者は銀の猫に戻っていた。

ナディルは、重い毛皮を背負ったような気分になる。その毛皮は、心地よいあたかさを持つてはいたが、銀の大猫は、すまなさそうに、ナディルから離れた。

「ややこしいやつ」

ガガが、空中から感想を述べる。

月が雲に隠れると、銀の髪 of 若者が、魔法のように現れた。鈴がそのことを告げるように、彼の胸でリーンと鳴る。

「王女さま……ですか」

若者は困ったような、複雑な表情をする。

「でも、アーヴァーンの王族の方々は、都の王宮に住んでおられるのでは……」

「私は、ずっと離宮に住んでいます」

ナディルは、口を尖らせる。

「では、あなたは第一王女の……」

「そう。ナディル・リア・ジフルです」

若者は黄水晶の目で、注意深くナデイルを見つめた。

「確かナデイル姫は、病弱で静養中だと聞いていましたが……。病弱ではなさそうですね」

「ここに来た頃は、体は多少弱かったけど、とうに治っています」

「なのに、あなたは離宮にいる」

「……」

ナデイルは、黙り込んだ。

そう。実際にナデイルのいるべき場所は、王宮なのだ。

幼い頃遊んだ記憶があり、なつかしい母の思い出がある場所。父の住む、水晶の形の美しい城。

だが、ナデイルはまだここにいる。

健康になったと言い出せぬがため、帰れと言われぬがため。

そして何より、身の安全のために。

「まあ、いろいろ事情があるようですね」

若者は、それ以上聞こうとはしなかった。

「ところでナデイル。どうやって離宮に入るの？ この人を連れて入ると、当然見咎められるよ。抜け穴を通っていくのにも、この状態じゃ時間がかかりそうだし」

「だいじょうぶ」

ナデイルは、いつも使っている秘密の抜け穴ではなく、正門の前

に堂々と立った。

「開門！ 開門っ！！」

ナデイルは、啞然としているガガを無視して、声を張り上げる。

「あーあ」

と、ガガがうなだれた。

「これで当分、ナデイルの夜の散歩は、ご法度だ」

「こんな夜更けに、何者だあ？」

門番たちが顔を出した。

眠そうな彼らの顔が、途端に豹変する。

「ナ、ナデイル王女さまっ！？」

「よかった、私の顔を覚えていてくれて」

ナデイルは、にっこりと門番たちに微笑みかける。

「な、な、な……」

門番たちは、口をぱくぱく開けた。

「ちょっと散歩してきたの」

「さ、散歩……っ」

門番たちの手がわなわなと震え、手に持った槍も、それに合わせて音をたてる。

彼らが守っていると固く信じていた姫君が、こともあるうに外から帰還したのだ。

平静でいることを期待するのが酷というものだろう。

「この方は、私の命の恩人なの。けがをされているので手当てをします」

ナデイルは、門番たちに言った。

「どっちが恩人だか……」

ガガが、ぼそつと呟く。

門が、鈍い音をたてて開いた。

今回のナデイルの行動で、ガガの言う通り、離宮を抜け出すのは難しくなるだろう。

警備はきびしくなり、侍女たちも、常にナデイルの行き先について回るかもしれない。

そのことを考えると少し憂鬱だったが、それよりナデイルは、この猫に化ける若者を自分の住む場所に招き入れられることが嬉しかった。

「猫さん、お名前は？」

「エリユースです。でも、王女さま、本当に私のようなものを中に入れてよろしいのですか？」

エリユースは、確かめるように、ナデイルの翡翠色の目を覗き込

んだ。

ナデイルは頷いて、微笑する。

この人は、自分に何かをもたらすだろう。

この人を離宮の中に入れることで、何かが変わっていく。そんな気がする……。

ナデイルは、小さな明かりのように灯った予感を、そつと抱きしめる。

アーヴァーンの離宮は、その夜から、銀の髪とトパーズの目を持つ不思議な若者を受け入れることとなった。

三か月後、彼が自ら離宮を立ち去る日まで。

エリユースに初めて会ったときのことは、今でも色褪せることなく、ナデイルの記憶に焼き付いている。

彼を見たときの、吸い込まれるような不思議な印象。

猫の彼と、人間の彼。二つの姿のエリユース。

背中を覆ったぬくもりとやわらかさ、そして重さ。

闇の中で妖しく光る月の目と、光の中に出たときの、黄水晶の目の色。銀の髪のきらめき。鈴の澄んだ音色。

交わした言葉の一つ一つも覚えている。

エリユースがナデイルに残したのは、たくさんのきらめくような会話。一緒に過ごした、楽しく愛おしい時間。そして、ナデイルがその短い間にも大切に育むには十分だった、彼への真っ直ぐな恋心だった。

さらには、彼が迷い、心を抑えていることが簡単にわかってしまふくらい、彼からのナデイルへの強い思い。

彼は、ナデイルのある望みを拒否したが、ナデイルは確かにそれもまた、受け取ってしまったのだ。

だからこそ今でも、心が彼へと向かうのを封じ込めることが出来ない。

あの時のえぐり取られたような心の痛みは、二年という時間が立つとも、消える気配はなかった。

二年前と同じように感じるのは、底知れぬ渴き。寝苦しい夜。

止めている涙も、その気になれば、いつだって流すことが出来るだろう。

もう少し時間を重ねれば、それらは単なる思い出という総称に変化するのだろうか。

あるいは、既に色褪せつつあることに、自分が気づいていないのか。それとも、無意識に認めようとしていないだけなのか。

どちらにせよナデイルは、当分それらを撫でさすりながら、抱えていかなければならなかった。

エリユースを見つけるまで。

あるいは彼の記憶と存在を、痛みを感じぬくらいの遠くへ置いてしまえるようになるまで。

昼過ぎに、ナデイルとフィリアス公子、そしてナデイルの肩の上に乗ったガガは、ゼノアの町に到着した。

石畳の美しい町には、様々な音と色彩が混じり合っている。

物売りの声、動物たちの鳴き声、蹄の音。人々のざわめき。兵士たちが腰に吊った剣の触れ合う音。

そして、果物の黄や赤、野菜の緑。道を行く娘たちが付けている魔除けの青い首飾り、男たちの白いチュニック。

ナデイルたちも、その風景の一部になりながら、町の中をゆつくりと進む。

「この先、カジェーラの城まで町はないようですから、ここで必要なものを仕入れて行ったほうがいいですね」

ナデイルは、フィリアスに言った。

「そうですね。そうしましょう」

フィリアスは答えたが、そのまま馬に跨ったまま、視線をどこかに留めている。

「どうかしました？」

ナデイルは馬の向きを元に戻し、フィリアスと並んだ。

「あの人、何か言いたそうにしていますね。ほら、手を振った。私の知り合いではないから、あなたか、それともガガくんのお友達で

はないのですか？」

「え？」

「ぼくには人間の友達なんてナデイル以外にはいないから、ナデイルの知り合いじゃないの」

ナデイルの肩につかまって、大きな豪華な肩章になっているガガ言う。

ナデイルは、人々の顔を一つ一つ眺めた。

この中に知っている人がいるのだろうか？ この町に？

まさかエリユースでは……。

そう思った途端、気が遠くなりそうだった。

だが、そんなはずはない。エリユースならば手を振ったりはしない。

彼は人混みでそんな行動は取らない性格だし、第一そんなに明るく軽い再会の仕方が出来る別れ方はしていなかった。少なくともナデイルにとっては。

「どの人ですか？」

ナデイルは訊ねた。声が少しかすれているのが自分でもわかった。行きかう人々の中で、一人の人物が、ナデイルによく見えるように手を上げる。

「あ……」

見知らぬ人々の中に出現した、見覚えのある懐かしい顔。けれども、それはやはりエリユースではなかった。

ナディルはそのことに落胆したが、同時に安堵する。
こういう形で彼に会いたくはない。

エリユースには偶然に出会ったのではなく、探し出して会わねばならないのだ。

そうでなければ、この二年の積み重ねが意味をなさない。

駆け足で近づいてきた人物は、ナディルと同じ賞金稼ぎを生業とする若者だった。

名前はレオン。

栗色の髪と、夏の空のような明るい青い目の持ち主だ。

一緒に仕事をしたことはないが、賞金稼ぎ仲間として彼の顔はよく知っていた。会えば親しく言葉を交わす仲でもある。

「翡翠のナディル。しばらく」

レオンは言ったが、いつもの底抜けに明るい彼らしくない、神妙な顔つきをしている。

「こんにちは、レオン。久しぶり」

「ちょっと、いいかな」

レオンは、ちら、とフィリアス公子に目をやった。

「すみませんが、しばらくここで待っていていただけます?」

ナディルが声をかけると、フィリアスは頷いた。

ナディルは馬を降りレオンと一緒に行きかけたが、思い出したようにくるりと振り返って、フィリアスのところに戻った。そして、

ガガをフィリアスに差し出す。

「公子さまをひとりにしておいたら、何だか危なそうだから、貸してあげます。ガガ、お願いね」

「はいはい」

ガガはフィリアスの肩に上り、それから彼の頭を抱きかかえるように、両手を置いて覆いかぶさる。

ナデイルは笑って頷き、レオンのあとを追った。

フィリアスは、雑踏の中にレオンと並んで紛れて行くナデイルを眺めた。

フィリアスのきらびやかなヘルメットになったガガは、暇そうに大きな欠伸をする。

通り過ぎる若い娘たちが、馬上のフィリアスを見つけて愛想よく微笑みかけ、熱い眼差しを送るが、フィリアスは全く無関心だった。

「ナデイルは、やはり、どこかの貴族の姫君なのか……。あの気品は、隠しようもないが」

フィリアスが、ひとりごとを言うように呟いた。

「こだわるね、公子さま」

ガガが、軽く鼻を鳴らす。

「たぶん、どこかで会っているはずですが。まさかオーデルクでは……」

「オーデルクじゃないことは確かだな」

「しかし、貴族の姫君なら、何でまた賞金稼ぎに？ エリユースを
探すためですか」

「聞いたけりや、ナデイルに直接聞くんだね」

ガガが、冷たく言う。

「では、そうしましょう。ところで、ガガくん。きみはずっと彼女
と一緒に？」

フィリアスが、自分の頭に被さっているガガに向かって訊ねた。

「そ。ナデイルの道案内、兼護衛役、兼教師さ」

「なるほど。姫君は、剣の腕は確かだが、世間の常識に通じている
者が必要だったわけですね」

それはあんたも同じだろ、と言いたげに、ガガはフィリアスの頭
のてっぺんを見下ろした。

「ぼくはこう見えても、あんたよりはるかに長い年月生きている。
いろんな土地で、様々な人々と一緒に過ごした。その辺の人間の年
寄りよりは、知識は豊富ってわけさ。お城の中で大切に育てられた
王子さまやお姫さまには、案内役が必要だよ。もちろん、あんたに
もね。たったひとりで冠を探しに来るなんて、危ないことよくやる
よ。言っておくけど、お金で雇った同行人は、危ないとみると雇い
主をほったらかして、さっさと逃げちまうもんだ。あんたの臣下み
たいに、命がけであんたを守ろうとはしない。お金より、自分の命

のほうが大切だからね」

「では、ナディルも逃げてしまっかな」

「一旦引き受けた仕事は、途中で投げ出したりはしないけど、エリユースが関わってくると、どうかな。ナディルがこの仕事を引き受けたのは、エリユースに会うためだしね」

それからガガは、フィリアスの美しく波打つ金の髪を見下ろした。

「しかし、金髪に金の竜は似合わないな。やっぱり、黒髪か銀髪だな」

「……ナディルのぬばたまの黒髪か、月の光の銀の髪……エリユースの髪の色というわけですね」

フィリアス公子が、葡萄色の目を、ナディルが見えなくなったあたり注いで言った。

「エリユース……か。それほど翡翠のナディルの心を捉えるとは。いったいどんな人物なのか、会ってみたいものですね」

「化け猫だよ」

ガガが、そっけなく言う。

「ほう。姫君は、そういう人間でないものかご趣味なのですか」

「人間でなくて、悪かったな」

ガガは、わざとらしく口から炎を噴き上げた。

「そういえば、きみはなぜ喋れるのですか？ 竜なのに。やはり獣人の部類なのですか？ ご先祖は、竜と人間を掛け合わせたものとか？ やはりそれには『猫族』が何か深く関わっているのでしょうか？ 古代に滅びたはずの竜をよみがえらせたのは猫族だという話がありますよね？」

フィリアスが訊ねる。

「公子さま。ム力つくことを、さらっとおっしゃるんだな」

ガガは、フィリアスの顔をずいと覗き込んだ。そして、小さく溜め息について呟く。

「まあ、確かにぼくを作ったのは、猫族の科学者だけど……」

「作った？ 魔法ですか？」

「方法は知らない。何せ竜を小型化して、後から人間の心をぶちこんだのさ」

「人間の？ それは誰のですか？ あなたは、元は人間だったのですか？ どこに住んでいたのです？ 何でまたそんなことに？ あなたの意思ですか？」

「ガキみたいに、後先考えないで思いつくまま質問を浴びせるのはやめてほしいんだけど、公子さま。あんたが訊けば訊くほど、ぼくの機嫌はますます悪くなるんだよ。確実にね」

「あ、すみません。では、質問は遠慮しますね」

公子は苦笑したが、少し首をかしげ、ガガに聞こえないようにポツリと言った。

「……何で機嫌が悪くなるのかな」

その後フィリアスとガガは、ナデイルが帰ってくるまで、人々の好奇と羨望の視線にさらされながら雑踏の中で黙り込んでいたのだった。

レオンとナデイルは通りを避け、人のいない細い路地へと入った。

「ここんどこ、すっかり名を上げたね、翡翠のナデイル」

レオンが言った。

「噂はよく聞くよ。頑張っているらしいな」

ナデイルは、くすつと笑った。

「あなたもね。どんな難しい仕事でも、必ずやり遂げるって、相変わらず定評があるよ」

「この間、言いがかりをつけてきた賞金稼ぎをまとめて5人ほど、こてんぱんに叩きのめしたらしいね」

「小娘だつてことで舐めてかかってきたから、ちょっときつめにお仕置きをしてあげただけだよ」

「ま、世間話というか、雑談はこれくらいにして」

レオンは咳払いをして、真面目な表情をした。
そして、じつとナディルを見つめる。

「何？ 迫力ある変な顔して。何か悩み事？」

「『変』は、よけいだよ。……実は、今やっている仕事は、人探しなんだ」

レオンが言う。

「あなたのお得意分野じゃない」

「でも、見つけるのに半年以上かった。依頼主は、デュプリー公爵。アーヴァーンの貴族で、国王の側近だ」

「デュプリー……」

懐かしい響きの名前だった。

もちろんナディルは、その人物を知っていた。

ナディルが離宮にいる頃、月に一度はナディルを訪ね、こまめに花やドレスを贈ってくれた、やさしい爺や。

ナディルにとって、数少ない味方の一人だ。

話し相手にと、ガガを異国の商人からわざわざ買い取り、離宮に連れて来たのも彼だった。

ナディルが黙って離宮を出て行って、どれだけ心配していることか。

「聞いたことがあるでしょう。いや、よく知っているでしょう、
と言うべきかな」

レオンが、ナディルの顔を覗き込んだ。

「え？ なぜ私が……」

ナディルは、思わず後ずさる。

「ぼくは、デュプリー公爵に依頼された。アーヴァーンのナディル・
リア・ジフル姫を捜し出すようにね。まさか、あんたがその王女さ
まだとは……。たまげたね、全く。まあ、ちょっと変わってるとは思
っていたけど」

「……」

ナディルは、唇を噛んだ。
ばれてしまった。

それも、賞金稼ぎの仲間に……！

「つてことで……」

レオンは、おもむろにひざまずいた。そして、頭を丁寧に下げる。

「王女。どうか私と一緒にアーヴァーンへお戻りください。私が、
安全且つ迅速に、アーヴァーンまでお送り致します」

「やめてよ、レオン。お願いだから、立って」

ナディルが言うと、レオンは簡単に姿勢を崩して立ち上がり、膝

をぱんぱんとはたいた。

「まったく。慣れないことをすると、足がつりそうだ。あんた、王位継承権第一位なんだって？　アーヴァーンの次の女王さまじゃないか。なんで賞金稼ぎなんかやってるの？　そんなことしてる場合じゃないでしょう」

レオンが、少々声を荒げる。

「二番目くらいだよ。次の国王は兄さまだから」

「兄さま……ね。腹違いの？」

「そう。りっぱな王太子だ」

「何かあの王家は複雑みたいだから、よくわからないが……。だけど、デュプリー公爵は、あんたが一番目だと言った」

「彼は、ナデイル王女に必要以上に肩入れしてるから。ところで、彼、元気だった？」

「ああ。なんだか、幽霊みたいな爺さんだったけど」

「そう……」

ナデイルは、うつむいた。

自分の行動は、きつと彼の寿命を縮めたに違いない。

自分を気にかけてくれていたのは彼くらいしかいなかったというのに、何という仕打ちをしているのだろう。

「王さま……あんたの父上も、心配しているらしい。表向きには、あんたは病気で、離宮で静養中ってことになっている」

レオンが言う。

「知ってる。まさか行方不明だなんて、公に出来ないものね。でも、結局私がいてもいなくても、ナデイル王女は離宮で静養中なんだけどね」

「いい加減、帰ったら？ そんなへそ曲げてないでさあ。そりゃ、アーヴァーンは居心地悪いかもしれないけど、心配してくれる人がいるわけだし」

「私、人を探しているの。その人を見つけないうちは、帰らない」

ナデイルは、レオンに言った。

「絶対に？」

「そう。絶対に。決めたの」

レオンは、腕を組む。

「だがぼくは、ナデイル王女を連れて帰らなければ、仕事は終わらないんだ。どうしても連れて帰らなきゃね。ぼくの信用に関わるし、名誉にも関わる。ひいては、これからの仕事にも差し支える。仕事は成功で終わらさなければならぬ。必ず」

「冗談ではない。

もうすぐエリユースに会えるかもしれないというのに。

こんな時に、ここで連れ戻されるなんて……。

だがナディルは、レオンの性格をよく知っていた。

彼は、引き受けた仕事は途中でやめたり、失敗したりはしない。たとえ完了できなくとも、それなりの有益な結果は依頼主に届けて、満足させる。ほぼ例外はない。

いったいどうすれば……。

まさかエリユースを見つけるまで、待っていてほしいとも頼めない。

今回必ず会えるとは限らないし、もし会えたとしても、その後ナディルがアーヴァーンに帰るかどうかはわからないのだ。

エリユースに会ったその後のこと。

それは、ナディルがあまり考えないようにしていることだった。

エリユースは、勝手に追いかけてきた自分を受け入れるのか、それとも拒否するのか。

それさえも予測はつかない。

「それは？」

レオンは、ナディルが差し出した、赤いきらめきを見下ろした。

ルビーをはめこんだ、竜の細工の指輪。

大粒の血を思わせる真紅の透明な宝石が、金の竜に守られ、ナディルの手のひらに無造作に載せられている。

「アーヴァーンの王家の者が持つ指輪です。王家に子供が生まれる度に作られるの。ルビーと組み合わせる動物は、一角獣とかライオンとか、人によってそれぞれ違います。私は金の竜。これは、私しか持っていない指輪です。王家に仕える者なら誰でも、私のものとわかるはず。これをデュプリーに渡してください。私を捜し出し

たという証拠として。そして、オーデルクのフィリアス公子と行動を共にしている、と言ってください。彼の冠探しの旅に同行していると。それでああなたの仕事は終わります。報酬も支払われるでしょう。最初決められた額には、足りないかもしれないけれど」

ナデイルは、レオンの手に指輪を置いて、握らせた。

「でも、これはあなたにとって、大切なものじゃ……」

「だいじょうぶ。私には、ルビーの目をした生きた金の竜が付いていますから」

ナデイルは、微笑んだ。

「フィリアス公子って……。さっきの金髪の……？」

レオンが訊ねる。

「そう。でも彼は、私の正体を知らないし、教えるつもりもないけどね。彼と一緒にいると知らせておけば、デュプリーは、少しは安心すると思う。フィリアス公子は、私の花婿候補の一人だったしね」

レオンは、肩をすくめた。

「オーデルクの公子さまをダシに使っわけですか。ま、とにかく、わかりましたよ、ナデイル王女さま。ぼくとしても、あなたを無理にアーヴァーンへ連れて帰りたくはないしね。この指輪をデュプリーの爺さんに渡して、それで納得してもらおう。……しかし、目の毒だな、この真紅の輝き」

レオンは、金の竜の指輪をつまみ上げ、かざした。

「これをぼくなんかに渡してもいいんですか？」

「あなたは、アーヴァーン王家から追っ手をかけられるような、そんな馬鹿な真似はしない。あなたの信用と名誉、ひいては、これらの仕事のためにもね」

ナデイルが言う。

「はいはい、その通りですよ。よくわかっていらっしやる。じゃあ、確かに」

レオンは、大事そうに指輪をしまいこんだ。

「あんたが誰を探しているのかは知らないが、早くその人が見つかるといいね。それからもちろん、あんたの正体は誰にも言わないよ。誓ってね」

「ありがとうございます。レオン。感謝します。デュプリーが選んだのが、あなたでよかった」

「じゃあ、感謝のしるしに」

レオンは、頬を指差した。

「え？」

「口づけを、姫君。本物の王女さまから、そういつのもらったことないし。この際」

「しょうがないな。弱みを握られちゃったしね」

ナディルはレオンの頬に、軽く唇を触れた。

レオンは少し顔を赤らめ、はじけるくらいの笑顔を見せる。

「どうも。では、ごきげんよう、王女さま……いや、翡翠のナディル。また、どこかで」

レオンはナディルに向かって手を上げ、片目をつぶって見せた。それからマントをふわりとひるがえして、太陽の光がまぶしいくらいに降り注ぐ通りへと姿を消した。

ナディルは、路地からは長方形に切り取られたように見える空に、翡翠色の両の目を漂わせる。

レオンは、ナディルが探しているのがエリユースだということを知らない。

もしかしたら、レオンはエリユースのことをよく知っていて、とても親しい間柄だったりするのかもしれないが、ナディルは訊けなかった。

『翡翠のナディル』が『化け猫エリユース』を探していることは、仲間うちには知られたくないことだった。

エリユースの耳に入れてはならない。彼は『翡翠のナディル』の存在だけを知っていてくれれば、それでいい。

彼が、『翡翠のナディル』がアーヴァーンのナディル王女だと気づくのは、まだ早いのだ。

どこにいる？ エリユース。あなたは、今。

どこで何をしているの？

もしあなたがカジエーラの城にいるのなら、もうすぐ会える。

あなたに会いに行くよ……。

ナデイルは路地を出て、通りに戻った。

彫像のように馬に跨っているフィリアスと、その頭の上で金の冠と化しているガガが、近くなる。

両方とも微動だにせず、それぞれお互いに違った方角を向いていた。

「あの二人、仲が悪いのかな？」

ナデイルは、少しあきれて呟いた。

離宮の人々は、満月になると猫に変化する若者に、最初は面食らい警戒していたが、やがて王女の唯一の友人として、それなりの接し方をするようになった。

そして、離宮にひとりで閉じ込められている気の毒な王女のために、決して若者のことを外部に漏らしたりはしなかった。

その不思議な若者のせいで、それまで無表情に近い顔つきで日々を過ごしていた王女には笑顔が豊かに現れ、その唇からは明るい笑い声が漏れた。

剣術の稽古の時以外は、一日のほとんどを薄暗い蔵書室に閉じこもっていた王女は、太陽が沈むまで彼と一緒に中庭にいるようになった。

二人がガガを伴って語り合う光景は、一枚の絵のようだった。その絵を垣間見ることによって、微笑ましく、あたたかい気持ちになれるような。

日溜りに立つエリユースには、月の光の中にいる時とはまた別の美しさがあった。

透けるようにやわらかい光を放っていた銀の髪は、太陽の下では落ち着いた華やかさを持つ、たぐいまれな金属のようだった。彼の目は、太陽の午後の輝きを映したような黄金の色。

侍女たちが騒ぎながら選んだ紺のトーガを身にまとい、傷ついた足の代わりに体を支える杖を持った彼は、威厳と気高さを合わせ持った魔法使いのように見える。

エリユースはナデイルに、いろいろな話をした。

彼が訪れた様々な国のこと、人々の様子。賞金稼ぎである彼が片

付けてきた、奇妙な仕事の話。

それは蔵書室のどの本よりもおもしろく、彼の心地よい声の響きと共に、ナデイルの記憶に刻まれた。

ナデイルが朝、目を覚ますと、エリユースは必ず離宮のどこかにいた。

姿が見えなくても探してみると、澄んだ鈴の音は回廊の奥から、あるいは窓の下から聞こえ、彼の銀の髪が中庭の花々の間を移動して行くのを見つけることが出来るのだった。

ナデイルは、彼の姿を探し当てるその度ごとに安堵した。

振り向くと彼がいるその現実が嬉しく、また不思議にも思った。

彼がここにいるということ自体が、夢か幻のような気がする。

彼を助けたことも、離宮に連れてきたことも、すべて満月の妖しい光が映し出した幻。

時折そんな不安が頭をもたげて夜中に突然起き上がり、ガガにいぶかしげに睨まれたりする。

だが、夜が明けるとエリユースは、やはり離宮のどこかにいるのだった。

「あなたは、私が怖くはないのですか？」

ある時、エリユースはナデイルに訊ねた。

「怖い？ どうしてですか。最初お会いしたときに申し上げたでしょう？ 怖くないって」

思いも寄らぬ質問をされて、ナデイルは戸惑う。

そんなこと、考えたこともないのに。わかってくれていると思っていたのに。

エリユースは、なぜそんな質問をまたするのだろう。

ナデイルは、悲しくなった。

「私は猫族の血を引いています。人間ではない部分を持っているのですよ」

「猫族は伝説だと思っていました。はるかなる昔、天からやってきて、そしてすぐにまた天に帰ってしまった、猫の姿をした人々。魔法をもたらしたのも、その人たちだと……」

ナデイルは、子供の頃に書物で読んだその話を思い返した。

「もたらしたわけではありません。言わば、きっかけを与えただけです。魔法の源は、この世界。この世界を構成するすべてのもの。人間はただ、それらに呼びかける術を知らなかっただけです。猫族は上手に呼びかけ、操ることが出来ました」

エリユースが言った。

「あなたが猫に変身するのは、先祖返りなのでしょう？」

ナデイルは訊ねる。

「そう。猫族は、短期間しか地上にはいませんでしたが、彼らの血は結構人間の中に広がりました。魔女や魔法使いは、そのほとんどが彼らの子孫だと言われています。私は、魔法は使えませんがね。当時、多くの国々の王たちを始め、野心を持った人々は、好んで猫族と婚姻を結んだそうです。魔法の強大な力を手に入れるためとはいえ、猫とよく結婚できたものだ。彼らは人間の姿形を取ってはいましたが、本当の姿は猫の化け物です。私が猫になったときの

ような……」

エリユースは皮肉っぽく、ふっと唇をほころばせる。

「そりゃあ、自分の意思に反して猫と結婚するのは、ぞつとすることかもしれないけど。交わるには、あまりにも異質すぎますものね。でも、愛し合っていた人たちだっていたでしょう。いえ、きつといたはずです。だから結ばれて新しい命が生まれ、あなた方が今いるのだと思います」

ナデイルは、言った。

エリユースは、おとなしそうなこの姫君の少々大胆な言葉に驚いたようだった。

彼は、ナデイルを見下ろした。

「あなたは、たとえばご自分の夫が猫だとしたら、どうされます？ その者と結婚しなければならなかったら？」

「構いません。その人のことを好きならば。それに、アーヴァーン王家にも、猫族の血は入っています。王家に昔から伝わるルビーも猫族から受け継がれたものだから。ですから、あなたとは遠い遠い親戚なのかもしれませんよ。それに……あなたは化け物ではありません。猫のときのあなたも、とてもきれいだと思います」

ナデイルは答える。

エリユースは、微笑んだ。

「あなたの目は、まるで翡翠ですね。見ている者の感情を落ち着かせ、安らぎを与えるような緑色。きれいな色だ」

彼の黄金色の二つの目が、自分を見つめている。

自分は、彼に真っ直ぐ見つめられている。

ナディルはその事実、体の表面が薄い炎で覆われたように熱くなるのを感じた。

「孤独な魂は、引かれ合う危険を孕む。私は、ここへは来るべきではなかったのかもしれない」

エリユースが言った。

「そんな悲しいことを言わないでください。私はあなたに会えてよかったと思っているのに」

ゆっくりと、心が動き出す。

もう止められはしない。

あなたは、魔法は使えないと言ったが、きっと無意識のうちに使ったのだ。

心が彼を追いかける。

氷が解けるように静かに変化していくのが、自分でもわかる……。

ナディルは不謹慎だと自分を戒めながら、エリユースの足が、まだずつと治らなければいいと本気で思った。

足が治れば、彼は出て行ってしまっただろう。

それは当たり前のこと。最初からわかっていたことだ。

そしてナディルは、またひとり、この離宮に残される。

今までと何一つ変わらぬ味気のない生活が、淡々と続くのだ。

この先、あなたはどこを巡るのだろう。

その黄水晶の目は、何を見るのか。

何を思い、何を感じるのか。

そして、誰を愛し、誰から愛されるのか。

ナデイルは、それが自分にはわからないことが、せつなかった。
決して知ることの出来ない、彼の未来。

この若者と自分の未来は、たとえわずかでも、この先交わることは永遠にないだろう。

王女と賞金稼ぎ。あまりにも遠すぎる。あまりにも……。

エリユースは、杖について歩き始める。

ナデイルは、彼の隣に並んだ。

今はこんなに肩が触れ合うくらいに近くにいるのに。ここにいるのに。

彼は、やがてはいなくなる。

朝、目を覚まして、彼の姿がどこにも見当たらない日が、必ずやってくる。

ナデイルは、目からこぼれそうになるあたたかい滴を無理やり押さえ込んだ。

ある日離宮に、国王の城から使者が到着した。

「舞踏会？」

ナデイルは、使者としてやって来たデュプリー公爵を振り返る。

「国王陛下のご生誕を祝う宴です。どうか今年はご出席を」

デュプリー公爵が言った。

若い頃は国で一、二位を争うくらいの剣の使い手だったという公爵も、今では髪に幾分白髪が混じり、顔には重ねた年令分以上の皺が刻まれている。

彼は、ナデイルが幼い時からの剣術と学問の師であり、頼もしい味方でもあった。

ナデイルの母の従兄で、母が国王に見初められなければ二人は結婚するはずだったという話も、ナデイルは耳にしたことがある。

「行きません」

ナデイルは言った。

「ナデイルは今年も熱があって気分がすぐませんので、ご辞退申し上げます」

「昨年も一昨年も、そしてその前も、姫君は辞退しておられます」

デュプリー公爵が、悲しげに言った。

「ナデイル王女は病弱なので、舞踏会なんてとても出られません」

ナデイルは、台詞を棒読みするように呟いた。

「それに舞踏会なんかに行つて、毒なんか盛られちゃ大変だしな。帰りに闇討ちに遭うかもしれないし」

ガガが言う。

デュプリー公爵は、大理石のテーブルの上に寝そべっているガガを、じろりと睨んだ。

「姫君は、私が命に代えてもお守り致します。姫君はこの国の王位の継承者なのですぞ。ぜひ一度、皆の前にお姿を……」

「でなければ皆さん、ナデイルのことを忘れてしまつてか？」と、ガガ。

「国王の継承者は兄さまでしょう。私はおとなしく、謙虚にしておいたほうがいい」

「あの方は、アーヴァーン王妃のお子様ではありません」

デュプリー公爵が言った。

「あの方の母君を、我々は王妃さまとは認めておりませぬ。アーヴァーンの王妃は、ナデイルさまの母君ただおひとり。王妃さまのお子様は、ナデイルさまただおひとりなのです」

「昔の言い伝えでしょ。ルビーが正妃の子供しか後継者に選ばないっていうのは。例外が起こるかもしれないのに」

「とにかく舞踏会には、ぜひご出席ください。付き添いの者を若い貴族の中からでも適当に見繕って、お迎えに来させますゆえ」

「それは、私が選んでもいい？」

「……は？」

ナデイルがにつこりと笑ったので、デュプリー公爵はげんそうな顔をする。

「あの人となら、行ってもいいわ」

ナデイルは、窓の外を指差した。

デュプリー公爵は、窓に素早く近づく。

エリユースが、庭の花々の間を歩いていた。

白いチュニツクとマントの彼は、銀の猫というより、どこか一角獣を思わせる。

彼はもう杖がなくとも、歩くのに不自由はないほどに回復していた。

「あれは、誰です？」

デュプリー公爵が訊ねた。

「お友達よ。月から落ちてきた猫なの」

「猫？ 月から落ちてきた、ですと？」

「あの人と一緒になら……それから、仮面舞踏会にしてもらえるのなら、行きましょう」

ナデイルはデュプリー公爵の反応を確かめるように、彼を眺める。デュプリー公爵は眉をしかめ、しばらくして腹を決めたように言った。

「わかりました。そのように取り計らいましょう」

やがてデュプリー公爵を乗せた馬車の音が遠ざかり、離宮は再び静かになった。

エリユースは金色の日溜りの中で日向ぼっこをし、離宮で働く人々は、のんびりとその仕事をこなして行く。

「ナデイル、本気？ あの銀猫を舞踏会へ、それも王さまのお城へ連れて行くなんて」

ガガが、確認するように訊ねた。

「エリユースと一緒になら、私は失礼な態度は取らないと思うの。そうするつもりはなくても、お妃さまをうつかり睨んだり、兄さまに皮肉を言ったりね。エリユースは、きっと私の感情を安定させてくれる。彼といると落ち着くの」

「そんなもんかね」

ガガは言っで、カリカリと耳の後ろをかいた。

「それに、おしゃれして彼と一緒に舞踏会に行けるなんて、素敵じ

やない？」

ガガは、あきれ顔で首を振る。

「あの銀猫さんは、踊れるの？」

「そこまで贅沢は言わない」

エリユースは、特に躊躇もなくいやな顔もせず、意外なほど簡単にナデイルの申し出を聞き入れた。

離宮は、姫君とその付き添いの若者の準備で俄かに活気づき、召使いたちの楽しげなおしゃべりと笑い声が、舞踏会の当日まであちこちで飛び交った。

ナデイルはその日、侍女たちが用意してくれた、それまで着たこともないくらいの美しい衣装に身を包んだ。

淡い透き通るような緑に、金の糸で花の模様を縫い取りしたドレス。花の間には、宝石で作られた小さなビーズが星空のようにきらめく。それは、デュプリー公爵から届けられたものだった。

真珠を散りばめた薄布を肩にまとい、エメラルドの繊細な首飾り、お揃いの耳飾りを付ける。

形よくまとめた漆黒の髪には、それによく映える金の冠。

そして指には、アーヴァーン王家の者であることを示すルビーの指輪。金色の竜がルビーを抱え込んでいる形状のものだった。

エリユースには、黒で統一された衣装が用意された。

銀の刺繍入りの上着、ズボン、黒の革靴。そして、闇よりも暗い色をしたマント。

銀の髪はトパーズのピンで留められ、頭にはルビーの目と金の鱗をした生きた竜が乗せられる。

太陽が山々の上にかかる頃、二人は質素な馬車に乗り込み、離宮を後にした。

正式にこの宮殿を出るのは、何年ぶりなのだろう。

ナデイルは馬車の窓から、遠ざかる門を眺めて思った。

「きれいだ……」

エリユースが、ナデイルを見つめる。

ナデイルは、顔を赤くした。

傾いた太陽の光が、彼の髪を薄い赤銅色に染めている。

あなたも、とてもきれい。

ナデイルは、心の中で呟いた。

「きょうは、あの鈴は付けておられないのですね？」

ナデイルは、エリユースに訊ねた。

いつも彼が付けている金の鈴の位置には、別の金細工の首飾りがかけられていた。

「舞踏会ですので、遠慮しました。演奏をしてくださる方々にも失礼ですしね。でも、持っではいますよ」

エリユースは、小さくたたまれた布の包みを、胸元からちらりと取り出して見せる。

音が鳴らないようにそうしているのだと気づいて、ナデイルは微笑んだ。

「それは、あなたのお守りか何かなのですか？　いつも付けておられますね」

「私の家に代々伝わる鈴です。由来などはよく知りませんが、気に入っているのだから付けているのです」

エリユースは鈴を直し、再びナデイルを真つすぐ見つめた。

「あなたは……アーヴァーンの女王になるかもしれない方なのですね」

彼が言った。

「次の国王は、兄だと思います」

ナデイルは、視線を落として答える。

「なぜあなたの父君は、後継者をまだ決めないのかな。今のうちに決めてしまえば、あなたはあんな辺鄙な建物に閉じ込められる必要はなくなるでしょう。あなたが病弱だと偽って離宮にいるのは、王位継承争いに巻き込まれないようにとの、周囲の配慮なのでしょう？」

ナデイルは、頷いた。

「そう。その争いから遠ざけるため、お父さまが私を離宮に住ませたのです。私が十歳のときでした」

「国王は、自分自身で王位継承者を決めることは出来ないのさ」

エリユースの頭から降りて、今は居心地のよいナデイルの膝の上に丸くなっているガガが言った。

「王位継承者を決めるのは、人ではなくルビーなんだ」

「ルビー？」

「アーヴァーン王家に伝わるルビー。正当な王位継承者が触れると、光り輝くと言われています」

「では、あなたがそのルビーに触れて、それが輝けば、あなたが次の国王というわけですね」

「でもそれは、兄さまかもしれません。でなければ、弟か妹の誰かも……」

「ただ、今までの例からすると、後継者はすべて正妃の子供だったらしい」

ガガが説明する。

「アーヴァーンの国王の正妃は、たとえ亡くなると、その女性ただ一人だけ。そして正妃の子供は、ナディルただ一人ってわけさ。元側室が正妃と同じ振る舞いをして、どんなに幅をきかせていてもね」

「ではいつそ、あなたがそのルビーに触ればよろしいのではないですか？ 父君を含めた皆の前で。そしてルビーが輝けば、父君にも後継者だと認めていただければよいのです。そうなれば争いなどは起こらないでしょう？」

エリユースが言った。

「無理だよ。ナディルにルビーを触らせまいと、躍起になってるやつらがいるんだから。宮廷って、そういうところだよ」

「私は、ずっと離宮で暮らすのもいいと思っています。別に王位を継承しなくても」

ナディルは呟いた。

「ナディルったら、またそんな後ろ向きなことを。それが安全な場所にさっさとお嫁に行って、だんなになる人にしっかり守ってもら

「って、和やかに暮らすんだね」と、ガガ。

エリユースは黙り込み、外の景色に目をやった。

太陽が、ゆるゆると角度を変えていく。

魚の鱗のような雲が、ことごとく薄紅に染まり、金糸で縁取りされたように輝いた。

「今宵は満月です。油断をすると私は猫になる」

エリユースは、静かに言った。

大広間に現れた二人の新客に、人々は思わず声を上げ、そして見惚れた。

ざわめきが入り口近くから、波のように広がって行く。

一人は、淡い緑のドレスを着た、黒髪の貴婦人。

貴婦人と呼ぶにはまだ早いあどけなさが、口元と体の線に残っている。

金の仮面の下から覗くのは、翡翠を思わせる不思議な緑の目。

もう一人は、黒いマントを優雅に揺らめかせて歩く、見事な銀の髪 of 若者だった。

ルビーの金の竜が、さながら輝く兜のように、若者の頭部を覆っている。

黒猫の仮面の下できらめく目は、透明な黄色の宝石だった。

「あれは……あのご婦人は、ナディル王女さまだ」

ひとりの老貴族が呟く。

「ナデイルさま？ まあ、お顔が拝見できないのが残念ですわ」

「でも、きつとおきれいよ。母君に似ておられるでしょうから……」

貴婦人たちが、囁く。

「では、あの貴公子は？」

「はて、あのような銀髪、若手の貴族の中におつたろうか？」

「染めているのか……あるいは髪かもしれませぬな」

「とすれば、そういうことをしそうなのは、イアン伯爵あたりか。それとも、セルビス候……。外国の貴族かもしれぬ」

ナデイルは、国王の前で礼儀正しく腰をかがめ、丁寧に挨拶をした。

国王の隣には、少し頬をこわばらせた妃。その隣には彼女の子供たちが、ナデイルの正体を知らずに座っている。

ナデイルよりも年下の子供たちは、素直な憧れの眼差しをナデイルに注いだ。

「よく来てくれた……」

国王は、ナデイルの頬に軽く手を触れた。

ナデイルと同じ黒髪。幼い頃いつも身近で見っていた、森の木々の緑の目。

それは何年たとうと変わらなかったが、顔には皺が刻まれ、あの頃ほど声に張りはない。

年を取られた。

ナディルは仮面の下から、父親を見つめる。

「楽しんでおいで」

「はい」

ナディルは、微笑んだ。

何という短い会話なのか。久しぶりに会ったというのに。

いつか父と思う存分語り合い、笑いさざめく時が来るのだろうか？ この城のどこかで。

ナディルは、ふと思った。

四人の貴公子が、国王との拝謁を終えたナディルの前に並ぶ。

「どうぞ姫君、お相手を」

「ぜひ、私と」

彼らは、手を差し出した。

鴉の仮面、ライオンの仮面、山犬の仮面、そして竜の仮面。きらびやかな異国の服に身を包んだ若者たち。

服装から推測すると、彼らはアーヴァーンの周辺の国の王侯貴族たちらしい。

ナディルの正体を知って近づいてきたのは明らかだった。

エリユースは、彼らとナディルの様子を見守る。

「あれはきつと、ナディルの花婿候補たちだよ」

ガガが言った。

「ナディルが出席するというので、招待されたんだ。やつかいだな。彼ら、仮面を付けていても、だいたい正体はバレバレだもんな。ナディルが選んだヤツが、これから宮中で幅を……エリユース？」

エリユースは驚くガガを頭に乗せたまま移動し、貴公子たちの輪の中に加わった。そして、彼もまたナディルに手を差し出す。

ナディルは微笑んで、迷うことなくエリユースの手に自分の手を預けた。

呆氣に取られる貴公子たちの前を、二人は滑るように通り過ぎる。

「踊れるの、エリユース？」

「少しなら」

「嘘だろ。ま、まさか、本気で踊る気？」

ガガがエリユースの頭の上で、じたばたする。

「しっかりつかまっておいで」

エリユースは、ガガに言った。

人々の間から、ほうつという、溜め息とも感嘆の声とも取れる声が漏れた。

黒髪の姫君と銀の髪の貴公子は、音楽に乗って、くるくると大広間を回った。

そこで踊っているどの組み合わせよりも軽やかに、そして優雅な足取りで。

エリユースは、ナディルが思ったとおりに先回りして動き、ナデ

イルを導く。まるで、もう何度も舞踏会で一緒に踊っていたように。ナデイルは安心してエリユースに体を預けた。

彼の手が、ナデイルに触れている。力強くナデイルを支えるのは、彼の腕。

銀の髪がふわりとなびいて、猫の仮面の下の黄水晶の鋭い目が、ナデイルに注がれる。

彼の視線を受けて、頬と耳が燃えるように熱い。

舞踏は王女として、幼い頃からうんざりするくらいに練習を重ねたので、無意識でも音楽に合わせて体は動いた。

けれどもエリユースに見つめられていると思うと、妙に意識し、緊張してぎこちなくなってしまう。

きらびやかな衣装と宝石を付けて踊っている、動物や魔物の仮面をかぶった人々。

広間にむせるように漂うのは、貴婦人たちが付けた花の香り。貴公子たちが髪にふりかけた匂い水の香り。

天井から吊り下げられた炎の塔のような照明が揺らめいて、広間を気だるげに照らし出す。

仮面を付けて正体を隠した人々と、彼らの輪郭を忠実に床に再現した影たちは、音楽と酒に酔いしれながら、淡い光の中を回り続ける。

不思議な光景だった。

それを望んだのは、ナデイル自身だったのだが。

そのどこか幻のような景色の中で、ナデイルとエリユースは何度も見つめ合う。

光に照らされて、仮面の中で一際美しく宝石のように輝く、エリユースの黄水晶の目。

それはナデイルにとって、一瞬で終わってしまう、とても短い夢のような時間だった。

音楽がやむと、拍手が起こった。

それは、一緒に踊った相手に対する感謝とねぎらいの拍手であり、踊った人々をたたえる拍手だったが、その大半はナディルとエリユースへのものだった。

国王の隣に陣取る王家の子供たちも、無邪気に一際高く手を打ち鳴らす。

「ありがとう、エリユース。あの四人の中の誰か一人を選んで踊るというわけにはいきませんでしたから」

「一つの行動にも意味を嗅ぎ取られるというわけですか。面倒ですね、王族の方は」

エリユースが言った。

「足は、大丈夫ですか？」

ナディルが訊ねると、黒猫の仮面は頷いた。

「ええ。もう治っていますよ。私は通常の人間より怪我が治るのは早いのです」

「それはやっぱり、猫さんだから？」

「そういうことですね」

仮面の下で黄色い目が微笑む。
その時、声が響いた。

「侯爵……？」

お喋りをしていた人々は、声の主に気づいて慌てて口をつぐみ、黙り込んだ。

広間が唐突に、しんと静まり返る。

「ファルグレット侯爵？」

声がもう一度、音のしない空間に響く。

国王の声だった。

エリユースは、仮面の下から国王を見つめた。

何かの魔法にかけられて石になってしまったのかとナディルが心配するくらい、エリユースは動かなかった。

人々は息を吞んで、国王と謎の貴公子を眺める。

エリユースと国王の間には、自然と道のような空間が作られ、遮るものは何もなかった。

ぴんと張り詰めた空気が、その道を覆う。

「お知り合いなのですか？」

国王の隣に座っていた妃が訊ねる。国王は、夢から覚めたような顔つきになった。

「思わず声をかけてしまった。すまぬ。人違いであった」

国王が呟いた。

「昔、そなたのような銀の髪と黄水晶の目の若者が、この宮殿にいたという。私が子供の頃、曾祖父から聞いた話だ。遠い昔のことであり、そなたがその侯爵であるはずもないのだが。ふと曾祖父の話を思い出してしまった」

エリユースは微笑み、国王に向かって丁寧挨拶をした。緊張が解け、人々は笑い合い、再び音楽が始まる。

けれども、エリユースは踊ろうとはせず、ナディルに言った。

「そろそろ帰りましょう、姫君。早めに切り上げたほうがよろしいです。あなたにとっても、そして私にとっても……」

「あれま。もう帰るの？」

エリユースの頭にしがみついているガガが、訊ねる。ナディルは頷いた。

「そうですね。病弱のナディル王女は、一曲踊っただけで帰らなければなりません。体にさわりますもの」

「ま、でないとおかしいよね、確かに」

ガガが同意した。

藍色の空には、輝きを増した月が貼りついてた。

鏡を思わせるその月は、非の打ちどころがないくらいの円を描いている。

仮面をはずしたナディルは、馬車の座席に深く腰を下ろした。

エリユースは、月の光を浴びないようにマントのフードを深く被り、馬車に乗る。

ガガはエリユースの頭から、ナディルの膝へと移動した。

「エリユース。一緒に来てくれたことを感謝します」

ナデイルは言ったが、エリユースは窓の外、満月の光で薄く覆われたアーヴァーンの風景に顔を向けていた。

「あなたの踊りはとても素敵でした。どこかで習ったことがおありなのでは？」

「少し興味があったのでお供しましたが、あの場所は夢。幻想です。私にとっては。美しく妖しげで、近寄りがたい世界。私を拒否するもの」

エリユースが呟く。

「だが、あなたにとっては現実だ。あなたはあの世界に生きている。そして、生きねばならない」

「エリユース……」

「私は、明日、発ちます」

ナデイルは、闇色のフードを見つめた。

彼の表情は、フードとその奥に立ちはだかる黒猫の仮面に隠されて見えなかった。

耳の奥に痛みのようなものが走り、口の中に何か熱い固まりが沸き上る。

固まりはゆっくりとナデイルの目に喉に、そして全身へと広がって行った。

ナデイルは自分の手が震えていることに気づき、両手を無表情に見下ろした。

それは、いつか聞かねばならぬ言葉。そして、ナデイルが恐れて

いた言葉だった。

わかっていたのだ。いつかエリユースが告げるであろうことを。わかっていたのに……。

かなわぬことは承知の上、それでもその日がまだ来ぬようにと本気で願っていた。

その日が伸びるように。たとえ一日でも。

けれども、時間は流れて行く。

手にすくった砂が一粒ずつ落ちていったとしても、最後の一粒が落ちてしまう時は必ず来る。

彼は去ってしまう。自分の元から彼の世界へ。彼の属する自分の知らない世界。そして、自分の知ることのない未来へと。

ナデイルの目から涙がこぼれて、手の甲に落ちた。

それは夜の空気に触れてたちまち冷え、ナデイルの手はそれに刺されたように痛んだ。

なぜ体が震えるのだろうか。なぜ涙がこぼれる？

彼が去って行くことは、彼が来た時から知っていたのに。

「そう……。行くんですね」

ナデイルは呟いた。

そして手で唇を押さえて、目を閉じる。

そうしていなければ、取り乱して叫び声を上げそうだった。

エリユース、行かないで、そばにいて。

ずっと私のそばに……。ひとりにしないで……。

たとえどんなに泣き叫んでも無駄なこと。どうすることも出来ぬことだ。

エリユースを困らせ、そして自分自身をもっと苦しみ、惨めにさせるだけの愚かな行為。

こらえねばならない。王女として。

そういうものはすべて涙にでも押し込め、体から出してしまわねばならない。

そうだ。涙ならいい。涙なら……。

ガガの頭の上に、ナデイルの目からこぼれた涙がぽつりと落ちる。そしてガガは、薄緑のドレスの中に、涙で出来た新しい模様が密やかに増えていくのを、黙り込んだままじっと眺めた。

やがて馬車は、離宮に到着した。

ゼノアの町を後にしたナデイルたちは、カジエーラの城を目指して、日が落ちるまで馬を進めた。

「今夜はここで野宿です。夕食にしましょう」

ナデイルは森の中の、木々の間に出来た平らな場所を選んで、馬を降りる。

手早く火を起こし、ナデイルは、ゼノアで仕入れてきた食品の数々をフィリアス公子の前に並べた。

固めのパンに水、芋を薄く伸ばして焼いたもの、乾燥させた肉という、旅人には一般的な組み合わせの食事だった。

フィリアスのために、普段は含まれない果実酒も追加されている。

ガガは、さつそく肉にぱくついた。

フィリアスも少しためらいながら、黙って食べ始める。

「もしかして、こういうの初めてですか？ 野宿も？」

ナデイルが訊ねると、彼は首を縦に振った。

「いつもは宿に泊まっていましたからね。食事もそこで済みますが、町で食事が出る店を見つけるか……」

「高級なところを選んで泊まってそうだなあ。食事だって、こんなみみっちい内容では公子さまの口に合うわけないもんね」

ガガが呟いた。

「すぐ慣れますよ」

ナデイルは微笑む。

「あなたも慣れるのに大変だったんじゃないのですか？　こういう生活に」

フィリアスが訊ねた。

「深窓の姫君だったわけでしょう、ずっと。それが賞金稼ぎだなんて」

「まあ、少しは」

ナデイルは言ったが、実際あまりつらいと感じたことはなかった。自分で選んだことであり、最初から覚悟の上のことでもあったからだ。

質素とはいえ、それなりに栄養を考えた食事で十分だし、野宿をするときに敷く落ち葉は適度に柔らかく、いい香りがして、結構寝心地はよかった。

食事が一段落すると、ガガは木に登り、手頃な枝を見つけて長々と体を伸ばした。

ナデイルはフィリアスに、手のひらに乗るくらいの薄緑の実を差し出す。

「どうぞ。オーデルクの瓜です」

「ありがとう。何だか懐かしいな」

フィリアスは瓜を受け取ったが、そのまま困ったようにそれを見下ろしている。

「何か？」

「その……。どうやって食べるのですか？」

ガガが、つかまっている木の枝から、ずり落ちそうになった。

「皮をむいて食べるんですよ？」

ナデイルは、小刀をフィリアスに渡す。

フィリアスはそれを瓜に、ぐさつと突き刺した。

「まさか、皮をむいたことがない……とか」

ガガは木の枝にしがみついたまま、麗しき貴公子を見下ろした。

「オーデルクの瓜だぜっ、オーデルクの公子さま？」

「その……いつもこれは、むかれて盆に乘せられた状態で出されていたものですから」

フィリアスが、恥ずかしそうに言う。

「情けないやつ」

ガガが、溜め息をついた。

「あんだ、剣のほうは、かなりの使い手なんだろうが」

「公子さまだから仕方がないですね。そういうこと、普段する必要がないもの」

ナデイルはフィリアスから瓜を受け取り、鮮やかな手つきでむき始める。

「でも、ナデイルはお城にいた頃から、果物の皮ぐらいはむけたけどな」

ガガは言って、再び木の枝に長々と体を横たえた。

フィリアス公子は、瓜の皮をむくナデイルの横顔を眺めた。
短く切られた漆黒の髪が、美しい影を描いて頬にかかる。

「エリユースのことを話してくれませんか？」

ナデイルは『エリユース』という言葉に、びくりとして顔を上げた。

「うわ、本当に聞いてやがる……」

ガガが、木の上から呟く。

「自分で聞けと言ったのは、ガガくんでしょう？」

フィリアスは、ちらりとガガを見上げて続けた。

「ナデイル。あなたの目はいつも遠くを見つめている。心がここに

ないようだ」

ナデイルは翡翠色の目をフィリアスに向けた。その目は、無表情なガラスのように見える。

「それは当たっているかもしれませんが。私の心は、常にエリユースを探しているのですから」

「あなたはエリユースのことしか目に入らないのですね。あなたは現実を見ていません」

「現実？」

ナデイルは表情を変えず、皮をむいた瓜を六つに切り分ける。

「私がここにこうしていることも、賞金稼ぎをしていることも、現実ですよ。あなたの依頼をお引き受けしたこともね。でも、二年前から……彼がいなくなった時から、熱に浮かされているような感じはします。彼と過ごした時間が現実で、この二年間が夢のような、そんな気もするのです。そして、今度彼に会ったとき、再び現実が始まる。そんな気も……」

ナデイルはフィリアスに、切り分けた瓜を差し出した。

「エリユースに会ったら、どうするおつもりなんですか？」

フィリアスが、瓜を受け取りながら訊ねる。

「……わからない」

ナデイルは、木々の間にわだかまる闇を見つめた。

「彼についていくのではないのですか？」

「わかりません。彼が私を受け入れてくれるかどうか不明です。彼は私を置いて行ってしまった。私が追いかけてきたことを迷惑がるかもしれないし、私のことを覚えてくれているかどうかも定かではありません」

フィリアスは、眉を寄せた。

「あなたとエリユースは、相思相愛ではないのですか？」

「もちろん相思相愛だったさ。ナデイルは悪いほうに考えすぎているだけだよ。エリユースがナデイルのことを忘れてるなんて、そんなことあるもんか」

ガガが言う。

「彼は、私を連れて行きたいと言ってくれました」

ナデイルは、うつむいた。

「やさしく私の髪を撫でてくれたし、私の目を見ると心が安らくなると言ってくれました。そして、泣いている私をずっと抱きしめてくれました。彼が緑色を好むのは、私の目が緑だから。そう信じます」

「だが……もしエリユースがあなたのことを忘れていたら？ あるいは、旅の途中で出会う他の多くの女性と同程度にしか、あなたの

ことを思っていなかったとしたら？ あなたの二年間は、全くの無駄だったことになる」

フィリアスが言った。

「そうだったら、まだ賞金稼ぎを続けるのですか？ それとも、おうちに戻られるのですか？」

「おうちに戻ってもなあ。命の危険があるもんな、ナデイルは。殺されるかもしれないんだよね」

ガガが呟く。

「え？ 何ですって？」

フィリアスの顔が、こわばった。

「それはだいじょうぶです。自分の身くらい自分で守れる自信はありますから。家に戻るかとか、今の仕事を続けて行くかとかも、その時になってみないとわかりません。でも、エリユースが私のことを忘れていることを知ったら、私のこの二年間は、一瞬のうちに溶けてなくなるかもしれませんね。そして、今の私も……」

「え……」

フィリアスが、不安げにナデイルの様子を伺う。

「自分の一番好きな人に存在を忘れられる……。そんな悲しいことはありません」

ナデイルは呟いた。

「彼が、思い出にすることさえしないで私の存在を忘れてしまっていれば、私は絶対に彼を許さないでしょう」

「許さない？ それは、まさか彼を……生かしておかないということですか？」

フィリアスの手から瓜の切れ端が、ぽとりと落ちる。
ナデイルは微笑んで、首を振った。

「そんなことしません。彼のこと、好きだもの。ずっと生きていてほしい。たとえ私を忘れていたとしても。でも、彼に忘れられた私は……」

「やめてくださいっ！」

フィリアスが叫んだ。

「エリユースを探すのは、もうやめてくださいっ！ カジエーラの城へは、私ひとりで行きます！」

フィリアスは、ナデイルの両肩をつかんだ。

紫の目が、驚くナデイルの間近に迫る。

「あなたは自分をしっかり見るべきです。エリユースを通してではなく、自分で、自分の力で世界を見るべきなんだ。もっと自分を大切にしないさい。彼への思い込みに翻弄されずに行動してください。あなたを置いて去ってしまったエリユースのことなど、あなたのほうから忘れてしまいなさいっ！」

「……」

ナデイルはしばらく、フィリアス公子の真剣な表情を見つめた。そして、彼を安心させるように穏やかな笑顔を作り、ゆっくりと彼の手を肩からはずす。

「自分を大切にしなさい……。エリユースもそう言いました。もう少し時間がたてば、彼のことを忘れられるのかもしれない。完全に思い出しちゃいけないのかもしれない。でも、今はだめです。私の心は、まだエリユースを追いかけているから。私の心をなだめるには、まだ時間が必要なんです。私がこうして旅をしているのは、エリユースを探すためではなく、自分の心を落ち着かせるため、自分を取り戻すため、彼を忘れるため。本当はそうなんだと思います」

「では、あなたがもつと冷静になり、完全に自分を取り戻すまで、エリユースが見つからなければいい。本気でそう思いますよ」

フィリアスが言う。

「ありがとう、公子さま。心配してくださって。だいじょうぶです。私はどうあろうと、きつとたくましく生きていくと思いますから。たとえどんな未来であろうと、私の大切な未来ですものね。気弱なことを言っでごめんなさい。いったんお引き受けた以上は、あなたに同行します。ひとりで行くなんて、おっしゃらないください」

フィリアスは軽く溜め息をついて、元の位置に腰を下ろした。

「あなたがそれほど思っておられるのに、エリユースはそのことを知りもしない」

「仕方ありません。私が勝手に追いかけてきたのですから」

「ナデイル。私はあなたが少しうらやましくもあります」

フィリアスが言った。

「うらやましい？ どうしてですか？」

「それほど一途に、ひとりの男を好きになれるなんてね。それまでの生活を捨てて、追いかけるくらいに。私にはあなたのような恋は、一生出来ないでしょう。そして、私をそれほどまでに恋焦がれてくれる女性もまた、現れないでしょうね」

「オーデルクの公子さまには、そのほうがいいんだよ。そのほうが幸せだ」

ガガが、呟く。

ナデイルは体にマントを巻き付け、地面に横になった。

「フィリアス公子。あなたのおかげで、今夜はほんの少し心安らかに眠れそうです。ありがとう」

ナデイルは言って、目を閉じる。

フィリアスは、少年のように見える黒髪の姫君を見下ろした。

何と無防備に眠るのだろう。まるで自分のベッドにいるようだ。

彼女は誰からも守られていないというのに。

これもまた、人を思う強さなのだろうか。

「あんたも眠ったら？ 明日は朝早くに出発するからね。ぼくが見張りをしているから、だいじょうぶ。ま、こんな森の中じゃ、何も来やしないだろうけど」

ガガが、木の上からフィリアスに言う。

「いや。私はもう少し起きています。きみは眠るといい。私が代わりに見張りをしているよ」

「そ？ では、遠慮なく」

ガガは木の枝から降り、ナデイルの横に体を丸めた。それから思い出したように、フィリアスを振り返る。

「まさかぼくが眠っている間に、『翡翠のナデイル』に手を出そうなんて思ってるんじゃないだろうな？」

「じよ、『冗談じゃない。そんなこと、考えてもいない』」

フィリアスが、慌てて言う。

「だろうな。ナデイルの腕は実践を積んだ分、あんたより上だしな」

ガガは再び体を丸め、頭を自分の背中に乗せた。

「……エリユースというのは、それほどの男なのですか？ この姫君が焦がれるほどに……」

フィリアスが訊ねる。

「少なくとも、オーデルクの瓜の皮は上手にむけると思っな。性格は、あんたのほうがいいかもしれないけど」

ガガが答えた。

「そう……。それはよかった」

フィリアスは微笑んだ。

それから、眠っているナディルをしばらく見つめた後、ひとりごとを言うように呟く。

「オーデルクにはね、伝説があるのですよ。銀の猫と一緒に消えてしまったお姫さまの話が……」

「……ふうん？ ナディルもそうだよね。銀の猫を追いかけてきたとはいえ、外から見ると一緒に消えたってことになるもの」

「案外お姫さまは、こんな感じでこういう所にいたのかもしれないねんね……」

「そのお姫さまが、幸せになってたらいいんだけどね」

やがて、ガガのルビーの目が閉じられる。

フィリアス公子は木に寄りかかり、ふけて行く夜の森の静けさの中で、ゆらゆらと揺れる緋色の炎を、いつまでも眺めていた。

魔力を持った鏡のようにも見える月が、窓の向こうをゆっくりと移動して行く。

ベッドに身を横たえたナデイルは、月を眺めていた。見えない糸で視線を縫いつけられたように。

二つの翡翠の目は人形のように無表情に見開かれ、薄闇の中に白い肌が浮き上がる。

長い漆黒の髪は複雑な波の模様を描いて床へと流れ、わだかまる闇の中へと溶け込んでいた。

ナデイルは、おもむろに起き上がる。

そして、冷えた床に足をそつと伸ばし、ベッドの脇に立った。

ナデイルの足元で眠っていたガガは、主人の動きを感じて目を開けた。

闇を映したルビーの目が、鏡の前でゆっくりと髪を梳くナデイルをぼんやりと眺める。

「……どうしたの？ どこかへ行くの？」

ナデイルは黙ったまま、ガガをちらりと見つめ返した。

その思いつめたような尋常ならざる表情に、ガガは慌てふためいて飛び起きる。

「ナデイル。ま、まさか……」

「止めないで」

ナデイルは小さな声で、だが強い口調でガガに言った。

「いいの、それで？」

ガガが、確かめるように訊ねる。

「後悔はしない。私の思いを断ち切るためには、必要なことなの。私がこれから強く生きていくために……」

「……そう。なら、ぼくは止めないよ。気をつけて」

ナデイルは頷いた。

ガガはそれまでと同じように体を丸め、瞼を閉じる。

ナデイルは、鏡に映った自分を確かめるように眺め、それから上着を羽織って部屋を出た。

回廊の石の床には、月の光が貼り付けられたように降り注ぐ。幾つもの柱の影が、その輝く平面を等間隔で切り分けていた。ナデイルは、昼とは違った距離に感じる回廊を足早に渡った。

一つの扉の前で、ナデイルは足を止める。

ナデイルは、鍵の束を取り出した。

離宮の女主人であるナデイルが扉を開けるのは、簡単なことだった。

香を焚いたような心地よい香りが漂う。

部屋の中は暗かった。

月の光が入らぬよう、窓はきちんと覆われている。

心細いくらいの小さなランプの光だけが、微かにゆらめいて灯っていた。

ナデイルは音を立てぬように、静かに進んだ。
そして、窓際に置かれたベッドへと近づく。

かすかな息遣い。

薄闇の中でさえ鈍い光を放つ、銀の髪。

ナデイルは佇んで、ベッドの中の人物を見下ろした。それから静かに上着を脱ぐ。

その時、銀の髪が浮き上がり、鋭いきらめきがナデイルのほうに向かつて飛んだ。

剣の心得があるナデイルの体は無意識に動きかけたが、ナデイルはそれを封じ込める。

背中に強くぶつかってくる固い平面をナデイルは感じた。

体の下には床があり、喉元には冷たい金属の感触があつた。

あたたかい手がナデイルの肩を押さえつけ、妖しく光る月のような目が、ナデイルを真上から凝視する。

ナデイルの喉には、剣の先が当てられていた。

「何者だ？」

枕元のランプが、素早く移動した。

光はナデイルの姿をあらわにしたが、エリユースの驚いた顔をも照らし出す。

「ナデイル王女？」

エリユースは、視線をそらさずに自分をじっと見上げる、アーヴアーンの王女を眺めた。

翡翠の目には吸い込まれるような不思議な光が宿り、肌は透明を帯びた白い陶器、唇は妖しいルビーの輝き。

そして闇よりも暗い色の長い髪は、伸ばされた翼のように彼女の体の周りに広がる。

エリユースは剣をナデイルの首から離し、ランプを床に置いた。それから、ナデイルの背中を支えて起き上がらせる。

「どうされたのですか、こんな時間に？」

彼が、やさしく訊ねた。

「あなたには、もう二度と会えないから……。私の心の行き場は、どこにもありません。でも、心を静め落ち着かさねば、生きてはいけません。だから、来ました」

ナデイルは、言った。

「あなたは、ご自分が何をしているのか、おわかりになっているのですか？」

エリユースは、険しい顔をしてナデイルに訊ねた。

「わかっているつもりです」

ナデイルは答え、真っ直ぐにエリユースを見つめる。

エリユースは眉を寄せ、短く溜め息をついた。

「ナデイル。あなたは確か、まだ十五くらいでしたね」

「ええ。でも、もう子供ではありません」

「ナデイル……。あなたが愛しいと思い込んでいるのは、私ではあ

りません。あなたが誰かに恋をしたいと思われていた時に、私がたまたま現れただけです。あなたは、まだ恋というものがよくわかっていない」

「誰でもよかったとおっしゃるのですか」

ナデイルの唇が震える。

「ご自分を大切にしてください。あなたは、まだこれから沢山のひとと会わなければならないのですよ。その中にはきっと、私よりもはるかに愛さねばならぬ人も現れるでしょう」

ナデイルは窓に駆け寄った。

そして、部屋に薄闇をもたらしていた帳を開け放つ。

月の光が窓から降り注ぎ、床に銀色の吹き溜まりを作った。

猫になったエリユースは、月の光の中にきちんと座って、ナデイルを眺めた。

「私は、もう数年もしたら、どこかの国の王子だか領主だかと意に沿わぬ結婚をしなければならぬ身です。それは、王族の女性として生まれた者の定め……。あきらめるしかないことです。夫となる人を愛し愛されるなどという幸運は、万に一つのことでしょう。だから、私は今、心から好きになった人を大切にしたいのです」

ナデイルは銀猫の首を抱き、そのトパースの目を覗き込んだ。

「私は、猫に変身するあなたごと好きです。あなただから好きなんです。誰でもよかったなんて悲しいことをおっしゃらないでください。これが恋じゃなかったら、何だこののですか。私の気持ちを受け入れてください、エリユース。そうしたら私は、あなたのこと

を大事な思い出として胸の中にしまいこみ、ここでの生活を心穏やかに、今までと同じように続けることが出来ます」

ナデイルは、銀猫の閉じられた口に、自分の唇を押し当てた。長い口づけを受けた後、猫は黙り込んだまま立ち上がった。そして、影の中に入る。

猫の姿は闇の中へ紛れ込み、足音も息遣いも聞こえなかった。ナデイルは不安になり、月の光が入らぬように窓を覆った。床に置かれた小さなランプだけが、部屋の唯一の照明となる。

人間の姿に戻ったエリユースは、ランプの傍に立っていた。ナデイルは彼に近寄り、その手を取った。それから、彼のあたたかい手を自分の頬に押し当てる。

「ナデイル……」

エリユースはナデイルの額に、閉じた睫毛に、そっと指で触れた。そしてナデイルを強く抱きしめる。

ナデイルは一瞬、息ができなくなった。体が突然熱を出したように熱くなり、戸惑うくらいに鼓動が早くなる。

しっかりと自分を保っていないと、気が遠くなりそうだった。

「ナデイル。重大な決心をしてここに来た割には、震えていますね？ それにあなたの目からは、今にも涙が溢れそうだ」

エリユースがナデイルの顔を覗き込んだ。ナデイルの体をきつく抱きしめたまま。

「それは……。だって……こういうことをするのは初めてですし……」

…」

何て場違いな、妙な台詞を口に出しているのだろっ、自分は。ナデイルは恥ずかしくなる。

それからナデイルは、震える手を胸元に滑らせた。指はこごえたように固まって動かなかったが、ナデイルは無理やり寝間着の襟をつかみ、するりと引く。

部屋の冷たい空気が肩と胸に触れようとした途端、ナデイルの手にエリユースの手が覆いかぶさり、それ以上の動作を押しとどめた。

「いけません！」

エリユースが、叱るように言った。

その手は、ナデイルの頭をやさしく抱き寄せる。

「もうそんなに緊張しなくてもいいですよ。このまま朝までこうしていきましょう。ずっとこうして、あなたを抱きしめている。私にはそれで十分です」

とても静かな、落ち着いた声だった。

そしてそれが、ナデイルの行為に対する彼の答えでもあった。そのことをナデイルは理解する。

「エリユース。エリユース……。私に恥をかかせるおつもりですか！？」

ナデイルは、エリユースの胸に顔をうずめた。声が震え、次第に泣き声になっていく。

「いいえ。そういうつもりはありません。あなたのお気持ちはとて

も嬉しいです。けれども、私はそれを受け入れることは出来ないのです。あなたは、私のようなものと深く関わってはなりません。あなたの未来のために。あなたがこれから出会う人のために」

「エリユース……。今宵だけの、ごく短い関わりも許されないのですか？ 大切な思い出にするためだけの関わりも？ 私は、あなたに愛されたという思い出がほしいのです」

「ナデイル。私がどれだけ自分を抑えるのに苦労しているか、わかりますか？」

エリユースが、微笑んだ。

「わかりません、そんなの。あなたはとても冷静に見えるもの。悔しいくらいにきつぱりと、あなたは私を拒否したわけだもの」

エリユースは、ナデイルの髪をやさしく撫でた。

「あなたをさらっていけたらどんなにいいか。何度もそう考えました」

エリユースは呟いた。

「この宮殿の庭の花を引き抜いて荒野に植え替えると、すぐに枯れてしまうでしょう。あなたもそうです。私と行動を共にすれば、長くは生きられない。私と来れば、あなたにはいつも危険がつきまとう。私の商売が商売ですからね。あなたは巻き込まれて、命を落とすかもしれない。あなたはやはり、ここにいてほしいのです」

「エリユース。私は、枯れるような花ではありません。私は……」

「ナディル。あなたの緑色の目は、私に安らぎと平和を与えてくれる。あなたの目の緑が好きです。私のようなものが望むことさえ出来ないような幸福を、あなたは私にくれるのかもしれない。だが、私はそれを守る自信はないのです。その前に、あなたをここから連れ出す決心もつきません」

連れて行って。私をここから連れ出して……。

自分が彼にそう言えば、それを強く求めれば、彼の決心はつくのだろうか。

けれども、そんなことを口にしてしまったら、彼を困らせるだけだ。

出来もしないことであるのは、彼もそして自分もよくわかってい

る。

だからこそ、思い出にしようとしたのに。

記憶の中に大切にしまっておこうと思ったのに……。
「かといって、私に思い出をくださる決心もつかないのですね。あなたを思い出にして、それを支えにして生きていくことさえ、私には許されないのでしょうか」

ナディルは震える声を抑えつけ、エリユースに訊ねた。

彼の答えはわかっていたが、自分の心を無理やり納得させたかった。

「あなたと深く関わって朝を迎え、何事もなかったようにそのまま旅立つことは、私には出来ません。あなたは私を思い出にするためと言われるが、私のほうはあなたへの思いがますます強くなり、断ち切ることも思い出にすることも出来なくなってしまうです。どうかお許しを……」

「では、もう少しここにいてください。もう少しここにいて、私に楽しい思い出をください……」

エリユースは、首を振る。

「なりません。それもまた、お互いに思いが強くなるだけです。私はこれ以上、ここに滞在することは出来ません。あなたは、賞金稼ぎの愛人などを作ってはならぬ方なのです」

その答えもまた、わかっていた。

涙が、止めようとしても溢れ出てくる。

エリユースの唇が、そつとナデイルの唇に触れた。

ナデイルは、その口づけを受ける。

彼のやわらかい唇。そして、あたたかい息を感じる。

このまま、こうしていられたら。

時間を止められたら、どんなにいいだろう。

朝など来なければいい。ずっと夜のままでいい。

けれども、音もなく気配もなく積み重なる時間は、ナデイルから恋人を引き剥がす。情け容赦もなく、確実に。

流れ落ちる涙はナデイルの頬を、鋭い痛みが張り付くくらいにまで、止め処なく濡らし続けた。

ガガは、静かに扉が開く音を聞いて、顔を上げた。

ナデイルのことが気になって一晩中眠れなかったのだが、朝方になって、ついうとうとしてしまっていた。

明るくなりかけた部屋の中に、ナデイルを抱えたエリユースが入

ってくる。

白い寝間着をまとったナディルを抱きしめたエリユースは、まるで朝の光に消えかけた幽霊を抱きかかえているように見えた。

「ナディル！ エリユース！」

エリユースは黙り込んだまま、眠っているナディルをベッドに横たえる。

ナディルの艶やかな黒髪は乱れ、涙のあとがわかる頬はこわばっていた。瞼は少し腫れているようだ。

「エリユース。ナディルと……？」

ガガは、遠慮がちにエリユースを見上げる。

エリユースは、首を振った。

「そ、そう……」

ガガは、ほっと安堵の溜め息をついた。

「エリユース。あなたが大人でよかったよ。ナディルもきつと、あなたに感謝すると思うよ。今はわからなくてもさ……」

「そう言っていたけると嬉しいが……。私はただ、逃げただけかもしれないぬ。わが身を、わが心を守りたいがために。そして、やっかいなことから遠ざかるために。昔、私の先祖がやったことを、そのままなぞってしまったただけなのかもしれない……」

「先祖？」

エリユースは淡く微笑んだ。そして、ガガに言う。

「きみにナデイルのことをお願いするのは、荷が重過ぎると思うが……」

「うん。ぼくはただの小さな竜だからね」

「確かに体はそうだが、きみの中身に期待したい。彼女が幸せであるために力を貸してあげてほしい。きみが出来る範囲で」

「わかってるよ。ぼくはいつもナデイルのそばにいる。離れない。守って見せるとも」

「ありがとう」

エリユースはベッドにかがみ込み、ナデイルの手を取った。そしてその手に唇をつける。

ガガは、そのきれいな光景に思わず見惚れた。

ベッドで眠る黒髪の姫君と、姫君をいとおしく見つめる銀の髪の若者。

けれどもこの二人は、もうすぐ別れなければならないのだ。

姫君はこのまま、この寂しい離宮で過ごし、若者はこれまで通り、賞金稼ぎとして旅を続ける。

決して結ばれることのない二人。もう二度と会うこともない。

エリユースはナデイルの額に何度かやさしく指を触れ、それから部屋を出て行った。

扉が閉まるのと同時に、ナデイルは目を開ける。

「ナデイル！ 起きてたの！？」

ガガは飛び上がった。

「さつきからずっと起きてるよ。エリユースの部屋にいるときからね。彼はずっと私を抱きしめてくれていたの。朝になるまで、ずっと」

ナデイルは答えた。翡翠色の瞳をどこか遠くにぼんやりとさまよわせながら。

「夜這い、失敗……だね。でも、よかった。ぼくはエリユースにお礼を言う。よく出来た人だと思うよ」

「よくないよ……」

ナデイルは、呟いた。

「彼は私を拒否したけど、私のことを思っている。自分の心から目をそらし、ごまかそうとしている。ずるいよ。それに、何？ あなたに私のことを頼むなんて？ 力を貸してあげてほしいですって？ あなたはただの飼い竜じゃない」

「うん……。そう……。だね……」

ガガは、絞り出すような声を出して同意し、うなだれた。

「私の心は静まらない。どこに持っていけばいいの？ この猛り狂うような、いまいましい心は。この苦しい胸の内は、いったいどこへ……？」

ベッドにうつ伏せになって押し殺すように泣き始めたナディルを、
ガガは成す術もなく、ただ見つめるだけだった。

その朝。

ナデイルは朝の身支度を整え、ガガと共に中庭に向かった。空と同じ色のドレスに、雲と同じ色の白い半透明のショール。飾りには銀色のものを選んだ。

空もドレスも、目に染み込むくらいに鮮やかな青色だった。

庭にはいつもと同じように日の光が降り注いでいた。

色鮮やかな花たちが揺れる小さな広間には、いつもと同じように朝食が乗せられたテーブルが用意され、いつもと同じようにエリユースが待っていた。

ただエリユースの衣装だけが、いつもとは違っていた。

彼は、既に旅の衣装をまとっている。

黒いマントに黒いブーツ。胸には、澄んだ音をたてる金の鈴。出会ったときと同じものだった。

それは、賞金稼ぎの本来の彼の姿。貴族の衣装などよりも、はるかに彼によく似合う。

自由にさまざまな土地を渡り歩く銀猫には、それが最もふさわしい。

エリユースの姿を見つけたナデイルは、ほっと胸を撫で下ろした。もし彼が、自分の知らぬうちに黙って旅立っていたら……。

そう思うと胸が締めつけられるようだった。

ナデイルが近づくと、エリユースは立ち上がる。

「おはよう、エリユース」

ナデイルは、いつもと同じように彼に声をかけた。

彼は、にっこりと微笑んだ。それも、いつもの彼の表情。けれども、朝の挨拶は、これで最後になる。

もうここで、このトパーズ色の目も銀の髪も、そして彼の笑顔も、永遠に見ることはない。

朝までずっと彼に抱きしめられていたのは……あれは夢だったのかもしれない。

彼を恋しく思う自分が勝手に作り上げた、悲しい夢……。

ナディルは、ふと思った。

テーブルの上の朝食は、ナディルとガガの分だけが用意されていた。

エリユースは、既に早くに済ませたらしい。

ナディルはそのことに言い知れぬ寂しさを感じた。

「では、私は参ります。ナディル。いえ、ナディル王女。心よりあなたに感謝し、お礼を申し上げます」

エリユースは、型どおりのお礼の言葉を短く述べた。そして、ナディルをじつと見つめる。

ナディルの番だった。

エリユースは待っている。ナディルの別れの挨拶。終わりの言葉を。

ガガが、心配そうにナディルを眺めた。

ナディルは、自分の手を握りしめる。唇が震えた。

手が、全身が、凍ったように冷たい。声が出ない。

だが、言わねばならないのだ。

「エリユース……」

ナデイルは、もう呼ぶことはないであろう彼の名を呼んだ。

「ありがとう、エリユース。私のほうも感謝しなければなりません。とても楽しかったです。あなたがここに来てくれて、本当によかったです……」

「私も楽しかったです。夢のような日々でした」

エリユースが微笑んだ。

ナデイルは、突然沸き上ってきた疑問をそのまま彼に投げかける。彼と過ごす時間を引き延ばしたかった。たとえわずかでも。

「聞かせてください。もし私が、自分で自分を守るような人間なら……あなたのそばにいても平気な、たとえ荒野でも枯れないで生きていける花ならば、あなたは私を連れて行ってくださったのでしょうか」

エリユースは、一瞬沈黙したあと答えた。

「あるいは……そうしたのかもしれない」

ナデイルの中で、何かが音をたてたような気がした。修復しようとしていた何かが。

これは、何なんだろう。

エリユースはナデイルの頬に軽く手を触れ、ゆっくりとその手を離した。

彼のあたたかい体温が、遠くなる。

「幸せに、ナデイル……」

彼が呟く。

幸せに？

幸せに？ 幸せにつて？

違う！

心が叫ぶ。

違う。違う……！！

ナデイルの中で何かが砕けた。

彼が、ゆっくりとお辞儀をした。

ナデイルが今までに見たどの貴族よりも、丁寧で優雅で美しいお辞儀だった。

エリユースのマントが、背を向ける彼に従って、ふわりと舞う。

金の鈴が、チリーンと鳴った。

ナデイルは立ち尽くしたまま、遠ざかる銀の髪と黒いマントを眺めた。

鮮やかな色で溢れる花々の間を、夜の闇と月の光の固まりが渡って行くようだった。

いつか遠い昔に、こういう光景を見たことがなかっただろうか。

当事者として、体験したことがなかっただろうか。

そのときも自分は、去っていく恋人をただ佇んで見送ることしか出来なかったのではなかっただろうか。

奇妙な既視感めいたものが、影のようにナディルの中を通り過ぎる。

ナディルは記憶をたどろうとしたが、何も見つけられなかった。もつとも、そんなことはあるはずもないのだ。

自分が誰かにこれほどまでに恋をしたのは、初めてなのだから。

これは終わりではない。終わらない。

自分は、彼の姿をまたどこかで見るだろう。

いつかまた彼と話し、彼のぬくもりをきつと近くで感じるだろう。

それは単にナディルの願いであり、望みでもあったのかもしれない。かった。

恋しい人を失って行く惨めな自分に対する、一時的な慰めであったのかもしれない。

けれどもナディルは、その時、強くそう思ったのだった。

白い岩山と青い空との二色だけの風景が四日間続いた後、突然ナデイルたちの前に、さまざまな色彩が広がった。

岩で囲まれた平地に緑が茂り、花畑が絨毯のように敷き詰められている。

その中央には、薄紅の宝石のかけらを寄せ集めて作り上げたような、きらびやかな城があった。

まるでその空間だけが別の世界から切り取られ、そこに貼り付けられたかのようだ。

「カジェーラの城ですね……」

フィリアスが、呟く。

ナデイルは馬を止めた。

思いがけない甘い花の香りが、ナデイルたちの周りに漂う。

「少女趣味というか、何というか……。カジェーラって、いくつくらいに魔女なんだろう」

ガガが言った。

「確か、百五十歳は超えていると聞きましたよ」

フィリアスが答える。

「百五十歳！ 皺だらけの老婆かな。白い髪で腰が曲がってて、ぐつぐつ煮える妖しげなお鍋をかきまぜている……」

と、ガガ。

「しっ！ 聞こえるよ。もう彼女の領域に入っているんだから」

ナデイルは、注意した。

カジェーラは、ナデイルたちの一行が近づいていることに気づいているはずだった。

何せ魔法が使える魔女なのだ。知らないはずはない。

けれども、何も起こらなかった。

美しい花畑が静かに広がり、透明な蝶が何匹も平和にふわふわと漂っただけだ。

ナデイルたちは、馬を進めた。

やわらかく、かわいらしい中間色ばかりの風景。きつい花の香り。どこか不自然なくらいに美しいその場所は、魔法で作り上げられた空間なのかもしれない。

エリユースもこの風景の中を通り、カジェーラの城に行き着いたのだらう。

これはエリユースが見た風景。彼が嗅いだ香り。

ナデイルは、朝焼けの空の色をした城を眺めた。

エリユースは、あの中にいるのだらうか？ 魔女に閉じ込められて？

それとも自らの機転で魔女の呪縛を解き放ち、もう立ち去ってしまったのか。

自分は、どちらを望んでいるのだらう。

ナデイルは、深く息を吸った。

手のひらには熱いような汗がにじみ、それとは反対に、体の内部

は芯から凍えて行くような気がした、
もしあの城の中で彼の姿を見つけたら、気が遠くなって倒れてしまいかもしれない。

ふと空を見上げたナデイルの目に、今までそこにはなかったはずのものが映った。

空に浮かぶ、たくさんの奇妙な物体。

あれは……？

ナデイルは、前を進むフィリアスに叫んだ。

「待つて！ あれは、いったい……」

「え？」

フィリアスが、不思議そうに振り返る。

青い空を背景にして、何か白い物体がたくさん浮かんでいた。
白の淚形を反対にしたようなもの。

逆さまにした、白い花の蕾にも見える。

それらは、降りしきる花びらがそのまま留め付けられたように、
空中に静止していた。

いつの間にあんなものが現れていたのか。なぜ気づかなかったのだろう。

エリユースのことを考えていて、見落としてしまったのか。

「鳥……かな。たくさんの。羽毛がめくれて風に吹かれているのが見える。でも、空中に止まってるな。羽ばたいてはいない」

ガガが言った。

「えーと。鳥……ですか？」

フィリアスが、ますます怪訝そうな顔をする。

その逆さまになった白い鳥っぽいものは、誰かに合図をされたかのように、同時に羽根を広げた。蕾がいつせいに花開いたみたいだった。

同時にその表面を覆っていた純白が、対照的な漆黒に変化する。

「うわ、色が変わった！」

ガガが叫ぶ。

フィリアスは、相変わらず腑に落ちない表情で、空を見上げていた。

「魔法だ、当然」

ナディルは腰から剣を引き抜いた。そして馬に跨る足に力を入れ、手綱を強く握り締める。

「ガガ、戦闘体制だ！」

「おうよ！」

ガガは叫んでナディルの頭に飛び乗り、ぱかりと口を開けた。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

フィリアスが、慌てた様子で言った。

「オーデルクの公子さま、何をぼさつとしてるのさ。もうすぐあいつらが飛びかかってくるぜ」

ガガが、いつにない迫力で、じろりとフィリアスを睨む。

「あいつら……？」

フィリアスは不安そうに、逆さまになった鳥もどきが浮かぶ空間を眺めた。

すぐに真つ黒に変化したその物体のうちの一つが、ナデイルたちめがけて落ちてくる。

それは素早く移動して、ナデイルが振りかざす剣の間をヒュンヒュンとすり抜けた。

ナデイルはその物体の動きを読み、剣を突き入れる。

やがて剣が、何かカチリとしたものに当たった。

剣の上を音をたてて滑り、空中に上がったその物体は、ぱさりと羽根を広げる。

黒い大きな翼だった。

左右に広げた翼の真ん中には、そこにあるはずの鳥の胴体も、嘴が付いた頭もなかった。

その代わりにあったのは、卵型の黄色の透明な宝石。きらめくトパーズだった。

それは、エリユースと同じ目の色。

剣に当たったのは、その宝石だ。

一瞬ためらおうとする心を素早く押さえつけ、ナデイルはその石めがけて剣を叩き込む。

再びカチリと音がして、鳥もどきは空中にぶちまけられた黒い液体のように弾けた。

すぐにそれは、煙となって消えてしまう。

「やった！」

ガガが叫ぶ。

「まだまだいる。先は長いよ！」

ナデイルは、うんざりするくらい空中に控えている黒い鳥もどきを見上げた。

あれを全部始末しなければならぬのだろうか。
とんでもない体力がいる。

そこまで、この三人の戦力で持つのか？

ガガが、口から炎を吐き出した。

赤い炎が丁寧に上空を這い、数十羽が焼かれて、木の実のようにぼとぼと落ちてくる。

それらは地面に付く前に、黒い煙となって消滅した。
けれども、まだ上空には、気の遠くなるくらいの黒い鳥もどきたち浮かんでいた。

ガガも、永遠に火炎攻撃が出来るわけではない。

体力を消耗して、衰弱してしまうのだ。

魔法で作られたものは、行動が読めない。

もし、何か別の攻撃を仕掛けられたら。

「あのう……。ナデイル」

フィリアスがナデイルに、おそろおそろ声をかける。

「何ですか？ 今、忙しいんですけど？」

ナデイルはガガに負けなくらいの迫力で、フィリアスを睨んだ。こんなときに、のんびりと話しかけないでほしい。だいたい、何で彼は戦おうとしないのだ？

フィリアス公子は剣を抜くどころか、今までと全く変わりなく、ゆったりとした姿勢で馬に跨っていた。

彼の真上には、今にも彼に飛びかかってきそうな黒い物体が浮かんでいる。

ナデイルはそれにも注意を払いながら、自分の正面に降りて来ようとしている物体を相手にしなければならなかった。

「何でナデイルだけに戦わせてるんだよ、オーデルクの公子さま。瓜は剥けなくても、こういうことは得意なはずだろ？」

ガガが、口から火炎攻撃の煙を漂わせながら、不満げにフィリアスに言う。

「ま、まあ、私は一応、オーデルクの剣の使い手の中では五本の指に入る、などとは言われてはいるんですけどね……」

フィリアス公子が戸惑った顔で呟いた。そして、さらに困ったような表情をして、ナデイルとガガに訊ねる。

「その……。いったいお二人は、何と戦っておられるのか？」

「は？ 何言ってるの、公子さま。寝ぼけてるの？ 当然、この変な鳥の化け物じゃないか。あんたの上にも一匹いるよ。あんたに狙いを定めている」

ガガが、顎で空中の物体を示す。

フィリアスは、困った顔をしたまま、天を仰いだ。
そこにはもちろん黒い鳥もどきが浮かんでいて、彼はそれを目にしたはずだった。けれども、全く動じる様子もなく、彼は平然と言う。

「私には、そんなものは見えません。空はさきほどと同じきれいな晴れた青空。蝶々以外に飛んでいるものはありませんよ。何てのどかで平和な景色なんでしょう。なのにあなた方は、剣を振り回したり、火を吹いたり……。失礼ながら、滑稽としか言いようがありません」

ナデイルとガガは、顔を見合わせた。

「そんな……。あんなに空にぎっしり浮かんでいるのに？」

「ぼくにも、そう見えるけど？」

ナデイルは目をごしごしとこすってみたが、やはりそれでも空には例の物体が見えてしまう。

眺めているうちに、ナデイルを狙っていた鳥もどきが、正面にふわりと降りてくる。

ナデイルは剣を構えた。ガガは、口を開ける。

「やめてくださいっ！ 力の無駄遣いです！」

フィリアスが叫ぶ。

「だって、見えるんだもん。見えないのは、公子さまだけじゃん」

ガガが言った。

「魔法ですよ。カジエーラは魔女なんです。妙な魔法を使って当然。あなた方は惑わされているのでしょう。魔法で作られた幻にね。ここには何もありません。それが本当なんですよ」と、フィリアス。

「じゃあ、何であんたには見えないんだよ？　つか、あれを見えないでいることが出来るんだよ？」

「私にもわかりません」

フィリアスは、肩をすくめる。

「とにかく、何もありませんから。第一、馬たちは何も反応していないじゃないですか。このまま進みましょう」

確かに彼の言う通り、ナデイルの馬もフィリアスの馬も、あの物体が現れようが、飛びかかってこようが、全く無反応だった。

そういう馬たちの反応に、ナデイルが少なからず疑問を抱いていたのも事実だった。

「でも、フィリアス公子。私は見るだけじゃなくて、あの存在を実際に感じてしまうんです。あれと戦うと、剣を通してあの感触が間違いなく伝わってきますし、襲われれば、きつと痛みも感じてしまうと思います。あれを無視して進むなんて……」

ナデイルが呟くと、フィリアス公子はにっこりと笑って振り返った。

「じゃ、こうしましょう。ナディル、手綱を私に。私が先導します。あなた方は目を閉じていてください。そうすれば何も見えないし、平気でしょう?」

鳥もどきが、ナディルに向かって突進してくる。

ナディルは、剣を使って応戦しようとする自分の腕を止めて、無理やり目を瞑った。

けれども、何も起こらなかった。

ナディルが目を開けると、物体は、前と同じところに浮かんでいる。

「そう……ですね。そのほうがいいようです。では公子、お願い致します」

ナディルは、手綱をフィリアスに渡した。

フィリアスは、受け取った手綱を軽く握り、楽しそうにナディルの馬を引っ張り始める。

「ガガ、公子さまのおっしゃる通り、目を閉じていよう。たぶん、何も起こらない」

ナディルは、まだ口をぱかりと開けているガガに言った。

「う、うん……」

ナディルの翡翠色の目とガガのルビー色の目は、しっかりと閉じられた。

視界から鳥もどきたちは消え去り、薄紅の臉の壁に塞がれる。

「何て気持ちのいい景色なんでしょうね。このきれいなお花畑の中で、一日中転がって過ごしたいものです」

フィリアス公子が、のんびりと呟く。

馬たちが草を踏む、やわらかい音が続く。

肌を感じるのは、降り注ぐ太陽の光のあたたかさ。やさしく吹き渡る風の流れ。

花々の甘い香りが鼻孔をくすぐる。

「カジェーラと仲良くなれないものかなあ。そうしたら、時々ここに遊びに来られるのに」

フィリアスはそう言って、鼻歌を歌い始めた。

ナディルも知っている、隣国オーデルクの子供がよく口ずさむ歌だ。

かなり元の旋律からはずれていて、何か別のおかしな曲に聞こえる。

ナディルは、そつと目を開けてみた。

けれども、慌ててまた瞼を閉じる。

やはり上空には、例の黒い鳥もどきたちが、びっしりと浮かんでいた。

馬たちは何事もなく、ゆっくりと花畑を抜けて行く。フィリアスの鼻歌も、途切れることはなかった。

「案外、あの公子さま、頼りになるのかもしれないね……」

ガガが呟く。

「そうだね。私もそれは認めるよ。ただ、歌はあまりお上手じゃない

「いみたいだね」

ナディルは目を閉じたまま、呟いた。

エリユースが出て行った後、ナデイルは、再び一日中建物の中で過ごすようになった。

開いた窓の外には、あまりにも眩い景色が広がっていた。

彼がいないというのに、庭園は彼がいたときと同じように美しい。彼がいたときに咲いていた花々は、今でも生き生きと光を浴びて、頭を持ち上げている。

なぜこんなに明るいのだろう。きれいなのだろう。

彼の姿は、この景色の中に見つけることは出来ないというのに。気がつくと、頬が濡れている。

けれどもナデイルは、涙が頬を伝うに任せた。

昼は、まだましだった。

光がナデイルを慰め、色彩が気持ちを紛らわせてくれた。

だが、安らぎと深い眠りを与えてくれるはずの夜は、永遠にやってきそうもなかった。

夜になってあたりが暗くなると、闇が体の奥にまで浸透し、ナデイルは身動きさえ出来なくなる。

感情が高ぶり、涙がとめどもなく流れ出す。

ナデイルは、まるで体の一部を失ったかのような、とてつもない喪失感に襲われた。

ナデイルの頭の中で、エリユースが言った言葉のすべてが蘇り、彼の笑顔が、あたたかい手の感触が、幻のようにナデイルに付きまとう。

この思いは、どこに行くのだろう。
行き場のない心。

彼に受け入れられず、伝わりもしないこの心は……。

そのうち、時間の中に溶け去ってしまうのか。知らぬうちに昇華してしまうのか。

それはいつのことだろう。

そんな気の遠くなるような時間の彼方まで、いったい自分は耐えられるのだろうか。

いつかエリユースのことを過去の出来事として認め、心静かによい思い出として受け止められる日が来るのだろうか。

「ナディル王女さま」

ナディルが窓際に座ってぼんやりと庭を見つめていると、侍女の一人が部屋に入ってきた。

彼女はナディルの様子を気にかけてながらも、伝えるべき言葉を口にする。

「お妃さまが、お見えになりました」

「おや。珍しいこともあるもんだ」

椅子の肘掛の上で寝そべっていたガガが、皮肉たつぷりという感じで呟いた。

「お会いします。お通ししてください」

ナディルが答えると、侍女は安堵した表情をして、部屋から出て行った。

「会っの？」

ガガが、頭を起こす。

「せっかく来てくださったんですもの。会わなきゃね。王女の礼儀として。それから、もちろん『娘』としてもね」

「ろくな用事じゃないと思うよ」

「でも、会っよ。今の私には、怖いことも心配することも、何もないんだもの」

ナデイルは、微笑んだ。

間もなく、一人の女性が姿を現した。

舞踏会で、アーヴァーン国王の隣にいた女性。国王の二番目の妃、ナデイルの腹違いの兄弟たちの母親だった。

背が高く、均整の取れた体。艶のある髪。手入れのされた肌には張りがあり、年齢を感じさせない美しさがある。

妃の後ろには侍女たち、そして数人の貴族たちも従っていた。

貴族たちは、王位継承者として、ナデイルよりも彼女の子供たちを支持する人々だ。

妃が離宮を訪れるという話を聞きつけて、慌ててお供を申し出たのかもしれない。

「いらせられませ」

ナデイルは、丁寧に腰をかがめて挨拶をした。

ガガが不満そうに、鼻を鳴らす。

「元気がありませんね、ナデイル。かわいがっていた猫がいなくなってしまったとか」

彼女が言った。

上品なドレスに身を包み、垢抜けた宝飾品を付けた妃は、ナデイルの前で妙に緊張しているように見えた。

城にいるときもナデイルは、彼女とは滅多に話したことはなかった。

向こうが避けていることが何となく感じ取れたので、特に自分からそういう機会を作ることなかったし、また周囲の人々が気を使つて、二人が出来るだけ会わぬように取り計らっていたせいもある。

「きょうは、何か？」

ナデイルは、妃に訊ねた。

エリユースを『かわいがっていた猫』と表現されたことに、ナデイルは思わず軽く唇を噛みしめたが、穏やかな王女の仮面の下に、この場には余計な感情を上手に隠してしまう。

妃は侍女たちに命じて、テーブルの上に、真珠の飾りが施された緑色の箱を乗せさせた。

そして、箱を開ける。

平たい箱の中には、肖像画が何枚も重ねられていた。

「それは……？」

「あなたの花婿候補たちですよ」

妃は、微笑んだ。

「あなたもそろそろ、結婚相手を選んでよい年頃ですからね」

彼女は肖像画を次々と取り出しては、テーブルの上に積み重ねた。

「どのお方も皆、アーヴァーンの王女に釣り合う方々ばかり。隣国の公子さまなど、いかがかしら。年といい容姿といい家柄といい、一番あなたに似合いそうですよ。隣国なら、いつでも気軽に父様に会いに帰って来られますし。公子さまは、この間の舞踏会にはおいでになっておられませんでしたがね。もちろん招待状は差し上げたのですが、何やらどうしても抜けられない大切な用事がありだとかで……」

「あの、お妃さま。私は、まだ結婚なんて……。静養中の身ですし」

ナディルが言うと、たちまち彼女は気分を害したように、ナディルを見据えた。

「あれだけ踊れば十分でしょう。誰と結婚されても不都合はないと思いますよ。それとも……」

彼女は、ふっと意地の悪い笑みを浮かべる。

「まさか、ずっと独り身で通すとおっしゃるのではありませんよね？」

ガガがシャーツと声を上げ、口を半開きにする。
背後の貴族たちが、身構えた。

「おお、こわい」

彼女はそう言ったが、怖がっている様子もなく、ガガに笑いかけた。

「やはり動物を飼うなら、猫がよろしいようですね。ナデイル、もう一つ嬉しいお話があるのでしょ」

「嬉しい話？」

ナデイルは、眉を寄せる。

「国王陛下があなたに、お城に戻られるようにと」

妃が言った。

彼女は反応を窺うように、ナデイルを見つめる。

「お父さまが……」

ナデイルは、眉を寄せたままの表情で、呟いた。

「元気なあなたに会われて、そう決心されたのでしょう。もうすぐお城の庭に、あなたが子供の頃好きだったという金色の花が咲きます。その頃、戻られるとよろしいでしょう。そしてその頃には、あなたの花婿も決めていなくてはね。その肖像画をよく見て、考えておいてくださいましな」

その後、妃は、真珠の飾りが付いた緑の箱を置いたまま、そそくさと立ち去った。

お付きの人々も、そろそろとナデイルの部屋を後にする。すぐに部屋の中は、いつもの静けさに包まれた。

「ナデイル。お城に帰れるんだよ。一応、よかったね、と言ったほうがいいのかな」

ガガが言った。

「そうだね……。ありがとう」

「でも、王様も能天気だよ。お城に帰ったら、ナデイルの身が危なくなるかもしれないのに。久し振りに舞踏会でナデイルに会って、そばに置いときたいって思ったのかな」

「お父さまは、私たちに仲良くしてもらいたいんだよ。皆で一緒に暮らしてほしいんだ」

「まあ、王様のご意向なら、お妃も逆らうわけにはいかないもんね。せっかくナデイルをお城から遠いこの離宮に閉じ込めて、思う存分楽しく過ごしていただろうに、残念なこった。今度はナデイルを結婚させることで追い出そうってのかな。ルビーに触る機会なんか作られないうちに、さっさとね。結婚したら、王女には王位継承権はなくなるもんね。ま、生まれた子供にはあるわけだけどさ」

「年頃の娘に縁談をすすめるのは、母親として当然のことだよ」

ナデイルは肖像画を手に取り、適当に順番を入れ替えた。

絵の中で、似たような角度で姿勢を正している貴公子たちは、何度並べ替えても全員同じ顔に見えた。

同じ画家が同じ時期に、それぞれの城を回って、同じような要請の元、うんざりしながら同じように描いたのかもしれない。

「ナデイル。何を優等生っぽいことを……。まさか、その中の誰か

と結婚しちゃうおうなんて、本気で……？」

ガガはルビー色の目で、主人を見上げた。

「どうせ、いつかは誰かと結婚しなければならない。今そうすれば、つまらない争いに巻き込まれることもないし、命を狙われることもなくなる。お嫁に行った先では、大切にされるだろうしね。私がお城に帰れば、おとなしくしていた人たちも、動き出さなければならなくなる。それは、お互いのためにも避けなければ。エリユースは私に、幸せに言った。幸せにならなきゃ」

「王女という身分の女性にとっては、それが一番幸せってことになるのかもしれない。ナデイルがそれでいいってんなら、ぼくは何も言えないけどさ。でも、本気でそう思っていないでしょう？ 自分に嘘をつこうとしているよ、ナデイル」

「他に私に何が出来るというの？ エリユースを忘れられるようなことを、他に何が？」

ナデイルは肖像画を緑の箱に収め、蓋を閉めた。

けれども、緑の箱の中に収められた貴公子たちの肖像画は、それ以来ナデイルの目に触れられることもなく、部屋の隅に置き去りにされた。

そして、たまに暇をもてあましたガガが箱を開け、パズルのように並べて遊ぶ高級な玩具と成り果てたのだった。

ある夜更け、ナディルは目を覚ました。
相変わらず、眠りが浅い。

エリユースが出て行つて以来、深く眠ることがないような気がした。

眠つても、悲しい夢を見て、目覚めてしまう。
そういう時は、必ず枕が濡れていた。

（行かないで……）

誰かが、近くで囁いたような気がした。

誰だろう。

若い女性……少女の声だ。

「誰……？」

突然ナディルの目の前に、庭園の景色が広がった。

そこは離宮の庭園だったが、今とは違う季節の花々が咲いている。
空は灰色で、風景全体も、灰色の薄いベールのようなもので包まれていた。

ナディルはその単調な色彩の中に、たったひとりで佇んでいた。

「ここは？ ベッドで寝ていたはずなのに？」

ナディルが疑問に思う間もなく、一人の少女がナディルの前を駆けっていく。

長い黒髪の少女だった。

彼女が着ているのは、寝間着らしき衣装。そして、彼女は裸足だった。

白い足が、裾が乱れるにも構わず、地面を勢いよく踏みしめる。ふわふわとしたその衣装のせいで、少女は羽根を付けた妖精のように見えた。

やがて少女の前に、一人の人物が現れた。

その人物は、少女に気づいて振り返る。

銀色の髪、トパーズの目の、背の高い若者だった。

「エリユース!？」

ナディルは思わず叫んだが、彼はエリユースではなかった。

髪と目の色は同じだが、顔立ちや雰囲気は違う。

体格や身長も似ていたが、微妙に、けれども一目で違うとわかるくらいに異なっていた。

彼がエリユースとは別人であることに、ナディルは、ほっと安堵する。

「侯爵……。行かないで、侯爵!」

少女が若者に向かって叫んだ。

「私を……。私を置いて行くの?」

「私たちはもう、ここにはいられません。長老たちがそう決めました」

若者が答える。

「あなたは、それに従うというの？」

「従わねばなりません。これは、我が一族の総意なのです」

若者が悲しげに、けれども、はつきりと言った。

彼のそばには、フード付きのマントをまとった、年若い少女とおぼしき人物が立っていた。

その人物は、黒髪の少女にお辞儀をする。

彼女と親しい間柄らしかった。年齢も彼女に近いようだ。

「なぜ？ 私たち、婚約するはずだよね？ 彼女だって、お隣の国の大公に……。なぜなの？ 変な噂を聞いたけど、そのせい？」

「噂は本当です。ルビーが光ってしまったのです。私が誤って触れたばかりに……。それを大勢の人に目撃されてしまいました」

若者が、ためらいがちに言った。

「では、侯爵。ルビーがあなたを選んだのです。あなたが次の国王ということになる。なればいい。私の夫として。そして、私のそばにずっといるといい」

若者は、彼女の言葉に首を振る。

「次の国王はあなたです、王太子殿下。それは揺るぎなきこと。他の誰によっても侵されてはならぬことです。私はあなたのおそばにはいません。お許しを」

彼女が、何かを叫んだ。

ナデイルには聞き取れなかったが、それがその若者の名前のようにだった。

「どうか、私のことはお忘れください。私たちは、遠くよりあなたの幸せを祈っております」

若者は向きを変え、マントの少女の肩を抱く。

二人は、その場から掻き消えた。

空気を一瞬だけ、陽炎のように揺らめかせて。

黒髪の少女は、ふらふらと庭園に倒れこんだ。

狂ったように地面を掻きむしり、何度も叫び声をあげ、やがて静かに嗚咽する。

（これは、夢……？ 昔、ここで起こったこと？）

ナデイルは立ち尽くしたまま、泣いている少女を見下ろした。

彼女もまた、恋人に去られたのだ。

ナデイルと同じように、銀の髪、黄水晶の目の恋人に。

だが、彼女がナデイルと違うのは、正直に自分の気持ちを彼に伝えたことだった。

> 行かないで。私を置いていくの？ 私のそばにずっといるといい
……<

それは、ナデイルがエリユースに言いたかった言葉。けれども、しまいこんで口に出来なかった言葉だ。

ナデイルは、彼女が彼に対して、はっきりと自分の思いを告げたことが羨ましかった。

同時に彼の心が、それでも動かなかったことが悲しくもあった。

自分がエリユースにたと言えていたとしても、同じ結果になったのかもしれない。

そう思うとさらに悲しくなり、心が痛んだ。

「あなたを追いかけて行けたら、どんなにいいだろう……。でも、私にはそれは許されません。私はここにとどまり、自分の不運を恨んで、ただ嘆き悲しむことしか出来ない……」

しばらく地面に突っ伏していた少女は呟き、ゆっくりと起き上がった。

そして、突っ立っているナディルを振り返る。

ナディルによく似た顔立ちの少女だった。歳もナディルと同じ頃くらいだろうか。

涙で濡れた目は、森の木々の緑。透明なエメラルドの目だった。

もつと成長した姿の彼女を、ナディルは見たことがあった。

頭に冠を付け、正装をした彼女は、泣き顔などではなく、凛々しく気品に満ちた穏やかな表情で、いつも前を通るナディルを見つめていた。廊下に飾られている、歴代の国王の肖像画の中から。

ナディルを見上げた少女は、ナディルに何かを問いかけているように思えた。

ナディルは、冷たい両手を握り締める。

けれども少女は、すぐに視線をナディルの背後に移した。

ナディルがはっと気づいたときには、ナディルの体を通り抜けて、一人の若者が少女に近づいていた。

若者に通り抜けられたとき、ナディルには何の感触も感覚もなかった。

これはやっぱり夢なのだ。過去にこの庭園であったことの夢。

ナデイルは改めて理解する。

「姫さま。どうされたのですか？ そのようなご様子で」

貴族らしいその若者は、少女に寄り添った。そして自分の上着を脱ぎ、少女の肩にかける。

「侯爵が……行ってしまったの。私を置いて……」

少女はしゃくり上げながら、やっと呟いた。

この若者の出現で、かろうじて止まっていた涙が、再び溢れ出したようだった。

「ご自分から身を引かれたのでしょうか。姫さまのことを大切にお思いだから、そうされたのですよ」

若者は、やさしくそう言った。

「大切だっと思うのなら、私のそばにいるべきだわ」

若者は微笑み、少女の汚れた足から、丁寧に土を払った。

少女は、涙を溜めたままのエメラルドの目で、若者の横顔をじっと見上げる。

その視線に気づいて、彼は再び微笑んだ。

「私は、姫さまのおそばにずっといますよ。たとえ何があるうと」

「ありがとう。でも、私がそばにいて欲しいのは侯爵なの。ごめんなさい……」

「お待ち致します、ずっと。姫さまが、私にそばにいて欲しいとお
思いになるまで」

若者は、につこりと笑った。

ふと気が付くと、ナディルはベッドの上に座っていた。

別の季節の灰色の庭園も、黒髪の少女とやさしい若者の姿も、欠
片さえ見つけることは出来なかった。

元通りのナディルの部屋だ。

「ナディル？ どうしたの？」

足元で丸くなっていたガガが、むくりと顔を上げる。

「夢を見たの。私の先祖の夢……」

「先祖お！？」

ガガが、あんどりと口を開ける。

「私のおじいさまのおばあさま……。ううん、ひいおじいさまのお
ばあさまくらいなのかもしれないけれど。廊下の国王の肖像画の中
の一人だ」

「ってことは、昔の女王さまの誰か？ 女王さまの絵って、何枚か
あるよね」

「うん。たぶんね。王太子って呼ばれてたから、きつと女王さまに
なったんだと思う。ね、ガガ。ちよつと廊下まで付き合ってくれる

「？」

ナディルは、ベッドから床に降りた。そして、上着を羽織る。

「まさか、廊下の絵を見に行くんじゃない……」

「当然でしょ？」

「やめようよ、こんな時間に。絵のせいで、昼間でも妙な雰囲気
の廊下なのにさ」

「喋って火を噴く竜のあなたが、何を言ってるの。人間の絵なんて
怖くないでしょ。ただの絵なんだから。布と木と絵の具で出来てい
るんだよ」

「何か情念がこもっているようで、苦手なんだよな。人間の念って、
ある意味、竜なんか比べ物にならないくらい怖いものだと思うんだ」

「たとえそうだとしても、全員私のご先祖たちなんだから。静かに
見守ってくれてはいても、子孫に変なことなんてしないよ」

「そりゃあ、そうなのかもしれないけどさあ……」

ナディルは、ぶつぶつ文句を言っているガガを肩に乗せ、明かり
を持って部屋を出る。

薄暗い廊下には、闇に溶け込むようにして、たくさんの絵が並べ
られていた。

きらびやかな衣装をまとった絵の中の人々は、わだかまる闇と影
のせいで、昼間とは違った別の雰囲気を持っているように見えた。

ナデイルは、絵の中に描かれている先祖たちの視線をかわしながら、廊下を奥へと進む。

探している絵は、すぐに見つかった。

黒い髪を形よく結び、冠をかぶった、若く美しい女王。

その森の緑の透明な目は真っ直ぐ前を向き、口元には気品のある微笑みが浮かんでいる。

まとった白いドレスには宝石が散りばめられ、笏を手にする彼女は、女王としての威厳に満ちていた。

間違いなく彼女だ。

恋人に去られて泣きじゃくっていた、まだあどけなさを残す少女は、絵の中では大人の女性へと見事に変身を遂げていた。

絵の下には小さな金属の板が貼られていて、そこには彼女の名前が刻まれている。

<ユーフェミア>

ナデイルはその名前を声に出さずに、何度も繰り返して呟いていた。

それから明かりをかざして彼女を見上げ、たくさんの質問を投げかける。

あなたはその後、どうやって心を静めたのだろうか。

恋人に去られ、引き裂かれ傷ついた心を、どうやって？

銀の髪の恋人のことは、忘れられたの？ 彼のことを思い出し、てしまったの？

あなたを心配して追いかけてきた、あのやさしそうな男の人……。いつか、あの人にそばにいて欲しいと思えるようになって、あの人と結婚したの？

生涯、あの人だけを愛したの？

あなたはあの人の子供を生み、あの人も私の先祖の一人になったの？

やがて、私のひいおじいさまやおじいさま、お父さまも生まれて、受け継がれるあなたの血の、枝の先の最後が私なの？

彼女は、答えなかった。

ただ橙色の温かい光に照らされ、穏やかな落ち着いた表情で、ナデイルを見つめ返すだけだった。

「ナデイルさま。久々に、お手合わせ願えますか？」

その朝。

一月ごとの御機嫌伺いに来ていたデュプリー公爵が、ナデイルに申し出た。

「そうしなよ、ナデイル。気分転換になるよ」

ガガにもそう言われて、ナデイルは剣を取る。
剣の冷たい銀色のきらめきは、束の間、ナデイルを取り巻く様々なことを忘れさせた。

自分の名前や身分、過去、今いる場所などさえも、頭から消え去ってしまう。

もちろん、昨夜の夢も。エリユースのことも。

剣を振るい相手の動きを読み、体を動かすが、ナデイルのすべてになる。

けれども、剣を置くと世界は再び姿を現し、行き場のない心を閉じ込めているということを、否が応でも思い出すのだった。

「デュプリー。私の剣は、どうですか？」

庭の階段に腰をかけ、汗を拭いているデュプリー公爵に、ナデイルは訊ねた。

「それはもう、姫さまの腕前は、かなりのものでございますよ」

デュプリー公爵は答えた。

「暗殺されちゃ大変だつてんで、さんざん鍛えこんだからねー」
と、ガガが横から口を挟む。

デュプリーは鋭い眼差しで、ガガをキツと睨んだ。

「実践でも通用するかしら。たとえば、その辺の町に突然放り出されても」

「もちろんですとも。明日から、一流の傭兵にでも賞金稼ぎにでもなれるくらいですよ」

「じゃあ、少しは自信を持っていいいわけね」

ナディルは風に髪をなびかせながら、空の彼方に翡翠色の目を漂わせた。

「姫さま。あの銀の髪の若者のことですが……」

デュプリー公爵が、唐突に言った。

「え？」

修復しようとしている傷に、突然無遠慮に触れたような気分になって、ナディルは彼に顔を向ける。

「エリユースのことだろ、爺さん」

ガガが、ナディルの代わりに言った。

「そういう名前でしたか。舞踏会で姫さまと踊っていたのも、彼ですネ」

ナデイルは、頷いた。

彼と踊ったのは確かだ。

けれども、それはもう過去の出来事になりつつある。二度と戻らない時間。淡く楽しい思い出にしてしまわねばならぬ出来事だ。

「彼は満月の夜になると猫に変身すると、召使いたちが申し出ておりましたが……」

「猫族の血を引いているらしいからね。先祖返りさ」

ガガが答える。

「昔、アーヴァーンの王宮にも、そういう方がいたとか。その方は侯爵家の方でしたが、ある日、一族ごと消えてしまいました。その一族もまた、猫族の血を濃く引いていたのです」

「お父さまが舞踏会で、エリユースと間違えた方でしょう。一族ごと消えてしまったのは、その侯爵が王家のルビーを光らせてしまったからなのでは？」

ナデイルが言うと、デュプリー公爵は驚いたようだった。

再び彼に睨まれたガガは、ぶんぶんと首を振る。

「ぼくが話したんじゃないからねっ！」

「本当の理由はわかりません。陰謀に巻き込まれたからだとか、魔女が彼らをどこかに連れ去ったとか、さまざまな噂が立ちました。」

姫さまが今おっしゃられたような噂も、確かにあったようです」

「でも、たぶんルビーが原因だ。ルビーがその侯爵を、国王の後継者として選んでしまったから」

ナデイルは呟く。

「だから身の危険を感じて、一族ごとどこかに隠れちゃったってわけだね。後継者争いに巻き込まれて殺されちゃ、たまないもんね」
「ううん。そうじゃないよ。国王の後継者には王太子が決まっていたの。それで彼は自ら身をひいた。一族でそうすることを決めてね。争いを避けたかったのかもしれないけど、王太子のことが、彼らが消えてしまった本当の理由なんだと思う」

ナデイルは、やんわりとガガの言葉を訂正する。

「姫さま、なぜそうだと……？」

デュプリーが訝しげに訊ねた。

「夢を見たの。その王太子さまと侯爵の夢」

「夢……ですか。アーヴァーンの王家には猫族の血が多少は混じっていますから、姫さまがそういう夢見の力をお持ちでも、何ら不思議ではありませんせぬが……」

あの夢。

銀の髪 of 若者を引きとめようとしていた、黒髪とエメラルドの目の少女の夢。

あれは彼女の子孫たちが受け継いできた、隠された記憶なのだ。
彼女から子供へ、そして孫へ、ひ孫へと。

それをナデイルが見たのは、デュプリーが言うように、猫族の血による不思議な力のせいもあるのかもしれない。

「その王太子は女性だった。たぶん私のご先祖。廊下に絵が飾つてあるから、何代か前の女王さまだ。名前は、ユーフェミア。つまりその人は、無事に国王になったのでしょう？」

「そうです。ルビーは後に、その方を選んだようです。宮殿にいるすべての人々の期待通りに。アーヴァーンでは、男性であれ女性であれ、王位につけます。王太子が女性であることも珍しくはないのです」

「最初から、その王太子を選べばよかったのに」

ガガが呟いた。

本当にそうだ。

もしそうなら、侯爵は彼女の元を去ったりしなかっただろう。

二人は何の問題もなく婚約し、結婚し、彼女は女王になり、あの侯爵は女王の夫として彼女を支えただろう。

二人は子供にも恵まれ、末永く幸せに暮らしただろう。

ナデイルは思う。

けれども、もしそうなら。

自分も父も祖父も、そして曾祖父も。

皆、生まれないことになってしまうのだ。

「とにかく、まあ、王位継承はうまく具合に進んだわけだね。その侯爵一族が消えてくれたおかげで」

ガガが、ナデイルの考えが伝わったかのように、臆面もなく皮肉っぽい口調で言った。

もちろん侯爵は、そのことをわかっていただろう。
知っていたからこそ、一族ごと身を隠してしまった。

「ナデイルも、王太子にさっさとなっちゃえばいいんだよ」

ガガが呟いた。

「この竜の言う通りでございますよ。でも、姫さまは王宮に戻られるのですし、それも近いうちかと」

「どうだか」

ガガが、ふんと鼻を鳴らす。

「なぜルビーは光ったの？ その侯爵は、王家の人間でもないのに？」

ナデイルは、デュプリーに訊ねた。

「その侯爵のお母上は、当時のアーヴァーン国王の妹君だったので。侯爵家に嫁いだその姫君は、王家の直系の方でした。お子様たちをお生みになってから、若くして亡くなられたそうですが。その方も、母君は正妃さまでした。ルビーが選ぶ範囲内ですよ。ちなみに、姫さまがおっしゃられた王太子さまの母君も、正妃さまでですよ。ですから、もちろんルビーはその後、その方を選んだのでしょうか。他にご兄弟もなく、国王の継承者は、その方しかいなくなってしまう

ったわけでしょうから」

「デュプリー。エリユースはもしかして、その一族と何か関係があると思う？」

「その侯爵も、輝くような銀の髪と黄色の目をしていたということですからね。ゆかりのものであるという可能性は否定できませんが、引き止めて訊ねればよかったですね」

「舞踏会で王様に呼ばれたとき、エリユース、妙に固まっていたよね。何か関係があるのかも」と、ガガ。

「国王にいきなり声をかけられたら、普通は固まるよ。人違いであっても。エリユースはああいうところは初めてだっただろうし」

「もし侯爵家ゆかりのものなら、アーヴァーン王家の指輪を持っているかもしれません」

デュプリーが言った。

「アーヴァーン王家の指輪？」

ナデイルは、思わず自分の指を見下ろす。

そこには、美しい細工の指輪が嵌められていた。ガガそっくりの金の竜が、大粒のルビーを大切そうに抱きしめている。

「そう。姫さまの指輪と同じ、ルビーの指輪ですよ。侯爵家には王家の姫君が嫁いでいるので、指輪が残っているはず。もちろん、ルビーを持つ動物は竜ではないでしょうけれどね」

デュプリーが言った。

「指輪は……持っていなかったよね、エリユースは」

ガガが、考え込む。

「持っていなかった。鈴なら持っていたけどね」

ナデイルも同意する。

「代々、家に伝わる鈴だと言っていたよね。きれいな鈴だった。いい音鳴ってたし」と、ガガ。

「鈴……ですか？」

デュプリーが首をかしげる。

「鈴のことは知りませんな」

「じゃあ、違うのかもしれない。たとえばそうだったとしても、彼はもういないもの。関係ないよ」

ナデイルは呟いて、短い溜め息をついた。

「関係なくはありませんよ。猫族の血を引くあの侯爵家が消えて、アーヴァーンは貴重な宝を失ったようなものです。出来れば……」

「どちらにせよ、彼はもう、ここには戻ってきません。それは間違いないことです」

ナデイルが強めの口調で言うと、デュプリーは口をつぐんでしまった。

けれども、すぐに彼は、穏やかにナデイルに微笑む。

「時間がきつと、姫さまの傷ついたお心を癒してくれますよ。もう少し辛抱なされば、きつと……」

デュプリーは、ナデイルとエリユースのことを侍女の誰かから伝え聞いたのかもしれない。

すべてを知っているのに、そんな風に大人の論理と経験で諭すように話す彼が、ナデイルは少し腹立たしかった。

もちろん自分のことを心配してくれていることはよくわかっていたし、ありがたかったとはいえ。

「辛抱？　どれだけこの心を抱えたまま、我慢しなければならなの？　いったい、いつまで？　彼を思い出にしてみえるまで？　そんなの、気が遠くなる……」

ナデイルは、デュプリー公爵を見つめた。

「あなたは、昔、私のお母さまの恋人だったのでしょうか？　どうやってお母さまのことを忘れられたの？　つらかったでしょうに。行き場のない心は、どうやって静めたの？」

「忘れてはいませんよ。お亡くなりになった今でも、私の心には王妃さまが住んでいらっしやいます。それに、恋人というのは誤解ですよ。私の一方的な片思いでした。歳も離れていましたしね。姫さまのお父さまとのご結婚が決まったとき、本当に嬉しかったのです。申し分のないお相手でしたからね」

「でも、お父さまには側室がいたのに。お母さまはつらかったかもしれない……。だから、若死にしてしまったのではないの？」

ナデイルが呟くと、デュプリーは顔を曇らせる。

「アーヴァーンでは、一夫多妻が認められていますからね。最もそれを行っているのは王族くらいで、隣国のオーデルクほどではないですけど。やはり、様々な軋轢や問題が生じますからね。王族に嫁がれる方は、それなりの覚悟が必要なのです。王妃さまもきつと、覚悟はしておられたはずですよ。そもそも、先に側室がいることをご承知で嫁がれたのですから。側室は臣下や外国との絆を深めるために、有効な制度でもあるのです」

「そう……。やっかいな制度だね」

ナデイルは、溜め息をつく。

それからナデイルは、思い詰めたように呟いた。

「私はあなたのように、相手の幸せを素直に祈れない。いい思い出に変化させて、心の中に住まわせることなんて出来そうにない。彼は、幸せになんて私に言っただけ、そんなの無理だ」

「もうしばらくすれば、そのつらいお心も楽におなりでしょう」

「出来れば、今すぐ楽になりたい」

デュプリーは困ったような顔をしたが、その表情が何かを見つけたかのように、突然明るくなる。

「そうそう、忘れていました。姫君、これを差し上げましょう」

デュプリーはそう言って話題を変え、薄緑の紐の束をナディルに差し出した。

「これは？」

「サラムンサのロープです。これで縛られた者は、たちまち眠ってしまうとか。護身用にお持ちください」

「ありがとう」

ナディルは、ロープを受け取った。

しなやかなそのロープは、草のよい香りがする。作られたばかりのようだ。

これではらく、気が紛れるかもしれない。

ナディルは、ぼんやりと思った。

「やっぱり、お城に戻ったときの、対暗殺者用なんじゃないか。よくこんな手に入れてきたね。まあ、デュプリーさんは竜を手に入れるツテがあるくらいだから、朝飯前だろうけど」

デュプリーは例のごとくガガをじろりと一瞥し、気を取り直したようにナディルに言う。

「姫さま、本当によろしかったです。姫さまが戻られるのが、とても待ち遠しいですよ。これからはずっと、姫さまを王宮でお見かけすることが出来るのです。何と喜ばしいことか。こんなに嬉しいことはございません」

彼はナディルに向かって、深々と丁寧なお辞儀をした。

「では、私はこれにて……」

「あなたの助力に感謝します、デュプリー公爵。それから……感情をぶつけてごめんなさい」

「いえ。私でよろしければ、いつでも姫さまのおつらさを受け止めて差し上げますよ。これから、ずっとです」

デュプリーが、やさしく微笑んだ。ナディルの幼い頃から、常にそうして来てくれたように。

「ありがとうございます。気をつけてお城に帰ってくださいね」

ナディルは笑ってデュプリーに言ったが、それがナディルから彼への別れの言葉になった。

「着きましたよ。二人とも、もう目を開けても大丈夫です。何てきれいな庭なんでしょうね」

鼻歌がやみ、楽しげなフィリアスの声が聞こえた。

ナデイルは、目を開ける。

城の門は、大きく開かれていた。

まるで来るものを拒まず、それどころか、待ちわびていたかのよう

に。三角錐や円筒形、そして様々な動物の形に刈り込まれた木々、花の模様の彫刻が施されたいくつものアーチ、小さな石の階段。

それらを飾るように、庭一面に咲き乱れているのは、霞のように見える白い花々。

花畑に飛んでいた蝶たちが、この庭にも、ふわふわと漂うように舞っている。

ナデイルとフィリアスの馬は、門の前に並んで佇んでいた。

ナデイルが、ちらつと後ろを振り返ると、あの鳥のような不気味な物体の群れは、きれいに消え去っていた。

美しい空が広がり、白い雲だけが平和に流れて行く。

それはおそらく、フィリアスがナデイルの馬を引きながらずっと見ていたであろう、この本来の景色だ。

「どうぞお入りって言われているような……」

ナデイルの頭にしがみついたガガが、呟いた。

「歓迎されていない、というわけではなさそうですね。いや、大歓迎かもしれませんよ」

フィリアスが、明るく言う。

「行きましょう、翡翠のナデイル」

二頭の馬は、門を抜けた。

庭をゆつくりと通り、城へと向かう。

何事も起こらなかった。

風の吹かない穏やかな庭が奥まで広がり、動くものといえば、ナデイルたちの一行と花の上を飛びかう蝶たちだけ。

城の玄関扉もまた、開け放たれていた。

ナデイルとフィリアスは馬を降り、注意深く扉をくぐる。

城の中は白で統一され、光り輝くようだった。

明り取りが至る所に設けられ、光がふんだんに届くようになって
いる。

白い空間を和ませるように、あちらこちらに置かれているのは、
薄紅色の花の束。

蠟燭の火が背の高い燭台の上で、控えめに燃えていた。

ガガはナデイルの頭から離れ、周囲を自由に飛び回って、独自に
探索を始める。

「静かですね。誰も出てこない」

ナデイルは、あたりを見回しながら呟いた。

「留守でしょうか、カジェーラは」

フィリアスが心配そうに言う。

「ナデイル、公子、こっちへ来て！」

ガガの声が遠くからした。

ナデイルとフィリアスは、ガガが先程消えた奥の間へと走る。

「見てごらん」

ガガは空中で羽ばたきながら、部屋の中央を指し示した。

長方形の大きなテーブルと椅子が、そこには置かれていた。

テーブルの上には食器がきちんと並べられ、焼きたてのパンが籠に盛られている。

銀製の大きな深皿には、色鮮やかな野菜が入ったスープ。その隣には、食欲をそそるような焼き目が付き、香草がまぶされた鳥肉。

他にも、野菜と肉を焼いて彩りよく並べたもの、かわいらしい形をしたお菓子、小粋な形に切られた果物など、数多くの料理の皿が、テーブルに置かれていた。

その半分近くは、ナデイルが知っている料理だった。

ナデイルが離宮で食べていた料理もある。

「ほう。これは、オーデルクの郷土料理ではないですか」

ナデイルが止める間もなく、フィリアスは料理の皿の一つから一片つまみ上げ、口の中に放り込む。

「うん。うまい。懐かしいな。カジエーラは、オーデルク出身なのかな」

「こちらは、アーヴァーンの料理ですよ」

ナデイルは、きれいに盛られている野菜の料理を指差した。ナデイルの好きな料理で、離宮でもよく出てきたものだ。

「じゃあ、カジェーラは、オーデルクとアーヴァーンで料理を習得した、とかかな？」

フィリアス公子が、のんびりと言った。そして、今度はどれをつまみ食いしようかと品定めを始める。

「公子さま。オーデルクの料理があるということは、カジェーラがあなたの正体を知っているということなのでは？」

ナデイルは、冷静にフィリアスに言った。

そしてもちろんカジェーラは、ナデイルの正体も知っていることになる。

ここに並んでいる料理は、オーデルクとアーヴァーンの料理。

宮廷料理のような豪華なものではないが、貴族の娘たちが結婚前にたしなみとして習得するような、こじんまりとして家庭的な、けれどもそれなりに華やかさのある料理だった。

カジェーラは二人の素性を見破り、それでわざわざこのような料理を出してきたのだろうか？

「何でわかったんだろう。しかし、私にちなんでこういう料理を作ってくれたということは、とにかく歓迎はされているということですよ。せつかくだから、いただきましょう。お腹がさつきからうるさいですよ。オーデルクの料理なんて久し振りだな。とても嬉しいです」

フィリアス公子は、既にさっさとテーブルにつき、ナイフを握り

しめていた。

「公子さまのように、素直に座っていただく気にはなれないんですけど」

ナデイルは、料理を食べ始めたフィリアス公子に冷たく言った。

「別に毒などは入っていないようですよ。魔法で作られたものでもありません。美味です。ガガくんはどうですか？　一緒にいただきますしょう」

「そりゃあ、これだけおいしそうな料理を見せられちゃ、食べたくないわけはないけどさ。何でアーヴァーンとオーデルクの料理なんだよ？」

ガガも、ナデイルと同じことを考えたらしかった。

カジエーラは、ナデイルとフィリアスの正体を見抜いていると。

ルビー色の目を瞬かせ、不安そうにガガはナデイルを見る。

「あいにく私は、オーデルクとアーヴァーンの料理しか作れぬからの」

その時、妖しいくらいに可愛らしい声がした。

蠟燭の火が、風も吹かないのに踊るように揺らめく。

ナデイルとガガは、声がしたほうを振り返った。

フィリアス公子も料理を食べるのをやめて、声の主のほうへ顔を向ける。

階段に少女が立っていた。

足元にまで届く長い髪は、血の色を思わせる真紅。

肌は髪の色を際立たせるような、透けるような白。

そしてナデイルたちを見下ろす目は、二粒の大きなトパーズ。それはエリユースと同じ色の目だった。

少女は、レースが美しい白いドレスに銀の帯を締め、真珠の飾りの付いた薄いベールをまとっていた。

外見の歳はナデイルと同じくらい、あるいはもう少し年下かもしれない。

ゆつくりと、少女は階段を降りた。

少女の動きに合わせて、澄んだ鈴の音が響く。

ナデイルは、彼女のベールを留め付けている飾りの先に、金色の鈴が下がっていることに気づいた。

それは、ナデイルがよく知っている鈴だった。

あれは……エリユースの鈴。

彼がいつも胸元に下げていた鈴だ。

この音色、あの輝き。間違いはない。

やはり彼は、ここに来たのだ。

だが、なぜこの少女が彼の鈴を身に付けている？

ナデイルは、冷たくなっていく自分の手を握りしめた。

少女は、客人たちに微笑んだ。

あどけない顔がほころぶ。

「私はカジエーラ。そなたたちが探していた魔女じゃ」

少女が言った。

言い回しはともかく、同年代のどの少女よりも美しく、愛らしい声だった。

けれども、ナデイルたちに注がれる不思議な黄色の目は、エリユ

ースよりもはるかに歳を重ねていた。

「カジェーラ？ あなたがですか？」

フィリアスが、椅子から立ち上がる。

「驚きました。こんなにお若い姿をしておられるとは……」

「皺くちやの腰の曲がった老婆で、鍋をかきまぜていなくて、残念じゃったな」

カジェーラは、ちろつとガガを見る。

ガガは、びくんと飛び上がった。

「もしかして、性格ものすごく悪いんじゃないの」

ガガは、カジェーラに聞こえないように呟いた。

「よう来なさったの。食事の用意をしておいた。もう召し上がっておられるようじゃが。湯浴みの準備も出来ておるから、ゆつくりなさるとよかるうて」

「ご親切なお心遣い、痛み入ります。ありがとうございます」

ナデイルは、丁寧にアーヴァーン式のお辞儀をする。

カジェーラの瞳の奥に、何か遠い記憶に触れたような、淡い光のようなものが走った。

けれどもそれは、一瞬のうちに消えてしまう。

「カジェーラ殿。私は、オーデルクの公子フィリアスと申します。

それから、翡翠のナディルと竜のガガ」

フィリアスが言った。

彼もまた、オーデルク式に、優雅に礼をする。

カジエーラは、ナディルがお辞儀をしたとき以上に、何かを感じたようだった。

彼女は人形のように、階段に突っ立っていた。

「あーあ。自分から正体をばらしちまったぞ」

ガガが、小さく呟いた。

「公子さまが、真剣に彼女と向き合いたいっていう証だよ。正体を隠していたら、こちらの心も通じないし、彼女も心を開いてくれない。交渉は決裂だ」

ナディルはガガに言った。

「でも、私の素性は、気づかれていないみたいだけど。アーヴァーの料理は、彼女がたまたま作れるから作ったような感じだし」

明かしたほうがいいのだろうか。フィリアスがそうした以上は。ナディルは悩む。

しかし、冠を探して彼女に会いに来たのは、フィリアス公子。ナディルは単にお金で雇われたお付きであり、用心棒だ。素性がそれほど問題になると思えない。

「オーデルクの公子さまか。次期大公じゃな。それはそれは。そのようなお方が、こんな無粋な城に来てくださるとは。光栄の至りじやな」

カジエーラが言う。

彼女の頬が、ごく薄く染まっているように思えるのは気のせいだろうか。

ナデイルは、嬉しそうに微笑むカジエーラを見上げた。

「門番たちは、無事に巻いてきたようじゃの」

「門番って……。空に浮かんだ、あの鳥みたいなもののことですか？」

ナデイルは、思わずカジエーラに訊ねた。

「そうじゃ。かわいかったであろう？」

「かわいいだと？ ブキミとしか形容のしようがないじゃ……」

ナデイルに睨まれて、ガガは慌てて言葉を飲み込んだ。

「私にはそのようなものは見えませんでした」と、フィリアス。

「カジエーラ殿。やはり、それは魔法ですか」

「ほほう。見えなかったとな。ふむ……」

カジエーラは興味を引かれた様子で、フィリアスをしげしげと眺めた。

「ま、門番は必要じゃからの。この城を守るために。そして、この年寄りを守るためにな。よからぬやからが、城の宝石を目当てにや

ってくるからのう」

「カジェーラ殿」

フィリアスが、姿勢を正す。

そして彼は、真面目なアメジスト色の目を彼女に注いだ。

「オーデルクの若者たちが、この城に来たはずなのですが。翡翠の冠を求めて。ご存知ですね？」

「あの失礼な盗賊どものことが。そなたの臣下たちだったのか？」

カジェーラが眉を寄せる。

「盗賊？」

「あやつらは、来るやつ来るやつほぼ全員、挨拶をすることもなしに、いきなりこの城に忍び込み、さんざん城内を徘徊して、あちこち荒らしおったぞ。全く教育がなっておらんのだ」

「それは……申し訳ないことをしました。私からお詫び申し上げます。どうかお許しを」

フィリアスは、再び丁寧に頭を下げる。

カジェーラは、はるか遠くにあるどこかの場所を見つめているような目で、彼をじつと見下ろした。

「彼らは、まだこの城の中にいるのでしょうか。オーデルクには戻ってはいませんが」

フィリアスが訊ねる。

「おるよ」

カジェーラは、あっさりと認めた。

「どこですかっ。いったいこの城のどこに彼らを……」

フィリアスが、少し声の調子を荒げて言う。

「別に取って食っておりやあせん。ちゃんと生きておる。安心するがよいぞ。監禁してもおらぬ。好きなように連れて帰るがいい。というより、目障りじゃから連れ帰ってくれば助かるというものじや」

カジェーラが、ふつと溜め息を混じえて答えた。フィリアスは姿勢を正し、再び頭を垂れる。

「失礼致しました。では、遠慮なく連れ帰らせていただきます。ところで翡翠の冠は……」

「それもここにある。返してやつてもよいぞ。そなたが正当な持ち主のようじゃからな。それより、料理が冷める。とつとと済ませて、湯浴みなどもしてくつろぐがよい。着替えも用意しておるからの。それからじゃ。ゆっくりと熱いお茶でも飲みながら、世間話でもしようではないか？」

カジェーラは、にっこりと魅力的に微笑んで、提案した。

離宮の尖塔に、薄いレースで包まれたような月がかかる頃。
パサリという乾いた小さな音を聞いたような気がして、ガガは目を覚ました。

壁にくっついていたら何かとても軽いものが、床に落ちたような。

もちろん、竜であるガガの耳にかすかに聞こえた音なので、人間がわかるような音ではない。

ガガも、それが本当に聞こえたのかどうか確証はなかった。
夢だったかもしれない。あるいは空耳。

ガガがふと頭を上げると、月の光の中にナデイルが立っているのが見えた。

白い寝間着をまとい、流れるような長い黒髪で背中を覆った姫君。けれども、ナデイルは微動だにせず、息をひそめるようにして、淡い光を浴びている。

いつもの穏やかで奥ゆかしいナデイルではなく、剣の稽古をしているときのような、ぴんと張り詰めた緊張感と落ち着いた闘争心を持ったナデイルだった。

「げ。こんな時間に戦闘体勢？ ナデイル、何やってんの？ 寝ぼけてる？」

ガガが起き上がろうとすると、ナデイルがぴしりと言う。

「動かないで！」

「へっ？」

ナデイルは、ガガに近いある場所を鋭い目の動きで示した。ガガがそのあたりを見ると、毛布のくぼみに何か黒い塊が張り付いていた。

塊からは、醜い毛で覆われた枯れ枝のようなものがいくつも放射状に伸びている。

それは、その塊の手足だった。

「うわ、蜘蛛だっ！」

ガガが叫ぶ。

「でかい。こんな大きな蜘蛛が入り込んでくるなんてっ！」

「勝手に入って来たんじゃないと思うんだよね」

ナデイルが呟く。

「え？」

「この蜘蛛、アーヴァーンにはいない蜘蛛だ。子供の頃、蔵書室にあった本で見たことがある。もっと遠い南の国にしかない蜘蛛だよ。しかも毒を持つてる」

「毒っ!？」

ガガは、蜘蛛を睨んだ。

蜘蛛は少し胴体を浮き上がらせる。

それは、ガガを威嚇しているような姿勢にも見えた。

「……毒蜘蛛か。自分で入って来たんじゃないとしたら、あと方法
は一つしかないよね。とにかく、運のいいことに事が始まる前に見
つけたわけだから、遠慮なく潰しちまえばいいんじゃないの？」

ガガは、尻尾をひらりと蜘蛛のほうに動かそうとした。
けれども、ナデイルの鋭い声が飛ぶ。

「動かないでつてば！ 飛び掛かれるよ！ 普通の毒蜘蛛じゃな
い。巨大な竜だって、鱗の間から噛まれたら一瞬で倒されてしまう。
それくらいの毒を持ってるんだ」

「ひっ！」

ガガの体はたちまち固まり、金色の置物と化した。

「まったく、そんな大層なものを送り込んでなくてもいいのにね。
私を殺したいんだったら、もっと簡単なものでも十分なのに。ア
ヴァーンでも、夜になるとよくその辺を飛んでいる毒蛾とか。食べ
るものに毒きのこなんかを仕込んだっていいわけだし。森の中にた
くさん生えてるから取り放題だ」

ナデイルが、溜め息をついて言った。

「じゃ、やっぱり、お妃が？」

ガガが置物の竜になったまま、ナデイルを見上げる。

「わからない。彼女にそんな度胸があるのかな。側近の誰かかもし
れない。次の国王のそばで、権力を握って富を得たい誰かとか」

「このこと、王様に言おうよ。デュプリー公爵でもいい。黙ってたらだめだよ、ナディール」

「それより、今はこれを何とかしなくちゃね」

ナディールは、そろそろと片手を上げる。

その手には、銀色の細長いものが握られていた。

いきなり向きを変え、蜘蛛が壁にふわりと飛びつく。

まるで、そういうおぞましい形をした小さな濃い闇が、壁を這い上がったようだった。

蜘蛛は、するすると恐ろしい速さで移動し始める。

「うわあああつ！」

ガガが声をあげた途端、ナディールの手から銀色のものが投げられた。

それは月の光を反射しながらベッドを素早く横切り、蜘蛛を簡単に貫いた。

ガガは、壁に留めつけられた蜘蛛をこわごわと眺める。

蜘蛛を留めつけているのは、ナディールの髪飾りだった。

たくさんの美しい花があしらわれたピンの先が、蜘蛛の胴体の真ん中に刺さっていた。

赤い血が一筋の線となって、蜘蛛から滴り落ちる。

月の光が作る影が加えられ、動かなくなった蜘蛛の足は、倍以上の本数に見えた。

「お見事！ さすがナディール！」

ガガが嬉しそうに叫ぶ。

「日ごろの稽古の成果だ。デュプリーに感謝しよう。ここまで仕込んでくれたことを」

ナディルは、呟いた。

それからナディルは寝間着の裾を引きずって床を横切り、部屋の扉を開ける。

「ちょっと着替えてくる。用意をしなきゃ」

「用意？ 何の？」

「殺されずに済む用意」

ナディルの姿が部屋から消えた。

ちらりと見えた横顔は、まだ残っている緊張のせいか、あるいは月の光のせいなのか、尋常ではないくらいに青白く見えた。

「着替えとなると、やっぱりついていけないからなあ。でも、何で殺されずに済む用意が着替えなんだろう」

残されたガガは、ぽつりと呟く。

ナディルとは四六時中一緒にいるが、入浴や着替えのときは、さすがに遠慮していた。ナディルのほうはあまりこだわらないようだったが、それくらいの良識は持ち合わせているのだ。

「しかし、気持ち悪いな」

ガガは再び、動かなくなつた蜘蛛をいつでも逃げ出せる体勢で見つめた。

やがて扉が静かに開き、ナデイルが帰つて来る。

着替えの終わったナデイルを何気なく眺めたガガは、驚いて飛び上がった。

「ナデイルっ！？ その格好は！？」

ナデイルが身につけている服は、王女の服ではなかった。

それは旅人の衣装。アーヴァーンの町でもよく見かける服装だった。

旅の途中にある少年たちが着ているもの。

丈夫な上質の生地で作られた灰緑の上下の服、風雨や強い日差しから確実に守ってくれるような灰色のマント。黒の皮のブーツ。腰に下げられているのは細身の剣。

その服装は、ナデイルには似合わないはずだった。長い髪をした、王女のナデイルには。

けれども、今ガガの前に立ったナデイルには、よく似合っていた。それはナデイルの髪が少年のように、首筋のところで短く切られていたからだ。

「そ、その髪はっ！ あんなに大切にしていた、あのきれいな長い髪は！？」

ガガは、叫んだ。

ナデイルの短い髪の前には、無理やり引きちぎられたような痛々しさが満ちていた。

「邪魔だから切ったよ。この格好に合わないでしょ。この服はね、

ずいぶん前から用意していたの。デュプリーのすすめでね。いつ何が起こってもいいようにって」

ナディルは、微笑む。

髪を切ったナディルには、確かに痛々しさのようなものは感じられるが、凜とした涼やかな気配が全身を惜しみなく包んでいた。表情もこわばってはいるものの、前よりもすっきりと穏やかに思えるのは、ガガの錯覚なのだろうか。

「邪魔？ 王宮に帰るのに？」

ガガが訊ねると、ナディルは首を振る。

「王宮には帰らない。これ、王宮に帰るための衣装じゃないでしょう？」

ナディルはマントを広げ、くるりと回って見せた。

「そ、それは、見ればわかるけど。旅の衣装……だよね。まさか……」

「そう。ここから出て行くよ。決めたの」

ナディルは静かに、そして噛みしめるように呟く。

「出て行く！ 出て行くって！ 王宮に帰らないで、んでもって王女の身分を捨てて、家出するってことっ！？」

ガガは、翼をばさばさと震わせた。

「そういうことになるね」

ナデイルは、ごく軽く答える。

「そ、そんな……。やっと王宮に帰れるという時に？」

「ここにいっても王宮にいても、何も変わらない。王宮にいられないからここにいたのに……。ここにいる理由も、もうなくなってしまう。私がないほうがいいと思ってる人たちが存在するってこと。その人たちがそういう行動を積極的に起こしたってこと。もうそれで十分だ。ここにももう、いられない。この城にいる他の人たちも巻き込んでしまう」

ナデイルは眉を寄せ、蜘蛛を一瞥した。それは怖気をふるうような赤と黒の二色で、壁を不気味に汚していた。

「だけど、ここから出て行って、どうするの、ナデイル？ ナデイルは王女さまなんだよ。ずっとそういう暮らしをしてきた。なのにいきなり市中へ出たりなんかして……」

「エリユースと同じことをする」

ガガは、ナデイルの答えに赤い目を見開いた。

「同じことって、まさか！」

「そう。賞金稼ぎ。出来ないかな、私に」

ナデイルは、にっこりと笑った。

「デュプリーは、私の剣の腕は確かだと言った。明日からでも、一流の傭兵にでも賞金稼ぎにでもなれるくらいだってね。外の暮らしについては、書物で読んで知ってる。召使いたち、そしてエリユースからも山ほど聞いた。補えないときも、切り抜ける術は持っている」と自負する」

「そ、そりゃあ、毒蜘蛛の襲撃がわかるくらいだから、たいしたもんだとは思っけど……」

ナデイルは微笑を消し、真面目な表情になった。

「エリユースが行ってしまってから、ずっと考えていた。初めはただ悲しいだけだったけど、だんだん腹が立ってきたの」

「え……？」

「彼は、幸せにって言った。幸せに。私にとっての幸せって何だろう。王宮に帰っても、ここにいても、そしてどこかの国の王子と結婚しても、私は幸せじゃない。私が望むのは、彼だ。彼のそばにいたい。彼が行く前からわかっていた。たとえどんな生活であっても、どんなに危険であっても、彼と一緒にいるということ。それが私の幸せなんだ」

ガガは黙り込んだまま、ナデイルを見上げる。

「エリユースは、私が誰かに守ってもらわなければ生きていけない姫君だと思ってる。私は彼が思うような、ひ弱な花じゃない。砂漠でも岩山でも、きつときれいに咲いて見せる。自分の身も自分で守れる。彼が間違っていたことを、私を連れて行かなかったことが間

違いだっただってことを、きつと証明する」

「証明って、ナデイル……？ エリユースを……追いかけるの？」

ガガは、ナデイルに訊ねた。

「賞金稼ぎをしながらね。彼を探して、見つけ出す。彼は、私の願いをかなえてはくれなかった。私が望んだ思い出をくれなかった。だから、単なる思い出として吹っ切れることも出来ない。私の心は行き場を失ってしまった。だから心をなだめ、静める行動が必要だ」

「それが、彼を追いかけること？」

ナデイルは頷く。

「この先、こんな心を抱えたまま生きていくなんて……。このまま他の誰かと結婚しなければならいなんて、真っ平だ」

「で……それからは……？ エリユースを見つけた後は？」

「見つけた後？ 私が自分で自分の身をちゃんと守れて、彼と同じことが出来るということに彼にわかってもらう。いつも冷静なあの彼の、驚く顔を見たらそれでいい。それで満足だ」

違う。本当は、自分はそれ以上を望んでいる。

彼が別れ際に言った「あるいはそうしたのかもしれませんが」という答えに、すぎるような希望を繋いでいる。

エリユース。あなたは、あんなことを言っではいけなかったんだよ。

「やはり、そうはしなかったでしょう」って言わなきゃいけないか

ったんだ。

そうすれば私も、あなたをあきらめられたのに。

私はあなたの中に、私に対する未練を見てしまった。

あなたの言葉の中に。あなたの態度の中に。あなたのその黄色い透明な目の中に。

私を拒むなら、とことん拒まなければいけなかったんだよ……。

「彼はまた、大人としてナデイルを拒否するかもしれないよ。追いかけてきたことを怒るかもしれない」

ガガが言う。

「それならそれで、あきらめがつくというもの。そのときは覚悟を決めて宮殿に帰り、戦いに臨むかな。殺されない自信はあるからね。それとも、どこか、誰も私を知らない静かなところを探して隠れ住むかも。それは、その時になってみなければわからない」

ナデイルは目を閉じ、天井を仰いだ。

彼のそばにいたい。

彼の手で髪を撫でられ、彼の口づけを受けていたい。

生まれてから今まで、こんなに何かを欲しかったことはなかった。

だが彼は、自分を欲しがってはいないのだ。

そのことを思うと、気分がとてつもなく沈みこむ。

あなたは、私がいなくても生きていける。

私がいなくても、きれいな景色を見て感動し、何の屈託もなく友人たちと語り合い、あなたの必要とする人たちに微笑みかける。愛する人の髪を撫で、目を見つめる。

私は、あなたの思い出の中に登場する人々の一人にしかない。

けれども、そんなことは許さない。

私を置いて行ったことを、たとえ一瞬でもいい、あなたに後悔してほしい。

でなければ、私の心は永遠に静まらないだろう。

それはナデイルの、王女としての自尊心であつたのかもしれない。つた。

「じゃあ、ぼくは止めない。だけど、やっぱりナデイルにとって外の世界に出るということは、並大抵のことじゃないと思うよ。おまけにエリユースと同じ商売をするなんて……。当然、ぼくも一緒に行くからね」

ガガが言った。

「ガガ……？」

ナデイルは驚いて、金色の竜を見下ろした。

ガガはきちんと座って、ナデイルを見つめていた。

ルビーの瞳が部屋の明かりで燃えているように見える。

「王女として育ったナデイルには世間常識が欠如しているだろうから、お供が必要だよ。ぼくは、だてに長生きしてないから、お供になつてあげよう。それに、ナデイルには飾る宝石がなくなっちゃうから、ぼくが飾りにもなつてあげる。金びかの竜の飾りだよ。目のルビーと、口から吐く炎付き」

「ありがとう、ガガ！」

ナデイルはガガを抱きあげ、頬ずりをした。それから頭の上に乗せる。

ガガはナデイルの頭を包み込み、ナデイルは金色の竜の形の兜をかぶった旅の少年のようになった。

「今度月が雲で隠れたら、この部屋を出るよ」

ナデイルが囁く。

「おう。夜の散歩で、もうさんざん慣れてるから、どうってことないさ」

ガガが力強く、大きく頷いた。

朝になり、離宮はいつもの営みを始めた。

火が起こされ、朝食の料理の匂いが漂い始める。

王女の好きな野菜のスープ、焼きたてのパン。外国から取り寄せた果物も、たくさん用意された。

けれども、離宮の主であるナデイル王女と飼い竜の姿は、どこを探しても見つけることは出来なかった。

離宮は騒然とし、直ちに王宮に使者が走った。

ナデイルの部屋に入ったデュプリー公爵は、毒蜘蛛がナデイルの髪留めで壁に串刺しにされているのを目にした。

それから彼は、離宮の武器庫の片隅にナデイルが切った髪を発見し、ナデイルがそこに用意していた旅の衣装がなくなっていることも確認した。

しかしデュプリー公爵は、何も言葉を口にすることなく、ただ険しい表情を顔に刻んだだけだった。

彼は、ナデイルの切り落とされた髪を丁寧に整えて束ね、ベッドのナデイルがいつも寝ている位置にそつと置いた。そしてナデイル

の部屋を閉めきり、その扉にはいくつもの鍵をかけさせた。

離宮はすぐに、何事もなかったかのように静けさを取り戻した。
次の日も、料理は作られ、パンが焼かれ、果物が倉庫から出され
た。

その次の日も。そのまた次の日も。

ナデルがいた時のように。いつものように。

薬草が入った熱い湯にナディルは体を横たえ、目を閉じた。よい香りを含んだ湯気を吸い、湯の中に体をゆらゆらと浸していると、気持ちがちが落ちていく。

旅の疲れが湯の中に溶け出していきそうだ。

湯浴みは久し振りだった。しかも薬草入りの湯にお目にかかるのは。

いつも泊まる宿には粗末なベッドしかなく、体は水で拭くくらいだった。

川や滝のそばを通るときは、ガガを見張りに立たせて、思う存分体を洗う。

もう慣れたとはいえ、やはり水は冷たく、芯まで冷えきった体を火のそばであたためなければならなかった。

熱いお湯は、アーヴァーンの離宮を思い出す。

もしかしたら、目を開ければあの場所に戻っていて、侍女たちの姿が周りにあるかもしれない。

彼女たちの笑い声が響き、陽気な冗談が飛び交っているのが聞こえるかもしれない。

そんな錯覚さえ、ふと抱^{いだ}かせる。

湯浴みが済んだら、カジエーラにあの鈴のことを訊かなければ。鈴というより、エリユースのことを。

彼女は、お茶の用意をしてくれているはずだった。

フィリアスは、もちろん冠と臣下たちのことを訊ねるだろうが、自分は別のことを話題にせねばならない。

どんな答えが返ってくるのだろうか。

なぜ彼女があ鈴を持っているのか。

鈴を持っていたエリユースは、今どこにいるのか。どうしているのか。

エリユースもフィリアスの臣下たちと同じように、この城のどこかにいるのだとしたら……。

「そなたに、どこかで会わなかったかのう？」

聞き覚えのある愛らしい声が、近くから聞こえた。

ナデイルは目を開ける。

カジェーラが浴槽のすぐそばに立って、ナデイルを見下ろしていた。

真紅の髪がナデイルの肩に触れるくらいの至近距離で波打ち、トパーズ色の透明な目がナデイルを捉えている。

チリン、と彼女が付けている鈴が鳴った。

「わーっ！」

ナデイルは、思わず声を上げる。

お湯がばしゃばしゃと派手な音をたて、大量に床にこぼれた。

「な、何かっ？」

「女同士なのじゃから、そんなに騒ぐこともないじゃろ」

カジェーラが、少し気を悪くしたように呟く。

「い、いきなり現れたら、驚きますー！」

「さつきから、ここにいるのじゃがの。そなたが気づかなかつただけで」

カジェーラは、あどけない少女の仕草で小首をかしげた。正体を知らなければ、そして彼女が喋りさえしなければ、誰からも何の疑いも持たれぬそのままの外見で通るに違いない。

「ナデイル、どうかしたっ!？」

ガガが翼をぱたぱたと羽ばたかせ、慌てて飛んでくる。

カジェーラがナデイルのそばに立っているのを目にした途端、ガガはまた飛び上がった。

「ひっ! 何でここにいるんだよ、この婆さんっ!」

「それは、誰のことかの?」

カジェーラに鋭く一瞥され、ガガは落下しそうになったが、かるうじてふらふらと浮上する。

「最初、馬でこちらに向かっていてる姿を見たときは、華奢な少年かと思つたが……。やはり女であつたな」

「別に男装しているつもりはありません。最も動きやすく、仕事しやすい服装をしているだけです」

ナデイルは、カジェーラに言った。

「そつだよ。見りゃわかるだろ。あんな格好をしてても相当な美少女だつて」

ガガが、補足する。

「ふむ……」

カジエーラは、ナデイルの濡れた黒髪と翡翠色の目、そして、ほんのりと薄紅に染まった肩の線を眺めた。

その二つの黄色の目が、何かを思い出そうとするかのように細められる。

気の遠くなるくらいの沢山の過去の残像の中から、たった一つの何かを探しているかのように。

その表情、その目が、エリユースに似ているような気がして、ナデイルはどきりとした。

（エリユースの……鈴……）

ナデイルは、カジエーラが付けている鈴を見つめた。

カジエーラは濃い緑のドレスに着替え、肩にふわりとした半透明のショールをかけていた。

金色の鈴は細い鎖に付け直されて、彼女の真っ白い胸元に、唯一の装飾品として控えめに輝いている。

やはりエリユースの鈴に間違いない。その色も形も。そして音色も。

自分が見間違っはうがない。

なぜこの鈴を彼女が身に付けているのか。

「……長い黒髪、白い肌の美しい少女」

カジエーラが、呟いた。

「え？」

ナデイルは、彼女の顔を見上げる。

「花に囲まれた少女じゃった。目を閉じていたので、瞳の色はわからぬが。そう。棺じゃ。その少女は、棺の中に納まっておった。たくさんの花に覆われて」

「な、何を……」

ガガの口から、炎がこぼれた。

「棺の中に横たわる、長い黒髪の姫君。あれは、そなたではなかったかのう」

「棺だつて？ 何を寝ぼけたこと言つてんだ、この魔女！」

ガガが、ごおおと炎を噴き上げる。

白い湯気の中に、青と赤の炎が勢いよく踊った。

「私の城で、竜にそういうことはされたくないの。火事になったらどうしてくれる？」

カジェーラが眉を寄せ、ぎろりとガガを睨む。

「ガガ、おやめなさい。失礼だよ」

ナデイルに言われて、ガガは炎を引つ込めた。

「失礼なのは、どっちなんだよ」

「それは……予言ですか？」

ナデイルは、カジェーラに訊ねる。

棺に横たわる、長い黒髪の少女。

それが自分のことを、自分の未来を示すなら……。

（私は死んでしまうということなの……？）

けれども、ナデイルは今そんな姿はしていない。

長い黒髪も白い肌も、離宮にいた頃　二年前までの姿だ。

「いや。私がどこかで見た光景じゃ。とすると過去じゃな。そんなに昔ではない。ごく最近じゃ。私がいまだ覚えていないということ、そういうことになるうな。年寄りには昔のことはよく覚えておるものじゃが、最近起こったことは、とんと記憶が飛んでしまうからのう。全く歳は取りたくないものじゃな」

カジェーラが屈託なく、明るく言った。

「なんだ。じゃ、ナデイルじゃないってことじゃん」

ガガが、ほつとしたように呟く。

「いや。そなたじゃったよ。ほぼ間違いなかるう」

カジェーラが言ったので、ガガは再び炎を吐きそうになった。

「ぼくは、ナデイルが小さいときからずっと一緒にいるけど、そん

な、棺に入るようなことはなかったぞ。断言できる！」

「まあ、年寄りの言うことじゃかな。まともに取り合わぬことじやな」

カジェーラがにやりと笑ったので、ガガはまた飛び上がる。

その時ナディルは、自分のすぐそばで上品に重ねられたカジェーラの手に、金色の指輪が嵌められていることに気が付いた。指輪にはルビーが輝いている。

大粒の真紅のルビー。ガガの目の色。

ナディルが持っているものとよく似たルビーだ。色合いも大きさも、磨かれ方も。

ルビーは、金の猫が抱えていた。尾の長い、可愛い猫だった。

(アーヴァーンの王家の指輪……?)

ナディルは、その指輪を凝視する。

もしそうだとしたら？

なぜ彼女がそういうものを持っている？

フィリアス公子は、カジェーラは宝石を集めていると言った。

だとすると、どこから手に入ってきたのだろうか。

この指輪だけではなく、もしかしたらエリユースの鈴も。

どこか別の場所で手に入れ、持ち帰ったのだとしたら？

ならば、この城にエリユースはいないことになる……。

カジェーラは、ナディルの視線に気づいて、さりげなく指輪を引っ込めた。

彼女の動きに合わせて、再び鈴がチリンと微かに鳴った。

「カジェーラ。その指輪……。それもあなたが集めたものですか？」

「これは、私が家族から受け継いだ唯一の宝石じゃ」

カジェーラは答えて、小さな溜め息をついた。

ナデイルは、彼女の横顔をじっと見上げる。

「あなたのご家族……。今は……」

「私がこういう歳じゃからの。もうみんな逝ってしもたよ。私も間もなく彼らの所に逝かねばならぬ。いくら魔法を使って若く装ってはいても、やはり寿命は訪れる。全うすれば、土に還らねばならぬ」

魔法をまとった少女の裏側にあるのは、年老いた本当の彼女の姿。ナデイルにはもちろんそれは見えなかったが、気の遠くなるような寂しさ、そして悲しさが、滲み出すように透けているのをナデイルは感じた。

何か……。何かがわかりそうな気がした。

すべての答えが、その寂しげな横顔の中にあるような。そんな気がした。

カジェーラは、一瞬ナデイルの翡翠色の目を見つめ返し、それから視線をすりと逸らせた。

「私がここに来たのは、着替えを持ってきてやったからじゃ」

カジェーラは、浴槽の近くのテーブルを指差した。そこには、きちんと畳まれた衣服が置かれていた。

「一応、そなたに合いそうな少年の服にしておいたが。姫君のドレスのほうがよかったかの」

「ありがとうございます。少年の服で結構です」

ドレスなどを着て、フィリアスに正体を暴露するようなことをするの気が進まなかった。

それに最近そういうものは着ていないので、久しぶりに着ると裾を踏みつけないとも限らない。

「お茶の用意……してくださってるんですね。急いで上がりますから……」

ナディルが言いかけると、カジエーラは首を振った。

「まだ上がなくてもよいぞ。あの若者は、お茶を飲む気分でもないらしいからの。ゆっくりつかって、旅の疲れを落とすがよろう」

「フィリアスのことですか？ 彼が何か？」

「自分で家来を探すのだと、城の中をうろつろしておる。あとで案内してやると言ったのに、せつかちなことじゃ。妙なところに迷い込まなければよいのじゃが」

カジエーラは、いたずらっぽく顔をしかめて見せる。

「妙なところ？」

「何せ、魔女の城なのでな。危険なものがいっぱい置いてあるのじ

や。あやつもまた、家来のようにならないとも限らぬのう」

「ガガ！」

ナデイルは、床に降りて、ちんまりと座っているガガを振り返る。

「フィリアスについて！ 心配だ」

「ぼくはナデイルが心配だよ。ぼくがフィリアスのところに行ったら、ナデイルはこの魔女と二人つきりになるじゃないか。何されるかわかんないよ」

「大丈夫だよ。この人は悪い人じゃないもの」

ナデイルが言うとかジエーラは、驚いたように目を見開いた。
ガガは、本当かよと言いたげに、思いつきり首をかしげる。

「少なくとも、私はそう信じる」

「それもナデイルの勘ってやつ？ なら、ぼくも信用しなきゃいけないけど」

「うん。信用してくれて大丈夫だと思う。だから、行って。彼のところへ。私たちは雇われたんだよ。彼を守らなくちゃいけない」

「……わかった。じゃ、気をつけて」

ガガは金色の翼を広げて、舞い上がった。

しばらくナデイルとかジエーラを交互に見比べ、それから決心したように、くるりと向きを変えて扉に移動する。

ガガが行ってしまおうとナディルは、勢いよく湯から上がった。

「おや。大胆じゃの」

カジエーラは、特に驚いた様子もなく、ナディルの体をしげしげと眺めた。

濡れた髪は艶やかな黒味をさらに増し、短く切られた髪の手先から透明な雫がしたたり落ちる。

熱い湯に充分あたためられた薄紅の肌を通して、薬草の香りが匂い立った。

ナディルの体は、カジエーラの目に美しく映ったはずだった。

「先ほど騒いだのは、何じゃったのやら」

「だから、あなたが突然現れたからです」

ナディルはカジエーラの前を堂々と横切り、彼女が用意してくれた服を素早く身につける。

「裸体を他人に見せることは平気なのじゃな」

カジエーラが幾分あきれたように、しかし興味がある様子で訊ねた。

「同性の前では慣れてますから。異性に見られるのは、もちろん遠慮したいですけど」

「ほう？」

城にいた頃は、いつも侍女たちに囲まれていた。

だからナデイルは、カジェーラに体を見られても特に抵抗はない。それに、この人は、もしかしたら……。

ある疑問が、ぼんやりと膨れ上がってくる。

そう。あの指輪を見たときから。

「カジェーラ。あなたにお聞きしたいことがあります」

服を着終わったナデイルは、カジェーラに向き直る。

訊かなければならない、この人に。

そのために、私はここに来たのだ。

「なんじゃ？」

カジェーラは、トパーズ色の目で、ナデイルを見つめた。

そのエリユースによく似た目を間近に見て、ナデイルは確信する。

やはり、間違っではない。

ここに来てよかったのだ。

そして……思いも寄らぬことを彼女から聞けるかもしれない。

薬草の香りが、はやる気持ちと沸き上る緊張感を適度に静めてくれる。

ナデイルは、大きく息を吸ってから続けた。

「あなたが付けておられるその鈴のことを教えていただけませんか？　鈴の持ち主のことも。それから、あなたの指に輝いているルビ―の指輪……。その話も、もっと詳しくお訊きしたいのです」

「……ったく。何でぼくが、公子さまのお守りなんかしなきゃならないんだよ」

廊下を低く飛びながら、ガガはぶつぶつと呟いた。

光の届かない廊下は薄暗く、明かりも灯されてはいない。カジェーラは、この城にひとりで暮らしている。

使わない場所には明かりを灯す必要もないのだろう。

あるいは、当然魔法を使って城内を移動するだろうから、そういった物さえいらないのかもしれないなかった。

ガガは鼻をひくつかせながら、微かに感じる公子の匂いをたどっていく。

石で出来た床には、たくさんの細かいものが散らばっていた。

何かが粉碎されたかけらのようだ。

おびただしい数のそれらが、床を埋め尽くすようにして広がっている。

「そういえば、何だろ、これ」

ガガは興味を引かれて、床に降りてみた。

まるで大きな目の形の悪いビーズをぶちまけたようだった。

足の裏から、その冷たい感触が伝わってくる。やはり硬い石のかけらのようだ。

「何でこんなに散らかしてんだ。掃除しろよな、あの婆さん」

>何じゃと？<というしゃがれ声がどこから降ってくるような気がして、ガガは思わず首をすくめた。

それからガガは、石のかけらを爪の間にすくいあげ、口から炎を少しだけ出して眺めてみる。

「これ……。宝石だ……」

赤い透明な石が、炎の中に浮かび上がった。

揺れる光を受けて燃えるように輝く、宝石のかけら。

ガガの爪からこぼれ、きらめきながら床に落ちていく。

「ルビー……だよね。これ全部？」

ガガは、もつとたくさんの炎を噴き上げて、廊下を照らしてみた。床に散らばっているのは、確かにすべてルビーだった。

廊下は柘榴の実を大量にばらまいたかのように、透明がかった赤に溢れている。

それは人間の血を連想させるような、ぞっとする色でもあった。

「集めた宝石を粉々にして、廊下にばらまくのが趣味なのかな、あの魔女」

ガガは再び翼を広げて舞い上がり、低空飛行を続ける。

「もしかしてオーデルクの翡翠の冠も、ばらばらにされてるんじゃない……」

その時ガガは、フィリアス公子の匂いを強く感じた。

廊下の突き当たりに部屋があり、その扉がわずかに開いている。隙間からは、明るい光が漏れていた。

その付近にあるルビーは、扉から届く光に照らされ、健康的で鮮やかな赤に染まっている。

「公子さま見つけ！ たぶん、あの中だ」

ガガは、扉の隙間から部屋の中に滑り込んだ。けれども、扉のすぐ向こうに突っ立っていたフィリアスの背中に、いきなりどすんとぶつかってしまう。

「わああっ！ 不覚……！」

ガガは、床に落下した。

叩き落とされた蝙蝠より無様だと内心情けなく思いながらも、ただちに気持ちを切り替えて起き上がる。

「公子さま、何でこんなところに……」

ガガは、そのまま言葉を飲み込んだ。突っ立っているフィリアスの向こうにあった意外なものに、目が釘付けになる。

光は、そこから発せられていた。

「公子さま。これって……」

「ごらんなさい。何てきれいなんでしょうね。さっきから見惚れているですよ」

フィリアスが、どこか夢を見ているような表情で呟いた。そのアメジスト色の目は、そこにあるものに真っ直ぐに注がれていた。

ガガもまた、それを凝視する。
驚きと、素直な感嘆を込めた眼差しで。

そこにあつたもの。

それは光をまとい浮かんでいた。

銀色を帯びた、輝くような白。床に向かって広がる、長い裾。

豪華な刺繍が施された生地には真珠が散りばめられ、胸元にはルビーで出来た飾りが縫い付けられていた。

幾重にもなった薄い花びらのような透明なベールが、まるでそれを守っているように、上からかけられている。

ベールには、白い花の飾りが沢山付いていた。

それをまとう者の美しさを限りなく引き出し、その者が持つ気品と若さをこの上なく際立たせるもの。

それは一枚のドレスだった。

貴重な芸術作品であるかのように、あるいはそれ自体が宝石であるかのように、光に囲まれ、大切に飾られているドレス。

ガガはフィリアスの隣にゆっくりと移動して伸び上がり、そのドレスを眺めた。

ナディルが舞踏会で着た衣装よりも、はるかに上等な生地で作られ、そして清楚だった。

舞踏会とは全く別の用途に作られたドレスであるということが、一目でわかる。

「これ……。もしかして……」

「そう。花嫁衣裳ですね」

フィリアス公子が頷いた。

「しかも、オーデルクのね。古いもののようですが、かなり身分の高い女性が着る衣装ですよ」

「オーデルクの？ 何でそんなのがここにあるんだろ？」

「カジエーラがどこかで手に入れたか……。あるいは別の理由か、ですね」

「別の理由？」

「カジエーラ自身の持ち物で、だからこそ、ここにこうやって飾ってあるか、です」

「カジエーラの？ それ、どういう……」

「その美しいお姫さまは、ある日、銀の猫と一緒にどこかに行ってしまいました」

フィリアスが、暗誦するように呟いた。

「それは……」

「オーデルクの伝説です」

「この間、ちらつと言ってたよね。昔、ナデイルみたいなことをやって、消えてしまったお姫さまがいたってこと……」

「状況は少し違つかもしれませんよ。ナデイルは、ご自分の意思で恋人の銀猫を追いかけて、消えてしまわれたようですが。その姫君

がそうだったのかどうか……。銀猫は、お姫さまを無理やり連れて行ったのかもしれない」

「無理やり連れて……？」

フィリアスは、さらに暗誦を続ける。子供におとぎ話を聞かせるように、抑揚をつけてゆつくりと。

「それは結婚式の少し前のことでした。どこを探しても、お姫さまも猫も見つかりませんでした。お姫さまを失った花婿は嘆き悲しみ、床に臥してしまいました。……そして私は、その話は伝説ではなく、本当にあったことだと聞いています」

「なぜ、そなたにそのようなことを話さねばならぬのじゃ？」

カジエーラが、ナデイルに言った。

その透明な黄色の目は凍ったような光を帯び、ナデイルをじっと見据える。

それまでの、どこかのんびりしたような穏やかな雰囲気は、完全に消え去っていた。

警戒と不快、そして苛立ちが、隠されることなくナデイルに伝わってくる。

まずい。彼女を怒らせてしまったら……。

もし何か魔法でも使われてしまったら……。

ナデイルは不安になり、躊躇する。

いや、大丈夫なはず。

まず素性、そして立場を明確にしなければならない。

もし自分が思っている通りなら、彼女の態度も変わるはずだ。

もしかすると、最初にそれらを明かしてしまったフィリアスは、

賢明だったのかもしれない。

本人はもちろん、特に深く考えずにしたことなのだろうが。

彼は能天気に見えるが、抑えるべきところは抑えているのかもしれない。

ナデイルは、フィリアスを少し尊敬した。

「私は……あなたが付けておられる鈴の持ち主を追いかけました」

ナデイルは言った。

かすれそうになる声を平静を装って搾り出す。

「……エリユースか」

カジエーラが、ほうつと短い溜め息を交えて呟く。

ナデイルは、胸に当てていた手をぎゅっと握りしめた。
しっかりしなければ。

このことを訊くために、自分はここに来たのではないか。
逃げ出しそうになる意識を無理やり心に縛りつけ、ナデイルは自分
を奮い立たせた。

「やはり、ご存知なのですね」

「誤解のないように言っておくがの。これはエリユースが私に預けたものじゃ。あやつから取り上げたものではないからな」

預けた……。

では、エリユースはカジエーラと知り合いということなのか。
それより、預けたということは、彼はここにはいないということ
を示すのでは？

彼は鈴を彼女に預けて、この城を去った……。

ナデイルは、鈴を指し示すカジエーラの指を見つめた。

白く細い指に輝くのは、猫がルビーを抱えている金の指輪。

ナデイルの尋常ならざる視線に気づいて、カジエーラの警戒心が
再び高まったようだった。

「私はその指輪と同じものを持っています。私の指輪は猫ではなく、

ガガのような金の竜です」

「金の竜とな。それはぜひ見たいものじゃな」

カジェーラは、ナデイルに手を差し出した。

ナデイルは、首を振る。

「残念ながら、今は持っていないせん。今頃は指輪をたずさえた者と共に、アーヴァーンに戻っているでしょう」

「アーヴァーン……か。娘。そなたの本当の名は？」

カジェーラが訊ねた。

「ナデイル・リア・ジフル。アーヴァーンの第一王女です」

「ほう。アーヴァーンの姫君とな」

カジェーラの目が細められた。

どういふ感情がその奥にはあるのか、ナデイルには推測すら出来なかった。

自分の望む結果は得られなかったのだろうか。

ナデイルの胸を一筋の黒い雲のような不安がよぎって行く。

「それはそれは。もし本物の姫君なら、このような辺鄙なところにようこそ、じゃな」

カジェーラが、歌うような調子で言った。

「それを証明するものではありません。信じていただくほかには」

ナディルが言うと、カジェーラは、ふっと微笑んだ。
少女が子猫に笑いかけるような、愛らしい微笑みだった。

「証明せずとも、私にはわかるかの」

「あ……？」

気が付くと、離れたところにいたはずのカジェーラは、ナディルのすぐそばにいた。

魔法を使ったらしい。

カジェーラはナディルの肩に手を回し、耳に口を寄せる。

「やっと会えましたね、王太子殿下。お久しゅうございます」

カジェーラは頬をほんのりと染め、ナディルを見つめる。輝くような笑顔だった。口調もそれまでとは違っている。

「私は……王太子ではありません」

ナディルが呟くと、カジェーラは頷いた。

「そなたの体の中に存在する、ある方に話しかけただけじゃ。そなたの中に流れている血をたどれば行き着くであろう、ある方に……」

「ユーフェミアですね。アーヴァーンの女王だった人。私の直系の先祖の一人です」

離宮の廊下のあの絵の下に貼られていた小さな金属の板。
それに書かれていた名前を言うと、カジェーラは嬉しそうに再び

大きく頷いた。そして、ナデイルの髪を指に絡めて軽く引つ張る。

「やはり似ておるのう。髪質などそっくりじゃ。長くないのが残念じゃの」

「カジエーラ。あなたは、ファルグレット侯爵の身内の方なのではないのですか？ 侯爵と一緒にユーフェミアの前から姿を消してしまった姫君。かつてアーヴァーンにいた、王家にとって大切な一族の姫君なのでは……」

ナデイルが言うと、カジエーラは寂しそうに微笑んだ。

それからナデイルから少し身を引き、丁寧に腰をかがめてお辞儀をした。

アーヴァーンのどの貴族の娘のお辞儀よりも丁寧に礼儀正しく、そして優雅で心がこもったものだった。

「ファルグレット侯爵は、私の兄でした。ユーフェミアさまは、幼き頃よりおそば近くにお仕えさせていただきました。ユーフェミアさまにとって、どなたよりも気心が知れた友人であつたと、恐れながら自負しております」

カジエーラが頭を下げたまま言った。

「じゃあ、あなたは侯爵の妹さん……。だから……。だから、侯爵と一緒にいかざるを得なかったのですね」

ナデイルの夢の中に現れた、銀の髪の若者とマントの少女。

銀の髪の若者はファルグレット侯爵であり、共にいた少女は、彼女 カジエーラだった。

あのマントには、赤い髪、黄色の目の少女が包まれていたのだ。

「私たち一族の選択は、間違っておりまして。私は今でもそう思っております。逃げるのではなく、隠れるのではなく、堂々と国王さまに助言申し上げるべきでした。長老たちは、浅はかにも期待していたのです。宮廷を去っても、いずれは事は収まるだろうと。ユーフェミアさまが無事に即位されたら、自分たちは再び請われてアーヴァーンに戻るであろうと。そして、兄とユーフェミアさまも無事に結婚し、兄はアーヴァーンの女王の夫に納まるであろうと……」

「でも、そうはならなかったのですね。アーヴァーン王家は、あなたの方を探さなかった。そしてユーフェミアは別の男性と結婚してしまいました。彼女をずっと待っていてくれた、やさしい男性と……。彼もまた、私の先祖となりました」

「若い娘は、そんなに長い年月を待つことなど出来ようはずありません。人間の娘が若くいられるのは、ほんのわずかな期間。その間に恋をし、伴侶を決めなければならぬのです。特に王家の方ともなれば、必ずその短い時期に結婚をして、子孫を設けなければならぬ定め」

「カジェーラ。もしやあなたにも決まった方が……？」

ナデイルの質問には答えず、カジェーラは続けた。

「過ちを認めぬまま長老たちは亡くなり、残された一族もやがては散って、その存在も忘れ去られていきました。この指輪は、アーヴァーンの王家から嫁いだ私の先祖の持ち物。私の一族がアーヴァーン王家に連なることを示す指輪です。今さら私が持っていて、もう何の意味もありませんが」

カジェーラは指輪をいとおしげに撫で、それから立ち上がった。

「となると、やはり私の記憶は間違いではなかったようじゃの」

元の口調に戻り、彼女はナデイルをしげしげと眺めた。

「棺の中に横たわる、長い黒髪の姫君。やはりあれはそなただったのじゃ」

「それはどういうことですか？ 私はいずれそうになると？」

ナデイルが訊ねると、カジェーラは、にやりと笑う。

「エリユースじゃよ。しかし、そなたは見ることは出来ぬのう」

エリユース……。

その名前を再び彼女の口から訊いて、ナデイルの体は総毛立つようだった。

心臓が激しく、熱く脈打っている。気を失いそうになくらいに。なのに冷たい液体のようなものが、肌をじわりと這い下りて行く。

「取りあえず、案内しようかの。あの公子と竜は、まだ戻ってこぬようじゃが、そのうち我々を探し当てるであろうし。先に行って待つておってもよいじやろう」

「案内って……どこにですか？ 見ることは出来ないって、何を？ エリユースに関係のあることなのですか？」

「あの公子が行きたがっていたところじゃよ。そこに案内しよう」

「翡翠の冠のところですか？」

ナデイルが訊ねると、カジェーラは、くくつと笑う。

「翡翠の冠は返してやる。そう言ったであろう。そなたたちがここまで来たその勇気と無謀さを称えてな。これもまた、私が持つていても無意味じゃ。というより、厄介者じゃ。見るたびにいやな気分になるからの」

カジェーラが手を宙にかかげると、その手のひらの上に、金と緑色の石で作られた、見事な冠が現れた。

上質の翡翠が惜しげもなくふんだんに使われ、その神秘的な輝きは、それぞれに命を閉じ込めたかのように瑞々しい。

特に中央にはめ込まれた翡翠は、氷河の透き通る緑を映したような大粒のもの。見る者を魅了し、その内部に引きずり込んでしまいそうな妖しい緑。

それは、オーデルクの大公家の栄光と繁栄を示す宝冠だった。

「翡翠のナデイル。その名の通り、これはそなたに似合いそうじゃの。ぜひ見たいものじゃ。これをその頭に戴き、その少年の衣装をこれにふさわしいものに替えて、私に見せてくれぬかのう？　そうすれば、さらにすなりとこれを公子殿に返して差し上げてもよいぞ。エリユースのことも話してやろう。どうじゃな？」

もちろんナデイルは、同意するしかなかった。

フィリアスに素性が知られてしまうことなど、もうどうでもよかった。エリユースのことがわかるのなら。

「では行こうかの、翡翠のナデイル。いや、やはりアーヴァーンのナデイル王女と呼ぶべきかの」

ナディルは、差し出されたカジエーラの手を取った。
その手はやわらかく、心細く思えるくらいに華奢なものだった。
けれどもその内部からは、すがりつきたくなるような安らかな温
かさが、ゆつたりと溢れて来る。
ナディルはその手を強く握った。

「『翡翠のナディル』とは、よう言ったものじゃのう。黒髪に金の冠。その目に翡翠。髪がもつと長ければよかったのう」

カジエーラはナディルを小さな部屋に連れていき、そこにずらりと並んだドレスを取り出しては、ナディルにあてがった。

色ごとにきちんと並べられたドレスは、どれも高価で美しいものだったが、ナディルがあまり見たことのない形状と装飾だった。

唯一見たのは、絵の中。ナディルの先祖のユーフェミアが着ていた衣装だ。

おそらく百五十年くらい前、ユーフェミアが生きていた頃、流行っていたドレスに違いない。

そしてカジエーラがまだ若く、魔法で外見を装わなくとも少女でいられた時代の頃のものの。

「どれがいいかの」

カジエーラは踊るような足取りでドレスを抜き出し、引き出しから装飾品を次々に取り出した。

「ついでに、あの竜にも何か用意してやろうかの。子猫用の衣装ならあるからの。レースの付いた赤いケープはどうじゃ？ 緑色の帽子をかぶせても似合うかもしれぬな」

「どんな衣装でも、ガガはきつと断ると思います」

ナディルが言うと、カジエーラは眉をしかめた。

「つまらぬの。まあ、竜は竜らしくいるのが一番じゃが」

結局カジエーラは、アーヴァーンの正装によく似た衣装を選んだ。白と金を基調にした、豪華なものだった。

ドレスの表面を覆う見事な縫い取りは、鳥と花を組み合わせたものの。

年若い姫君のために作られたらしいドレスだった。

カジエーラは、ナデイルにドレスを着せた後、長い黒髪の付け毛をナデイルの髪に補った。

それからナデイルの頭にオーデルクの大公妃の宝冠を乗せる。

カジエーラは、いろんな距離からナデイルを何度も眺め、満足そうに頷いた。

「やはりよく似合うのう。何と美しい。そうじゃ、ではその冠はそなたにやろう。そなたがここから持ち出すがよろう」

カジエーラが言った。

「あの公子に簡単に返してしまうのは、少し癪に障るのでな。私はこの冠を手に入れるのに、気に入っていた黒真珠の首飾りとエメラルドの指輪五つを代わりに手放したのじゃぞ」

「私に……ですか？ あなたがそんな高価な代償を払って手にした冠を……」

ナデイルは戸惑って、彼女を見つめる。

「よいのじゃ。そなたはその美しさで、目の保養をさせてくれたからの。そなたがその後、誰に冠を譲ろうとそなたの勝手。私の知る

ところではない」

カジェーラが、にっと笑った。

ナデイルは冠に気をつけながら、感謝を込めてお辞儀をした。
それから、彼女に訊きたくて訊けぬままだった質問を思いきってぶつけてみる。

「カジェーラ。エリユースは……ここにはもう、いないのですね？」

「そなたは、エリユースの恋人か何かの？ そなたらは思い合っておるのか？」

カジェーラが黄色の目を細めた。

ナデイルが言葉を探して黙り込んでいると、彼女は納得したように何度も頷いた。

「よいよい。訊くのが野暮というものじゃったの」

「あの……。エリユースは……」

「あやつは、サファイアの首飾りを探しにきた。それをこの城で見つけて、持って行ってしまったのじゃ。代わりに、オパールの腕輪を置いていきよったがの。サファイアの首飾りのほうが高価なのだが、腕輪を気に入ったので、大目に見てやったのじゃ」

カジェーラが言った。

サファイアの首飾りを持って行ってしまった……。
では、もうエリユースは、ここにはいないのだ。

賞金稼ぎとしての目的を果たして、この城からは既に去ってしまった。

全身から力が抜けていくようだった。

彼はいないのだ。ここには、もう……。

彼がいたことを示すのは、カジェーラが付けている金の鈴だけ……。

苦く切なく、そして熱いものが、ナデイルの目からこぼれそうになった。

「エリユースのことを慕っておるのじゃな、ナデイル王女」

カジェーラが、やさしく言った。

「私は彼を捕まえることが出来ません。彼は銀猫。私が伸ばした手をすり抜けて、逃げてしまう。この手で捕まえ、抱きしめることは出来ません……」

「確かに、自由に気ままな銀猫じゃの。しかし、放浪する銀猫も、いずれは帰らねばならぬ。あたたかい家にな。その身を常に案じ、どのような時にでも笑顔で迎えてくれる、愛する家族がいる場所へじゃ」

「でも、それは、おそらく私のところではないのです」

「後ろ向きじゃの。猫の気持ちが変わるのを根気よく待ってやってはくれぬかのう」

カジェーラが笑った。

「猫の気持ちは、いずれ変わるのですか？」

「それはわからぬ。何しろ猫じゃからな」

カジェーラは肩をすくめる。

「あなたはエリユースとは、どういう……？ 彼は、銀の髪とトパーズの目です。それは、あなたの兄君のファルグレット侯爵と同じですよ？ やはりエリユースは、あなたの身内なのではないのですか？」

ナデイルは、カジェーラに訊ねた。

「そう。あやつは、私の兄……当時の侯爵の直系の子孫じゃ。つまり、そなたの先祖のユーフェミア女王と結婚しそこねたファルグレット侯爵の子孫じゃな」

やはり……ファルグレット侯爵。

ナデイルの父が舞踏会で思わずその名を口にした、そしてナデイルの夢の中に出てきた、マントの青年。

彼の血を受け継ぐエリユースは、その姿もまた彼から継承していたのだ。

「兄は、ユーフェミアさまが結婚されたことを聞くと、一族があてがった娘と仕方なく結婚したのです」

カジェーラが、口調を変えて静かに言った。

「その何代目かの子孫がエリユースです。兄の一族は、何かと私のことを目にかけてくれました。この城を用意してくれたのも彼らで

す。ですから私は、エリユースが生まれたときから知っています。子供の頃はよく、この城に遊びに来ていましたよ。今でも時折、訪ねてくれます。私を気遣って。とてもいい子ですよ」

「この城にエリユースが……子供の頃から……」

ナデイルの中に、この古城に対する親しみが突然沸き上る。

けれどもそれは、すぐに気の遠くなるような切なさに変化して膨れ上がり、ナデイルに覆いかぶさった。

「あやつに、もつときちゃんと我々一族のことを話しておくべきであった。あやつは子供の頃から、うんざりするほど年寄りたちに聞かされ続けたのじゃ。我々は、やがてはアーヴァーンに帰る。帰らねばならぬ。侯爵家として、猫族の血と力を受け継ぐ一族として。そして王家に寄り添わねばならぬ、とな。それであやつは反発し、家を出おった。無理もない。現実味のない、伝説めいた夢物語を延々と聞かされたのじゃからな。今の一族に必要なものは、夢でも伝説でもない。日々の営みじゃ。雨風をしのげる家で、それなりのものを食していくこと、それなりの衣服に身を包むこと、あたたかい寝床で休むことじゃ。たとえささやかでも、小さくとも、それを毎日続けて行くことこそが、何にも変えがたい大切な日常の幸せというものじゃ」

カジェーラが、窓の外のはるか遠くに視線をさまよわせながら言う。

その目は、やはりエリユースそっくりだった。

「しかし、エリユースが出て行った間に、年寄りたちは死んでしもうた。そしてエリユースの親たちも次々と亡くなり、今では一族はエリユースと私の二人だけじゃ。侯爵がアーヴァーンを去ったあの

時、一族は散り散りになり、傍系の子孫たちは自分たちの出生さえ、もうわかつてはおらぬじやろう。やがて私がいなくなれば、エリユースはたった一人になる。銀の猫はたった一匹、この荒野に残されてしまうのじゃ。私は、あやつのが心配じゃ。まあ、あやつなりに生きてはいくじやろうがの」

「では……エリユースは、ここには来ることがあるのですね……」

ナデイルが訊ねると、カジエーラはこくと頷く。

「この間、来たばかりじゃから、当分は来ぬじやろ。じゃが、いつかは来る。それまで待つておるか？ 私は構わぬぞ。というより、この城が賑やかになって嬉しいくらいじゃが？」

ナデイルは、首を振った。

訊かれる前から、答えは決まっている。迷う必要さえなかった。

「ここで待つているなんて、そんなことは出来ません。そんな待ち伏せをするような卑怯なことは。私は、私のほうから出向いて彼を見つめます」

カジエーラは、ふつとあきれたように溜め息をついた。

それから、あどけなさを含んだ表情で、にこつと笑う。

「さすがに誇り高いアーヴァーンの王女さまじゃの。だからこそ『翡翠のナデイル』と呼ばれる所以でもあるのじやろうが。そういうところも、ユーフェミアさまにそっくりじゃ。じゃが、そなたがこの城を出て行くということは、フィリアス公子やその臣下どもも一緒に出て行くことになるのかのう。一度にこの城から大人数に行け行かれたら、寂しくなるの。あの公子の家来どもも、あやつらなり

に今はこの城の一員じゃからな。ま、あの公子が彼らを連れて帰れるかどうかは定かではないが」

「この城の一員？ カジエーラ、フィリアス公子の臣下の人たちはどこに？ 彼らを閉じ込めているのですか？」

「私は何もしておらぬよ。彼らを閉じ込めているのは、彼ら自身じや。公子は彼らを解放出来るかのう。公子もまた、家来たちと仲良く一緒に、ずっとこの城の一員になるやもしれんな。私は、それはそれで嬉しいがの」

「それは……フィリアス公子も閉じ込められてしまうということですか？」

「そういうことじゃの」

「私をそこに案内してください」

ナディルが言うと、カジエーラは再度肩をすくめる。

「あまり首を突っ込まぬほうがいいと思うがの、翡翠のナディル。無事にこの城から出たければな」

「私はフィリアス公子に雇われました。まだ仕事は終わっていません。私だけ帰るといふわけにはいかないのです」

「そうじゃの。仕事は最後まできっちり仕上げねばならぬのう。報酬ももらわねばなるまいし。ただ働きはよくないからのう」

カジエーラは手を上げ、空気を撫でる仕草をした。

途端にナデルがいた部屋の壁が溶け落ちるように消え、それと入れ替わるように、別の新しい壁が現れた。

それは、息が詰まるような暗い石積みの壁だった。

湿った土の匂いが鼻孔の奥に入り込み、ひんやりとした空気がナデイルの体を包む。

ナデイルとカジエーラは、石の壁で囲まれた狭い廊下に立っていた。

カジエーラが魔法でそうしたのか、すぐに橙色の明かりが幾つも並んで灯り、ちろちろと揺れ始める。

真正面に、四角の光が見えた。

闇の中でそれは、昼間の空を正方形に切り取ったように浮かび上がっていた。

「こちらじゃ」

カジエーラはナデイルの手を引いて、四角形の平たい光へと導く。その四角の光が窓であることに、ナデイルは間もなく気づいた。窓に嵌められた装飾が、向こう側の光を通して影絵のように浮かび上がっている。

それは、猫と戯れる少女の装飾だった。

「いらん」

カジエーラの伸ばされた手が新たな影となつて、表面の装飾に重ねられる。

ナデイルは、その窓を覗いた。そして声を上げる。

「これは……」

窓の下は、光に包まれた広間だった。

美しい彫刻が施された柱、高い天井。

天井からは、何千本もの蠟燭が灯った豪華なシャンデリアが吊り下げられている。

広間には、たくさんの人々がいた。

少しずつ間隔を開けて立ち、同じ方角を向いて。

まるで集会でも開いているかのようにだった。

けれども、そこに大勢の人々がいるという気配は全くなかった。

息遣いが感じられることなく、話し声も聞こえない。

そこにあるのは、総毛立つような静けさ。

何者かが邪心を持って作り上げたような静寂。

それは異様な光景だった。

人々は、まるで一瞬のうちに動きを止められてしまったかのように突っ立っていた。それとも、体の表はそのままに、内部だけが石に変えられてしまったのか。

ある者は手を伸ばし、ある者は自分の肩を抱いていた。

その多くの目は閉じられ、開けている者も、うつろなガラスのような眼球をぼんやりと一点に注いでいるだけだ。

人々の中には、オーデルクの衣装を着た若者が数多くいた。顔を覆い、手を広げ、あるいは剣を高く掲げて。

彼らもまた、微動だにしなかった。

広間で動くのは、シャンデリアの蠟燭の光に合わせて静かに揺れる、人々の淡い影だけだった。

「ここは、昔は舞踏会が開かれた部屋らしいのじゃがな。今では静かなものじゃ」

カジエーラが呟いた。

「カジエーラ。あの人たちに魔法を？」

少女と猫の装飾に指を絡め、ナディルはカジエーラを振り返る。カジエーラの目は、闇の中では、小さな二つの月のようだった。猫の時のエリユースの目がそれに重なり、ナディルは軽い眩暈を感じた。

「私は何もしておらぬ。あれじゃ」

カジエーラが、窓の向こうを指差す。

広間の奥に、銀色の卵型の板のようなものが据え付けられていた。その中の空間にも、広間が続いているのが見える。

柱、シャンデリア、身動きしない人々の姿。

板を隔てて、広間の光景を寸分たがわず映し取った空間だった。

それは背の高い、大きな鏡だった。

縁に花の飾りがこてこてと施され、翼を広げた鳥の彫刻が、その上に何羽も乗せられている。

「あれは……鏡……？」

「そうじゃ 魔法の鏡じゃな」

カジエーラはナディルの隣に並んで、広間を見下ろした。

「私はこの城に来たとき、あの鏡も一緒に持ってきた。あれは猫族

が作ったという言い伝えのある鏡での。魔力を持つておる。私の母の形見であり、アーヴァーンの城を去るとき、私が唯一望んで持ち出せたものじゃ。一族の女性たちは、昔からあれを普通の鏡として使っておった。私も子供の頃からあれを使い、あれの前で化粧をして自分の身を飾った。なぜなら、鏡はその魔力をずっと封じ込められていたからじゃ。けれども、悲しみに打ちひしがれていた私を哀れに思った私の兄が、鏡の魔力を解き放った。あの鏡は覗いた者の心を感じ取る。そして、その者が求めるものを映し出す力を持つているのじゃ」

「心を感じ取って、求めるものを映す……？」

「それは穏やかな言い方じゃな。つまりあの鏡はな、覗いた者の心の傷につけこんで、虜にしてしまう。そういうことじゃ」

「虜に？　じゃあ、あの人たちは……」

ナデイルは、動かぬ人々を眺めた。

「そうじゃ。心を鏡に捉えられてしまった囚人たち、ということになろうかの」

「そんな……。じゃあ、あれは、人々に災いをもたらす、呪われた鏡では……」

「そうとも言えぬぞ。彼らは間違いなく幸福じゃからな。死に別れた親族と会っている者もおろう。結ばれなかった恋人と再び愛を語っている者もおろう。捨て去った夢を叶えた者もおろう。それぞれ的人生の中で、己が望む瞬間を永遠に味わうことが出来るのじゃ」

「でも、でも……それは現実のものではありません。鏡が見せる夢。幻ではないですか!」

ナデイルは、声を荒げた。

「夢でも幻でも、必要な者には必要なのじゃ。特に心弱き者にはな。私もかつて、あの鏡を覗いていた。幸せじゃった。あの中には、私が求めるものが現れたからのう。その中に、いつまでもいつまでも永遠に浸っていたかった」

「あなたは、では、あの鏡の呪縛から逃れられたということなのですね?」

ナデイルが訊ねると、カジエーラは微笑んで頷く。

「五十年ほどかかったかのう。鏡が見せるものが幻であることによやく気づき、嫌気がさして自らあの前から離れるまでな。その間私は、兄の一族にとっては『魔法の鏡を覗いている哀れな姫君』で通っていたようじゃ。皆、そつとしておいてくれた。鏡に関わるのが怖かったからでもあるうな。あの者たちは、何十年かかるかのう。やはり五十年くらいかの」

「カジエーラ。あの人たちは人間です。あなたのように長命ではないし、若さを保つことも出来ません。時間が流れると老いて死んでしまいます。五十年だなんて、むごすぎます。それに彼らには、帰りをずっと待っている人たちがいます。彼らが帰ってくると信じて毎日せつない思いで過ごしている、あの人たちの数倍以上の人たちがいるんです。どうか彼らを解放してください」

「ナデイル王女。猫族の血を受け継ぐ魔女や魔法使いも、やがては

時の流れと共に消えて行く定めのものじゃ。ただ魔法が使えるというだけで、人間と何も変わりはせぬ」

カジエーラが、真面目な顔をして言った。

「ま、気の毒とは思うが。解放しようとしてあの鏡を覗けば、私もまた鏡の囚人となってしまうかもしれないから。百年前は鏡から逃られたとはいえ、今私の心がどう反応するのか、私にも見当はつかぬ。また五十年かかってしまうかもしれない」

「あなたがそれほどまでに鏡の中に求めたもの。それはいつたい……？」

カジエーラは、ナデイルの翡翠色の目を一瞥して、視線をそらせた。

「誰しも心に傷の一つや二つ、持っておろう。年若いそなたもな。この年になれば傷が多すぎるというものじゃ。あるいは忘却という年寄り特有の長所において、鏡を覗いても、私は全く何の問題もなく鏡を破壊できるのかもしれない。じゃが、私はそのことに私の力を使いたくはないのじゃ。他の大仕事が控えておるのでな。私も老いた身ゆえ、やることは選ばねばならぬ。鏡のことに力を使い果たしてしまうと、何も出来ぬまま逝くしかないからの」

「大仕事というのは？」

「そなたには関係のないことじゃ。……と言いたいところじゃが、関係ありそうじゃ。私はそのことで、いずれそなたと戦うはめになるかもしれない。が、まあ、今は関係のないことじゃ。気にするでない。それより、おお、そうじゃ」

カジエーラが、にっと笑う。

「エリユースは、あの鏡を覗いておったぞ。この前来たときにな。思い出した。その時にはまだこういうお客たちは、ここにはおらんかったからのう。残念じゃな。あやつだったら、解放できたかもしれぬのにな」

「エリユースが？」

ナデイルは、思わずカジエーラの黄水晶の目を見つめた。

「では、彼は鏡を覗いても無事だったのですね？ 鏡の呪縛からは、すぐに逃れられたと……」

「そうじゃ。じゃが、あやつはあの鏡に慣れておる。子供の頃から鏡を覗いては遊んでおった。いたいけな子供には、心の傷などまだないからの。しかし、成長した今でも、心の傷は一切ないのかのう」

「……あの人たちを解放するためには、あの鏡を破壊すればいいわけですね？」

ナデイルは、カジエーラに訊ねた。

心の傷。

そういうものがないからこそ、エリユースは鏡に呪縛されなかったのではないのか？

自分は彼の心を悩ませるほどの存在にさえなれていないということではないのか……？

溢れそうになる感情と、その中から生まれ出ようとする疑問を、

ナデイルは無理やり押さえ込む。

「いや。そこまでする必要はない。鏡に布をかぶせればいいのじゃ。そうすればたちまち魔法は解け、あの者たちは自分を取り戻すじゃろって」

「では、簡単なことです。たとえば、目を閉じて鏡のところまで行くとか、後ろ向きで行くとか。そうすれば鏡を見なくてもすみす。そして、そのまま布をかぶせれば……」

「あの鏡は、何しろ魔法の鏡じゃからの。目を閉じていようが、後ろ向きになっていようが、近づけば魔法は心に忍び込む。抗うことは出来はせぬ。気が付けば……気が付くことが出来ればじゃが、鏡の中をまともに覗くはめになっておるじゃろっ」

「でも。彼は……エリユースは大丈夫だったのでしょうか？」

「そうじゃの。あやつは特別かもしれぬが、鏡に付け入れられぬほどの強い心の持ち主ならば出来るじゃろっな」

「カジェーラ。あの鏡を覆えるくらいの布を用意していただだけませんか？ それから、私をこの下に降ろしてください」

ナデイルは、カジェーラに言った。

「そなたが行って、あの者たちを解放するというのか？」

ナデイルは、頷く。

カジェーラは、黄色の透明な目で、探るようにナデイルを眺めた。

「じゃが、あの鏡は心の弱みをえぐってくるぞ。そなた、心に傷は持っておらぬのか？」

傷などという程度ではない。

引き裂かれたものを繋ぎ合わせてかろうじて形を保ち、ごまかしながら持続させてきたような心。今でも壊れそうに疼く心だ。

ナデイルは、自分の肩を両手で抱いた。

けれども、あれからもう二年もたっている。

時間の流れによつて、ある程度は修復できているはずだ。

いや、修復されていなければならぬ。

エリユースは、鏡を覗いて無事だった。

彼は鏡の中には何も見なかった。

見たのかもしれないが、それに心を惑わされ、囚われることはなかった。

それが答えなのかもしれない。自分がこの二年間、ずっと探していた答えなのかも。

ならば、自分もそうしよう。鏡に挑もう。

でなければ、彼を超えることは出来ない。

この二年間、さまざまなことを切り抜けてきたのだ。

今度だつてそうして見せる。

『翡翠のナデイル』は、請け負った仕事は最後までやり遂げなければならぬ。

カジェーラは、空中から金糸と銀糸で刺繍がされた黒い布を取り出し、ナデイルに渡した。

闇夜の空間に咲き乱れる花々を表したような、綺麗な布だった。

「では、行くがいい。ナデイル王女。いや、翡翠のナデイル」

ナデイルの姿は、たちまちカジェーラの前から掻き消えた。

「ナデイル!？」

ガガの声が、広間に響く。

広間の扉が開き、ガガがその隙間から飛び込んで来た。

扉がさらに広がり、続いてフィリアスが、ガガを追いかけるようにして入って来る。

ガガとフィリアスは、緑色の宝石で作られた冠を戴いた長い髪
のナデイルが、ドレスの裾を引きずり、鏡に向かってゆっくりと歩
いて行くのを見た。

しっかりと抱きしめた黒い布の刺繍が、ナデイルの腕の中できら
きらと輝く。

「ナデイル、あんな格好して、いったい何を……」

「あの姫君が、ナデイルですって?」

フィリアスが、信じられないという表情をして呟く。

その大きく見開かれたアメジストの目は、前方を横切って行くナ
デイルの姿を呆然と見つめた。そしてその視線は最後に、ナデイル
が頭に乗せている翡翠の冠に注がれる。

「あの冠は、オーデルクの……」

「そうじゃ。そなたの家の冠じゃの。そして、あれが『翡翠のナデ
イル』の本来の姿じゃな」

フィリアスとガガのそばに、カジエーラがふわりと姿を現す。
ガガは「ひっ」と叫んで、遠くに飛びのいた。

「美しい冠じゃ。翡翠のナディルには、よう似合う」

カジエーラが、夢見るように、うつとりとして呟いた。

「私はあの冠をあの姫にやった。冠が欲しければ、あの姫と交渉するのじゃな。私は知らぬ」

「では、この広間には、私が捜し求めていたものが、すべて揃っているというわけですね」

家臣たちの姿に気づいたフィリアスが、言った。

それから彼は、たった今浮かべた安堵したような表情をたちまち引き締め、鋭くカジエーラに質問する。

「カジエーラ殿。もしや、彼らに魔法をかけたのですか？」

「魔法をかけたのは、あの鏡じゃ。私は何もしておらん。同じ質問に何度同じことを答えねばならぬのじゃ。そなたの臣下たちは、勝手にこの広間に入り込み、勝手にあれに捕まりおった」

カジエーラは、広間の奥に据え付けられた大きな鏡をめんどくさそうに目の動きで示した。

「鏡？ 鏡だつて？ 何だよ、あれ。この人たちをこんなふうにしたのがあの鏡なら、呪いの鏡だ！ ナディル！ そっち行っちゃだめだあっ！！」

「これっ！」

ナデイルのところに飛んで行こうとするガガの尻尾を、カジエーラは素早くつかんだ。

意外と強いカジエーラの力で、ガガは床にびたんとたたきつけられる。

「あの姫は、これから鏡の魔法を封じ込めるところなのじゃ。邪魔するでない。ここでおとなしく見守っておれ」

「封じ込めるとは？ ナデイルが持っているあの布ですか？」

フィリアスがカジエーラに訊ねた。

「あの布をかぶせれば、鏡の呪縛は遮られ、ここにいる人々はすべて自由になるう。まあ、最も手っ取り早いのは、鏡を粉々に壊すことなのじゃが、あの鏡はそういう殺意を敏感に感じ取るからのう。布をかぶせるほうが簡単じゃ。砕け散った鏡のかけらを掃除する必要もなくなるしの。しかし、あの姫に出来るのかのう。強がってはおったが、相当心に傷を負っていると見たぞ。あの鏡は、人の心の弱みにつけこんで虜にするからのう。誘惑に打ち勝てるかの」

「勝てるわけない。無謀だよ、ナデイル。傷どころじゃないじゃないかい……」

ガガは不安げに、鏡に近づいて行くナデイルを眺めた。

ナデイルは、林のように立ち尽くす人々の間を抜けて、鏡に向か

った。

その表面に姿が映らぬよう、慎重に近づいて行く。

ナデイルがすぐ傍を通っても、人々は動かなかった。

閉じられた目。開いてはいても、うつろな人形のようなガラスの目。

鏡に捕らえられ、彼らは何を見ているのか。心の中では、何が起こっているのか。

鏡が瞬きをしたように、ナデイルには思えた。そして、鏡がナデイルに気づき、少しナデイルに向けて角度を変えたような。

ナデイルは布を握りしめ、鏡から目をそらして進んだ。

床には絨毯が敷かれている。藍色の地に真紅の花模様が鮮やかだった。

ナデイルは視線を床に落とし、絨毯に描かれた模様を目でたどりながら鏡に近づく。

やがてナデイルは、鏡の前に立った。

だいじょうだ。何も起こりはしない。

ここまで簡単に来られたではないか。

鏡には、ナデイルが映っていた。

ドレスに身を包み、オーデルクの翡翠の冠を戴いた、可憐で美しい姫君。

もちろんナデイルは、まともにそれを見ることは避けたが、自分が映っていることはわかる。

映るのは当然。これは鏡なのだ。

魔法の鏡でなくとも、鏡は前に立った者の姿を否応なくそのまま映す。

別のものが映らず、普通に自分の姿が映っているらしいことに、ナデイルは幾分安堵する。

ナディルは、布を広げた。

この鏡には、眠っていてもらわねばならない。

魔法を封じ、鏡に囚われた人々を解放するのだ。

と、鏡の表面が、風に撫でられた湖のように、ゆるやかに波打った。

（ごらん）

誰かが囁いた。

幼い子供の声だ。

（ごらん）

今度は大人の男性の声。そしてそれは、すぐに女性の声になる。

（ごらん、ごらん……）

だがそれは、ナディルの耳ではなく、頭の中で聞こえた。

鏡だ。

鏡が喋っている。

ナディルは、床の一点をただひたすら見つめた。
気分が悪い。

まるで、冷えた手で頭の中をかき混ぜられているような……。

「ナディル……」

その声に、ナデイルはぴくりと顔を引きつらせる。

「ナデイル」

声がもう一度、名前を呼ぶ。

聞き覚えのある、懐かしい声。

時がたとえ忘れもせぬ、忘れられもせぬ、あの声だ。

「やめて」

ナデイルは、呟いた。

「彼は、ここにはいない。私の心を探って偽者を作り上げたって、騙されない」

リーン、と鈴の音が聞こえた。

そして、彼のマントの揺らめきが、鏡から目をそらしているはずの視界の端に、ちらと見えたような気がする。

エリユースの鈴は、カジエーラが持っている。

今ここで聞こえるはずはない。鏡が作った幻聴だ。それは言うまでもないこと。

けれども鈴の音は、本物よりもさらに本物らしく、ナデイルの耳に心地よく響いた。

彼のマントがナデイルのすぐそばで揺れ、彼の黒い皮のブーツが、ナデイルの足元に確かに存在している。

初めて会ったとき、猪の罾から彼の足をはずした。あの時から鮮明な記憶として残る、彼のブーツが。

ナデイルがもう少し頭を上げれば、きっとエリユースの胸が見えるに違いなかった。

そして、さらにそこには、エリユースの銀の髪が、トパーズ色の目が存在する。やさしく微笑みながら、ナディルを見下ろしている。

これはエリユースではない。

ナディルは、目を閉じた。

だが、彼の眼差しを感じる。

彼の息遣いも、確実に聞こえる。

二年間、ずっと思い続けた、そのままのエリユース。

ナディルは、目を開けた。

「ナディルっ！」

ガガが叫んだ。

ガガとカジエーラ、そしてフィリアスは、鏡の表面が揺らめいた後、そこから幽霊のように、ふわりと人影が抜け出すのを目の当たりにした。

闇色のマントをまとったその美しい若者は、銀の髪と黄水晶の透明な目をしていた。

「エリユースだ！」

「そのようじゃ」

カジエーラが、ガガに同意する。

「あの姫君の心の傷は、やはりエリユースなのじゃな」

「あれが、エリユース……」

フィリアスが呟いた。

「でも、でも、エリユースじゃないよ！ おかしいよ。ここにはいないんだろっ！」

ガガが叫ぶ。

「むろん、偽者じゃ。あの姫の頭の中を探って、鏡が出してきた幻影じゃよ」

「そんな……。ナデイル！」

鏡の中から抜け出たエリユースは、ナデイルのそばに立ち、ナデイルをじつと見下ろした。

「ナデイル！ 鏡に騙されないで！ 早く布をかけちまうんだっ！」

ナデイルにはガガの声はよく聞こえたが、手は布をつかんだまま動かなかった。

「ナデイル……」

懐かしい感触が、ナデイルの肩を包んだ。

エリユースの手だった。

この二年間、ずっと憧れ続けた手。

その手で髪を撫でられ、抱きしめられたいと、気の遠くなるような回数を願い、憧れ続けた手。

そのあたたかさに、ナデイルはうつむいたまま、顔を歪める。

銀の髪がナデイルの視界の隅できらめき、鈴が澄んだ音をたてた。

香を焚いた香りが、ほのかに漂う。彼の香りだ。

ナディルは、手を伸ばした。

手が彼の胸に触れる。

それは、確かにそこに存在していた。ナディルの記憶のその通りに。

ナディルは、手を引つ込めた。

「あなたはエリユースじゃない」

ナディルは呟く。

「これは幻だ」

「幻ではありませんよ」

鏡から抜け出たその人物が言った。間違いなく彼の声だった。二年ぶりに聞くその声は、さらに続けた。

「ナディル。私はずっと鏡の中で、あなたを待っていたのです」

「嘘だ。あなたはこの城を出て行っただけです。カジエーラからそう聞いた」

「出て行ったのは体だけです。心はここに」

エリユースが言った。

「あなたは私を置いて、行ってしまったのに。なぜ？」

「いつも、あなたのことを思っていました。あなたの姿が心に焼き付いて、あれでよかったのだろつかと何度も自問しました。あなたを連れて離宮を出なかったことを後悔しています」

それは、ナデイルが望んでいた彼の言葉だった。

彼が言うはずもない言葉。夢の中でさえ、聞くことの出来ぬもの。

エリユースは、ナデイルの髪を撫でた。

そしてナデイルを引き寄せる。

「エリユースじゃない。エリユースは、そんなこと絶対に言いはしない」

「だが、私は言います。何度でも、あなたが望むだけ」

鏡が作り上げたエリユースは、ナデイルを抱きしめた。

「私はもうどこにも行きません。あなたと一緒にいきましょう。あなたのそばにずっといて、あなたが望むことをすべてかなえましょう」

ナデイルは、確かめるように、エリユースの背中に手を伸ばした。彼の広い背中。たくましい腕。そして銀の髪。彼の香り。

二年の間、ナデイルが望んだものたち。

切なく恋焦がれ、そのために数えきれぬほどの涙を流した。

それが今、この手の中にある。そして、もうどこにも行かぬと約束しているのだ。

それは、本物のエリユースが、決してナデイルには与えぬであろうものだった。

手に入らぬものを追い求めるよりも、ここでこのまま、このエリ

ユースの申し出を受け入れたほうが、幸せなのではないだろうか？
本物のエリユースは、鏡の中に何も見ることなく、行ってしまった。

彼の心に傷はなく、弱みもなかった。

自分を置いて行った後悔も、思い出も、ひとかけらだってありはしない。

ナディルは、ぼんやりと考えた。

ここにいれば、確実に心を癒され、安らかになる。

悪夢にうなされることもなくなり、心地よい眠りが約束されるだろう。

息の詰まる夜も、現実を思い知らされる眩い朝も、もう来ることはない。

少しだけ、彼の顔を見てみよう。一瞬だけ……。

ナディルは、彼の胸のあたたかさを感じながら、思った。

これが偽者なら、その目が自分の思っている通りの彼の目であるはずがない。

自分には、わかるはずだ。

きつと見抜いて、抗える。

ナディルは、顔を上げた。

そして、エリユースの目をまともに覗き込む。

それはやはり、ナディルが二年の間、大切に記憶に刻んでいたエリユースの目の色だった。

それを縁取る睫毛も。銀色の眉も。

ナディルが覚えていた通りのエリユース。

けれども、ナディルの姿は彼の瞳には映っていなかった。
その眼差しは、確かにナディルにやさしく注がれているというのに。

（なぜ？ エリユース、私を見ていないの？）

「見ていますよ。これから、ずっと。永遠にあなたを……」

鏡が作り上げた虚像の目には、何も映ろうはずがない。それこそが、偽者である証拠。

けれども、ナデイルの疑問は鏡の魔力で薄められ、心地のよい眠りの中に、たちまち吸収されて行く。

「ナデイル。もうあなたを離しません……」

「エリユース……。エリユース……！」

エリユースの腕の中で、ナデイルの心は満たされていた。あれほどまでに恋焦がれ、求め続けていたもの。それが今、手に入ったのだ。

ナデイルの目から、涙がこぼれる。

この二年間に流した涙とは違う涙だった。

もう、あんなにつらい、苦い涙は流さない。永遠に……。

私はここにいる。

エリユースと一緒に、ずっと、ここに……。

ずっとずっと、彼に見つめられ、抱きしめられて、眠る……。

ナデイルの手から、鏡を覆うための黒い布が、ぱさりと落ちた。

ナデイルの両腕は、エリユースを抱きしめた状態のまま凍りつき、

ナデイルの翡翠の目からは、光が消える。

「ナデイル!!」

ガガが、悲鳴に近い声で叫ぶ。

エリユースの姿は、消えていた。

両手を宙に掲げたナデイルだけが、鏡の前に残されていた。

鏡は満足げに、その平らな銀色の表面をゆらりと波立たせた。

「ナデイルが！ ナデイルがーっ！！！」

カジェーラに尻尾をつかまれたガガが、じたばたと動き回って叫んだ。

「やはり、鏡に捕まってしまったようじゃの」

カジェーラが、冷ややか過ぎるくらいの落ち着いた声で言う。

「それほどまでにエリユースのことを思っておったのか。重症の恋わずらいだったのじゃな」

ガガは振り返り、キツとカジェーラを睨んだ。

「エリユースを追いかけて家出をしてきたくらいなんだよ、ナデイルは！ そのエリユースが現れたら、一溜まりもないだろう！」

「現れるも何も、あれはあの姫が作り出した幻影じゃ。そのうち幻影だと悟って、解放されるじゃろ。あの姫は意思が強そうじゃからの」

カジェーラが、のんびりと言った。

「そのうち？ いつだよ？」

「そうじゃのう。五十年はいかんじゃろ。二十年くらいかの？」

「二十年！？ 冗談だろ」

ガガは羽根を広げ、さらに暴れる。

「離せよ、この魔女っ！！」

「どうするつもりじゃ？」

カジエーラが、黄色の目を細めてガガを見下ろした。

「あの鏡、叩き割ってやる。そうすれば、みんな鏡から開放される。ナデイルも！」

「そなたには無理じゃ。おそらく鏡のほうで、そなたより一枚上じや」

「やってみなきゃわからないだろう。叩き割れなければ、煤で真っ黒にして、何も映らないようにしてやるっ！」

「やめておけ。竜に魔法が絡むと、ろくなことがない。それより、あのままにしておいてやったらどうじゃ？ 鏡に囚われた者は、目覚めれば、否応無しにつらい現実が待っておるのじゃ。愛するものが存在しない事実を突きつけられ、自分が自分の望むものに成り得ないということを思い知る。たとえ幻やまやかしであろうとも、鏡を覗いていれば望みはかなえられる。本人がそう願えば永久にな」

「夢はいつか覚めるものなんだ。たとえつらくても、現実を受け入れなきゃならない。それが人間の定めなんだよ」

ガガはカジエーラに照準を定め、ぱかりと口を開けた。

そして、思いつめたような、幾分不気味な声で呟く。

「離せよ。火あぶりになりたくなくや」

「私を脅すのか。あきれたやつじゃ。ならば、ほれ、行くがいい」

カジエーラは溜め息をつき、ガガの尻尾を握っていた手を離れた。自由になったガガは羽根をバタバタと羽ばたかせ、動かぬ人々の林の間を通り抜ける。

鏡の真正面に出たガガは、鏡を見ないように気を付けながら、やはり動かぬナデイルの肩の上に飛び乗った。

「ナデイル、今助けるからね！」

大きく開かれたガガの口の中に、ふわりと赤い火の玉が浮かぶ。けれども、それがもっと大きく育って口から放たれ、鏡に投げつけられることはなかった。

火の玉は消滅してしまったのだ。そのままガガの口の中で燃え尽きて。

鏡から目をそらしていたガガの視界に、何かが現れた。

一人の幼い少年だった。

金色の巻き毛に、晴れた日の海を思い出させるような、明るい青い目。

富裕層であることが明らかな、上質の服を着ている。

宙に浮かんだその少年は、ガガをじつと見た。

ガガの口から、悲鳴のような声が漏れる。

「忘れたの？ 忘れてないよね、ぼくのこと」

少年が、悲しそうにガガがに言った。
ガガは、ルビーの目を大きく見開く。

少年を見ていたはずのその真紅の目は、いつのまにか鏡に向けられ、その中に映るものをまともに覗いていた。
鏡を隔てて、その向こうに佇む少年の姿を
。

「捕まりおった、あの竜……」

カジェーラが呟いた。

「だから言つたのじゃ。やっかいなことを」

「どうなるのですか？」

フィリアスが、カジェーラに訊ねる。

「下手をすると、この城と花畑がまるごと吹き飛ぶであろうよ。小さくとも竜じゃからな。それくらいの力は持っておろう」

「えっ……」

フィリアスが絶句した。

（セリアン。セリアン……）

誰かが、かれの名前を呼んでいた。
誰だろう。

聞き覚えのある、懐かしい声。
呼ばれると安心し、切なくもなる声。

ああ、これは父さんだ。

泣き声も聞こえる。

絶叫するような、激しい泣き声。

あれは、母さんだ。

母さんが泣いてる？ 何で泣いているんだろう。

かれは両親を探そうとしたが、何も見えなかった。

かれは闇の中に浮かんでいた。

手を動かそうとしたが、動かなかった。

まるで金属の塊に変化してしまったかのように、体はとても重かった。

ただ、周囲の声だけが、妙に大きくはつきりと聞こえていた。

どうしたんだっけ、ぼくは。

そうだ。落ちたんだ。登っていた木から。

子猫が木から下りられなくなっていたから、助けようとした。

でも、枝が折れたんだ。

ものすごい音がして。

子猫は、無事だったのかな。

とてもかわいい子猫だった。木の上で、不安そうに震えていた。

「この子はもう、助かりません」

両親以外の誰かの声がした。

聞いたことのない声だ。

落ちて着いた、大人の男性の声だった。

「そんな、先生……」

「どうか、どうか……」

父の声と母の声がした。やはり、二人とも泣いているようだった。

「まだ……まだ六つなんですよ、この子は。何でこんな歳で死ななきゃならないのです？」

「残念ですが……。私にはご子息を治してさしあげることが出来ません」

医者らしきその声の人物が言った。

「でも、先生。先生は、猫族の方なのでしょう？」

「猫族なら、魔法が使えますよね？」

すぎるような両親の声。

そうだ。猫族のお医者。

岬の館に住んでいる、あの人だ。

かれは思い出す。

何度か、庭で薬草を摘んでいるのを見かけたことがあった。

その人物は、白い髪に黄色の目をしていた。

ぼさぼさの髪の中に隠れてはいたが、耳は尖っていて、人間よりはもっと上の位置にあった。猫のように。

館で何か魔法の研究をしていて、たまに町の医者が匙を投げるような重病人が出ると、人々から請われて出かけ、治していた。

彼は猫族で、天の彼方に去った同族がいつか迎えに来るのを待っているのだと。

そういう話もかれは聞いていた。

だから、彼のことをよその人に話してはいけないよ。

話したら、彼は悪い人たちに連れて行かれてしまうからね。

悪い人たちは、彼が持つている魔法の力を利用してしようとしているんだ。

そして、彼が連れて行かれるということは、町からは大切な医者さまがいなくなるということでもあるんだよ。

町の人たちは、みんな困ってしまうんだ。彼のことは内緒だよ。

大人たちは、子供たちにそう言い聞かせていた。

すると、両親は彼を呼んだのだ。

そんなに酷い怪我だったのなのかな。

全然痛くないし、平気なのに？

ただ、少し体が重いだけで……。

「猫族でも、治せないものがあるのですよ」

彼が、諭すように言った。

「でも、先生は治されたのでしょうか。同じような症状の娘を」

父が食い下がる。

「その娘も事故に遭い、町のどの医者からも助からないと宣言された。けれども、先生は助けたのです。噂で聞きました。娘は生まれ変わり、以前よりもはるかに美しい別人となって、ある貴族に見初められ、結婚したと」

「確かにその通りですが……。私は後悔していますよ。果たしてそれでよかったのかと」

猫族の医者が、ためらいがちに言う。

「それは、先生がその娘を治すために使ったのが、死体を繋ぎ合わせて作った体だったからなのでしょう？」

母が呟いた。

猫族の医者、びくりと緊張するのをかれは感じた。

「いえ、誰も責めてはいませんよ。その娘は助かり、美しい体を得て幸せになった。結婚式は盛大で、王族も呼ばれたとか。先生が後悔することなどあるものですか。皆、感謝していますとも」

「では、先生。セリアンもその方法で治せますよね？ たとえ死体を繋ぎ合わせた体だとしても、別人になったとしても、我々は構いません。この子が助かってくれるなら。ただ生きてくれてさえいれば、それでいいんです」

「確かに新しい体があれば、ご子息は助かるかもしれません。けれども、現在は無理です。そうしようにも、ご子息を移せるような体がありません。ここにあったものは、その娘のために使ってしまったしね。今は、あのようなものしかありません」

猫族の医者、何かを指し示す。

「あれは……」

両親が息を呑むのがわかった。

奇妙で重苦しい沈黙が続く。

いったい何？

父さんと母さんは、何を見ているのだろうか？

かれも見なかったが、相変わらずかれの周りは果てがない闇の空間が広がり、そのままそこに漂っているしかなかった。

「私が最近作ったものです。種族としてはかなり巨大なのですが、小型化に成功しました。しかし、あれは……」

「あれでも構いません。どうか！」

母が叫んだ。

「気が確かとは思えない。あなたのご息があれになるのですよ。あなたはあれの世話をし、抱きしめなければならぬのです。そして、あれを一生愛さなければならぬのですよ？ そんなことが……」

「出来ますとも。たとえ外見がどうであれ、私の息子なのです。私がお腹を痛めて生んだ我が子なのですよ。愛さないわけがありません。愛せますとも！」

「私からもお願いいたします。どうか……。もちろん、お礼は差し上げます。先生が必要な薬草でも鉱物でも、すべてご用意致しますよう。先生がずっとあの館に住んでいただけるよう、取り計らいしますとも。私もセリアンを失いたくはないのです。たとえどんな姿になっても、私たちの子供です。そのことに間違いはありません。お願いします、先生！」

父も言う。

猫族の医者は、ふうつと悲しげな溜め息をついた。

あれって何？

ぼくをどうするの？

いやだ。

ぼくはぼくのままにいる！

猫族の医者が近づいてくる気配を彼は感じた。

やめて。来ないで。

ぼくにさわらないで！！

闇の中にかろうじて繋ぎとめていたかれの意識が、すつと遠く
な
った。

かれは、鏡の中を覗いていた。

金の巻き毛に海の青の目。頬を紅潮させた、あどけない少年のかれ。

そこは彼の部屋だった。

部屋は焼け焦げ、廃墟のような一室と化していた。

両親がかれのために買ってくれた高価な調度品も、かれが気に入っていた玩具も、すべて無残な姿と成り果て、鏡とそれを覗き込むかれを取り囲んでいた。

鏡の中には、小さな動物が映っていた。

きらめく金色の鱗で全身を覆われ、長い尻尾を宙にくねらせた動物。

背中からは、端が透けている美しい羽根が伸びていた。

その口は耳まで裂け、尖った歯の間からは、風に舞うリボンのように、舌がちろちろと動いている。

その両目は、ルビーのような真紅。

それは大きく見開かれ、鏡の中からかれをじっと見つめ返していた。

これは、何？

この動物は？

いつの間にか、鏡のこちら側にいるはずのかれも、その姿を取っていた。

鏡を隔てて、二頭のそれが向かい合う。

ぼくじゃない。こんなの、ぼくじゃない……。
ぼくの体は、どこに行ったの？

かれの後ろに、誰かが倒れていた。

かれはそのことに気づいて、振り返る。

かれの母親だった。

うずくまるようにして倒れている彼女は、動かない。

彼女の片方の手は、彼女の腹部に回されていた。

まるでそこを守るように。そこだけを何かから守りたいように。

そうだ。そこには芽生えたばかりの新しい命が入っていたのだ。

かれの弟か妹。

けれども、それが生まれることは、もうない。

それを宿した母親が、既に生きてはいないのだから。

なぜ？

彼女は どうして死んでしまったのだろうか？

「母さん？」

かれは、彼女に近づいた。

彼女のもう片方の手は、剣を握りしめていた。

剣など扱ったことなどなかったであろう彼女が思い余って取り出

し、手にしたものだ。かれに相対するために。

>セリアン！ あなたじゃない。ここにいるのは、あなたじゃない
！<

彼女はそう叫びながら、かれに剣を振りかざした。

あんな彼女は、見たことなかった。
とても怖かった。

その後、どうなったんだろう。

「セリアン！」

背後で、誰かの声がした。

もちろん、知っている声だ。かれの父親の声だった。

かれは、振り向く。ルビーのような真紅の目で。

父親がそこにうなだれていた。手には大きな斧を持っていた。

「私たちが愚かだったのか……。やはりおまえは、あのまま逝かしてやったほうがよかったのかもしれない。こんな……。こんな化け物の体になど移さずに、安らかに……」

父親は、悲しげな顔でかれを眺めた。疲れきった表情だった。彼は、ゆっくりと斧を振り上げる。

「私は、すべてを失った。すべてを手に入れようとして……。人間の分際であやしげな魔法などに関わり、命を操ろうとした罰なのかもしれない」

かれは、あとずさった。

父親もまた、彼が見たことのない恐ろしい顔をしていた。

「父さん、来ないで……」

そう言おうとした彼の言葉は、言葉になる前に化け物のささやき声となって、尖った歯の間からこぼれ出た。

「私はただ、おまえを助けたかったんだよ。それだけなんだ。そんな姿になっても、おまえには生きていてほしかったのだ。許してくれ」

（うん。わかっているよ、父さん。あやまらないで。でも、ぼくは悲しかったんだ。受け入れられなかったんだ、ぼくは。だから、だから……）

「私は、あの猫族の医者と約束した。おまえを一生愛すると。母さんも、もちろんそうしたかったのだ。ただ、母さんには、守らなければならぬものが出来てしまったのだよ」

（わかるよ、父さん……。だから母さんは、ぼくに構っていられたかったんだよね。ぼくはこんな姿をしているし……。だから、酷いこと言ったり、ぼくを檻に入れたり、ご飯をくれなかったりしたんだよね……。でもぼくは、そんなことをされたら、凶暴になるしかなかったんだ。この体が暴れるのを抑えられなかったんだ）

「おまえを愛している。だが、もう終わりにしよう。このままでは彼との約束を破るしかなくなるだろう。私は、おまえを連れて行く。おまえを愛している証として。そして、私が犯した罪をあがなうために」

父親は、斧を振り下ろした。かれの頭上に。

真っ黒い斧が不気味な音をたてて、空気を切った。

かれは、素早く横に飛んだ。

どすんという音を立てて、斧がかれの傍に突き刺さる。

それは床を醜く切り裂き、それ自身の重さで、その傷の中にめりこんだ。

（やめて、父さん！ やめて！ でないと、ぼくは……）

斧が床から引き抜かれ、再びそれは振り上げられる。

屈強なかれの父親は、今度は紛う方なく、かれにその武器の刃を振り下ろすだろう。

（でないと、ぼくは……別のものに乗っ取られてしまうんだ。ぼくの心は、どこかに行ってしまうんだ……）

迫ってくる斧の銀のきらめきを見たあと、かれの意識は遠くなくなった。

気がついたとき、そこは火の海だった。

かれの父も、そして母も、倒れたまま赤い炎に包まれていた。肉の焦げる嫌な匂いが鼻をついた。

かれは、鏡の前で立ち尽くしていた。

鏡の中にも、燃え上がる炎が映っている。

その炎の赤い天蓋の中で震えているのは、一頭の小さな金の竜だった。

（全部燃えてしまえばいい。父さんも、母さんも、お腹の中の弟か妹も。そして、このぼくも）

彼は、鏡の中で炎を反射して輝いている、美しい金の鱗の竜を眺めた。

（燃えてしまえるかな、この体は。悔しいほど頑丈そうだ。でも、燃やしてしまおう。ぼくはもう、いなくなるんだ。楽になるんだ……）

…)

「セリアン……」

誰かがかれを呼んだ。

誰だろう。

もう、ぼくのことを呼んでくれる人なんていないはずなのに。

「セリアン」

かれが見上げると、そこにはあの猫族の医者が立っていた。

医者は、宝石のような黄色の透明な目で、かれを見下ろしていた。その目には、炎の赤が薄くゆらめきながら映っていた。

（こんな火の中なのに？　そうか、この人は猫族だもの。魔法が使えるんだ）

かれがぼんやりと考えていると、医者はかれを抱き上げた。

「一緒においで」

（一緒に？　行っても仕方ないよ。父さんも母さんも死んじゃったんだ。ぼくの弟か妹もね。ぼくが殺したんだよ）

「きみはまだ、その体に同化できていないのだよ。きみがやったんじゃない。竜の本能がきみの意思を無視して、勝手にやっちゃったことなんだ」

医者が言った。

かれは喋ってはいないのに、医者にはかれの考えがわかるようだった。

「でも、ぼくがやったことに変わりはないよ。もう、放っておいて、ぼくもこの火の中で死ぬんだ。父さんたちと一緒に」

「残念ながら、きみは死ねないよ。その体になってしまったんだからね。私とおいで。きみのご両親は、きみに生きてほしがっていた。だからこそ、きみにこの体を与えたのだ。きみは、生きなければならぬのだよ。きみの今の体が年老いて、生きることを拒否するその日まで。きみが奪ったこの三人の分まで、一生懸命にね」

（でも、生きていても、何も楽しいことなんかないよ……）

「楽しくなくても、きみは生きなきゃいけない。楽しいことはこの先、きみが自分で見つけなければならぬんだよ。それに、これは私の罪だ。きみたちの幸せを願ってやったことが、きみたちを不幸にってしまった。私に償いをさせてほしい」

（あなたのせいじゃないよ。ぼくが悪いんだ。全部、ぼくが……）

医者は、首を振った。

「一緒に行こう。屋敷が燃え落ちる。猫族とはいえ、不死身じゃないからね」

かれは、医者首にしがみついた。
それは、すべてを焼き尽くす炎の中で、唯一かれがしがみつけるものだった。

猫族の医者は、かれを岬の館に連れて行った。

かれはそこで、医者と一緒に穏やかな生活を始めた。

医者はかれに、かれの家庭教師からは教わらなかったいろいろなことを教えた。

地質学や数学、化学、薬学。物理学やさまざまな地域の言語。

太陽や星、宇宙のことも、医者は話した。

話が尽きると、医者はたくさんの本を買ってきて、かれに与えた。それはとても興味深く新しい知識だったので、驚異的な速さと正確さでかれの頭の中に詰め込まれた。

ある日、医者はかれに言った。

おそらく、かれと一緒に暮らし始めて、三十年以上はたつ頃だった。

「私は、帰らなければならないのだ」

「帰るって？ どこにですか？」

新しい体にも慣れ、人間の言葉も以前より流暢に喋れるようになったかれは、医者に訊ねた。

医者は、空を指差す。

「私たちが来たところだよ。明日にでも、仲間が私を迎えにくる。やっと連絡が取れたのだ。長かった。私が帰ることで、この世界にはもう、純粋な猫族は存在しなくなるだろう」

医者は、不思議な黄水晶の目を静かにかれに注いだ。
見る度に不思議な目だった。

遠い遠い彼方から来た目。天のはるか彼方の宇宙からやってきた、

異世界の目。

「おめでとうございます。よかったですね。純潔の猫族がいなくなっても、猫族の血はこの世界に広がっていますよ。その血は魔法と共に、子々孫々受け継がれていくでしょう」

では自分はどうなるのだろうか。かれが思いかけたとき、医者と言った。

「セリアン、きみも一緒に来ないか？」

「ぼくも……？」

「この世界にいても、つらいだけだろう。私と来れば、今までと同じ暮らしは保障するよ。きみにとっては、何もかも新しい世界ということにはなるだろうけれどね。今までどおり、静かに暮らしていけると思う。どうだい？」

しばらく考えた後、かれは答えた。

少し迷ったが、後悔はなかった。

「ぼくは、この世界に残ります。ぼくはこの世界で生まれて育ちました。この世界が好きです。ひとりぼっちになったとしても、ずっとここにいたいんです。それにあなたは、ぼくは自分で楽しいことを見つけないならなおっしゃった。だから、見つけたいと思います。そしてぼくは、この世界にあなた方が残した血の行方も、見守っていただけると思うんです」

猫族の医者は、しばらくかれを見つめた後、にっこりと笑った。そして、いとおしげにかれの頭に手を置いた。

「そうか。では、見つけたまえ。素晴らしい楽しみが見つかるといね。そして、我々の子孫たちの行く末も見守っておくれ」

かれは、その手のひらのあたたかさを大切に記憶にしまいこんだ。

翌日、海の彼方から、かれが見たこともない白い雲のような船が、滑るように近づいてきた。

かれが気がついたとき、かれの隣にいたはずの医者^{イサナ}の姿は、もうなかった。

船は、岬の端に立っているかれの頭上を一回だけぐるりと回り、それから空の彼方に星となって消えてしまった。

猫族の医者との別れ。

それは、かれの長い旅の始まりでもあった。

やがてかれがアーヴァーン^{アールヴァン}のナディル・リア・ジフル姫の元にたどり着き、『ガガ』という名の小さな金の飼^カい竜として暮らすようになるまで。

囚われた人々によって鏡の中に映し出される光景は、ナディルも垣間見ることが出来た。しっかりと抱きしめられた、エリユースのやさしい腕の中から。

幸福感に浸り、目を閉じていても、それに意識を集中すると映像が頭の中に流れてくる。

あまたの像の中で、ガガのそれは輝くように際立っていた。

（ガガ……。あなたは人間だったんだね……）

（うん。ずっとずっと昔のことだけど……）

ガガが、遠くからナディルに答える。

言葉は聞こえなかったが、彼の思念はナディルに届いた。

（ごめんなさい。あなたをただの飼い竜としてしか見てこなかった……）

（いいんだよ。ぼくも、ただの小さな飼い竜として、あなたのそばにいたんだから）

ガガは、石像の動かぬ竜のように、鏡の前に座っていた。

金の鱗からは、完全に生気が抜け去っていた。それは今、年月を重ねて曇ってしまったガラスの束のように、体を虚しく覆うだけだ。ルビーの目は大きく見開かれ、鏡の中に映っているもう一頭の竜を魅入られたようにじっと眺めていた。

（ナディル。ぼくは鏡につかまってしまった。ぼくのそばには父さ

んと母さんがいるんだ。二人とも、ぼくに笑ってくれる。ここでは二人とも生きてるんだ。昔、ぼくが幸せだった頃のように」

（私もつかまつてる。私のそばにはエリユースがいるの）

（ナデイル！ そのエリユースは本物じゃないよ！）

（あなたのご両親もそうだ。鏡が記憶を探って映している、単なる幻……。あなたも私もそのことがわかっているのに、ここから出られないんだよ……）

「ナデイル。どうかしましたか？」

エリユースが、甘い声で訊ねた。

「あなたにお話をしましょう、楽しい異国の話を。あなたが望まれるだけ、いくらでも……」

エリユースがナデイルを抱き寄せる。

「うん、エリユース。話してくれる？　ずっと聞いていたいよ……」

（ナデイル、ナデイル！　聞いちゃだめだ！！　それは鏡が喋ってるんだ！）

「セリアン、おいで。母さんがご馳走をつくってくれたよ。おまえの好きな料理だよ」

昔、死んだはずの父親が、ガガに言った。かつて人間だった頃の名前を呼んで。

ガガは、ぼんやりした意識の中で、自分が竜ではなく、人間の少年の姿をしていることに気づく。

金色の巻き毛。白い肌。目は、晴れた日の海の青色のはずだった。ここでは、おまえは人間なんだ。人間でいられるんだよ……。鏡が耳元で囁いたような気がした。

「セリアン。あなたが好きな野苺も摘んできたわ。食べるわよね？」

母の笑顔。

どれだけこの笑顔が欲しかったことだろう。どれだけ焦がれたことだろう。

彼女は微笑む。籠にいっぱい赤い大きな野苺をかざしながら。

（うん。食べるよ。大好きなもの。ずいぶん長いこと食べてないよ。それはうちの地方でしか採れない種類なものね……）

「じゃあ、おいで。もっとこちらへ」

父親もまた、にこりと笑う。

ガガは、立ち止まった。

（違う。違うよ。そっちへ行っちゃだめなんだ。もっと出られなくなってしまうんだ。出なくちゃ。ここから、出なくちゃ……）

鏡の中に映る竜の体が、体内に炎を宿したように赤くなる。

それは次第に、ガラスの鱗で覆われた輪郭を膨れ上がらせた。

「何をしてるの、セリアン。そんなことをしたら、父さんも母さんも死んでしまうのよ」

母親が眉を寄せる。

ガガの体は彼の意識の中で、また竜に戻っていた。

（二人とも、もう死んでるんだよ。だって、だって、ぼくが殺したんだから！）

鏡の中の竜は、さらに大きさを増した。

「セリアン。父さんも母さんも、ぴんぴんしてるよ。ほら、ごらん」

父親が笑いながらおどけて、くるりと回って見せる。

（父さんも母さんも、お墓の中だよ。ぼくはお葬式には出られなかったけど、代わりに先生が参列してくれたんだ。先生は、二人の体をきれいにしてくれたんだよ。ぼくが焼いて汚してしまったから……）

「セリアン。何を恐ろしいこと言ってるの。早くこちらにいらつしやい」

母親が手招きをした。

ガガは、立ち尽くす。

鏡の中の竜は、どんどん膨れ上がった。

小さな竜の可愛らしさは消え、凶暴さを窺わせる鋭い眼差しを持った、大きなきらめく金色の竜が現れる。

「やつかいじやの」

カジエーラが呟いて、ふうつと溜め息をつく。

「あのまま鏡の中の竜が巨大化して鏡を壊したら、この城も、とばつちりで消滅するであろうな。昔の姿と大きさを取り戻した竜が、無意識に魔力を使うのじゃからな」

「それは、かなりまずいですよ！ 古代の人々は、どれだけ竜の凶暴さに翻弄され、悩まされたか。伝説が伝説でなくなってしまいます！」

フィリアスが、おろおろして言った。

「当然じゃ。すると、やはり私が出て行くしかないわけじゃな。あまりあの鏡に力を使いたくはないのじゃが、仕方あるまい。抱^{いだ}いていた目標は、あきらめるしかないかの。伝説だった竜を余計なことをしてよみがえらせたのは、我が先祖の仕業じゃしの」

「あなたなら、あの鏡を……？」

フィリアスが、すぐるようにカジエーラを見下ろす。

「わからぬ。前は脱出するのに五十年かかったからのう。また囚われるかもしれぬ。あの鏡に近づける、強い心の持ち主がいればいいのじゃが。あるいは、エリユースのように鏡に慣れている者。あるいは、子供でも連れてくるかの。純粹で無垢な子供ならば、鏡の影響は受けぬであろうからな。心に傷を受けることなく幸せに育ち、何の悩みも苦労もまだ経験していない子供をな。ま、私もあの頃よりは年老いたからのう。時間が心を洗ってくれたやもしれぬ。案外簡単に鏡を……」

そう言いかけたカジエーラは、黄色いトパーズの目を大きく見開

いた。

動かぬ人々の間を縫って、金色と青の影が素早く走る。

「あれは……」

カジェーラは、その影を目で追った。

それは鏡に向かって、迷うことなく突進した。

ナデイルは、どこか遠いところから、軽い足音が近づくのを聞いた。

タタタタという、軽快な足音だった。

誰だろう？

誰かが走っている。

行儀の悪い子供だろうか。

ナデイルはふと思ったが、そのままエリユースの背中を抱きしめ、再び安らかに気だるい眠りの中に身を沈ませる。

けれどもその眠りは、大音響と共に破られた。

何か美しい、巨大な楽器が壊されたかのような音だった。

ナデイルを抱きしめていたエリユースのあたたかい手が、そしてナデイルに寄り添っていた彼の広い胸が、突然ナデイルのもとから溶け去ってしまう。まるで、砂の城が波にさらわれて崩れるように。

宙にかかげた手に冷たい空気を感じて、ナデイルは目を開けた。ナデイルの目の前の銀の壁が分解し、何千ものかけらとなって床へと流れ落ちて行く。巨大な波が砕ける音と共に。

鏡の破片は、身動きせぬ人々の足元を覆い尽くし、星の海のように散らばった。

その一つ一つに、何億もの蠟燭の光が映って、まばゆく輝く。

人々の目に生気が戻り、その体がびくりと動いた。彼らは呆けたように、お互いの顔を見つめ合った。

「だいじょうぶですか、ナデイルっ！」

金色と青の影。

金の髪をなびかせ、青いマントを羽織ったフィリアスが、ナデイルに駆け寄る。

ナデイルを気遣うやさしい目。

けれどもそれは、先程までナデイルのそばにいた人物の目とは対照的な、紫色の目だった。

「フィリアス……」

ナデイルは、ぼんやりと彼を眺めた。
頭が少し痛む。気分もよくなかった。

ガガも夢から覚めたように、うつろな目をあたりに注いでいた。鏡の中に映っていた巨大な竜は、鏡の分解と共に消え去っていた。小さな金の竜だけが、残された鏡の台座の前に、ちんまりと座っている。砕けた鏡のかげらに埋もれるようにして。

鱗にはいつもの美しさが戻り、石像ではなく、呼吸をする生きた竜がそこにいた。

「もう安心ですよ、翡翠のナデイル。いや、どこかの王家の姫君のナデイル、かな」

王女の衣装を付けたナデイルを間近にして、少し頬を染めたフィリアスが笑った。

「鏡は……？」

ナデイルは、今は木製の壁と成り果てた鏡の名残りを眺める。
ガガは、きらめく破片を蹴散らして羽根を広げ、その前から飛び
立った。

「私が割ってしまいました」と、フィリアス。

「あなたが？」

「ええ。これでね」

フィリアスは、剣の柄をぽんぽんとたたく。

「魔法の鏡だなんて信じられませんね。あつけないものです」

「あなたは……鏡の中に何も見なかったのですか？」

ナデイルは訊ねた。

なぜこの人は、鏡の呪縛に囚われずに壊すことが出来たのか？
いとも簡単にあの魔法の鏡を？

「別に何も。ただの鏡でしたよ？ そりゃあ、少し大きめでしたが」

フィリアスが、不思議そうに答えた。

「それより、ナデイル。本当にあなたですか？ 驚きました。こんなに美しかったなんて」

フィリアスがさらに頬を染め、再びしげしげと遠慮会釈もなくナ

デイルを見下ろした。

「つまりフィリアスは……。悩みとか心の傷とか、全然ないヤツだったってわけか。鏡が取り入る隙もないくらい」

カジェーラの隣に舞い降りたガガが、あきれたように呟く。

「そのようじゃな。悩みの種となるべき冠も臣下も、戻ったも同然じゃし」

カジェーラが言った。

「あるいは、悩みや苦しみになるまで物事を深く考えぬ、楽天的な性格か。もしくは子供のように、それらをまだ体験したことのない無垢さゆえなのか」

「ぼくは、その両方だと思うね」

「私もそう思う。初めての意見の一致じゃな。おそらくあの公子、失恋も、身近な人間が亡くなった経験も、まだないのであるうな。たとえこの先そういう経験を積んでも、能天気生きていくのであるう。それもまた、生まれながらあの公子に恵まれた運と才能じゃ。ともあれ、鏡を割る必要はなかったと思うのじゃが。布を掛ければ充分じゃったのに。あれは一応、私の思い出の品ぞ。それを粉々にしておって。掃除も大変じゃ。私は家事全般に関しては、魔法を使っではおらぬのじゃぞ」

カジェーラは、不服そうに呟いた。それから思い出したようにガガを見下ろす。

「そういえば、そなたも気の毒な境遇だったのじゃのう、セリアン殿。しかも、私よりもはるかに年上とな。純潔の猫族と交流した者は、今ではそなたくらいじゃろうな」

「今度その名前でぼくを呼んだら、遠慮なく噛み付かせてもらおうかな！」

ガガは、ぎろつとカジエーラを睨んだ。

「フィリアスさま！」

鏡の魔法から解放された人々の間から、オーデルクの衣装をまとった若者の一団が進み出る。

彼らはフィリアスの前で膝をつき、頭を垂れた。

「おお、皆無事ですな。よかった。これでオーデルクに帰れますよ」

フィリアスは臣下たちに、にっこりと微笑む。

「フィリアスさま。アーヴァーンのナディル王女さまとご結婚されたのですか？」

臣下のひとりが、フィリアスに訊ねた。

「え？」

フィリアスは怪訝そうな顔をして臣下を見下ろし、それからナディルのほうを向く。

「ナデイル王女？」

「アーヴァーンのナデイル王女であらせられましょう。肖像画を拝見したことがございます。そしていつぞや、フィリアスさまの代理で参加させていただいた舞踏会で、お見かけも致しました。王女は、銀の髪と黄色の目をした若者と、見事に踊っておられました。わがオーデルクの翡翠と同じ瞳。その漆黒の御髪。仮面を付けておられたとはいえ、忘れも致しません。そして、王女の御頭に輝くのは、我々が追い求めていたオーデルク大公妃の翡翠の冠。魔女から取り戻されたんですね？」

「残念ながら、私はオーデルクの大公妃ではありません。この冠は、ただお借りしているだけです」

ナデイルは言った。

フィリアスは、アメジスト色の目を滑稽なくらいにまで見開く。彼はしばし、呆然とナデイルを見つめた。

「ナデイル？ ナデイル・リア・ジフル……王女？ あなたが？ まさか……。王女は、アーヴァーンの離宮で病に臥せっておられるはず……」

「行方不明だということを公には出来ませんでしょうか？　フィリアス公子さま、あなたにはお礼を申し上げねばなりませんね。私とガガを鏡の呪縛から解き放ってくださいました」

ナデイルはフィリアスに向かって腰をかがめ、オーデルク風のお辞儀をした。

フィリアスが、まだ呆然としたまま、それを眺める。

「翡翠のナデイル……。何ということでしょう。あなたがナデイル王女だなんて。確かに同じお名前でしたが、思いもしませんでした」

「ま、ナデイルという名前は、よくある名前かもしれないもんな」

ガガが、ぼそつと呟く。

「ナデイルが生まれたとき、アーヴァーンの女の子の名前は、ナデイルくだらけになったもんだ」

「いつぞや、もう十年以上も前ですが、お隣のアーヴァーンを何かの折に訪問したとき、あなたをお見かけしたことがありましたよ。その頃、あなたはまだ幼い少女だったが……。そんなふうに、私に挨拶してくださった。何とかかわいらしい姫君なのかと、美しい目の色なのかと。なぜ思い出さなかったのだろう」

「申し訳ありません。私もその時のことは覚えておりませんわ」

ナデイルは微笑んだ。

「覚えておられなくて当然ですよ。あなたも私もまだ子供でした。特にあなたは小さかった」

フィリアスは姿勢を正し、ナデイルの手を取って唇を当てた。

「あーあ。ばらしちゃった。これであの公子さまとは、はい、さようならというわけにはいなくなるよ」

ガガは、うんざりしたように言った。

「そうじゃな。借りを作ってしまったしのう。正体を知った上は、公子も対応を変えざるをえんじやろ」

カジェーラが頷いて、ガガに同意する。

「ナデイル王女。確かにその冠はあなたによく似合う。あなたほど似合う姫君はいないかもしれませんね」

ますます頬を赤くしたフィリアスが言った。

「この冠はあなたにお返し致します、フィリアス公子。私はこれをカジェーラからいただきましたから、今は私が所有していることになるのです」

「ありがとう、ナデイル。あなたのおかげで、私はオーデルクの世継ぎとして認められます。私のほうこそ、お礼を申し上げなければならぬ立場」

フィリアスは、ナデイルに丁寧に頭を下げた。

「ナデイル。ぜひ、オーデルクに一緒に来てください。約束の翡翠も差し上げねばなりません。オーデルクにいらっしゃって、お好きなだけ翡翠を持って行ってください。ぜひとも」

「それは……でも」

ナデイルはためらった。そして、目を伏せる。

エリユースは、いない。

その現実が、再びナデイルのもとに戻って来る。

さっきまで自分を抱きしめてくれていた彼。

あれは、鏡が自分の心を覗き込んで作り出してみせた、まやかし。それ以外の何物でもない。現実には存在しないのだ。

決してエリユースではない。彼の意思も心も、そこには全くない。わかつてはいたが、ナデイルは悲しかった。

気分は次第によくなってはきた。けれども、それとは反対に、虚しさが胸いっぱい膨れ上がってくる。

「エリユース殿は、もうこの城にはいないのですよ。彼の行方は、オーデルクに来てから調べるといい。私も情報を集めるお手伝いが出来ると思いますし」

フィリアスが、明るく言った。

この城をあとにすること。

それは、エリユースから遠ざかることも意味する。

ここは、彼と血が繋がるカジェーラの城であり、彼もまた、時折ここに姿を現すのだから。

もちろん、いずれはここを立ち去るにしても、ナデイルはもう少

しカジエーラからエリユースの話を聞き、しばらくは彼の気配を感じていたかった。

このまま彼を追い続けるのか。それともあきらめて別の行動を取るのか。

それすらも、まだ決めかねている。

心は相変わらず彼を求めているのだ。

たとえば彼が鏡の中に何も見なかったとわかってても。

「そうじゃ。やっと思い出した」

カジエーラが言った。

「棺の中に横たわる、長い黒髪の姫君。やはり、あれはナデイル、そなたじゃ」

「え!？」

ガガが飛び上がって、目を剥いた。

それから、カジエーラを思いつきり睨む。

「婆さん、また何を寝とぼけたことを言い出すんだ!」

「別に寝とぼけておりゃあせん」

カジエーラは、床に散らばる鏡のかげらの中から、大きな目のものを選んで手に取った。

それは天井のシャンデリアを集めたように光を放つ。

「全く、年は取りたくないのう。昔のことはよく覚えておっても、最近のことはさっぱりじゃ。自覚しておっても、どうにもならん」

カジエーラはナデイルの前に進み、鏡の破片を差し出した。

「鏡の魔力はなくなったが、鏡の記憶は残っておる。かけらの中にそれを見ることも出来るのじゃ」

「鏡の記憶？」

カジエーラは頷いた。それから、黄水晶の透明な目をナデイルに注ぐ。

「見る勇氣があるかの？ エリユースが鏡の中に何を見たのか」

ナデイルは、カジエーラの手の中で輝く銀色の小さな板をじっと見つめた。

再び鏡に囚われていたときのように、体が石のごとく硬くなったかのようにだった。

「……見ます。見せてください」

しばらく黙りこんだナデイルは、小さな声で、やっとそう呟いた。

「では、見るがいい」

ナデイルは鏡のかけらをカジエーラから受け取り、その中を覗き込む。

鏡の中にはナデイルの顔がそのまま映っていたが、やがてそれはばやけ、別のものが形を結んだ。

少女が、白い花に囲まれて眠っていた。

花畑でうたた寝をしているかのように、穏やかに。

長い黒髪が花の上を流れるように這い、華奢な体は花の中に途中から埋もれていた。

肌の色は、花よりもさらに白かった。

少女と花は、長方形の箱に納められていた。

絡まった花々の彫刻が施された、薄い緑色の木製の箱に。

少女は動かない。

目は固く閉じられ、血の気のない唇も、軽く結ばれたままだった。長い睫毛で飾られた瞼の下にあるのは、おそらく翡翠色の透き通った目。

けれども、その目が開かれることは、もうない。その少女が何かを見つめ、それに微笑みかけることは二度とないのだ。

若者がひとり、少女が納められた箱のそばに佇んでいた。

銀の髪に黄色の宝石のような目。

旅の衣装のその若者は、少女を見下ろしていた。

悲しげに。けれども、感情を押し殺した冷静な様子で。

若者は、ずっと少女を見つめていた。

ただ静かに見つめるだけだった。

何も起こらなかったし、起こりそうもなかった。

少女は生きるのをやめ、若者は生きていて、既に死出の旅路に立った棺の中の少女を見ている。

ただそれだけだった。

「もう、いい。もう十分……」

ナデイルは鏡を握りしめ、その映像を自分の視界から遮った。

割れた鏡は、それをあまりにも強く握ったナデイルの手を切り裂き、指の間に血を滲ませた。

頬には、知らぬ間に涙が伝っていた。

涙は、ナデイルがまとうている豪華なドレスにぽとぽとこぼれ、染み込んでいく。

「ナデイル。何が見えたの？」

ガガが訊ねる。

ナデイルは、首を振った。

そして、カジエーラに言う。

「エリユースが見たのは、あなたがおっしゃった通りのものでした。棺に横たわる長い黒髪の姫君。それはやはり私でした。つまり、彼にとって、私は死んでいるのです。棺の中に納めて、死んだことにしたいものなのです。もう十分です」

ナデイルの手から鏡のかけらが離れ、鋭い金属の音をたてて床に落ちた。

それは他の多くの残骸と同じように、ただの鏡のかけらに戻り、天井の光をまばゆく映す。

「私はもう、エリユースを追いかけるのはやめます……」

「ナデイル……？」

ガガは、ナデイルの肩に舞い降りた。

薄紅色の細い舌で、頬にこぼれる涙を舐めたが、それでも涙は止まらなかった。

「泣かないで、ナデイル。『翡翠のナデイル』は泣かないんだよ」

「私は今、翡翠のナデイルじゃない。ただのナデイルだ……」

ナデイルは、こみ上げてくる嗚咽を抑えながら、かすれた声で呟いた。

「ナデイル王女。何か悲しいものを見てしまったのですね。オーデルクと一緒に行きましょう。きっとあなたの心を紛らわすものがたくさんありますとも」

フィリアスが声をかける。

ナデイルは、頷いた。

「連れて行ってください。私はもう、この城にはいられません……」

「ナデイル、そんな簡単にオーデルクに行くことを決めちゃっていいの？」

「どこでもいい。とにかく、ここから出なくちゃ……」

ナデイルは、心配そうに自分を見上げるガガを抱きしめる。

あたたかい涙は、ガガの背中を覆う金色の鱗を濡らした。

「この二年間って、いったい何だったんだろう。私は何をしてきたのだろう。そう思ったら、とても悔しい。自分が腹立たしい。エリユースは、決して私を振り返ったりしない。もしかしたらって、それを望みにここまでできたのに。彼の末練と私への思いを信じたから、ここに来たのに……。それは幻だった。私が欲しいエリユースは、あの鏡の中にしかない。鏡は壊れたから、もう存在もしないんだ」

「ナデル……」

「ごめんね、ガガ。ううん、セリアン。あなたは私なんかより、ずっとずっとつらい目にあつたのに。でも、今はとても泣きたいの。ただ泣きたい……。泣いているんな感情を涙と一緒に流してしまいたい……」

「ガガでいいよ。セリアンなんて呼ばれたら、固まっちゃう。この二年間は、ナデルにとつて大切な二年間だった。決して無駄な時間なんかじゃない。オーデルクに着いたら気分を切り替えて、エリユースのことなんかきっぱり忘れてしまえばいいさ」

「思い出さぬほうがよかったかのう。しかし、事実じゃからな……。エリユースが鏡の中に見たものは、そなたがたつた今見たものと同じなのじゃ」

カジェーラが、申し訳なさそうに呟いた。

ナデルとガガを眺めていたフィリアスは、おもむろに、ナデルが落とした鏡のかけらを拾い上げる。

特に考えがあつたわけではなく、ただ何となく興味を引かれたので、鏡を手を取った。ちょうど足の先に落ちていたこともある。

誰かに理由を訊かれたら、もちろんフィリアスは、そう答えたに違いなかった。

彼が鏡をかざすと、その表面が波が立つように揺らめいてばやけ、何かが現れた。

しばらくその映像に見入っていたフィリアスは、カジェーラのほうに向き直る。

彼は、緊張した面持ちでカジエーラに訊ねた。

「カジエーラ殿。今、ナデイル王女が戴いている翡翠の冠。オーデルクの大公家の宝であるその冠は、本来はあなたが被るはずだったものなのではありませんか？」

フィリアス公子の言葉を聞いたオーデルクの人々の間に、驚愕と疑問の声がどよめいて上がる。

フィリアスはそれを無視し、カジエーラの反応を待った。

「そんなこともあったかのう。はるか昔のことじゃ」

カジェーラは、ふつと薄い微笑みを浮かべたが、フィリアス公子は真面目な顔をしたまま続けた。

「いえ。あなたはよく覚えておいでのはず。でなければ、花嫁衣裳をあんなに大切そうに飾っておかれるはずもありますまい？」

カジェーラの表情がたちまち変化した。

微笑みは完全に消え去り、眉間には不機嫌そうな皺が寄る。

「見たのか。やっかいなものを」

「あれはオーデルクの大公妃になる女性の花嫁衣裳です。あの衣裳は翡翠の冠が載せられて、初めて完璧なものとなる」

フィリアスが言った。

「冠まで持ってくるわけにはいかなかったからのう。じゃが、妙なところであの冠に出会えるとは思ってもみなかった。ひそやかに盗品として売りに出されておったぞ」

「それをあなたが買い戻して下さったのですね」

「黒真珠の首飾りとエメラルドの指輪五つと交換したのじゃ。安い買い物であったな。そういう物品であることが、運のよいことに盗賊どもには伝わっていなかったと見える。私が買わねばどうなっ

いたと思う？　今でも冠は行方不明じゃ。そなたの正妃となる姫君は、冠なしでそなたに嫁ぐはめになる。実に情けないことじゃのう」

「カジェーラ殿。あなたには感謝してもしきれません。あの美しい衣装は、あなたがお召しになるはずだった花嫁衣裳。あれに添えられるはずだった翡翠の冠は、あなたにとってはただ悲しい記憶が残る品。それをわざわざ大切な宝石と交換して、闇に流れていくのを阻止してくださった」

「さすがに無視は出来なかったのだな。買った方がいいが、見て楽しむこともできなかったがの」

フィリアス公子は、丁寧にカジェーラに向かってお辞儀をした。

「フィリアス公子。いったいどういうこと？　この魔女の婆さんが、オーデルクの大公妃だった？」

ガガがフィリアスに訊ねる。

「それは聞き捨てならぬことです。我々にもお話しいただきたい」

フィリアスの臣下が、カジェーラを睨みながら、不満そうに言った。

フィリアスは、ガガに向かって鏡のかけらをかざした。

ガガは翼を羽ばたかせてそれをひったくるように受け取り、再びナデイルの肩に舞い戻る。

ナデイルは、それを覗き込んだ。

鏡の破片は、ナデイルが先ほどその中に見たものとは全く違うものを映していた。

「あなたは、おそらく四代前のオーデルク大公の元婚約者。何事もなければ、あなたはあの衣装を身にまとい、翡翠の冠を戴いて、オーデルクの大公妃になるはずだった。そして大公家には猫族の血が入り、アーヴァーンの王家とも、親戚としての絆が固められるはずでした。けれども、そうはならなかった。あなたの一族とアーヴァーン王家の何らかの事情で」

フィリアスが言った。

「ファルグレット侯爵家は、一族ごと姿を消してしまいました。もちろん、大公家への輿入れが決まっていた侯爵の妹君も一緒に」

鏡から顔を上げて、ナデイルは呟く。

あの夢。

ナデイルが離宮にいた時に見た、夢の中のマントの少女。

ファルグレット侯爵に寄り添っていた彼女は、大公家へ嫁ぐはずだった。

だから、ユーフェミアは言ったのだ。

>なぜ？ 私たち、婚約するはずだよね？ 彼女だって、お隣の国の大公に……<

お隣の国の大公に嫁ぐはずなのに……。

ユーフェミアは唇に上がらせることなく途中で飲み込んでしまったが、あのあとに続くのはその言葉。

彼女 ユーフェミアの幼馴染であり、侯爵家の姫君であるカジエーラは、大公に嫁ぐことはなかった。

そしてまたユーフェミアも、思い合っていた侯爵と結婚すること

はなかった。

アーヴァーンのルビーがファルグレット侯爵に反応して光ってしまい、侯爵一族が姿を隠してしまったからだ。

「その美しいお姫さまは、ある日、銀の猫と一緒にどこかに行ってしまいました。それは結婚式の少し前のことでした。どこを探しても、お姫さまも猫も見つかりませんでした」

フィリアスが、ゆっくりと暗誦するように口にする。

「オーデルクに伝わるお話です。『お姫さま』とは、カジェーラ、あなたのことだったのですね。そして、『銀の猫』というのは、月の光で猫に変身したというあなたの兄上の侯爵、もしくは、猫族の血を引くあなたの一族のことでしょう」

「そうじゃな。オーデルクの人々は、勝手な姫君のことを伝説としてでも覚えておいてくれたということじゃ。嬉しいかぎりじゃな」

カジェーラが、小さな溜め息をつく。

それから彼女は、フィリアス公子をその黄色い透明な目で、真っ直ぐ見つめた。

「そなたが花畑を横切ってくるのを初めて見たとき、オーデルクの大公の血に連なる者であることが一目でわかった。やはりあの方に似ておるからのう。ナディル王女の素性までは、その時はわからなかったがの」

「フィリアスにあの鳥の化け物が見えなかったのは、そういう理由？ 大公に似ていたから、エコヒイキして、見えなくしたとか……」

ガガが訊ねると、カジエーラは首を振った。

「公子に花畑の番人たちが見えなかったのは、鏡が公子に反応しなかったのと同じ理由じゃ。けがれなき心を持つ者には、番人たちは手を出さぬ」

「じゃあ、ナデイルもぼくも、けがれてるってわけかよ」

「言い換えれば、世間知らずの無害なお子様には、あの番人たちは用がないということじゃな」

「それは随分なおっしやりようですね」

フィリアスが、大げさに肩をすくめて見せる。

「要するに、やっぱりフィリアス公子はガキってことさ」

ガガが、さらに付け加えた。

「ともかく私は、そなたがここまで来てくれたことが嬉しくもあり、冠を返せることに安堵した。だから、そなたたちを歓迎したのじゃ。張り切って料理まで作ってしもうた。オーデルクの料理は、あの方に作って差し上げるために習得したものじゃ。花嫁修業じゃな。召し上がっていただいたことは、結局なかったかの」

「代わりに私がいただきましたよ。実に美味でした。堪能いたしました」

フィリアスが言うと、カジエーラの頬が薄く染まる。

「あの方には召し上がっていただけなかったが、あの方によく似た子孫には提供できたということじゃな」

「それは少し間違っていますよ。私は、あなたの元婚約者の大公と血は繋がっていますが、直系の子孫ではないのです」

フィリアスの言葉にカジエーラが眉を寄せた。

「なんじゃと？ そなたはあの方の子孫ではないのか？」

「あなたの元婚約者は、私の曾祖父の兄君です。あなたがいなくなってしまった後、体を壊し、大公を弟である私の曾祖父に譲って、都から遠い城に退きました。妃を娶ることもなく、生涯ひとり静かに暮らしたといえます。消えてしまった姫君の面影を抱きしめながら。彼が亡くなった後その城には、姫君の肖像画や姫君に贈れなかった装飾品などが、たくさん残されていたとか」

「お姫さまを失った花婿は嘆き悲しみ、床に臥してしまいました……」

ガガがフィリアスの言葉を思い出して、小さく呟いた。

カジエーラは、目を伏せて黙り込む。

何かに耐えるように彼女の唇はきつく結ばれ、その手は固く握りしめられていた。

やがてカジエーラは、自嘲気味に言った。

「私は、あの方は他の姫君と結婚されて、子孫も成されたのだと……。ならば、あの方をここへさらってくればよかったかのう。せめて亡くなる前のわずかな期間でも、私がそばにいて差し上げればよ

かったか……」

「でも、あなたはご存じなかったのですよね。大公がそうしたことすら、おわかりにならなかった。なぜなら、ずっと鏡の魔力に囚われていたからです。あなたの悲しみは、鏡の餌食になるくらいに深かったのですから」

フィリアスが言った。

ナデイルは、鏡のかけらを再び眺める。

鏡の中には一組の男女がいたが、それは、エリユースと棺によこたわるナデイルの姿ではなかった。

輝くような金の巻き毛とアメジスト色の目を持つ、フィリアスによく似た若者。

そしてその若者が抱きしめているのは、赤い髪の少女　カジェーラ。

二人は豪華な衣装を身につけていた。

若者は、金の糸で刺繍が施された、薄緑の礼服。

少女は真珠が散りばめられた白いドレスをまとい、幾重にもなった透明な花びらのようなベールを被っていた。その頭上に載せられているのは、彼女の赤い髪に映える翡翠の冠だった。

祝福されていたのに、行われなかった結婚式。結ばれなかった花婿と花嫁。

カジェーラが五十年間、鏡に囚われて眺めていたものだった。

「あの鏡は、寿命が短い人間には害をなすものじゃ。じゃが、私はあの鏡のおかげで立ち直れた。確かに時間はかかったが。鏡のおかげで張り裂けるような感情はいつしか消え、遠い過去のものとなった。虚しさは味わったが、現実に目覚めた。そなたは木っ端微塵

にしてくれたがの。あれは私にとっては、大切な愛すべきものだっただのじゃぞ」

カジェーラはそう言って、フィリアスを睨む。

フィリアスは、にっこりと笑った。

「あなたの鏡を割ってしまったことは、私としても大変遺憾です。あなたは翡翠の冠も取り戻してくださった。それにあなたは、オーデルクの大公妃になるはずだった方です。ぜひあなたに報いたい。アーヴァーンの王家としては、あなたをどうすることもできないでしょうし」

フィリアスは、ちらつとナデイルを見る。

ナデイルは頷き、そして言った。

「ファルグレット侯爵一族は、出奔しました。侯爵自身がアーヴァーンに戻らぬ限り、アーヴァーン王家としては、カジェーラ殿に何も出来ないでしょう」

「それ、エリユースのこと……？」

ガガが遠慮がちに、ナデイルにささやく。

ナデイルは黙り込んで、ガガの質問を無視した。

「報いるとは？ 私もナデイル王女と一緒に、オーデルクに連れて行ってくれるということかの？」

カジェーラが訊ねると、フィリアスの臣下たちの間に、緊張した妙な空気が急降下する。

不安げに眉をしかめ、何か言いたげに口を開けたまま、彼らはフ

イリアスとカジエーラを見守った。

「もちろん、来てくださってかまいませんとも。オーデルクには、大公家付きの魔法使いは現在おりませんからね。ここくらいの広さもなく、花畑も付いていないかもしれませんが、屋敷も用意致しますう」

フィリアスが明るく答える。

フィリアスの臣下たちは、慌てふためいた。

カジエーラは、ふふつと笑う。

「冗談じゃ。そなた、家来たちの顔を見たであろうが。絶句しおつたぞ」

カジエーラに一瞥され、オーデルクの人々は慌てて目を伏せる。

「たとえ何代か前の大公の元婚約者であろうとも、そして冠を取り戻すのに協力したとしても、私は彼らにとっては恐ろしい魔女じゃ。私をオーデルクに連れて行くということは、揉め事の種を持ち込むのと同じことぞ」

「ですが、あなたには何かして差し上げたいのです。ぜひとも」

フィリアスが言う。

カジエーラは、やさしくはかなげな少女の顔で微笑んだ。

「その気持ちだけで十分じゃ。私に残された時間は短い。私はその時間を私の使いたいように使う。静かにひとりでここで過ごし……そして最後にやらねばならぬことがあるしの」

「やらねばならぬことって何だろ？」

ガガが、首をかしげた。

「では、カジェーラ殿。時々ここに遊びに来てもよろしいですか？ 私はあの花畑がとても気に入ったのです。ぜひ寝転んで、一日のんびり過ごしたい。そしてもちろん、あなたの手料理もまたご馳走になりたいのです。幸いなことに、私はあなたの婚約者に似ているようです。彼に出来なかったことを、ぜひ私に。それであなたの心が少しでも癒されるなら、とても嬉しいです」

フィリアスが、申し出る。

臣下たちの口が、再びあんぐりと開いた。

何を言い出すのだ、我らが公子は。

そういう無言のセリフが、全員の唇に張り付いている。

「勝手にするがよい。私の邪魔をしなれば、いつでも来てよいぞ。料理も作ってやろう」

カジェーラが答えると、フィリアスの顔が嬉しさで、ぱつと輝いた。

「ありがとうございます！ では、近いうちに参ります」

そんなことはさせませんぞ、と臣下たちは固く決意したようだが、フィリアスはきつと、事もなげにするりと立ち回って彼らを出し抜き、彼らが気がついたときには既に花畑で寝そべていそうだった。

「公子さま、やっぱり無邪気で何も考えない、いたいけのないガキだよな。オトナだったら、普通そんなことを言い出す発想も勇気も

あるもんか……」

ガガが呟く。

ナデイルは淡く微笑んで、ガガの頭を撫でた。

「あ、ナデイル。笑った……」

ガガは、ルビーの目でナデイルの穏やかな顔を見上げた。

「カジエーラ。私はあなたの婚約者だった大公に、そんなに似ていますか？」

フィリアスはそう言って、さりげなくカジエーラの前に立つ。
カジエーラは、眩しそうに彼を見上げた。

「似ておるよ。その金の巻き毛は、私がかつて憧れた髪じゃった。
その紫の目は、私が愛したあの方の、アメジストの目と同じじゃ」

「では……」

フィリアスは、満面の笑みのまま、行動する。

そこにいる一同は、目を疑った。

フィリアスは、いきなりカジエーラを強く抱きしめたのだ。

「な、何をする……！」

カジエーラが叫んだ。

だがその声は、フィリアスの胸で遮られ、くぐもって消されてしまふ。

「あなたの元婚約者、私の曾祖父の兄が、あなたに言いたかったこと……。それを私が代わりに言いましょう。彼は言いたかったはずなのですから」

「なんじゃと？」

カジェーラが、フィリアスの胸に埋もれたまま言った。

けれども彼女は、突然そんなことをされても、特に嫌がりもせず、そのままフィリアスに抱きしめられていた。

「カジェーラ。我が麗しの姫君。私は、あなたのことをずっと思っていました。私が生涯を終えるその瞬間まで、あなたのことを考えていました。あなたを愛し、あなたを心配し、あなたの幸せを祈っております」

フィリアスが言った。

真剣に。力強く。

まるで大公の思いをはるかなる過去から呼び出し、その体に集めるように。

二人を見つめるナディルにもガガにも、その瞬間だけフィリアスは別人のように映った。

「嬉しゅうございます、大公さま。私も大公さまのことをずっとお慕いしておりました。鏡に囚われていたときも、解放された後も。ずっとずっと。今でもお慕いしております。この命の尽きる時まで」

……」

カジェーラが答える。

頬を染め、はつきりとした言葉をその薄紅の唇で紡ぐ彼女は、その時は老いを隠した魔女ではなく、侯爵家の若き姫君だった。

突然、目の前から消えてしまった婚約者。

大公の思いは、如何ばかりであっただろう。

一族と行動を共にした姫君のほうもまた　。

二人の中に当然存在したであろう疑問や非難、怒り、さらには言い訳や謝罪の言葉。

フィリアスとカジエーラは、そういうものは口にしなかった。

ただ短く互いに思いを述べた後、再び静かに抱き合った。ごく自然に、恋人同士のように。

割れて散らばった鏡が、二人の周囲で星の破片のように輝く。

「公子さまったら、やっぱり無邪気で深く考えていないよな。感情で判断して、いきなり行動するし」

ガガが、あきれたように呟く。

「それがフィリアス公子の素敵なところだよ。彼の判断は、何にせよ結局のところ、いつも間違っていないもの」

フィリアスが、やはり彼の気分で唐突に大公の役を終えるまで、ナデイルもナデイルの肩にとまったガガも、そしてオーデルクの人々も、まるで一枚の美しい絵に見入るかのように、二人を眺めたのだった。

魔法の鏡から解放された人々は、カジエーラの城で丁重なもてなしを受け、一晚を過ごした。

そして次の朝、オーデルクの若者の一団以外は、それぞれの目的地へ、あるいは故郷へと散らばっていった。

翡翠の冠はナデイルからフィリアス公子に返され、箱の中に嚴重に収められて、馬の背に乗せられた。

フィリアスの臣下たちは、フィリアスがアーヴァーンの王女を伴ってオーデルクに帰ることが、ことのほか嬉しいようだった。

何しろナデイルは、元々フィリアスの花嫁候補。次期大公と隣国アーヴァーンの王女との婚姻は、オーデルクの人々が最も望む縁組だったからだ。

彼らの中では、フィリアスとナデイルがオーデルクに到着した後に結婚するのは当然のことであり、結婚式の段取りもまた、密やかに決められつつあるようだった。帰路の準備をすすめながら、彼らは賑やかに談笑し合う。

「ナデイル。だいじょうぶ？」

ガガが、城の窓際に座って庭を眺めていたナデイルに声を掛けた。ナデイルは、もちろん豪華なドレス姿ではなく、いつもの質素な旅の衣装を身につけていた。

気高く美しい王女はその気配さえ消え、無造作な髪型や華奢な体の輪郭も、やはり少年っぽく見える。

とはいえそれは、元氣のない、うなだれた少年だった。

「何だか疲れたよ。鏡から解き放たれてから、ずっと体がだるい」

ナデイルは、答えた。

「鏡の魔法にかかっていたせいだよ。それか……偽者とはいえ、エリユースに会っちゃったからかな」

ガガが遠慮がちに言って、ナデイルの顔を心配そうに覗き込む。

「そうかもしれない。久しぶりに会ったんだものね、エリユースには」

ナデイルは、短い溜め息をついた。

それより、たぶんあの鏡のかけらの中を見てしまったせいだ。

ナデイルは、思う。

エリユースと、その足元に横たわる、死んでしまった自分の姿…

…。

それはエリユースの心の中にあつたもの。

この二年間ずっと抱いてきた、ナデイルの彼への思いに対する、彼の答えであつたものだ。

「あなたはだいじょうぶなの？ 鏡にあんなのを見せられて？」

ナデイルが気遣うと、ガガは胸を張る。

「平気だよ。何せぼくが入ってる体は、強靱な竜の体なんだから。少々気が滅入ったくらいでは、へこたれないのさ」

「ならいいけど……」

「ところで、ナデイル。オーデルクに行って、フィリアス公子に報酬の翡翠をもらったら、その後どうするの？」

ガガは、ナデイルに訊ねた。

「わからない。ともかく、エリユースを追いかけるのはもうやめた」

「オーデルクの人たちはみんな、ナデイルはフィリアス公子と結婚すると思ってるよ」

「みたいだね。公子さまは捕らわれのお姫様を助けたわけだから、そういう流れになって当然だよ」

ナデイルは他人事のように、そっけなく呟いた。

「それもまた、そなたの人生の選択肢のひとつじゃがのう」

窓から注ぐ太陽の光がゆらゆらと波打ち、カジエーラがナデイルとガガの前に現れる。

「うわ、またこの婆さん、どこから沸いて出るんだよ」

「ここは私の城じゃ。どこからどう沸こうが、私の勝手というものじゃ」

カジエーラが、黄色の透明な目を細めてガガを見下ろした。

「口が悪いよ、ガガ。この人はアーヴァーンの侯爵家の姫君なんだからね」

ナデイルが注意する。

「元、だろ」

ガガが、ふんと横を向いた。

「ナデイル王女さま。ファルグレット侯爵を伴ってアーヴァーンの国王さまの城に帰ることが、あなたの最も理想的な未来だと思えますよ。＞消えた姫君＜は、私ひとりだけで十分です」

カジェーラが穏やかに微笑んで、ナデイルに言った。

おそらく彼女は、そんなふうにユーフェミアに対しても、事あるごとに助言していたに違いなかった。親しい友、幼なじみ、さらには最も身近にいる臣下として。

「でも、それは無理というものです。エリユースの心の中に、私はいません。私は彼の中では、既に死者なのですから。私にも誇りというものがあります。惨めな思いは、もうたくさんです」

ナデイルもまた、王女の口調に戻って、彼女に答える。

「やつかいじやのう。そなたたち二人は思い合っておるはずじゃない。しかもそなたたちの恋は、周囲からは祝福されるであろくに。そなたらが惹かれあうのは、先祖の血のせいもある。思い合いながらもかなわなかった、悲しい恋。ユーフェミアさまと私の兄の思いが、二人にはそれぞれ流れておるのじゃ。その思いは時を越え、世代を越えて、お互いを求め合っておるはずじゃぞ。全くうまくいかぬものじゃな。ま、私も人の恋路のことは言えぬ立場じゃがの」

カジェーラは、ナデイルの前に手を差し出した。

その指先には、細い鎖に通された金色の鈴が下がっていた。
鈴は、廊下の景色をその滑らかな側面に映して、小さく揺れている。

「それは……」

「これをそなたに預けよう。そなたが持っているとい

カジェーラが言った。

「なぜ、私に……？ それはエリユースのものでしょうか？」

ナデイルは、眉を寄せる。

「この鈴は、我が一族が猫族の血を引いていることを示すものじゃ。猫族の力を使うことの証でもある。この鈴を持つ者は、ファルグレット侯爵家のものであることの証明となる。この指輪と共にな」

カジェーラは、指に嵌めたルビーの指輪を撫でた。

「猫族の力？ エリユースは、魔法は使えないって言ってましたが？」

ナデイルは、噛み付くようにカジェーラに言う。

エリユースのことは、もう済んでしまった過去のこと。

あの鏡のかけらが映し出したものを見て、やっと自分の心を納得させ、あきらめをつけたところなのだ。

今さら彼の鈴などを持ち出されても、迷惑なだけだった。

「生まれつき強い魔力を持った子供にその力を使わせることは、避けねばならぬ。危なくて仕方がないからのう。ゆえにそういう子供には、この鈴で魔力を封じたのじゃ。私の兄もしくり。私もそうであつた」

「え。じゃあ、エリユースは魔法が使えるの？」

思わずガガが質問する。

カジエーラは、頷いた。

「エリユースは少年の頃に家を出てしまつたゆえ、そのことは知らなかつたようじゃがな。これを壊せば封印は解かれ、エリユースは魔法が使えるようになるじやろう。私も魔女として生きることを決めたとき、自分で鈴を壊したのじゃ。ナデイル王女、そなたがこれを持ち、時期が来れば壊すがよからう。代々のファルグレット侯爵は魔法を使い、常にアーヴァーン王家のそばにいて、王家の人々を助けたのじゃ」

ナデイルは、冷たい翡翠色の目で鈴を眺めた。

「侯爵は、私の元には戻ってきません。私が持っていてても意味がないでしょう」

「困つたのう。これが私のところにあつても、またエリユースに無事に戻るかどうかわからぬからのう」

カジエーラは、ちらとガガを見た。

それから、にんまりと笑う。

「そうじゃ。竜がおつた」

カジェーラは、ガガの前にふわりと移動した。

「な……！ 婆さん、何すんだ！！」

「じつとしておれ」

カジェーラは、ガガの首に素早く鈴をかけた。

金色の鈴が、ガガの金の鱗の上で輝く。

似たような色と明るさの金色だった。

少し離れて眺めると、鈴はガガの鱗に溶け込んでしまう。

「ふむ……」

カジェーラは、鈴を付けたガガを、ゆっくりと色々な角度から眺める。

そして一言、彼女はぽつりと呟いた。

「似合わぬのう。やはり金の竜に金の鈴は映えぬわ」

「勝手にかけて、何ほざいてんだ！」

ガガが叫んだ。

「そなたが持つておれ。ナディル王女の代わりにな。あるいは、いつかファルグレット侯爵が、アーヴァーンに帰ることがあるやもしれぬ」

カジェーラは、にやっと笑って、ガガの頭をぼんぽんとたたいた。その動きに合わせて、鈴がチリンチリンと鳴る。

ガガは、ぱかりと口を開けたが、炎は吐かなかった。

「私はこれから成さねばならぬことがあるからの。それを持っているわけにはいかぬのじゃ」

「時々それ言つてたけど。結局、何をするつもりなのさ？」

ガガが訊ねる。

金の鈴は、はるか昔からガガがそうやって首にかけていたかのよう、に、ガガの鱗にこの上もなく馴染んでいた。

「私は、アーヴァーンの王家のルビーを破壊しようと思っている」

カジェーラが、真面目な顔をして言った。

さすがにナディルは驚いて、カジェーラを振り返る。

「あの猫族のルビーは、すべての元凶じゃ。人の一生を狂わせる。人のさまざまな欲望を増長させ、人殺しの理由ともなる。いったいどれだけの者があのルビーのために未来を狂わされ、涙を流し、そして死んできたか知れぬ」

「でも、あれはアーヴァーンの王家の宝です。アーヴァーンの国王を指名する、大切な宝石なのです」

ナディルが言つと、カジェーラは微笑む。

「そなたもあのルビーで、さんざん嫌な思いをしてきたのであろう？ 恨みこそすれ、未練などはないと踏んだが」

「それでも従わねばなりません。あれは古来より我が王家を導き守

ってきた、聖なるルビー」

「笑止じゃ」

カジエーラが言つて、大きく溜め息をついた。

「あの宝石の由来を知っておるか？　なぜ猫族があれをアーヴァーン王家に持ち込んだのか」

「国王の後継者を選ぶためだろ？」

ガガが訊ねると、カジエーラは救いがたい、という表情で首を振った。

「当時のアーヴァーンの国王は、自分の望む王子を後継者に指名することはかなわなかった。王子は正妃との子供じゃったが、正妃は既になく、国王の側近の娘である側室が、その側近と共に権力を握って幅をきかせていたからじゃ。誰もが、次の国王は側室腹の王子じゃと疑わなかった」

「まるで、ナディルと同じ状況……」

ガガが、小さく呟く。

「そこで国王は一計を案じた。懇意にしていた猫族の侯爵から、不思議なルビーを譲り受けたのじゃ。ルビーは猫族の血に反応する。猫族の血を引く者が触れると、光り輝く。それを利用することにしたのじゃな」

「なん……だつて……？」

ガガが搾り出すようにうめいた。

「それは……つまり、国王の後継者とかは関係なく、ということですか？」

ナデイルが訊ねると、カジエーラは満足そうに頷いた。

「正妃は猫族の血を引いておった。息子である王子もそうじゃ。となると、ルビーは当然その王子が触ると光る。ルビーが次期国王を選ぶと触れ込めば、王子を後継者に仕立て上げるのは簡単じゃ」

「それが、アーヴァーン王家が大切にしているルビーの真相かよ」

ガガが、吐き捨てるように言った。

「そういうことじゃの。以来ルビーは、国王の後継者指名に使われることになった。当たり前のことながら、ルビーは猫族の血を引いた王子や王女に反応した。正妃は猫族を先祖とする貴族から選ばれることが慣例だったゆえ、正妃の子供たちが触れると光ったのじゃ。ところが、当初はルビーを利用して次期国王を選んでいたはずが、やがてその由来が忘れられ、ルビーが聖石として祭り上げられると、その反応に従わざるをえなくなった。アーヴァーン王家の不幸の始まりじゃ。私は猫族の末裔として、あのルビーを葬り去らねばならぬ。それが私の使命だと心得ておる。あれを王家に持ち込んだのは私の先祖じゃからな。子孫である私が始末をつける。その準備も、ほぼ整った」

「じゃあ、もしかして、廊下にわんさかあったあのルビーの残骸は……」

ガガが言いかけると、カジエーラが続けた。

「私が練習台にしたルビーの骸じゃ。気が遠くなるくらいの量を破壊して練習したからの。一撃でルビーをきれいに破壊する自信があるぞ。どんなに大きかろうと、後腐れもなく、砂のように粉々になるじゃろう」

「では、カジエーラ。あなたはルビーを破壊するために、アーヴァーの国王の城においてになるということですか？」

ナディルは、カジエーラに訊ねる。

「そういうことじゃな。たとえその時、そなたがアーヴァーの女王であり、エリユースがそなたの夫のファルグレット侯爵であろうとなかろうと、な」

カジエーラは、にっと笑う。

「ですが、アーヴァー王家の者としては、あなたのその行為をみすみす黙って見過ごすわけにはまいりません。たとえ由来はどうであれ、あのルビーはアーヴァー王家の宝なのです。その宝を破壊しようとする者があれば、当然のことながら阻止し、宝を守らねばなりません」

「すると、ナディル王女。やはりそなたとは戦わねばならぬということかのう」

カジエーラが、面白がっているように言った。

「やめとこうよ、ナデイル。ルビーはただの石なんだ。猫族の血にもれなく反応して光るだけの、きれいな赤い石だよ。それを人間たちが勝手に利用してきただけなんだ。あのせいで、ナデイルもさんざんな目に遭ってきたんじゃないか。父上とも離れなきゃならなかったし、命も狙われた。もうこれ以上、あんなものに振り回されちゃいけないよ。この人と戦って、いったい何を守ろうってんだよ」

ガガが言う。

「あの石は、代々のアーヴァーン国王を選んできた。それがまがい物だとわかったら、王家の権威は地に堕ちる。国王の面子は守らなければならぬよ。王家の者としては」

ナデイルは呟いた。

「そなたは家出をしてきたらしいが、それでもやはり、王家の人間の立場を取るとのことじゃな？」

カジェーラが、愛くるしく首をかしげる。

「そうですね。私がアーヴァーンの王女であるということは、どこにしようかと逃れられぬ定め。そのことがわかっただけでも、この二年間の放浪には意味があつたのかもしれませんが。そして、アーヴァーンを外から冷静に眺められたことも、きつと意義があつたことなのだと思います。あのルビーが何の力もないただの石でも、形式的にアーヴァーン王家の宝ならば、形式的に対処しなければなりません。正面から来られたら、正面から受けて返さねばならないということです」

ナデイルは、カジェーラに言った。

「カジェーラ殿。ルビーを破壊するために、あなたがわざわざ恐ろしい魔女として国王の城においでになる必要はありません。私の友人として、私を訪ねて下さればいい。そうすれば、私が人知れずルビーをあなたに渡すことも出来ます。ルビーがあつたところには、ルビーとそっくりな赤い石を置いておけばいいだけの話。あなたがアーヴァーンにおられた頃は知りませんが、今ではどんなルビーかなんて知っている人は、現国王の私の父以外は、ほとんどいないでしょう。王家の人間の私だって知らないのです。ルビーは、国王以外は入ることの出来ない城の奥に置かれているらしいですから。入れ替えられていても、きっと誰も気づかない。そしてアーヴァーンの国王は、これからはルビーなどは使わず、自らの意思で後継者を選ばなければなりません」

「だよね。当然だよ」

ほっとしたように、ガガが頷く。

「そうじゃの。頭をうんと悩ませて、後継者を自分で決めればいいのじゃ。それが国王の本来の仕事じゃろう」

カジェーラは、ふとガガに視線を止めた。

「ルビーがあつた場所には、偽者の石ではなく、こういう小さな竜を置いておくのもよからう。ルビーを二つも持つておるからのう」

ガガはカジェーラにそう言われ、ルビー色の両の目を見開いて、飛び上がる。

「アーヴァーンの城奥深くに守られているルビーとは、そこに鎮座

する金の竜が持つ、ルビーのような目のことじゃった。伝説としても、きれいにまとまろうが」

「まとまりますね。そうしようかな。竜の体を持つガガは、とんでもなく長生きするでしょうし。そうやって、猫族の子孫であるアーヴァーン王家をずっと見守ってもらえたらいいな」

ナデイルが言う。

「冗談じゃない。やめてくれ。城の奥の奥の薄暗い場所に、ルビーになってじっとしてゐるなんて。息が詰まっちゃう！」

ガガが、本当に嫌そうに呟いた。

ナデイルとカジエーラは、顔を見合わせて笑い合う。

百五十年前、ユーフェミアとカジエーラが、アーヴァーンの王宮でそうしていたように。

「そろそろ、発ちますが……」

フィリアスが、遠慮がちに声をかける。

彼は廊下をゆっくりと歩いて、ナデイルたちに近づいてきた。

「はい、フィリアス公子。では、参ります。カジエーラ、お元気でまた会いましょう」

ナデイルが声をかけると、カジエーラは優雅な動作で丁寧に頭を下げた。

「カジエーラ。必ず遊びに来ますからね。その時、ナデイル王女も

一緒に連れて来られたらいいな」

フィリアスが無邪気に言う。

「公子さま、さりげなくおっしゃるけど、それ、いろんな意味があるんだよね」

ガガがフィリアスに聞こえないように、ぼそりと呟く。

「では、公子さま。オーデルクの料理を作って待っていきましょう。掃除もしなければなりませんね」

カジェーラは、フィリアスに微笑んだ。

それから彼女は、改めてナデイルに向き直る。

「ナデイル王女。未来をどうするかは、そなたが決めること。そなたが決めるしかないのじゃ。幸せをその手につかむがよい。本当に大切なものを見極めたら、それを手に入れるのじゃ。そしてそれを手にしたら、しっかり抱きしめ、決して離してはならぬ」

「私も、そうありたいです」

ナデイルは、呟く。

「そうしようよ。そうでなきゃだめだよ」と、ガガが横から口を挟んだ。

「人生は一度きりじゃ。そなたが美しい若い娘でいられるのも、ほんのわずかな期間。その間に大いに恋をし、かけがいのないものを得るのじゃ。ともあれ、後悔せぬようにな」

ナデイルは、頷いた。

「金の竜。そなたは、常に王女のそばにいるがいい。王女のよき相談相手となり、王女を慰め、小さな癒しとなつての」

カジエーラがガガに言うと、ガガはムツとしたように答える。

「言われなくても、いるさ。ナデイルだけじゃなく、ナデイルの子孫たちも、ぼくは見守つて行く。ぼくは、あんたよりも年上なんだぜ。猫族のことも、あんたよりもよく知ってる」

「そうであつたな」

カジエーラは、にやつと笑った。

「やはり本物のルビーになるのが、そなたの定めなのではないのかの？」

「絶対、断る！」

ガガは、ぼうつと一瞬だけ火を噴いた。

やがて、アーヴァーン風とオーデルク風の別れの挨拶を済ませた二人の若人は、金の竜を連れて、カジエーラの前から遠ざかる。

カジエーラは、彼らの後姿を見送りながら、ぼうつと年老いた溜め息をついた。

「私がアーヴァーンにナデイル王女を訪ねて行ったとき、ナデイル

王女は既にオーデルクの大公妃となっていて、城にはおられぬのかのう……」

オーデルクの人々の一行は、フィリアスを先頭にして魔女カジエーラの城を出立した。

フィリアスの後ろには、彼の臣下たちが翡翠の冠を守るように、隊列を組んで従った。

ナデイルとガガを乗せた馬は、その一行から少し間をあけてついていく。

フィリアスの臣下から輿に乗るよう勧められたのだが、もちろんそれは断った。

一行は平和で美しい花畑を通り、山の道へと入った。

同じような景色が延々と続く空間を人々はゆっくりと進む。

「ねえ、ナデイル。じゃあさ、アーヴァーンに帰るってこと？ オーデルクで報酬の翡翠をもらったなら」

ナデイルの首にゆったりと巻きついていたガガが、訊ねた。

先ほどのカジエーラとのやりとりで、状況は一変してしまったのだ。確認しておかねばならぬことだった。

「カジエーラが城に来るというのなら、いずれ近いうちにそうせざるを得ない。彼女にルビーを返さないかね。あのルビーの本来の持ち主は、彼女なのだから」

ナデイルは答える。

「ナデイル王女、覚悟を決めてアーヴァーンに帰りますか？ でも、すんなりと帰れるかな……」

ガガは、前に行くオーデルクの隊列を赤い瞳で眺めた。

やがて、先頭にいたフィリアスが隊列から離れ、道を逆走して来る。

彼は、自分の馬をナデイルの馬の横に並べた。

「おや、公子さま。退屈になったのかな」

「まあ、それもあるのですけれどね」

フィリアスが、白い歯を見せて笑う。

「ナデイルに用があるのですよ」

「何でしょう？」

ナデイルが訊ねる。

フィリアスは、透き通ったアメジスト色の目をナデイルに向けた。少しためらってから、言いくそくに彼は切り出す。

「その、ナデイル。冠のことですが……。あなたがずっと持っていてくださいませんか？」

「は？」

ガガは、よく聞こえなかったふりをするように、頭をかしげて耳を突き出した。

ナデイルは、フィリアスに訊ねる。

「でも、あれは、オーデルクの大公妃さまの大切な冠なのでしょう？」

「そう。オーデルクの大公に嫁ぐ姫君が付ける冠。そしてナディル王女。翡翠の目を持つあなたに、最もよく似合う冠です」

フィリアスは、頬を染める。

「公子さま、回りくどい言い方をしやがる……」

ガガが、あきれたように溜め息をついた。

けれども、当然その言葉の意味を推し量ったナディルは、公子に言った。

「つまり、私にあの冠の正式な所有者になれということですね？」

「そうです」

フィリアスは、頷いた。

「ナディル。オーデルクの大公妃になっていただけませんか？ もともとあなたとの縁談話がありました。あなたがご病気になるれたとかで立ち消えになってしまっていました。あなたはご病気でなかったようですし」

「そ。ご存知のように家出してたのさ、ナディル王女は」

ガガが言う。

ナディルは黙り込んで、青と白の旅の風景に視線を移した。
乾いた岩山と、空に浮かぶ羽根のような雲が、じんわりと動いて

行く。

「私はエリユースのように、あなたを置いて行ったりはしません。彼のように、あなたを守れないなんて決して言いません。何があっても、あなたを守ってみせます」

フィリアスが、真面目な顔をして言った。

「私は、自分で自分を守れます。どなたにも守っていただく必要はありません」

ナデイルは答えた。

「でも、今回は守れなかったですよ？」

フィリアスが、微笑む。

ガガにじろりと睨まれ、彼の微笑みは、たちまち苦笑に変わった。

「いや、まあ、私がお助けしなくとも、カジエーラがあなたを助けたかもしれません。彼女が何もしなかったとしても、おそらくエリユース殿があなたを助けたでしょう。彼はカジエーラ殿とは親戚なのでしょう？ 早かれ遅かれ、彼はあの城に必ずやってくる。そしてあなたを見つけて、鏡の呪縛から解いたはずですよ」

「むろん、鏡を割ったりせずね」と、ガガ。

「エリユースに助けられる……。それは私にとっては屈辱です。あなたには感謝しなければ」

ナデイルは、小さく呟いた。

「ナデイル王女。たとえあなたを守る必要がなくても、私はいつもあなたのそばにいきましょう。あなたのそばにいて、あなたに微笑みと安らぎを差し上げましょう。あなたも私のそばにいて、いつも笑っていてください。その美しく、可愛い微笑みを私に下さい。私の妃になれば、あなたの身の安全は保証されますし、アーヴァーンの王位継承争いもなくなります」

フィリアスが言った。

「たぶん、そうでしょうね……。フィリアス公子、あなたといえば、安らぎと平和が得られるでしょう。振り向いてくれないエリユースを追いかけるよりも、ずっと幸せかもしれません。お父さまも、デユプリー公爵も安心するでしょうね。すべてうまくいくのです」

「でも、本当にそれでいいの？」

ガガが訊ねる。

「正直に言いますと、私があなたと結婚したい理由は、別にあるのですよ」

フィリアスが、明るく言った。

「私の妃になれば、あなたのアーヴァーンでの王位継承権はなくなります。けれども、あなたの子供には与えられるのです。昔、アーヴァーン王家のルビーが、他国に嫁いだ王女の息子を次期国王に選んだことがあったとか」

「きっとその嫁いだ王女は、正妃の娘だったんだね。で、猫族の血

を引いていたんだ」

ガガが、ぼそつと言う。

「え？」とフィリアスはガガを見つめたが、ガガは無視して空を見上げた。

「次期国王も、その可能性がありますよね。何しろ、現国王の正妃はあなたの母上だけ。あなたの他のご兄弟は、全員側室のお子様です。となると、あなたが他国に嫁げば、ルビーは誰も選ばないかもしれない。そして、あなたの生んだ王子が王女を指名するかもしれないのです」

「オーデルクの大公が、アーヴァーンも治めるということですか？」

ナデイルは、フィリアスに訊ねた。

「あなたにとっては、悪くはないことのはずですよ。あなたはアーヴァーンの女王にならなくても、国王の母になるのですから。あなたの血を引く者が、代々アーヴァーンの王、そしてオーデルクの大公となっていくのです」

「そうかもしれませんが……」

ナデイルは呟いて、遠くを眺めた。

「まあ、これは、あなたとの縁談が舞い込んできたときに、私の父が言っていたことの受け売りなのですけれどね。父はあなたのことを大変気に入っていたようです。あなたの肖像画は、とてもかわいらしかったようですしね。臣下たちが、いろいろと話してくれまし

たよ。我が大公家は、あなたを歓迎し、大切にします。ぜひ考えておいてくださいね。お返事はオーデルクに到着して、しばらくしてからで結構ですから」

フィリアスはにつこり笑い、再び馬を飛ばして、隊列の先頭に戻って行った。

「やっぱりあの公子さま、妙にやり手だよね。自分ではもちろん、何の意識もなく、何も考えてはいないのだろうけど。一つ一つの立ち回りが結構的を射てて、したたかなんだ」

ガガが、感心したように呟いた。

「そうだね。フィリアス公子なら、きっとオーデルクのいい大公さまになれるだろうね。彼の家族になる人たちも、彼と一緒に、楽しくてのんびりした時間を過ごせるのだろうな」

ナデイルも頷く。

「で、どうするの、ナデイル。フィリアス公子があんなこと言うてきたけど。ぼくは、さらに先が読めなくなってきたよ」

「本当にに大切なものを見極めたら、それを手に入れる。そしてそれを手にしたら、しっかりと抱きしめ、決して離さない。カジエーラが言ってたでしょ。私はいつまでも十七歳ではいられない。エリユースと出会った十五歳のときから、もう二年もたってしまった。賞金稼ぎの世界でも、皆がちゃやほやして仕事を回してくれるのは、私が十七の若い娘だから。だけど、いつまでもそれは続かない。これからの身の振り方を決めなければね。オーデルクの大公妃になるのも悪くはないかもしれない。命を狙われることもなくなるだろうし、

私が他国に嫁いだら、お妃さまだってほつとされるだろう。彼女の周囲の連中もね。それも選択肢の一つ。未来は自分で決めなきゃ」

「ナデイルの心は、フィリアス公子に動いているの？ エリユースのことは、もう忘れられたの？ 公子さま、ずるいよね。心が弱つてるときにやさしい言葉なんてかけられたら……。むろん公子さまは、やっぱりそうしようと思ってそうしたんじゃないんだろうけどさあ」

「私の先祖のユーフェミアも、たぶんそうだったんだろっな。傷ついている時にあんなことをそばで言われたら、心が自然とその人に向かつて行ってしまうよね」

> 私は、姫さまのおそばにずっといますよ。たとえ何があるうと…

…<

> お待ち致します、ずっと。姫さまが、私にそばにいて欲しいとお
思いになるまで……<

ナデイルは、夢の中の若者がユーフェミアに言った言葉を思い出
す。

「だけど、ユーフェミアは幸せだった。そう思えるよ。恋人に去ら
れても、その後愛する夫を得て、子宝にも恵まれた。あの絵も、不
幸な人生を歩んだ女性には決して見えなかった。ファルグレット侯
爵のことは、完璧に思い出ししてしまえたんだ。私も、彼女のよう
になれるのかな」

「ナデイル。もしかして、自棄^{やけ}になってない？」

ガガが心配そうに訊ねる。

「先祖が幸せだったからって、ナディルも幸せになれるとは限らないよ。無理やり心を別なところに向けようとしちゃだめだよ」

「だいじょうぶだよ。私は自分の心に従って、自分が幸せになれる選択をするから」

ナディルは呟き、再び空を見上げた。

明るい薄青の空には、輝きを失った月が印を押されたように浮かんでいる。

それは、猫の前足の研ぎ澄まされた爪のような、尖った形をしていた。

カジエーラは、鏡のかけらが散らばった大広間に佇み、うんざりしたように肩をすくめた。

「これを片付けねばならぬのか。年寄りにとっては、途方もないのう。しかし、いつまでもこのままにしておきたくもないからの」

木製の台から剥がれ落ちて割れた鏡は、幾千、いやそれ以上もの破片となって広範囲に散乱し、天井のシャンデリアの光を反射して壊れた星の集まりのように輝いていた。

そのナイフよりも鋭い切っ先は、近づく者を容赦なく傷つけようと待ち構えているかのように、雑然と折り重なっている。

魔法を使うと一瞬で事は済んでしまう。

怪我をすることもなく、鏡の破片の小さな一粒すらも消えてしまつて、広間は前よりも美しくなるに違いない。

けれどもカジエーラは、食事や掃除などの家事一切は、魔法は使わず、すべて手作業で行っていた。

今回も地道に自らの体を使い、すべて済ませてしまわねばならぬ。

人間の主婦ならば、たとえめんどろであろうが、労力が必要であろうが、家事は自らの力のみで、ごく当たり前にこなしていくもの。こなさざるを得ないもの。

侯爵家の姫君であつたカジエーラも、長年の一人暮らしのうちに、普通の家庭の逞しい主婦に負けないくらいに家事は身に付いてしまつていた。

あるいは、たとえ魔女として生きることを選んだというものの、そのような雑事に魔力を使用してしまふほどに人間の平凡な暮らし

からは離れたくないという、彼女なりのこだわりがあったのかも知れない。

「まあ、アーヴァーンのルビーは壊さずに済みそうじゃからな。その分、これからは何にでも自由に魔法を使ってよいわけじゃが。今回は例外として、魔法に頼ってしまおうかのう」

カジエーラは、おもむろに鏡のかけらを一つ、つまみあげた。手作業で片付けられるかどうかを注意深く吟味するように。

鏡の中には、彼女の透明な黄色の目が映っている。同じ目を持ち、同じ血を引く若者のことを、彼女は思い出した。あれは何ヶ月前のことだったのだろう。彼がここにやってきたのは。彼が鏡を覗き込み、その心の内側を映したのは。

「ふむ……」

カジエーラは、鏡の中を眺めた。鏡の向こうには、花に埋もれた長い黒髪の姫君が映し出された。そして、それが映った鏡を覗き込んでいるのは、彼女と同じトパーズの目をした、その銀の髪の若者。若者は、食い入るように鏡の中の姫君を見つめていた。

>この姫君は？ そなたの思い人なのか？<

カジエーラは、何ヶ月か前、その若者に自らが発した質問を思い出す。

カジエーラ自身は鏡に取り込まれないよう、少し離れた位置に立って、若者が映し出したものを垣間見ていた。若者は、彼女の問いに黙ったまま頷いた。

>棺の中に入っておるようじゃが。亡くなったのか？<

>そうなのかもしれません。今はもう、この世の方ではないのかも……<

若者 エリユースが答えた。

>この方は、陰謀に巻き込まれて殺されてしまったおそれがあります。噂を聞きました。この方がおられるはずの城に、この方の気配が全くないと。召使いたちは、何事もなかったかのように振舞っているようです。この方のために料理も作られますし、宝石やドレスも届けられているといえます。けれども、実は姫君はいないのだという。姫君の部屋の寝台には姫君は横になってはおられず、そこには姫君が残した黒髪が一房、代わりに置かれていると……<

エリユースは、鏡にそつと手を置いた。

手は鏡の中の姫君には届かず、滑らかで固いその表面で止められてしまう。

>ならばこの姫君は、どこかに連れ去られたか……あるいはそなたが言うように亡き者にされ、人知れずどこかの土の中に埋められてしまったかもしれぬかのう<

>私は、この方を置いてきてしまいました。どうしても、自分の中の迷いを断ち切ることが出来なかったのです。そして、あの方の真っ直ぐな思いも、お断りしてしまいました。もし私があの時、城からお連れすれば……この方は亡くならずにすんだかもしれない。私と一緒に旅をしなくとも、あなたに預かっていただくという方法もありました。ここならば、追っ手は来ますまい。あの方も、安心し

てこの城で平和に暮らせたはず。けれども、そういうことを考える余裕も、私にはありませんでした<

>そなたも、まだ若いからのう。己の行動を経験で律していくには、まだ早い年齢じゃ<

>私は、もう一度、この方の国に行ってみようと思います。そして、本当にこの方が亡くなってしまったのかどうか、確かめなければなりません<

>もし本当に亡くなっておられたら、そなたはますます後悔することになるぞ<

>それでも、それが真実ならば、受け入れなければならぬのです。自分がどれだけ悔い、心がどのように張り裂けるのか見当も付きませんが、それでも確かめなければなりません。そうしなければ、私は先に進むことが出来ないのです。私の時間はおそらく、あの城を出たときから止まってしまっているのですから<

「また、やってしもうたわ……」

カジェーラは、覗き込んでいた鏡のかけらを輝く星々の中に投げ入れた。

それは銀色の弧を描いて宙を飛び、再び尖った星々の群れの中に混じってしまう。

「やはり私のこの体は、そろそろ寿命なのかもしれぬな。こんな大切なことも、全く覚えてはおらん。たとえ魔女と呼ばれて魔法が使えるようとも、その魔法で若い娘の外見を取り繕ってみようとも、老いには勝てぬ。穴だらけじゃ」

彼女は、忌々しげに言った。

「ナデイル王女。エリユースが鏡にそなたを映し出したのは、そなたが思っているような意味ではないぞ。棺の中に横たわる、長い黒髪の姫君のそなた。そなたはそれをエリユースの望みだと解釈したが、鏡が映し出したのは、エリユースの不安じゃ。恐れじゃ。子供の頃からあの鏡に慣れ親しんでいたエリユースは、己の心の負の部分を鏡に映し出したのじゃ。エリユースはそなたを思っておる。今でもな。そなたを残してアーヴァーンを出してしまったことを、この上もなく後悔している。この二年間、ずっとあやつのはそのことではないだっただじやろう。そなたらは、思い合っておるのじゃよ」

カジェーラは、彼女の細い指に嵌められた、アーヴァーン王家の指輪を見下ろした。

金の猫が、大粒の見事なルビーをしつかりと抱えている。

「エリユース。いや、ファルグレット侯爵。アーヴァーンの王女と共に、アーヴァーンに帰るがよい。そなたの代で帰るのじゃ。それがそなたの幸せ、ナデイル王女の幸せともなるう。アーヴァーン王家も、再び猫族の力を持つ魔法使いを得ることになる。先祖たちが犯した過ちをそなたは繰り返してはならぬ。消えた姫君は、銀の猫と一緒に再び城に帰るのじゃ。そなたらが結ばれることで、ユーフエミアさまと我が兄との叶わなかった恋は、やっと成就するじやろう。迷い悩むのも若者の特権じゃが、あまりにも迷っているのは、大切なものを逃してしまうぞ。後先を顧みずに突っ走るのも、若者の特権なのじゃ。しかし……間に合っているとよいのじゃがのう……」

その時、カジェーラは何かを感じ、黄色い宝石のような目で、天井を突き抜けたはるか遠くを見渡した。

花畑の上空に浮かぶ見張り番たちが、いつもとは違う何かを伝えてきた。

馬が草を踏む音。

その馬に跨って近づいて来る、人間の微かな息遣い。

花畑を通って城に吹き込む風にも、その気配が濃く含まれている。その人物は、真っ直ぐ城を目指して馬を進めていた。

「おや、誰か来たようじゃの。掃除は先延ばしにして、食事を作らねばならぬかのう。いや、この時間ならば、手抜きをしてお茶でいいかの。そうじゃ、お茶の後で客人に、ここの掃除を手伝ってもらうことにすればいいではないか。全くよい時に来てくれたものじゃ」

カジエーラは幼い少女のように、無邪気に微笑んだ。

オーデルクに入ったフィリアス一行を市民たちはこぞって歓迎した。

臣下のひとりが一足先にカジエーラの城を出立し、公子の帰還を知らせていたのだ。

人々は笑いさざめき、馬上のフィリアスに手を振った。

着飾った娘たちは、一行に向かって花を撒く。

フィリアスは手を上げ、人々に応えた。

あちこちでフィリアスの名前が呼ばれ、褒め称える声が沸き上がる。

「いかがですか？　これがオーデルクの陽気で人懐っこい人々です。あなたが望めば、もうすぐこの歓声は、あなたのものになるのですよ」

ナデイルと並んで馬を進めるフィリアスが言った。

人々に笑いながら手を振るフィリアスは、頼もしく、またとても美しかった。

金の巻き毛がゆらゆらと風になびき、そのやさしげな双眸は高貴な宝石の紫色。

娘たちが撒く薄紅の花びらは、彼の姿を間違いなく引き立てながら、その周囲に降り注ぐ。

それはオーデルクの大通りの空を覆い、ナデイルの周りにも心地よく舞った。

オーデルクの人々から、こよなく愛され、慕われている公子。

王位継承争いなどとは微塵も関係のない、のんびりとした明るい大公家。

公子と婚姻を結び、大公家の一員となれば、何の不自由もない楽しい生活が保証される。

少なくとも、ナディル王女としてアーヴァーンに戻るよりは、あるいは翡翠のナディルとして、賞金稼ぎという不安定な仕事を続けることよりは、はるかに望ましく、満ち足りた未来になることは確実だった。

「断る理由がないんだよね……」

ナディルは呟いた。

「え？」

と、ナディルの頭の上で金の兜となっているガガが聞き返す。

「公子さまの申し出を断る理由。だって、理想的な相手だもの。外見だって、中身だって、彼に付随するいろいろな物だって」

「中身がガキってことが気にかかるけどな」

ガガが言う。

「それも許容範囲内。この話を断ったら、きつともうこんなことはないよ。顔も見たことのないどこかの中年王族との縁談が来るか、当たり障りのない臣下と適当に娶わせられるか。それとも一生独身かな。もちろんそれは、アーヴァーンに帰ったらの話だけど」

「アーヴァーンに帰らないで、今まで通りずっと『翡翠のナディル』でいるっていうのも、ありだと思っけど？」

「そして、賞金稼ぎの誰かと結婚するの？」

ナデイルは、視界にぶらさがっているガガの前足に訊ねた。

「たとえば化け猫エリユースと。賞金稼ぎを続けていたら、遅かれ早かれ『翡翠のナデイル』は、そのうち『化け猫エリユース』と対峙する時が必ず来る。そしたら、彼の本心を訊いてみればいいんだよ」

「訊かなくてもわかったよ。鏡が教えてくれたもの。あなたもエリユースのことはきっぱり忘れろって言ったじゃない」

「言っただけだよ……。何かしつくりしないな」

「気のせいだよ。現実をちゃんと認めなきゃ」

「でも、やっぱりナデイルが本当に欲しいのは、アメジストじゃなくて、トパースの目なんでしょう？」

「アメジストが何ですって？」

フィリアスが、話に割り込んでくる。

「公子さまのアメジストの目が、とてもきれいだって話だよ」

ガガが皮肉っぽく答えた。

「それはどうも。ナデイルの翡翠の目もすばらしいですよ。もちろん、ガガくんのルビーの目もね」

フィリアスが笑う。

「ナデイル。城に着いたら、着替えてくださいね。早く美しいあなたを見せて自慢したいです。皆、びっくりしますよ」

「そりゃあ、するだろうさ」と、ガガが言ったときには、フィリアスは既に向きを変え、バルコニーに鈴なりの貴族の娘たちに手を振っていた。

娘たちは頬を染め、公子の視線を独り占めしようと、必死に叫び声を上げている。

「もし彼の申し出を断って、それでもユーフェミアみたいに『いつまでもお待ちしますよ』なんてやさしく言われたら、結局受け入れざるを得なくなるよね……。彼は、鏡の中の妄想の虚像じゃない。ちゃんと実在する生身の人間なんだもの。そんな人に心のこもった言葉を投げかけられたら、やっぱり答えなければならぬ」

ナデイルは、自分に言い聞かせるように呟いた。

オーデルクの大公の城は、丘の上にあった。

白い石を積み上げて造られた城は、周囲の豊かな緑に引き立てられ、より美しい清楚な白に見える。

それを一目見て呟いたガガの形容は、『おいしそうな平たい白いお菓子』だった。

その白いお菓子は、青い空と白い雲の下で、丘を覆うように広がっていた。

「おかえりなさいませ」

「ご無事で何よりです」

宮殿の人々がフィリアスに挨拶をし、フィリアスの隣を歩くナデイルにも笑顔で頭を下げる。

少年のような旅の衣装、頭に乗せているのはルビーの瞳の金の竜。そんな出で立ちのナデイルに、人々は驚きも警戒もしなかった。既にナデイルの素性が伝えられているのかもしれない。もちろん、公子の結婚相手になる予定であるところの、隣の国の王女として。

「おかえりなさいませ、公子さま」

磨かれた広い廊下の両脇に、若い娘たちが列を作って並び、頭を垂れる。

娘たちは、それぞれ鮮やかな衣装を身にまとい、宝石や花をふんだんに使って髪や胸を飾っていた。

いずれも美しい娘たちだった。貴族の娘たちか、あるいは大公家の親戚筋の姫君たちだろうか。

ナデイルは、自分に注がれるたくさんの視線を感じ取った。

最前列の娘が進み出て、お辞儀をする。

焦げ茶色の長い髪を形よく結った、一際美しい娘だ。

濃い紫色のドレスが落ち着いた色味とはいえ、華やかだった。髪に飾った白い薔薇が、甘い香りを漂わせる。

彼女はナデイルよりも、そしてフィリアスよりも、明らかに年上だった。

木漏れ日を通した葉の色のような薄い緑の目が、知的でやさしげだ。

「いらせられませ、アーヴァーンのナデイル・リア・ジフル王女殿下」

歌うように彼女は言った。

そして、ナデイルの服装にも頭に乗ったガガにも物怖じすることなく、上品に微笑む。

「ただいま、ウィーカ。皆、息災だったかい？」

フィリアスがにこやかに訊ねる。

ウィーカと呼ばれたその娘は、深く頷いた。

「だろうね。きみに任せておけば、間違いないからね」

ウィーカは、女官長か何かなのだろうか。

ナデイルの疑問に答えるように、フィリアスがナデイルのほうを向く。

「彼女は、私の乳母の娘なのです。私は生まれたときから、何かと世話になっているのです」

「そうなのですか」

「結婚したのは、私が十三の時です。彼女は二十歳を過ぎていましたがね。ひとりくらい、そういう年代の者がいてもいいと周囲も言うので……」

フィリアスが、さらににこやかに言った。

「へ？ 何だと？ けっ……こん……っ!？」

ガガが、ナデイルの頭から足を踏み外して、転げ落ちそうになる。かろうじてナデイルの肩にしがみついて体勢を立て直したガガは、フィリアスに訊ねた。

「公子さま、確か今『結婚』って……そうおっしゃったように聞こえたのですか？」

「はい。言いましたよ？」と、フィリアス。

「フィリアス公子。もしや、この女性の方々って……」

ナデイルは、廊下の奥までずらりと並んだ姫君たちを、思わず眺め渡した。

「私の妻たちですよ。ちなみに、ウィーカは最初の妻です」

フィリアスが、事もなげに答えた。

「っ、妻たちって……まさか、その、全員!？」

ガガが、信じられないといった風に叫ぶ。

「ええ。今のところ二十五人います。もちろん皆、側室ですよ。正妃はまだ娶っていませんからね」

フィリアスが、明るく言った。

「忘れていた。オーデルクが一夫多妻制だったってこと」

ナデイルは、溜め息まじりに呟く。

「えーっ。えーっ！　そ、それにしても、二十五人はひどいんじゃないの」

それからガガは声を潜め、ひとりごとを言うように、ぼそぼそと呟いた。

「二十五人って……。よく体が持つよ。一晩に一人でも、一ヶ月近く待たさなきゃなんないわけだし……。一晩にまとめて二人だったりす……」

至近距離でナデイルに睨まれ、ガガは黙った。

「少ないですか？　私の父は、私と同じ年くらいの頃には、六十人以上はいたらしいですが」

フィリアスが言う。

「まあ、子供がたくさん生まれては争いの元にもなるので、そこは

何かと苦勞したらしいのですがね」

「かなり苦勞してそうだよな」

ガガは、再びナデイルに睨まれる。

「側室は誰でもなれます。けれども、正妃となるといろいろと条件がある。ナデイル、あなたはその条件にすべて当てはまります。正式に縁談があつたくらいなのですからね。身分、美貌、知性、教養、年齢、強さ。おまけにあなたは、外の世界にも詳しい。あなたはこの女性たちの頂点に立つことになるのですよ」

と、フィリアス。

「ナデイルさまが正妃さまになられるのなら、私共もこれほど嬉しいことはございません」

ウィーカが言った。

同時に後ろに並んだ側室たちが、全員微笑んで頷く。

「私は、あなたが王女でなくても結婚を申し込むつもりでした」

フィリアスが言った。

「あなたのような女性は、妻たちの中にはいません。皆おとなしく、一日中城の中に閉じこもって楽器を弾いたり、刺繍をしたり、ドレスや宝石の話に夢中になったり……。けれども、あなたは違っていい。剣の使い手で、名の通った賞金稼ぎで、たった一人の男に激しい恋をしておられた。あなたが私を思ってくださればどんなにいいか。エリユースを思うように。ずっとそう思っていました」

「『翡翠のナデイル』を側室につてかあ？」

「そうです。でもそれは、アーヴァーンの王女を正妃に娶るよりも、うんと自慢できることかもしれませんよ？」

ガガの質問にフィリアスが、相変わらずにつこりと笑いながら答えた。

「ま、確かにそうだろうけどさ」

その時、小さな影が側室たちの間をちょこちょこと走ってきた。転びそうになりながらも側室たちに順番に手を差し出され、その影は、ナデイルたちのいるところまでたどりつく。

子供だった。

まだ三歳にもなっていない男の子だ。

フィリアスそっくりの金の巻き毛が背中に波打ち、小さいながらも、一目で貴族以上の子弟のものだとわかる服を着ていた。ぱつちりとした大きな目が愛らしい。

「うわ、公子さまをそのまま人形にしたみたいながキンチョ……」

ガガが言いかけた途端、その子供が叫んだ。

「お父さま！」

そして、その小さな幼児は、フィリアスに突進して飛びつく。フィリアスは、嬉しそうに彼を抱きしめた。

「おお。少し見ない間に随分大きくなりましたね。やはり子供は成

「長が早い」

「お父……さまって」

ガガが、あんぐりと口を開ける。

「あなたとウィーカさんの子供ですね？ 目の色がウィーカさんと同じだ」

ナデイルは、落ち着いた口調でフィリアスに言った。

「二歳になります。生まれたのは、そうだ、アーヴァーンでの舞踏会の日でした。あのとき、あなたが久しぶりに舞踏会に出られると聞いて、楽しみにしていたのを覚えています。でも、ウィーカが産気づいたので、舞踏会のほうはお断りしてしまいましたけどね。やはり初めての子供なので、私事を優先しました」

「お妃が言ってた、お隣の公子さまの欠席理由って……そういうことだったわけか」

ガガが呟く。

「フィリアス公子さまったら、中身はガキのくせに、やることだけはしっかりやって……ナデイル……？」

ナデイルは、うつむいていた。

肩が小刻みに震えている。

心配になったガガが覗き込むと、ナデイルの顔には苦しげな微笑みのようなものが張り付いていた。

笑いたいのを無理やり必死で我慢しているような顔だった。

「ナディル、笑ってる……？ 泣いてるのかと思ったよ？」

ナディルは顔を上げ、呟く。

「見つかったよ」

「え？」

「『翡翠のナディル』は泣かないってば。今は笑いたい気分。自分の愚かさや甘さ、迷いなんかをね。とどのつまり、現実には厳しいってことだ。たとえどこに行こうとも、何をしようとも、>戦い<は必ずくつついてくる」

ナディルは、笑いを噛み殺しながら言った。

「お話というのは？」

ナデイルのために用意された客間に、フィリアスが入ってくる。彼は、ナデイルがドレスに着替えず、まだ旅の衣装のままにいることに、少し疑問を持ったようだった。

ドレスと装飾品は、首飾り以外は、召使いが持ってきたそのままの状態で客間に置かれていた。

ドレスは、ウィーカが選んだという、垢抜けた形の美しい薄紅色のもの。装飾品は、それほどの派手さはないが、翡翠をふんだんに使ったものだ。

ガガは所在なげに、翡翠の首飾りをテーブルに乗せて遊んでいた。首にかけたエリユースの鈴が、時たまチリンと涼しげな音をたてる。

「お返事をいただけるのでしょうか、ナデイル王女。私の求婚に対するお返事を？」

フィリアスは、問いかけるようにナデイルを見つめた。

アメジストの目が、期待と緊張に満ちて輝いている。

「取りあえず、座ったら？」

ガガが言う。

フィリアスは、どこか居心地悪そうに椅子に腰を下ろした。ナデイルも続いて、フィリアスの向かい側に静かに座る。

「フィリアス公子。あなたのご厚意には感謝します。鏡から助けていただいたことも、感謝しております。ですが……」

ナデイルはしばし黙り、それから心を決めたように続けた。

フィリアスに、きちんと説明しなければならない。

たとえば彼にわかってもらえなくても、誠意を込めて。

「アーヴァーンは一夫一婦制です。王族は側室がいたりしますが、それは例外として」

「あなたのお父上も、例外に入りますよね？」

フィリアス公子が訊ねる。ナデイルは、頷いた。

「子供の頃から疑問に思っていました。なぜ父の妻は、他の一般家庭のように私の母だけではないのだらうって。私はその慣習を受け入れることが出来ませんでした。今でも受け入れてはいません。私がアーヴァーンの城を出た理由のひとつは、そのせいもあると思います」

「しかし、側室というのは、便利で大切な制度でもあるのですよ。相手の身内を娶ることで、敵を味方にも出来ます。味方とはさらに、その結束を高めることが出来るのです。外国の王家とも、円満に付き合っていけますし、臣下たちとは信頼が深まります。また側室を下げ渡した臣下とは、新たな絆が結ばれるのです」

「私も昔、側近の公爵から同じようなことを言われました。でも私は、自分の夫になる方の妻は自分だけでないと納得が出来ません。私が安らぎと平和を得る家庭を作るためには……」

「だが、ナデイル王女。正妃はあなただけですよ。たとえ側室が何十人いようと、大公妃はあなただけ。あの翡翠の冠を贈られるのは、大公妃だけです。そして次期大公になるのは、大公妃が生んだ子供なのですよ」

フィリアスが、困ったように言う。

「大公妃が男の子を生めば、でしょう」

ナデイルは、ふつと溜め息をつく。

「まあ、それが大公妃の仕事でもあるわけです。オーデルクの大公になれるのは、男子だけですからね。アーヴァーンの国王はそうではないようですが。もちろん私も、惜しみなく努力はしますよ」

フィリアスが、少し頬を赤らめた。

「もう男の子は生まれています。公子さまは、ウィーカさんを正妃にしてあげるべきなのではないでしょうか。それがいちばん大公家がまとまっていけることだと思うのですが？」

ナデイルが言うと、横でガガが翡翠の首飾りを回しながら、深く頷いた。

「え？ 何ですか？ 彼女は大公妃になるには、身分が低すぎますよ。私よりかなり年上ですしね。なに、彼女のことならご心配はいりません。分をわきまえていますからね。きっと大公妃を何かと助けてくれるでしょう。他の側室たちも、こぞって素晴らしい女性たちですよ。皆、とても穏やかで仲がいい。あなたの力になってくれると思いますよ？ 男の子が生まれなければ、大公妃であるあな

たがウィーカの子供を養子にすれば済む話ですし？」

フィリアスが不思議そうに言う。

「わかってないよな」

ガガが、さらに首飾りを激しく、ぐるぐると回した。

「フィリアス公子。あなたはきっと、どの側室にも等しくおやさしいでしょう。側室の方々はそれに満足され、その慣習を当たり前のこととして受け入れておられるのかもしれませんが。でも、私にとってそれは当たり前のことではありません」

「オーデルクの慣習にご不満なのですか？　ですから、大公妃は他の側室たちとは違いますよ？　表向きには、私の妻はあなたひとりということになりますから」

フィリアスが首をかしげた。

「あなたの奥方は、あの二十五人の女性たち全員です。私がここに入れば、きっと私は争いの元凶となる。ここの調和を乱してしまう。あるいは、私自身が病になってしまう。私の母のように……。母は、覚悟を決めて側室のいる父と結婚したのでしょうけれど、やはり耐えられなかったのだと思うのです。私が幼い頃、母は、父が側室の子供たちと遊んでいる姿をとて寂しそうに眺めていました。母の思い出はあまりありませんが、その姿だけは今でもはっきり覚えています。私が求めているのは、配偶者として私だけを愛し、私だけに安らぎをくれる、たった一人の男性。それは、ごく普通の少女にはありふれた望みであり、当然のごとくに与えられる未来でもあります。王女としては、我がままで贅沢な望みなのかもしれません。」

でも、私はそれを求めずにはられないのです」

「ええっと。つまり、その……私はあなたに、あなたの望むものを差し上げられないということなのでしょう……？」

フィリアスが、ためらいがちに確認する。

「うん。ご明察。平たく、且つやわらかく言えば、そういうことだ」と、ガガ。

「男だったら、すっぱりきっぱり潔くあきらめようよ、公子さま」

フィリアスの整った美しい顔が、たちまち崩れた。

「そんな……。非常に……。非常に残念です……。私の父も残念がるでしょう。あなたをととても気に入っているというのに。あなたにお会いするのをとても楽しみにしていたのですよ……」

フィリアスは、今にも泣き出しそうな子供のような顔をする。

ナデイルは、何か自分がとても意地悪ないじめっ子になったような気分になった。

けれども、彼にこういう顔をされてそんな気持ちになった女性は無数にいたのだろうし、それを増幅させて自分の意見を撤回した女性もまた数多くいたに違いないと、冷静に思い直す。

「私もとても残念です。大公さまにはよろしくお伝えください。私は『翡翠のナデイル』として、大公さまにはお会いせずにオーデルクを離れます」

フィリアスは、長い溜め息をついた。それから自分を納得させる

かのように、口元に弱々しい微笑みを浮かべて頷いた。

やがて彼は静かに立ち上がり、うなだれながら、ふらふらと部屋から出て行く。

その悲壮感漂う背中を見送って、ナディルはさすがに後ろめたさを感じた。

「私、ちゃんと上手に断れたのかな。公子さまを傷つけたんじゃないかな」

ナディルは、フィリアスに負けなくらいの大きな吐息を出して、呟いた。

曲がりなりにも、自分に特別な存在として思いを抱き、求婚してくれた相手だ。

やはりその彼を自分の言動によって落ち込ませるようなことはしたくはなかった。

けれども、結局申し出を断ったこと自体が、どう逃れようと彼の気を悪くさせてしまったことに間違いはない。

「まあ、今まで側室たちに結婚を申し込んで、断られたことはきつとなかっただろうな。でも、少しぐらい傷ついたほうがいいんだよ、あの人は。傷つく前よりは多少大人になれる。周り、特に女性からはいつも手を差し伸ばしてもらって、何でも思い通りになる生活をしてきたのだろうからね。そうならないこともあるってことを学習しなきゃ。それが公子さまのためでもあるんだよ。あの魔法の鏡になーんにも映らなかったなんて、一国を担っていくには問題があるすぎる。たとえ無意識に立ち回りがうまい才能を持っていたとしても」

ガガが言った。

「おつしやる通りですな。私もあれの性格には、一抹の不安を覚えるところですが」

扉の影から、誰かがガガに同意する。

ナデイルとガガが振り返ると、そこには一人の人物が立っていた。腰くらいまでもある、柔らかく波打つ金の髪、透明なアメジスト色の目。

歳はナデイルの父と同じ年代くらいだろうか。

ゆったりとした着心地のよさそうな衣装に身を包み、優雅な姿勢で扉に軽く片手を添えている。

その指には、幾つもの翡翠の指輪が輝いていた。

そして何よりも特徴的なのは、その人物がフィリアスによく似ていたことだ。

「うわ、これまた公子さまをそっくりそのまま老けさせたようなオジサ……」

ナデイルは、素早く立ち上がる。

「オーデルクの大公さまだ」

「ひいっ!」

ガガは、両手で口を押さえて飛び上がる。

ナデイルは、大公に軽くお辞儀をした。

大公は人懐こい微笑みを浮かべながら挨拶を返し、ナデイルの部屋に入ってくる。

「しかし、まあ、あれも短期間で立派に冠を探してきましたのでね。

やはり、何やら妙な嗅覚というか才覚というか、そのような天分を何か持っておるようです。大公となっても心配はいらないでしょう。しっかりした側室も付いておることですし、側近たちも頼れる逸材ばかりですしね。ナデイル王女、お会いできて光栄です」

大公は、フィリアスが先程まで座っていた椅子に、どっかりと腰を下ろした。

彼はフィリアスの年齢からすると、ナデイルの父よりも幾らか年上なのかもしれないが、それよりもはるかに若く見えた。

ナデイルは、この年代でこれほど美しい男性に会うのは初めてだった。

確かに顔には年齢に応じた皺が刻まれてはいたが、それは彼の魅力を引き立てる飾りにしか過ぎなかった。

顔だけではなく、彼の体全体が、内部から生命力が常に溢れ出ているかのように、しなやかで若々しい。

彼のアメジストの目に見つめられて頬を染める娘は、案外多いかもしれないかった。

「ナデイル。私はあなたが欲しかったのですよ、フィリアスの妃として、ぜひ我が大公家にお迎えしたかった。実は、あなたが生まれたときからそう望んでおりました。十七年前、アーヴァーンの正妃に姫君が出来たと聞いて、踊り出したい気分でしたよ。フィリアスに願ってもない伴侶が現れたかもしれないねと」

大公が言った。

「公子さまから伺いました。私をことのほか気に入ってくださいましたとか。ご期待に添えなくて申し訳ありません」

「いや。アーヴァーンの姫君にふられるのは、オーデルクはもう慣

れていますからね。オーデルクの男共は、いつもアーヴァーンの姫君たちに振り回されっぱなしです。かく言う私も、あなたの母上に片思いでしたな。そういう理由でも、あなたが欲しかったわけなのですが」

「母に……ですか？」

大公は、ナデイルの翡翠色の瞳でまじまじと見つめられ、嬉しそうに微笑んだ。

「若かりし頃の話ですがね。舞踏会でお相手をしていただいて、一目惚れでした。しかし、お母上は従兄の公爵に嫁がれるという噂を耳にしましたので、躊躇しておったのです。そうしましたら、何ということが、アーヴァーンの国王とご結婚されて王妃さまになってしまわれた。ぐずぐずとためらっていた自分を呪いましたな」

大公は明るく、はっはっはと笑った。それから少し神妙な面持ちをして、ナデイルを覗き込む。

「ナデイル王女。では、これから銀の猫を探しに行かれますのかな？」

「いえ、それは……」

ナデイルは思わず視線を宙に漂わせ、その後すぐにそれを床に落とした。

「またしても我が大公家の男は、銀の猫に姫君をさらわれてしまうのですかね。まあ、それは詮索するのはやめておきましょう。とにかく、あなたがご無事でよかった。それでも私は、あなたを心配し

ておったのですよ。あなたが王位継承争いに巻き込まれてしまったのではないかと。あなたは離宮にはおられなかったようですね」

「ありがとうございます、心配してくださつて。でも……ご存知だったのですか？　アーヴァーンはそのことを隠していたはずなのに？」

「オーデルクは、アーヴァーンよりも小さな大公国です。生き残っていくためには、それなりに細かく情報網を張り巡らせる必要があるのですよ。さすがにあなたの消息まではわかりませんでしたかね。『翡翠のナデイル』があなただということも」

大公は、にやりと笑った。

「もちろん心配していたのは、私だけではないと思いますよ。あなたの近しい方々は、私などには比べ物にならないくらいにご心労のことかと」

「そうですね。耳が痛いです」

ナデイルは、呟いた。

「しかし、あなたが行ってしまわれるのだしたら、息子の嫁にふさわしい姫君を改めて探さなくてはなりません。また悩みが増えてしまいますよ」

大公は、おどけて大袈裟に頭を抱えて見せる。

「フィリアス公子の正妃は、やはりお迎えされるのですか？」

ナデイルは、大公に訊ねた。

「調和が乱れますかな？ 先程フィリアスに、そのようなことを仰つておいででしたね。確かに今は、ウィーカが何かと仕切つておるようですが。しかし、正妃は必要ですよ。他国に誇れる血筋で、且つアメジストの目をした公子を産んでくれる、若い正妃がね」

大公は、自分の目を指差した。

フィリアスそっくりのその目は、冷たく静かな宝石よりもはるかに瑞々しい、深い紫の美しい色合いをしていた。

「これは我が大公家の特徴であり、印でもあります。私の孫は、髪は私やフィリアスに似ましたが、目の色は母親に似てしまった。彼は将来、そのことで不利になるかもしれません。他の側室や未来の正妃にそんな目の弟が生まれれば、ですがね」

「アメジストの目。それを持っていることが大公の条件になるのですか？」

ナデイルが質問すると、大公は穏やかに笑う。

「頭が古くて固い連中は、そういうくだらないことも気にするものなのですよ。ルビーで次期国王を決めるアーヴァーンもまた然り、ですな」

「そうですね。良くない慣習だと思います。変えていかねばなりません」

ナデイルが言うと、大公は一瞬驚いたようだったが、引き続き口元に笑みを浮べた。

「これは頼もしい。ナディル王女、今度あなたにお会いするときは、女王陛下となられて、アーヴァーンの玉座に座っておられるやもしれませぬな？」

「それは、国王である父が決めることです」

「ほう、ルビーではなくお父上が、ですか」

ナディルは頷く。

大公もまた満足そうに頷いた。そして頼杖について、ナディルを遠慮会釈もなく、真正面からじっと眺める。

ナディルは、そのアメジスト色の目を臆することなく見つめ返した。

「ぜひとも、女王となられたあなたと舞踏会で踊ってみたいものです。もちろん、その時には踊ってくださいますね？　ところで、ナディル。私はまだ片思いをあきらめてはおりませんよ。将来、あなたが夫となる方との間に姫君を設けられたなら、ぜひ私の孫の正妃としてお迎えしたい」

「大公さま。それはあまりにも先走りすぎですよ。未来がどうなるかなんて、誰にもわからないんですから」

ガガが、たしなめた。

大公は、ガガにも温かな眼差しを向ける。

「いや、小さな金の竜殿。時間なんぞ、あつという間に過ぎ去ってしまいます。はるかなる昔から生きてこられたあなたは、そのことをよくわかっておいでのはず。そして未来が見えなくて不安だから

こそ、我々は様々な角度から先を読むことを試み、あらゆることに備えなければならぬのです。婚約が早ければ、そちらのご意向で側室を娶るのを止めることもできますしね。どちらにしろ、オーデルクはアーヴァーンに片思いをし続けるでしょう。猫族の血を引く、アーヴァーンのかわいい姫君を得られるまではね。ナディル。あなたの戴冠式と結婚式には、ぜひ出席させていたきたいものですな」

オーデルク大公はナディルの手を取り、うやうやしく唇をつけた。

「まあ、結局よかったじゃない。断る理由が見つかったさ」

ガガが、ナデイルの頭の上で言った。

「ナデイルはお人好しなところがあるというか、育ちがいいというか、何せ律儀に断れる理由、もしくはきつかけを探していたんですよ」

「探していたってほど積極的じゃなかったよ。消極的に、ただ待っていたかもしれない。オーデルクを去れる口実が、何か現れてくれるのをね」

「じゃ、ま、一応自覚はあったわけだね。ナデイルがナデイルらしくないことをしようとしてるってこと」

「あのまま流されてもいいかなってというのは、確かにあったと思う」

ナデイルたちの背後の丘の上には、先ほど出立したばかりのオーデルク大公の城が、相変わらず白いお菓子のように広がっていた。白いお菓子の外壁は、傾いた太陽の光を受けてほんのりと薄い紅に染まり、きちんと並んだ窓は、橙色の飴を薄く切り取って嵌めこんだようにも見える。

ガガは、鼻歌を歌い出しかねないほど機嫌がよさそうだった。

ぴんと背筋を伸ばし、ルビーの目で前方を伺う。

その頭は、ナデイルを乗せた馬の揺れに従って、軽く上下した。フィリアスから約束の報酬として支払われた上質の翡翠は、荷物

の奥深くにしまいこまれている。

これからは、野宿とは無縁の生活になりそうだ。

それもまた、ガガの機嫌がいい要因なのかもしれない。

彼は、いつになくぺらぺらと喋り続けた。

「それにしても、あのオーデルク大公のおやじ、側室が六十人以上いたっていうの、何となくわかるような気がするな。ぼくから見ても、艶っぽいというか、精力的というか。それに、やり手だよ。公子さまは何も考えてないけど、大公さまはとも考えている」

「魅力的な人だね。フィリアス公子も年を取ったら、あんなふうになるのかな」

「たぶん外見は確実にね。何十年後かに公子さまと舞踏会とかで会ったら、確かめてみればいいさ。だけど、公子さま、翡翠のナディルを側室にしようと狙っていたなんて、あきれてものも言えないね」

「側室じゃなくて正妃だよ。未来のオーデルク大公妃」

「ナディル王女さまはね。翡翠のナディルは側室だ。とにかく大それた考えだよ。思い上がりもいいとこだ。ナディルが断つてよかった。アーヴァーンに使いでも出されてたら、身動き取れなくなるところだったし。それまでにオーデルクを出られて、ほんとよかったよ」

ガガは、何度も頷いた。

「よかった、か。それで、嬉しそうなんだ？」

ナディルは、まだしつこく頷いているガガに声をかける。

「だって、『翡翠のナデイル』ともあるう人が、見ていられなかったもの。気持ちはわかるよ。落ち込んでるときに、目の前に『幸せな結婚生活と未来』が、確かなものとして降りてきたんだから。つついてみたくもなるよね。公子さまは見た目もいいし、助けてもらった恩もある。あの魔女を抱きしめたときも、確かにかつこよかった」

「フィリアスの厚意とやさしさにすがってもいいかなって、少しでも思ってしまったのは浅はかだったな。オーデルクの大公妃になったら、すべて丸くおさまって樂できるかもなんてね。少々自己嫌悪だ。君主の家なら、どこに行っても大変だということは当たり前なのに」

ナデイルは、呟いた。

「仕方ないよ。ナデイルだって、やっぱり若い女の子なんだもの。王女さまやってたって、賞金稼ぎやってたってさ。夢見る少女であることに変わりはないさ」

「ありがとう。包括的な励まし方をしてくれて。ちょっと苦し紛れっぽいけど」

ナデイルは、微笑んだ。

やはりガガは、ナデイルの気晴らしになるように、いろいろと賑やかに喋ってくれているのだろう。

ナデイルは、彼のそんな心遣いを嬉しく思う。

「何の。しかし、フィリアス公子さまは基本的にはいい人だけど、やっぱり側室二十五人はまずいよなあ。それも、これから確実に人

数が増えそうだしな。たったひとりの側室で苦勞してきたナデイルが、首を縦に振るはずもないんだ。でも、公子さま、ナデイルが何で断ったのか、一生わかんないんだろっな」

「オーデルクが、これから平和でありますように。そう願わずにはいられないよ。フィリアスのんびりしていても、奥方たちは戦っているんだと思う。たとえ国の慣習で、表向きがどんなに穏やかに見えたとしてもね。そうすることで、大公家は大公を頂点に均衡が保たれて、うまくいつてるのかもしれない」

「大公は、女性たちの嫉妬を巧みに利用してるってわけだ。外から見ると穏やかでのんびりしていても、やっぱり中ではいろいろあるんだよね。まあ、あれだけ女性がいて、いくら調教……いや、慣習ってことで納得させられてたとしても、何もないわけがないよね。何も無いほうが、不自然で不気味ってもんだ。表に出ない分、ねちねちと凄まじかったりして。ばくが長年見てきた経験上でも、そう感じるね」

「側室の子供も気の毒だよな。どうしても自分の力では越えられないものに常に悩まされる。私の兄さまたちも辛かったんだと思う」

「だからお妃も頑張っちゃったんだろうな、周りの思惑も巻き込んで。あのかわいい公子さまの公子さまの行く末に、幸多からんことを」

ナデイルは、あの薄緑の目をした年上の美しい側室のことを思っている。

公の席でフィリアスの隣に並ぶことが許されるのは、常に彼の正妃。

どんなに心を傷つけられて叫びたくても、彼女はそれを押し殺し、

聡明でしつかりした第一側室として、家庭内のさまざまなことに采配を振らねばならない。

そして、たとえ懸命に大公家に尽くしても、彼女は決して側室以上のものにはなれないのだ。

それが、もう既に決められてしまっている彼女の未来。

どれだけ苦しいことだろう。やるせないことだろう。

それとも彼女は、そんな感情は心のどこかに閉じ込めて、賢くやり過ごして行くのだろうか。

ナデイルは、お妃　父の側室と彼女を重ねてみた。

側室たちもまた、それぞれにさまざまな思いを抱えて生きている。自分の境遇の中、精一杯に。あるいは、したたかに。

そんな彼女たちに対抗するには、やはり自分も過酷な戦場に身を置かねばならないだろう。

「公子さま、そのうちあの魔女を二十六番目の側室に、なんて言い出すんじゃないだろうな。あの性格じゃ言い出しかねないぞ。いや、公子さまよりか大公のほうが目を付けるかも。あの人、結構きれいだものね。二人して、あの魔女の城に入り浸ってたりして」と、ガガ。

「ま、あの人がそれを受け入れるなら、別に構わないけどさ。公子さまは、あの人の婚約者によく似ているらしいし。ってことは、大公も似てるんだろうし。側室とはいえ、今の魔女の境遇よりは、はるかにマシだ。大公家の一員としてそれなりに身分は保証されて、終生敬われるもの」

「何気にカジエーラの幸せを願ってあげてるの？　彼女も気の毒な姫君だものね。あなたは妙に絡んでたけど、実は彼女のこと気に入ってたんじゃない？」

ナデイルは、くすつと笑う。

ガガは、不満そうに鼻を鳴らした。

「何であんな婆さんを。あの人は薄幸の姫君っていうより、やつぱりぼくにとつてはおつかない魔女だからね。しかし、あの人の婚約者だった昔の大公さまは、側室なんかいなくて、あの人だけだったわけでしょ。後に結婚もしなかった。たいした大公さまだったんだね」

「とても素敵なお人だったんだろうね。だから、今でも彼女は彼のことを思ってる。百五十年も前の恋なのに」

「じゃあ、やつぱり彼女がフィリアスや大公の側室になるなんてあり得ないね。申し込まれても、笑止じゃ！<とか言つて、断つちやうだろうな」

「きつとそうだろうね。カジエーラは、見た目はあんなだけど、すごく大人なものね。欲なんかもないし」

「同意！ いつもぼくは彼女に絡もうとして、結局ガキ扱いされて空回りさせられてた気がする……。ところで、ナデイル。当面の目的地は？ 予定通りというか、仕方なくというか、何せアーヴァーンに帰る？」

ガガが、雑談を中断して確認する。

「うん。でも、もう少し士気を高めてからにしたい。あの場所に帰るってことは、戦うってことでもあるわけだから。雑念を払って、心を研ぎ澄まさないや。私はもつと強くなりたい。もうしばらく賞

金稼ぎの仕事をして、それからかな。カジエーラにはちょっと待ってもらわなきゃいけないね」

ナデイルは、答えた。

「ま、婆さんはいつまでも待たせとけばいいさ。そのほうが長生きするだろ」

ガガは、おもむろに後ろを振り返る。

そして、薄紅の空の下に広がるオーデルク大公の城をしみじみと眺めた。

「おいしそうだな。あんなお菓子が食べたいな」

「食べようか。今夜は高級な宿に泊まって、豪華に行こう」

ナデイルが提案する。

「当然だよ。『翡翠のナデイル』は、今、その目の色と同じ翡翠をしこたま持っているんだものね」

ガガは言って、ぺろりと舌なめずりをした。

「こき使って悪かったの。疲れたじゃろう」

カジエーラは彼の前に、白い陶器に入ったお茶を置いた。暗いガーネットのような、落ち着いた美しい色のお茶だった。甘さを含んだ清々しい香りが、あたりに漂う。椅子にゆったりと腰を下ろしていた彼は、軽く会釈をした。

「おかげで大広間は、以前よりも美しくなった。鏡のかけらは微塵もない。当分掃除する必要もないじゃろう」

「お役に立てて光栄です」

彼が言った。

「やはり男おのこが二人いると、片付くのが早いのもう」

「そうですね。しかし、ほとんど彼がやってくれたようなものですよ。私はやはり、年ですので……」

彼　デュプリー公爵が、向かいの席に座ったカジエーラに微笑んだ。

デュプリーは、カジエーラが入れたお茶の色を目でも楽しみながら、それをゆっくりと味わう。

熱いお茶は、疲れた体の隅々にまで、心地よく染み渡って行くようだった。

こんなに細々こまごまと気持ちよく体を動かしたのは何年振りだろう。デ

ユプリーは思う。

「ナデイル王女に会えなくて、残念じゃったのう。まあ、王女たちがここに來たのは、何ヶ月も前のことじゃがの」

カジエーラが言った。

「いえ。きつとまた近いうちにお会いできると思っておりますよ。それにナデイルさまのことは、それほど心配してはおりません。ご無事でお元氣にしておられると伺ったところですしね」

「ならば、よいがの」

「しかし、賞金稼ぎをしていらつしやつたとは驚きました」

「あの姫もまた、多少なりと猫族の血を受け継いでおるからの。人の出来ぬことがいろいろと出来るのであるうな。しかし、あの姫がひとりで外に放り出されても生きていけるように仕込んだのは、そなたなのであろう？ それこそ賞金稼ぎであるうが、傭兵であるうが」

カジエーラが訊ねる。

「お見通しでしたか。確かにそういう時がくるのではないかという予感を持って、姫君を強くお育て申し上げましたが」

デュプリー公爵は、屈託なく笑った。

「そういえば、『翡翠のナデイル』がオーデルク公子の側室の申し込みを断ったとか。そんな噂を最近賞金稼ぎたちから聞きましたよ」

「ほう。やはりあの公子、能天気なようでいて、思いの外やり手なのじゃな。それとも、周りの者の機転なのかの。アーヴァーンのナデイル王女がオーデルク公子の正妃の申し込みを断ったのでは、何かと支障があるからのう。両国の友好にも関わるやもしれぬ。翡翠のナデイルならば、彼女の武勇伝じゃ。しかし、するとあの姫、そういう結論を出したのじゃな。確かに心配はいらぬかもしれぬの。私も安堵した」

「私が心配なのは、あなたですよ、カジエーラさま」

デュプリー公爵が心持ち真剣な表情をして、カジエーラを見つめる。

「私が？ 何でじゃ？」

「あなたはこのような寂しいところで、たったおひとりで暮らしておられる」

「年寄りの気楽なひとり暮らしじゃ。寂しいと思ったことはないぞ。そのようなやわな感情は、鏡の中に捨ててきた。百年以上も前にな」

「カジエーラさま。もしよろしければ、私の城においでになりませんか？」

デュプリー公爵が、少しためらってから言った。

「そなたの城に？」

カジエーラは、首をかしげる。

「私の祖先……祖父の祖母だったと思いますが、ファルグレット侯爵家から嫁いできたといえます。あなたとは血が繋がった親戚なのですよ。ですから、あなたのことがとても気になるのです」

デュプリー公爵が言った。

「ほう。そなたがのう。そういえば、私の叔母の一人は、当時のデュプリー公爵に嫁いでおったの。子供の頃、結婚式に出席した記憶があるぞ。では、そなたとは遠いところ同士になるのかの」

それからカジエーラは、声をひそめて呟いた。

「ならばそなたも、人前で王家のルビーには触らぬことじゃな……」

「は？」

デュプリー公爵が聞き返す。

「いや、こちらの話じゃ」

カジエーラは、いたずらな少女のように肩をすくめた。

「ぜひ私の城をご実家だと思いいなって、ご自由に滞在していたければ、と思うのですよ」

デュプリー公爵が続ける。

「じゃが、私はアーヴァーンには入れぬ。出奔したファルグレット侯爵がアーヴァーンに戻らぬ限りはな。ナディル王女にもそう言わ

れたぞ」

「ファルグレット侯爵家の姫君としては、でしょう。私の大切な友人としては、いつでも入れますよ」

「王女もそう言っておったわ。さすが王女の師匠じやの」

カジェーラは、くくつと笑った。

「じゃが、私はここで暮らしていく。ここが気に入っておるので。う。オーデルクの公子殿も遊びにくると言っておったしの。何ならそなたも遊びに来るか？」

「おお、喜んで。私は、近いうちに引退致します。独り身ゆえ、自分の城にいても時間を持て余すだけ。ならば、ここでカジェーラさまといろいろお話をしたいと存じます」

「いろいろ忙しくなるのう。そろそろや々と大公さまのおそばに行けると安堵しておったのじゃが。大公さまには、私があちらに参るのもう少し待っていただかねばならぬかのう」

「そうですとも。長い間お待ち願ったのですから、この際もう少しそうしていただいてもよろしいかと」

二人は、穏やかに笑い合う。

カジェーラは、二杯目のお茶をそれぞれの器に注いだ。

ポットを持つカジェーラの指には金の猫が抱くルビーの指輪はなく、その代わりに大粒のオパールが嵌められた銀の飾りが、細い手首に通されていた。

オパールの腕輪はカジェーラが動いたたびに、落ち着いた七色の輝きを放つ。

「ところで、彼は？ 姿が見えないようですが」

デュプリーが訊ねる。

「先ほど発った。あわただしいことじゃの。鏡を片付ける間に、私から聞かされた話で十分と見える。もうこの城に用はないのじゃろう。まあ、若い者はいつも眩しいくらいに元気であわただしい。そうして未来をその手に掴み取って行くのじゃろうな」

カジェーラは答えて、花の香りの熱いお茶を口に含んだ。

『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』は、いつ訪れても旅人たちを同じように迎える、心地の良い宿だった。

庭にひしめき合うように茂る常緑樹、その緑を薄めて塗ったような外壁、ほのかに漂う薬草の香り。

今宵も宿の主人はむつつりとカウンターに座り、その周囲のテーブルには客たちが陣取る。

客たちは思い思いに食事や酒を注文し、静かにそれぞれの時間を過ごしていた。

『翡翠のナデイル』は頭に生きた竜を乗せ、いつもと同じように、宿の主人の前に金貨を積み上げる。この宿を利用するのは、四度目くらいだった。

「翡翠のナデイルさんというのは、あなたですか？」

相変わらずでつぷりと太った主人が、訊ねた。

「何か？」

いきなり名前を言われて、ナデイルは眉を寄せる。

ここに泊まるときは、名前を明かす必要は、もちろんなかった。

主人に自分の名前を口にされるのは、初めてのことだ。

ガガもびつくりしたのか、背ビレがぴんと起き上がった。

透明なヒレが広がって、ナデイルの生きた兜は、さらに豪華さを増す。

「あなたを探しておられる方が……。ほら、あの方です」

主人は、ガガの様子を気にかけながら、ナデイルの背後を指差した。

ナデイルより先に、ガガが主人の指差した方向を素早く振り返る。その透明なルビーの目が、大きく見開かれた。

「ナデイル、あの人……」

「え？」

ナデイルは、振り向いた。

数ヶ月前フィリアスが座っていた席に、若者がひとり、フィリアスよりは行儀悪く腰掛けていた。

彼は頬杖をついて、気だるそうにナデイルに手を振っている。栗色の髪と、夏の空を思わせる明るい青の目。

「レオン……！！」

「この間、ゼノアの町で一緒に話してた人だよね」

ガガが呟く。

「確か賞金稼ぎ仲間だった。なーんだ、緊張して損した」

ガガの背ビレは、たちまち力を失って寝てしまった。

ナデイルは、レオンの隣に座った。

テーブルの上には、豪華な料理と高級な酒が、所狭しと並べられ

ている。

「翡翠のナディル。いや、ナディル王女さま。指輪は確かに渡したよ。デュプリー公爵に」

酔いで顔を赤くしたレオンが言った。

「ありがとう。ご苦労様でした。報酬はもらえた？」

「うん。たっぷり」

レオンは、片目をつぶって見せる。

「あの爺さん、気前がいいな。好きだよ。おかげで今夜もこんなに贅沢が来ている」

それからレオンは、少し真面目な顔をする。

「ところで、ナディル。『化け猫エリユース』って知ってる？」

「……」

ナディルの体は、一瞬のうちに凍りついたようになる。

オーデルクを出て以来、エリユースの消息は聞かなかった。

彼の名を誰かの口から聞くのは、あれ以来初めてだ。

しかも再会したレオンから、いきなりその名が出るとは。
。

「エリユース。賞金稼ぎだよな」

ナデイルは、しばらく言葉を選ぶのに迷い、結局そう言った。

レオンは何を話そうとしているのか？

エリユースに関する何を……？

「そ。かなりの腕のね。なぜか『化け猫』なんて呼ばれてるけど、相当の美形だよ」

ナデイルと深い関わりがあつたとは露知らず、レオンは能天気 continué 続けた。

「彼が、何か？」

ナデイルは、首筋に接するガガの尻尾を一際冷たく感じた。

耳と頬が熱い。

レオンに訝しがられてはならないというのに。

「アーヴァーンのナデイル王女は、オーデルクのフィリアス公子と行動を共にした後、また行方不明だ。それで、今度は国王が賞金稼ぎたちに泣きついたってわけ。国王、つまり、むろんあなたのお父上だね。相当あなたのことを心配してるみたいだよ。で、選ばれたのが化け猫エリユース。デュプリー公爵が指名したんだ。内密のことだよ。ぼくは、デュプリー公爵から聞いた。あれから彼は、とき仕事をくれるんだ」

何気なく、世間話でもしているかのように動くレオンの唇が、ナデイルには妙にゆっくりと見えた。

「なんてこった……」

ガガが呟く。

「エリユースは……引き受けたの？」

ナデイルは、レオンの空色の目を覗き込む。
眩しいくらいに明るい色だった。

「いや、断ったよ」

レオンの答えに、ガガが溜め息をついた。

「でしょうね。彼は当然、断るよ」

ナデイルは、ふつと微笑んだ。

何を期待していたのだろう。

レオンが口にした答えは、当たり前のことではないか。

ナデイルは、ひそやかに自嘲する。

「ちょっと違うかな。報酬と……それから、一族の再興だっけ。国王はその二つを提示した。あの人、実はアーヴァーンの侯爵家の人らしいよ。ナデイル、知ってるんじゃないの？」

ちらりとナデイルの顔を見て、レオンは続ける。

「でもエリユースは、そういうものはいらないって辞退したんだ。賞金稼ぎとしてではなく、そもそもって侯爵としてではなく、自分のためにナデイル王女を探すってね。彼は、そう言ったらしい」

「えっ」

ガガが、ナデイルの頭の上で、金で出来た彫像のように固まった。

「私を探すって……？ エリユースが、そう？」

ナデイルは、かすれそうになる声を絞り出す。

「自分のためってどういうことだろ？ デュプリー公爵に聞いたけど、教えてくれなかったよ。にやにや笑うばかりでさ。ナデイルとエリユースって、どういう間柄？」

レオンが訊ねる。

「自分の幸せのために、だろ。そういうことさ」

ガガが言った。

「そんなはずない。だって……だって、エリユースが鏡の中に映したのは……」

ナデイルは、うつむいた。

彼が鏡に映したのは、自分が死んだ姿だ。

棺の中で花に覆われ、息絶えたナデイル王女。

それは彼の望み。願い。

自分はもう、彼の心の中ではそういう存在だという意味。

「きっと誤解だよ、ナデイル。エリユースはナデイルのことを思ってる。間違いないよ！」

ガガが叫ぶように言った。

「え？ え？ えー？」

いきなり話についていけなくなったレオンが、ナディルとガガを交互に何度も見比べる。

「彼は気が付いたんだよ、自分の気持ちに。呆れるくらいに遅いけどね。そして、やーっと行動に移したわけなんだ」

「そう……なの？ だけど、そんな……」

「そうに決まってるさ。でなきゃ、エリユースは自分のために探すなんて言わないし、デュプリーの爺さんがにやついたりするもんか。あの人、人前では滅多に笑わないんだぜ」

「でも……でも……」

「そうだってば。永年のぼくの経験でも間違いないね。間違ってたら、アーヴァーン王家のルビーになってやってもいいよ」

ガガが胸を張った。

「そんなことって……」

どこかでけたたましい笑い声が起こる。

苦しげで、けれども爽快で、とても明るい笑い声だった。

その声を自分が出していることに気が付いて、ナディルはさらにあきれ、可笑しくなった。

二年間の悲しみも涙も眠れない夜も、すべて飴のように溶け、笑いに変換されて途切れなくこみ上げてくる。

ずっと胸に抱き続けた思い。それは、ちょっとやそつでは出し尽くされるものではなかった。

ナディルは、周囲の客たちの注目を集めるくらいに、大声で笑い続けた。

「あのー……」

レオンが助けを求めるように、ナディルの頭の上のガガを見る。ガガは肩をすくめた。

ガガ自身も、ナディルがこんなふうに笑うところは見たことがなかった。

ナディルとは長い付き合いだったが、初めてかもしれない。

「ナディル、何か悪いもの食った？」

レオンが心配そうに言う。

「ごめんなさい。でも、止まらなくて……。ね、レオン。ナディル王女が翡翠のナディルだってこと、エリユースは知ってるの？」

ナディルは、レオンに訊ねた。

「知らないと思うよ。少なくとも、ごく最近までは。この間、賞金稼ぎたちの間であんたのことが話題になってさ。その場にエリユースもいて、『翡翠のナディル』とぜひ一度お手合わせ願いたいものだね、とか何とか、のんびりと言ってたよ。でも今頃、とうに気づいてるかもしれない。『化け猫エリユース』が本気を出して調べりゃ、簡単にわかるだろうしね。そういえば、この前デュプリー侯爵とエリユースが、一緒にどこかに出かけたらしい。あんた絡みのことだと思う。ナディル、気をつけないとアーヴァーンに連れ戻され

るよ。帰りたくないんでしょう？ 誰かを探してるんだっけ？」

レオンが、再び真面目な顔をして言った。

「そうだね。ようく気をつけるよ。ありがとう、レオン。あなたとここで会えて、本当によかった」

幾分収まってきた笑いを押さえつけながら、ナディルはレオンに答える。

ナディルの目には、いつの間にか、あたたかい滴がこぼれるくらいに溜まっていた。

「で……。どうするの？」

いつも通り部屋の点検を注意深く行いながら、ガガが訊ねる。

「もちろん逃げる。『化け猫エリユース』なんかに捕まらない」

ナデイルは、機嫌よく答えた。

「ええっ。なんでだよー!？」

ガガは、床の上で高く跳ねた。

「さんざん探しまくってたエリユースが、今度は向こうからナデイルを探しているんだよ？ 逃げる必要がどこにあるのさ？」

ナデイルは、笑った。

「エリユースは、私を見つけれない。なぜなら、その前に私が彼を見つけるから。私のほうから彼に会いに行く。そして、彼が私を見つけるより先に、私が彼を見つけるの。私に見つけられたときの彼の驚いた顔をどうしても見なきゃね」

「……ったく」

ガガが、あきれて溜め息をつく。

「ここでじっとしていても、エリユースのほうからそのうち来てく

れるのに。第一、彼に対抗しようとしても、ナディルは太刀打ちできないと思うよ。だって彼は、凄腕の賞金稼ぎ『化け猫エリユース』なんだもの。経験も能力も、ずうっとナディルより勝^{まさ}ってる。つか、もうそのへんまで来ているかもしれないよ。今頃、下でレオンと話していたりなんかして」

「だとしても、レオンは私の正体は言わないよ。この前、誓ってくれたもの。絶対、私のほうから彼を捕まえる」

ナディルはマントを脱ぎ、サラマンサのロープと剣をベッドの枕元の下あたりに置いた。

それから、ひらりとベッドに飛び乗る。

「ガガ、給仕の子が夕食を持ってきてくれるまで、少し寝るね。ここ、持ってくるの遅いこと多いし。何かとても疲れた」

ナディルは、そのまま体を横たえる。

ガガが部屋の点検を終えた時、ナディルは既に眠っていた。毛布を口でくわえ、ガガはナディルにそっとかける。

「いい夢を、ナディル。束の間だけど、ゆっくりお眠り」

それからガガはナディルの枕元に座って、その安らかであどけない寝顔に見惚れた。

「ナディル、よかったね。ナディルには幸せになってもらいたよ。ナディルが幸せなら、そばにいるぼくも幸せだよ。ぼくは、ナディルがお母さんになっても、お婆さんになっても、ずっとそばにいる。そしていつか、ナディルがぼくの両親のいるところに旅立っても、

ぼくはナデイルの子供や孫たちと一緒にいるよ。たとえそこが王様の城の中でも、砂漠でも、大海原でもね。ぼくはこの体で、まだまだ生きなきゃならないんだから。ぼくは、猫族と一緒に天の彼方に行くことを選ばなくて正解だったと思う。だって、この世界が好きだもの。この世界で懸命に暮らしてる人たちも好きなんだ。それにね。何といつても、ナデイルに出会えたんだもの。ナデイルと一緒にいると、はらはらするけど、やっぱり楽しいもんね……」

二つの輝く月の目をした銀の猫が、闇の中を走る。

ナデイルは夢の中で、その微かなやわらかい足音を聞いたような気がした。

相変わらず、足音をたてないんだね。

でも、私にはわかるよ。

あなたの足音が近い……。

今、どこにいるのだろう。

だけど、そんなに遠くないよね……。

部屋の扉が、トントントントンと規則正しくたたかれた。

「あ、食事を持ってきてくれたんだ。今回は早いな」

ナデイルの足元で丸くなっていたガガは起き上がり、扉の前に走った。

「この間はさんざん待たされて、結局忘れられてたことがわかって、ひと悶着起きるところだったもんな。宿代タダってことになって得したけど。料理をテーブルに並べてもらったら、ナデイルを起こさ

なきや」

ぶつぶつ呟きながら扉を開けたガガは、ルビーの目を大きく見開く。

給仕の少年よりも背の高い人物が、そこに立っていた。

「あ……」

「翡翠のナデイルは？」

その人物が、ガガを見下ろして微笑む。

ガガがよく知っている人物だった。

「ね、眠ってるよ……。どうぞ……」

ガガはその人物を中に招き入れた。

そして、自分は部屋の隅に静かに移動し、そこに丸くなる。

聞こえない足音が、近づいてくる。

皮のブーツが部屋の木の床を踏みしめ、マントが揺れる。

ナデイルは、夢から引き戻された。

心臓が激しく鼓動する。

彼に別れを告げられた時以上に高鳴っている。

けれども、ナデイルは目を開けなかった。

どうすればいいのか考え付かなかったからだ。

どんな態度を取ればいいのか。

何を話せばいいのか。

考えれば考えれば、頭の中は空っぽになって行く。

ガガの冗談が本当になってしまった。

どんなに悪あがきをしたって、本気を出した『化け猫エリユース』にはかなわない。

先に見つけられてしまった。

彼はレオンと話したのだろうか。

話さなくとも、『翡翠のナディル』の居場所と正体は既にわかっていたのだろうか。

しかし、いきなりの展開だ。どうすればいいものか。

ナディルが思い悩む間にも、足音は近くなる。

訪問者は、ナディルのベッドの傍で立ち止まった。

その人物の指には、真紅のルビーを抱えた金の猫の指輪が輝いていた。

それは、その人物の素性を知らしめるもの。

アーヴァーンの王家から嫁いだ姫君が、一族にもたらしたもので、ごく最近まで、魔女カジエーラがはめていたものだ。

（侯爵。ファルグレット侯爵。私と一緒にアーヴァーンに帰りましょう）

目を閉じたまま、ナディルは彼に話しかける。

（あなたの鈴を預かっているの。今はガガが持つてるよ。私はそれをあなたの首にかける。それは、あなたの魔力を封じ込めた鈴。そして、あなたが先祖から引き継がねばならない、大切な役目の印でもある鈴だ。自由で気まぐれな銀猫さん、あなたの居場所は私の隣なんだよ。一緒にアーヴァーンの国王の城に帰ろう。あなたと一緒に、私も城に帰れる。もっと強くなれる。そのためには、私にはあなたが必要なんだ）

「ナデイル……」

その人物が、自分の名を呼んだ。

どちらだろう。

『翡翠のナデイル』。アーヴァーンの『ナデイル王女』かもしれない。

それとも、そのどちらでもない、ただの『ナデイル』。でも、そんなことはどうでもいい。

彼がここにいて、自分を呼んでいることは現実なのだ。

その声は、鏡が作った声ではない。

あの声よりもはるかにあたたかく、心地よい声だった。

今考えると、全然違う声だ。

なぜあんな声に囚われたのだろう。

そう思うと何とはなしに滑稽になり、ナデイルは心の中でくすりと苦笑する。

彼は、ここにいる。

今、自分の前に立ち、自分を見下ろしている。

痛いくらいに強く感じる、彼の視線。

夢ではない。

目を開けると、彼がいる。

銀の髪とトパーズの目をした懐かしいエリユースが、そこに立っている。

（エリユース。目を閉じていても、あなたが笑っているのが見えるよ。やさしい眼差しで私を見つめているのが見える。だって、私も猫族の末裔なのだから。何だかとても安心した顔だね。そんなに私のことを心配してくれてたの？）

「ナディル」

彼は、もう一度名前を呼んだ。
彼の気配が近くなる。

（少し待って。呼吸を整えて、準備が出来てから、目を開ける。でも、どんなに心の準備をしたって、私、きっと泣いてしまう……。ああ、そうだ、今夜は満月だから、気をつけなければ、あなたは猫になってしまっ……。でも、猫になってもかまわない。猫のあなたも、とても素敵なのだから）

ナディルは、彼の指のあたたかさを頬に感じた。
その指は、そつと遠慮がちにナディルの頬を撫でる。
ナディルがそこにいることを確かめるかのように。

エリユース、そんなことをしたら、起きているのがばれてしまう。
顔が熱いよ。
きつと真つ赤になってる。
涙だって、今にもこぼれそうだ。

ナディルはくすぐったさを我慢して、眠っているふりを続ける。

あなたを抱きしめよう。
私の銀の猫をしつかりとこの手の中につかまえよう。
もうどこにも行かせない。

エリユース・ファルグレット侯爵。私はアーヴァーンの王女としても、ただのナディルとしても、あなたがとても必要だ。

それからナディルは、いたずらっぽい笑みを唇に浮かべる。

空っぽになっていた頭が、次第に落ち着きを取り戻していく。

（でも……でもね。その前に、化け猫エリユース。ガガが入れてくれたとはいえ、『翡翠のナディル』の寝室にのこのこ入ってくるなんて、失礼極まりないよ）

ナディルは、片手をそろそろと枕元の下に這わせた。彼に気づかれないように。

手はすぐに、そこに置いたものに到達する。

ナディルは、それに指を絡めた。

（ちよつとだけ私の相手をしてくれる？ 『翡翠のナディル』と戦ってみたかったんでしょ？ 私、あなたに勝てる自信、割とあるんだよ。銀猫になったあなたと渡り合うのも、また一興だ）

ナディルは、ゆっくりと目を開ける。

片手に剣の柄を握りしめて。

「わああああ、ナディルーっっ！！ 何だよおおお つ！？」

ガガがルビーの目を大きく見開き、両手で頭を押さえて絶叫した。

旅人の宿『砂漠に眠る緑の羽根生え猫』は、逢う魔が時の青い湿った空気に包まれ、明かりを灯して静かに沈み込む。

やがて、そのはるか上にかかる鏡のような丸い月は、深まってく夜の中、透明な輝きを一際増した。

淡い月の光は、廊下の扉の前に並べて置かれた料理と、料理の間に陣取ってそれにぱくつく小さな金の竜に、やさしく降り注ぐ。

「
終
わ
り
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459o/>

翡翠のナディル ～消えた姫君と銀の猫～

2011年10月5日12時48分発行